粕屋郡粕屋町

to bara mugi o

戸原麦尾遺跡(Ⅱ)

―福岡市多々良浄水場建設に伴う緊急調査―

福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集

1989

福岡市教育委員会

粕屋郡粕屋町

to bara mugi o

戸原麦尾遺跡(Ⅱ)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集

付図

付図１　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区遺構分布全体図(1/300)
付図２　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区(ｂ区)遺構分布部分図(1/200)
付図３　杭列(ＳＡ02)出土状況および断面見通し図(１／40)

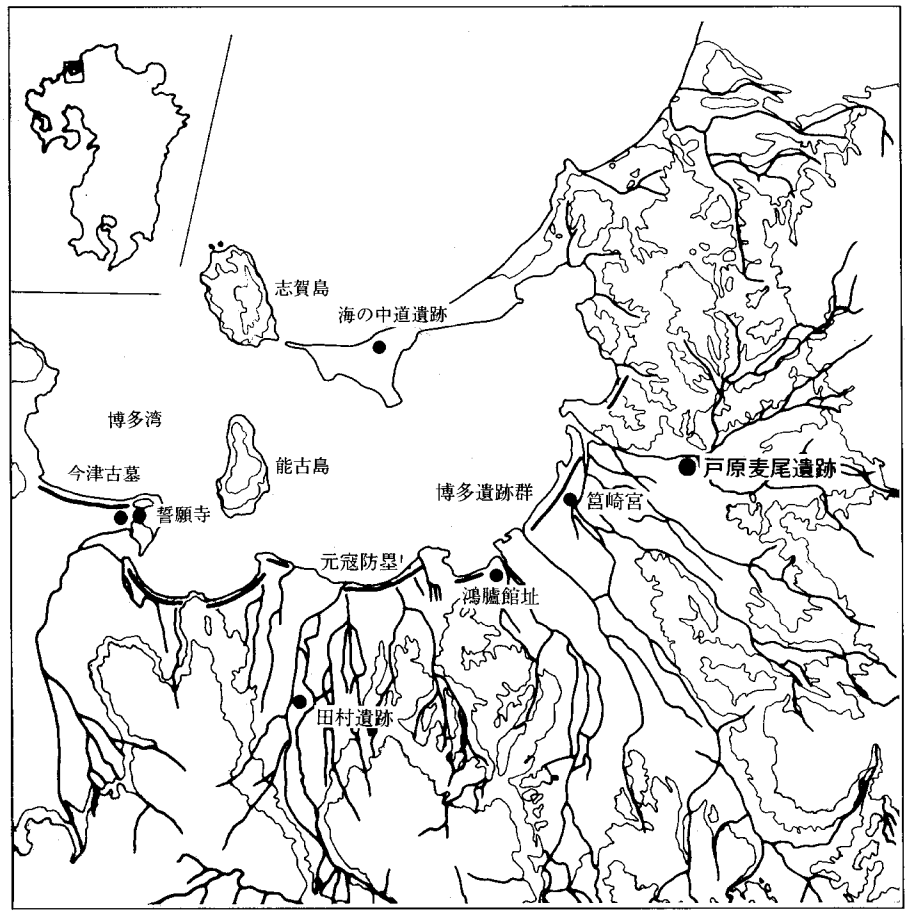
1989

福岡市教育委員会

粕屋郡粕屋町

to bara mugi o

戸原麦尾遺跡(Ⅱ)

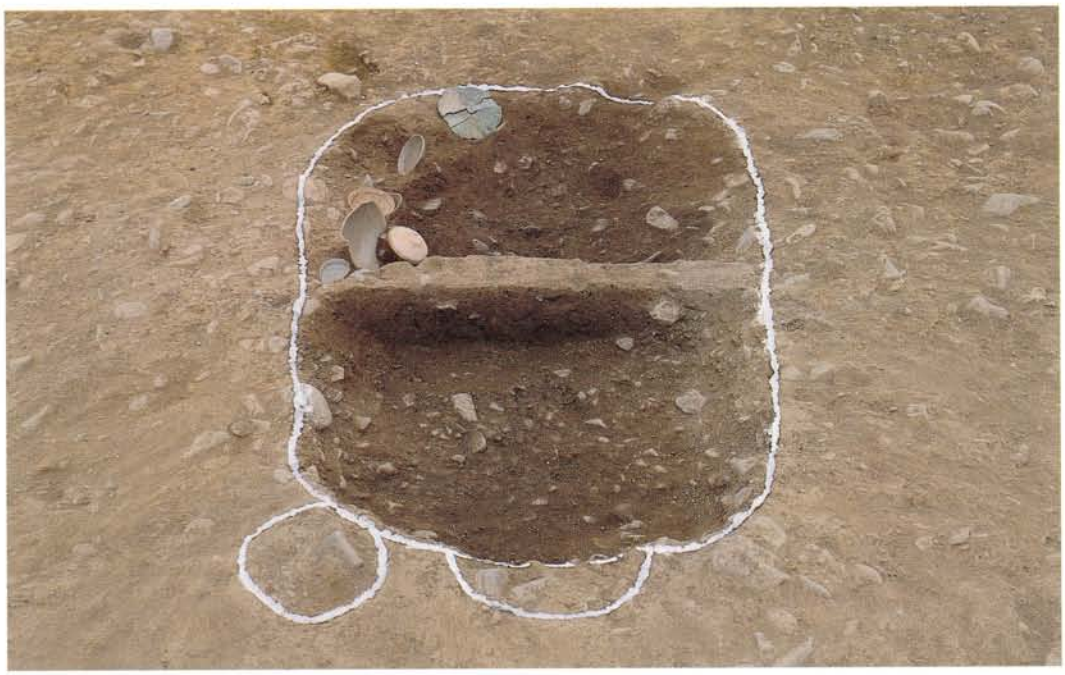


遺跡調査番号8403

遺跡略号　ＫＴＭ

1989

福岡市教育委員会



第Ｉｂ区土壙墓ＳＫ10遺物出土状況

第Ⅰａ区ＳＫ36出土青銅製鳳凰文柄鏡

第Ⅰｂ区ＳＫ10出土青銅製六花鏡

巻頭図版２

序

福岡市では、昭和53年の大渇水の経験以来、水資源の安定的確保と供給を目指して、各種の渇水対策事業を進めてきております。その一貫として粕屋郡粕屋町内において多々良浄水場の建設を計画し、昭和59年度に着工、63年度に完成の運びとなりました。

この建設工事に並行して、あしかけ4年にわたる埋蔵文化財の発掘調査が実施されました。

本報告書は、その調査の結果について報告するものであります。この4年間の調査において、鎌倉～室町時代にかけての館跡や集落跡等が確認され、また当時の対外的な交易の一端を窺い知ることのできる貴重な輸入陶磁器や青銅製の鏡などが出土するなど、多くの貴重な成果を上げることができました。

本報告書が、埋蔵文化財への理解と認識を深めるために広く活用されることを願いますとともに、発掘調査から資料の整理にいたるまでの、多くの方々のご協力に対しまして心から感謝の意を表します。

平成元年3月31日

福岡市教育委員会
教育長　佐　藤　善　郎

例　　言

1．本書は、昭和59年度から62年度にかけて、福岡市教育委員会が調査を行った、福岡県粕屋郡粕屋町に所在する戸原麦尾遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査報告は昭和62年度に「戸原麦尾遺跡(Ⅰ)」として第Ⅰ～Ⅳ区全体の概要を報告した。本書は、第Ⅰ区に関する報告であり、第Ⅱ～Ⅳ区の報告および総括については平成元年度に「戸原麦尾遺跡(Ⅲ)」として刊行する予定である。

3．遺跡の発掘調査は、福岡市水道局が事業主体として計画した多々良浄水場の建設にともなって実施されたものである。

4．本書に使用した地図は、Fig. 2・3に旧帝国陸軍陸地測量部発行の「箱崎」(1／20000) を、Fig. 5に国土地理院発行の「福岡」(1／25000) を、Fig.10に福岡市発行の都市計画図「土井」(1／2500) を原図として用いた。

5．本書に使用した方位はすべて磁北である。真北との偏値は、西偏6°40′である。

6．掲載した遺構の呼称には、下記の略号を便宜的に用いた。通し番号は、調査時の番号を再整理し、通し番号順に掲載した。調査時の番号との対比は各遺構毎の一覧表で、対比が可能である。

ＳＡ○○：杭列・柵列　　ＳＫ○○：土壙・土壙墓木棺墓
ＳＢ○○：掘立柱建物　　ＳＰ○○：柱穴
ＳＤ○○：溝状遺構　　ＳＲ○○：旧河川
ＳＥ○○：井戸　　ＳＸ○○：性格不明の竪穴遺構

7．掲載遺物には遺物の種類・材質・出土遺構の別を問わず通し番号を符した（1～558)。

8．本書に収録した遺構の写真・実測図等の記録は、池崎譲二、田中壽夫、荒牧広行、白石公高、竹下弘美、が分担して撮影・実測等を行った。トレースにあたっては池田祐司、田中克子、永淵昭子、林田憲三、久保寿一郎の協力を得た。

9．出土遺物の実測・トレースは主として田中が行った。遺物写真は、荒牧が撮影した。

10. 本書の執筆分担は、田中が主として執筆した。第Ⅱ章は荒牧と田中、第Ⅲ章(3)－2)と(4)－2)、第Ⅳ章(1)－2)の井戸の項を荒牧が担当し、田中が一部を補筆した。

11. 本書の編集は荒牧の協力を受け田中が行った。

12. 戸原麦尾遺跡に関わる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される。

調査番号	遺跡名	遺跡略号	調査地地籍	開発面積	調査面積
8403	戸原麦尾	ＫＴＭ	福岡県粕屋郡粕屋町戸原麦尾他	80000㎡	32670㎡

本文目次

Ⅰ．はじめに　頁

(1)　調査にいたる経過 …… 1

(2)　調査の体制 …… 2

Ⅱ．遺跡の位置と歴史的環境 …… 3

(1)　戸原麦尾遺跡の位置と立地 …… 3

(2)　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 5

Ⅲ．発掘調査の記録 …… 9

(1)　発掘調査の方法と経過 …… 9

(2)　各調査区（第Ⅰ～Ⅳ区）の概要 …… 11

(3)　遺構各説 …… 15

1)　掘立柱建物　(SB 01～50) …… 15

2)　井　戸　(SE 01～21) …… 29

3)　竪穴遺構　(SX 01～83) …… 37

4)　溝状遺構・礫群(SD 01～69、SX 2403・3137) …… 64

5)　土壙・土壙墓・木棺墓　(SK 01～39) …… 73

6)　旧河川および杭列 …… 85

(4)　遺物各説 …… 89

1)　柱穴出土の遺物 …… 89

2)　井　戸出土の遺物 …… 92

3)　竪穴遺構出土の遺物 …… 102

4)　溝状遺構・礫群出土の遺物 …… 113

5)　土壙・土壙墓・木棺墓出土の遺物 …… 120

6)　旧河川出土の遺物 …… 127

7)　表土・包含層出土の遺物 …… 130

Ⅳ．おわりに …… 137

(1)　第Ⅰ区における調査の成果と問題点について …… 137

1)　出土遺物について …… 137

2)　検出遺構について …… 138

3)　第Ⅰ区の屋敷地の年代と遺構の構成について …… 140

(2)　第Ⅰａ区ＳＫ36出土の青銅製柄鏡について …… 141

挿図目次

Fig. 1　戸原麦尾遺跡遠景（北東から）…… 3
Fig. 2　博多湾旧海岸線の復元図（1/100000）…… 4
Fig. 3　戸原麦尾遺跡の位置と旧海岸線 …… 4
Fig. 4　広田板碑 …… 5
Fig. 5　戸原麦尾遺跡の位置と周辺の遺跡（1/40000）…… 6
Fig. 6　多々良遺跡調査風景 …… 7
Fig. 7　多々良込田遺跡調査風景 …… 7
Fig. 8　顕孝寺跡遠景（南東から）…… 7
Fig. 9　多々良川下流域の条里の復元（1/40000）…… 8
Fig. 10　遺跡周辺の字名と条里の推定復元（1/8000）…… 8
Fig. 11　第Ⅱ区作業風景（西から）…… 10
Fig. 12　第Ⅱ区作業風景（東から）…… 10
Fig. 13　第Ⅲ区作業風景（東から）…… 10
Fig. 14　第Ⅳ区作業風景（東から）…… 10
Fig. 15　戸原麦尾遺跡調査区設定位置図（1/3000）…… 12
Fig. 16　第Ⅱａ区完掘状況（北から）…… 13
Fig. 17　第Ⅲｂ区完掘状況（北東から）…… 14
Fig. 18　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区土層断面図（1/50）…… おりこみ(1)
Fig. 19　掘立柱建物配置図（1/1500）…… 16
Fig. 20　柱穴（2359）遺物出土状況図（1/20）…… 19
Fig. 21　掘立柱建物平面および断面図（SB01～03）(1/100) その１ …… 20
Fig. 22　掘立柱建物平面および断面図（SB04～06・8）(1/100) その２ …… 21
Fig. 23　掘立柱建物平面および断面図（SB09～12）(1/100) その３ …… 22
Fig. 24　掘立柱建物平面および断面図（SB13・15・20）(1/100) その４ …… 23
Fig. 25　掘立柱建物平面および断面図（SB21・22・28）(1/100)その５ …… 24
Fig. 26　掘立柱建物平面および断面図（SB29・31・34・37）(1/100) その６ …… 25
Fig. 27　掘立柱建物平面および断面図（SB38・41・42）(1/100) その７ …… 26
Fig. 28　掘立柱建物平面および断面図（SB48～50）(1/100) その８ …… 27
Fig. 29　井戸平面および断面図（SE01～04）(1/40) その１ …… 30
Fig. 30　井戸平面および断面図（SE05～08）(1/40) その２ …… 32
Fig. 31　井戸平面および断面図（SE09～13）(1/40) その３ …… 34
Fig. 32　井戸平面および断面図（SE14～20）(1/40) その４ …… 35
Fig. 33　竪穴遺構配置図（1/1500）…… 38
Fig. 34　竪穴遺構平面および断面図（SX01～06・08・09：1/40、07：1/80）その１ …… 41
Fig. 35　竪穴遺構平面および断面図（SX10～17）(1/40) その２ …… 43
Fig. 36　竪穴遺構平面および断面図（SX18～21）(1/40) その３ …… 45
Fig. 37　竪穴遺構平面および断面図（SX22～25）(1/40) その４ …… 46
Fig. 38　竪穴遺構平面および断面図（SX26～34）(1/40) その５ …… おりこみ(2)
Fig. 39　竪穴遺構平面および断面図（SX35～46）(1/40) その６ …… 48
Fig. 40　竪穴遺構平面および断面図（SX47～56）(1/40) その７ …… 50
Fig. 41　土壙・竪穴遺構平面および断面図（SK14・SX58・59）(1/40) その８ …… 51
Fig. 42　井戸・竪穴遺構平面および断面図（SE21・SX60～64）(1/40) その９ …… 53
Fig. 43　竪穴遺構平面および断面図（SX65～68）(1/40) その10 …… 54
Fig. 44　竪穴遺構平面および断面図（SX69～72）(1/40) その11 …… 55
Fig. 45　竪穴遺構平面および断面図（SX73・74）(1/60) その12 …… 56
Fig. 46　竪穴遺構平面および断面図（SX75～77）(1/60) その13 …… 57

Fig. 47　竪穴遺構平面および断面図（SX78）(1/40) その14 …… 58
Fig. 48　竪穴遺構平面および断面図（SX79～82）(1/40) その15 …… 59
Fig. 49　竪穴遺構平面および断面図（SX83）(1/40) その16 …… 60
Fig. 50　井戸および溝状遺構配置図（1/1500） …… 64
Fig. 51　SD07南西部平面図（1/160） …… 67
Fig. 52　溝状遺構土層断面図（1/60） …… 69
Fig. 53　SD08・SX3137平面図（1/160） …… 72
Fig. 54　土壙・土壙墓・木棺墓配置図（1/1500） …… 73
Fig. 55　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK01～14）(1/40) その１ …… 75
Fig. 56　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK15～28）(1/40) その２ …… 77
Fig. 57　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK29～35）(1/40) その３ …… 79
Fig. 58　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK36～39）(1/40) その４ …… 82
Fig. 59　杭列（SA01・02）配置図（1/400） …… 87
Fig. 60　杭列（SA06・07）配置図（1/300） …… 88
Fig. 61　杭列（SA01・06・07）出土状況平面および断面図（1/40） …… おりこみ(3)
Fig. 62　柱穴出土遺物実測図（1/3）その１ …… 90
Fig. 63　柱穴出土遺物実測図（1/3）その２ …… 91
Fig. 64　井戸（SE01・05・06）出土遺物実測図（1/3）その１ …… 93
Fig. 65　井戸（SE06・07）出土遺物実測図（1/3・1/4）その２ …… 95
Fig. 66　井戸（SE07・08・09）出土遺物実測図（1/3・1/4）その３ …… 96
Fig. 67　井戸（SE10・13・15～18・20）出土遺物実測図（1/3）その４ …… 97
Fig. 68　井戸（SE21）出土遺物実測図（1/3）その５ …… 99
Fig. 69　井戸（SE21）出土遺物実測図（1/3）その６ …… 100
Fig. 70　竪穴遺構（SX03・08・09・14・22・23）出土遺物実測図（1/3）その１ …… 103
Fig. 71　竪穴遺構（SX34）出土遺物実測図（1/3）その２ …… 104
Fig. 72　竪穴遺構（SX24～26・39・44・58～60・62・64・65・67・82）出土遺物実測図（1/3）その３ …… 106
Fig. 73　竪穴遺構（SX69・70・72）出土遺物実測図（1/3）その４ …… 107
Fig. 74　竪穴遺構（SX73）出土遺物実測図（1/3）その５ …… 107
Fig. 75　竪穴遺構（SX74）出土遺物実測図（1/3）その６ …… 108
Fig. 76　竪穴遺構（SX75）出土遺物実測図（1/3）その７ …… 109
Fig. 77　竪穴遺構（SX76・77・81）出土遺物実測図（1/3）その８ …… 109
Fig. 78　竪穴遺構（SX83）出土遺物実測図（1/3）その９ …… 111
Fig. 79　溝状遺構（SD02・07・08）出土遺物実測図（1/3）その１ …… 113
Fig. 80　溝状遺構（SD08）出土遺物実測図（1/3）その２ …… 114
Fig. 81　溝状遺構（SD24・32・40・64）出土遺物実測図（1/3）その３ …… 115
Fig. 82　SX2403（礫群）出土遺物実測図（1/3） …… 116
Fig. 83　SX3137（礫群）出土遺物実測図（1/3） …… 119
Fig. 84　土壙・土壙墓・木棺墓（SK01～03）出土遺物実測図（1/3）その１ …… 120
Fig. 85　土壙・土壙墓・木棺墓（SK04・05・07・08・10・13・14・18・19）出土遺物実測図　その２ …… 123
Fig. 86　木棺墓（SK31）出土遺物実測図（1/3）その３ …… 124
Fig. 87　土壙・土壙墓・木棺墓（SK32・34・36・38・39）出土遺物実測図（1/3）その４ …… 125
Fig. 88　旧河川（SR01・02・3723）出土遺物実測図（1/3・1/4）その４ …… 125
Fig. 89　旧河川・表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その１ …… 131
Fig. 90　表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その２ …… 133
Fig. 91　表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その３ …… 135
Fig. 92　第Ⅰ区出土銅銭拓影（2/3） …… 136
Fig. 93　青銅製柄鏡関連資料（開城出土） …… 142
Fig. 94　青銅製柄鏡関連資料（開城　中国各地出土） …… 143

図版目次

巻頭図版１　第Ⅰ区土壙墓SK10遺物出土状況
巻頭図版２　第Ⅰ区土壙墓SK10出土青銅製六花鏡、SK36出土青銅製柄鏡
図版とびら　第Ⅰ区発掘調査風景(1985年２月)
ＰＬ．１
戸原麦尾遺跡とその周辺(航空写真)
ＰＬ．２
(1) 戸原麦尾遺跡遠景および粕屋平野を臨む(西から)
(2) 戸原麦尾遺跡遠景および多々良川河口を臨む(東から)
ＰＬ．３
(1) 第Ⅰａ区全景(東から)
(2) 第Ⅰａ区北東～北側遺構分布状況(東から)
ＰＬ．４
(1) 第Ⅰａ区北東部遺構分布状況(東から)
(2) 第Ⅰａ区北東部遺構分布状況(南から)
(3) 第Ⅰａ区北側遺構検出状況(西から)
ＰＬ．５
(1) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況(南から)
(2) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況(南西から)
ＰＬ．６
(1) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況(西から)
(2) 第Ⅰａ区西側竪穴遺構完掘状況(南西から)
(3) 第Ⅰａ区北側遺構完掘状況(西から)
ＰＬ．７
(1) 第Ⅰｂ区完掘状況全景(西から)
(2) 第Ⅰｂ区完掘状況全景(南から)
ＰＬ．８
(1) 第Ⅰｂ区部分完掘状況(東から)
(2) 第Ⅰｂ区部分完掘状況(西から)
(3) 第Ⅰｂ区部分完掘状況(南から)
ＰＬ．９
(1) 第Ⅰｂ区掘立柱建物検出状況(東から)
(2) 第Ⅰｂ区掘立柱建物検出状況(東から)
(3) 第Ⅰｂ区掘立柱建物検出状況(南から)
(4) 第Ⅰｄ区掘立柱建物検出状況(東から)
ＰＬ．10
(1) 第Ⅰｂ区北側部分完掘状況(南から)
(2) 第Ⅰｄ区完掘状況(北から)
(3) 第Ⅰｄ区完掘状況(南から)
ＰＬ．11
(1) 井戸(SE01)完掘状況(東から)
(2) 井戸(SE02)完掘状況(西から)
(3) 井戸(SE05)完掘状況(南から)
(4) 井戸(SE06)桶側遺存状況(西から)
(5) 井戸(SE07・08)桶側遺存状況(南から)
(6) SE07桶側遺存状況(西から)
(7) 井戸(SE07)井戸枠遺存状況(南西から)
(8) 井戸(SE07)井戸枠遺存状況(南西から)
ＰＬ．12
(1) 井戸(SE09)完掘状況(南から)
(2) 井戸(SE10)石組状況(北から)
(3) 井戸(SE10)完掘状況(西から)
(4) 井戸(SE11)桶側遺存状況(西から)
(5) 井戸(SE11)桶側遺存状況(東から)
(6) 井戸(SE12)検出状況(南東から)
(7) 井戸(SE12・13)石組状況(西から)
(8) 井戸(SE12)井側内状況(西から)
ＰＬ．13
(1) 井戸(SE13)石組・井側遺存状況(南から)
(2) 井戸(SE14)完掘状況(南から)
(3) 井戸(SE15)完掘状況(西から)
(4) 井戸(SE17)内遺物出土状況(南から)
(5) 井戸(SE17)完掘状況(南から)
(6) 井戸(SE21)完掘状況(南から)
(7) 井戸(SE22)完掘状況(北から)
ＰＬ．14
(1) 竪穴遺構(SX03)遺物出土状況(西から)
(2) 竪穴遺構(SX04)焼石・木炭出土状況(南西から)
(3) 竪穴遺構(SX05)完掘状況(南東から)
(4) 竪穴遺構(SX06)遺物出土状況(南から)
(5) 竪穴遺構(SX07)完掘状況(西から)
(6) 竪穴遺構(SX10)完掘状況(西から)
(7) 竪穴遺構(SX11)完掘状況(南から)
(8) 竪穴遺構(SX15)完掘状況(西から)
ＰＬ．15
(1) 竪穴遺構(SX16)完掘状況(南東から)
(2) 竪穴遺構(SX17)完掘状況(東から)
(3) 竪穴遺構(SX18)完掘状況(南東から)
(4) 竪穴遺構(SX19)完掘状況(東から)
(5) 竪穴遺構(SX20)完掘状況(南から)
(6) 竪穴遺構(SX22)完掘状況(南から)
(7) 竪穴遺構(SX23)完掘状況(北から)
(8) 竪穴遺構(SX26)完掘状況(東から)
ＰＬ．16
(1) 竪穴遺構(SX31)完掘状況(東から)
(2) 竪穴遺構(SX32・ＳＫ14・SX58・59)完掘及び切り合い状況(南から)
(3) 竪穴遺構(SX34)完掘状況(南東から)
(4) 竪穴遺構(SX46)完掘状況(南から)
(5) 竪穴遺構(SX50)完掘状況(北から)
(6) 竪穴遺構(SX59)完掘状況(南から)
(7) 溝状遺構(SD33)・井戸(SE21)・竪穴遺構(SX60～64)完掘及び切り合い状況(南から)

ＰＬ．17
(1) 井戸(SE21)・竪穴遺構(SX60～64)完掘及び切り合い状況(南西から)
(2) 竪穴遺構(SX67)完掘状況(南西から)
(3) 竪穴遺構(SX68)完掘状況(南西から)
(4) 竪穴遺構(SX71)完掘状況(東から)
(5) 竪穴遺構(SX72)遺物出土状況(南から)
(6) 竪穴遺構(SX72)完掘状況(南から)
(7) 竪穴遺構(SX73)完掘状況(南南東から)
(8) 竪穴遺構(SX73・74)完掘・切り合い状況(北から)
ＰＬ．18
(1) 竪穴遺構(SX75)完掘状況(北から)
(2) 竪穴遺構(SX75)遺物出土状況(北から)
(3) 竪穴遺構(SX77)完掘状況(北から)
ＰＬ．19
(1) 竪穴遺構(SX78)完掘状況(北から)
(2) 竪穴遺構(SX79～81)完掘状況(南から)
(3) 竪穴遺構(SX82)完掘状況(北から)
(4) 竪穴遺構(SX83)遺物出土状況(南から)
ＰＬ．20
(1) 溝状遺構(SD01・02・05)完掘状況(南西から)
(2) 溝状遺構(SD24・25・26・64・68)完掘状況(南東から)
ＰＬ．21
(1) 溝状遺構(SD23・26)完掘及び切り合い状況(西から)
(2) 溝状遺構(SD08・60・16・21)完掘状況(南西から)
ＰＬ．22
(1) 溝状遺構(SD33)完掘状況及びSX62等との切り合い状況(西から)
(2) 溝状遺構(SD64)完掘状況(西から)
ＰＬ．23 (1) 礫群(SX2403)検出状況(北から)
(2) 礫群(SX3137)検出状況及びSD08・34(南西から)
ＰＬ．24
(1) 井戸(SE06～08)・竪穴遺構(SX58・59)・土壙(SK14)検出及び切り合い状況(東から)
(2) 土壙(SK02)遺物出土状況(南から)
(3) 土壙(SK03)遺物出土状況(北東から)
ＰＬ．25 (1) 土壙(SK04)遺物出土状況(南西から)
(2) 土壙(SK05)遺物出土状況(南から)
ＰＬ．26
(1) 土壙(SK06)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK07)完掘状況(東から)
ＰＬ．27
(1) 土壙(SK08)完掘状況(南西から)
(2) 木棺墓(SK09)完掘状況(北西から)
ＰＬ．28
(1) 木棺墓(SK10)完掘および遺物出土状況(北から)
(2) 木棺墓(SK10)遺物(六花鏡・白磁碗・皿)出土状況(北から)
(3) 木棺墓(SK10)遺物(ガラス製小玉)出土状況(北から)
ＰＬ．29
(1) 木棺墓(SK11・12)完掘状況(南西から)
(2) 土壙(SK13)完掘状況(西から)
ＰＬ．30
(1) 土壙(SK14)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK15・16)完掘状況(南から)
ＰＬ．31
(1) 土壙(SK17・18)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK19)完掘状況(東から)
ＰＬ．32
(1) 土壙(SK21)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK25・26)完掘状況(南西から)
ＰＬ．33
(1) 土壙(SK29)完掘状況(南から)
(2) 土壙(SK27)・竪穴遺構(SX51)完掘及び切り合い状況(東から)
ＰＬ．34
(1) 土壙(SK30)完掘及び遺物出土状況(西から)
(2) 木棺墓(SK31)遺物出土状況(西から)
ＰＬ．35
(1) 土壙(SK32)完掘状況(南西から)
(2) 土壙(SK33)完掘状況(南から)
ＰＬ．36
(1) 土壙墓(SK34)完掘状況(北から)
(2) 木棺墓(SK36)遺物出土状況及び墓壙検出状況(北から)
(3) 土壙(SK39)完掘状況(西から)
ＰＬ．37
(1) 第Ⅰａ区旧河川遠景(西から)
(2) 第Ⅰａ区旧河川(SR01・02)遠景(南東から)
(3) 第Ⅰｂ区旧河川(SR3723)遠景(西から)
ＰＬ．38
(1) 杭列(SA01)出土状況およびＳＲ02内土層堆積状況(北から)
(2) 杭列(SA01)出土状況(北から)
(3) 杭列(SA01)出土状況(北から)
ＰＬ．39
(1) 杭列(SA02)出土状況(西から)
(2) 杭列(SA02)出土状況(東から)
ＰＬ．40
(1) 杭列(SA06)出土状況(東から)
(2) 杭列(SA07)出土状況(西から)

(3) 杭列(SA07)出土状況(南西から)
PL. 41
(1) 第Ⅰa区東南壁土層断面(北西から)
(2) 第Ⅰa区旧河川(SR01)中央部土層断面および東岸際状況(南から)
(3) 第Ⅰd区西壁土層断面(東から)
PL. 42
第Ⅰ区柱穴出土遺物(1/3)
PL. 43
第Ⅰ区柱穴、井戸出土遺物(1/3)
PL. 44
第Ⅰ区柱穴、井戸、竪穴遺構出土遺物(1/3)
PL. 45
第Ⅰ区竪穴遺構、溝状遺構出土遺物(1/3)
PL. 46
第Ⅰ区竪穴遺構、土壙出土遺物(1/3)
PL. 47
第Ⅰ区木棺墓出土遺物(1/3)
PL. 48
第Ⅰ区土壙墓・木棺墓出土遺物(1/3)
PL. 49
第Ⅰ区木棺墓、検出面、包含層出土遺物(1/3)
PL. 50
第Ⅰ区包含層出土遺物(1/3)
PL. 51
第Ⅰ区出土天目、青磁碗(1/3)
PL. 52
第Ⅰ区出土石製品(1/3)
PL. 53
第Ⅰ区旧河川、検出面出土遺物(1/3)
PL. 54
第Ⅰ区出土鉄製品、貨銭(1/3・2/3)

表目次

Tab. 1 発掘調査の経過表 …… 11
Tab. 2 第Ⅰ区掘立柱建物(SB01～50)計測値表 …… 28
Tab. 3 第Ⅰ区検出井戸(SE01～21)所見表 …… 36
Tab. 4 第Ⅰ区検出竪穴遺構(SX01～83)所見表 …… 60
Tab. 5 第Ⅰ区検出土壙・土壙墓・木棺墓(SK01～39)所見表 …… 82
Tab. 6 第Ⅰ区遺構別貨銭出土一覧 …… 134
Tab. 7 第Ⅰ区出土遺物種類別出土状況表 …… 137
Tab. 8 第Ⅰ区検出遺構時期区分表 …… 140
Tab. 9 第Ⅰ区出土土師器(坏・皿)計測表 …… 144

付図目次

付図1 戸原麦尾遺跡第Ⅰ区遺構分布全体図(1/300)
付図2 戸原麦尾遺跡第Ⅰ区(b区)遺構分布部分図(1/200)
付図3 杭列(SA02)出土状況および断面見通し図(1／40)

Ⅰ はじめに

(1) 調査に至る経過

福岡市においては、近年の都市化の進展と人口の急激な増加に対して水資源の安定的な確保と供給が緊急の課題とされて来た。特に昭和53年の異常気象による大渇水の経験以来、行政施策上の重要な懸案の一つとなっている。この施策の一貫として、東区香椎字長谷に貯水ダムの建設が予定されるとともに、浄水施設として多々良浄水場が多々良川左岸の粕屋町内に建設される運びとなり、昭和59年度から着工されることとなった。

一方福岡市教育委員会では、公共事業および民間開発の各種開発行為に対しては事前に開発予定地内における埋蔵文化財の有無の審査を行い、埋蔵文化財の保護に努めているところであり、長谷ダムと多々良浄水場の建設計画事業についても、福岡市域外ではあるが本市の主体事業であるということから事前審査の対称となった。

多々良浄水場建設予定地は事業の計画段階では、周知の遺跡としては未だ認知されていない地点であった。しかし建設予定地の周辺には、多々良川の左岸に展開する古代条里を始めとして、多々良遺跡、多々良込田遺跡、内橋廃寺推定地などの古代から中世にかかる遺跡が点在しており、これらと関連する何らかの遺跡が存在することが予想されたことと、また古代官道である西海道の推定線上にも位置するということから、十分な現地踏査を要すると図面上で判断された。

埋蔵文化財課では昭和59年７月上旬に現地踏査を行い、建設予定地内において古代から中世にかかる遺物の散布を確認した。これに基づいて、建設予定地内における遺跡の範囲、遺構遺物の遺存状況などを明らかにするために、同年７月24日から８月10日にかけて試掘調査を行った。調査の結果、建設予定地内には開発面積（約80000㎡）の約30～35％にあたる25000㎡前後の広さにわたって鎌倉時代を中心とした時期の遺構・遺物が認められ、浄水場建設工事に先立っては発掘調査等のなんらかの保存上の措置を要すると判断された。

これらの事前審査の成果を踏まえて、教育委員会と水道局間とで遺跡の保存上の問題も含めて協議を重ねたが、工事着工の時期、建設工事計画の内容がすでに実施段階であることから、やむを得ず発掘調査を行い記録保存に代えるということになった。

発掘調査は昭和59年10月16日から緊急に実施することとなり、以下の調査体制で行うこととなった。

なお発掘調査にあたっては地元の方々からの多くのご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

(2) 調査の体制

多々良浄水場建設主体	福岡市水道局	前事業管理者	出口末人
		現事業管理者	小田一郎
調査主体	福岡市教育委員会	教育長	佐藤善郎
調査総括		埋蔵文化財課長	柳田純孝
		埋蔵文化財第一係長	折尾　学
事前審査		文化財主事	山崎純男
		埋蔵文化財第一係	山崎龍雄
調査事務担当		埋蔵文化財第一係	松延好文
調査担当		埋蔵文化財第一係	
		(昭和59年度)	池崎譲二
		(昭和59～62年度)	田中壽夫
		(昭和60～62年度)	荒牧宏行

調査補助員	(昭和59年度)	白石公高　竹下弘美
調査整理	(昭和59～62年度)	櫛田猷子　花井祝子　大坂静子　田鍋町子　戎崎喜久美 森本満里子　山田スミ代　出口三千代
	(昭和63年度)	池見恭子　安部国恵　田中聖子　馬場イツ子　酒井紀子 田村妙子
調査作業	(昭和59～62年度)	入江英美　松永　茂　長　勝伸　森山恭介　高浪信夫 熊本義徳　山本一夫　三留清馬　長　義人　長　孝一 神尾順次　黒木伸一　岩隈史郎　伊藤末信　本田直裕 千種　務　河野裕之 安部国恵　安部サエ子　因　弘子　池見恭子　尾畑信江 黒木良子　黒木澄子　薙野弥恵子　長　武子　長とし子 西村康子　田村妙子　田鍋勝代　松永一枝　大歯ミツ子 長　サト　高木京子　長　福代　藤スエ子　松尾フタエ 長トモエ　森山タツエ　菩提道子　長嘉鶴子　長　絹子 柴田スマ子　田鍋ヤサノ　山野キヨカ　西村きくえ 安増綾子　田中聖子　馬場イツ子　川添佳子

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

(1)　戸原麦尾遺跡の位置と立地（Fig. 2～10. PL. 1・2）

九州の西北部沿岸には、大小の沖積平野が形成されている。戸原麦尾遺跡はそれらの一つである粕屋平野の西部に位置している。

この粕屋平野を含めた広義の福岡平野は、北方に博多湾が位置し、北東から東側にかけて三郡山地が、南から西南にかけては急峻な背振山地が展開している。各山地からは博多湾へ向って、河川が流下し、その沖積作用によって小平野が形成されている。各小平野は、博多湾へ向って派生した油山、月隈の各低丘陵を境として、西から、早良平野、福岡平野、粕屋平野と呼称される。粕屋平野はこの福岡平野の北東に位置し、三郡山地から西へ流下する多々良川、須恵川、宇美川の営力によって形成された平野である。

多々良川は粕屋平野の北縁を緩やかに蛇行しながら西流している。多々良川右岸には、川岸近くまで出入りの著しい丘陵が迫っている。これに対して、多々良川と須恵川にはさまれた流域は、東方の大隈～長者原付近から、緩やかな傾斜の丘陵が西方の広田集落付近まで続き、さらに広田付近から以西では、平坦な沖積地となっている。本遺跡はこの沖積平野部の、標高約5.50～5.80ｍを測る沖積微高地上に立地している。

本遺跡の営まれた時期の前後、すなわち古代末から中世にかけての旧地形の状況については判然としない部分が多い。博多湾の旧海岸線については、元寇防塁の位置、沿岸部からの考古資料の出土状況や博多古図等の絵図、あるいは文献資料によって二、三の復元案が示されており[注1]、Fig. 2と3のような状況を呈していたことが想定されている[注2]。また多々良込田遺跡[注3]や本遺跡の調査の結果では、多々良川のたび重なる氾濫と蛇行の痕を物語る状況が確認されている。また現地形にも、蛇行の傷跡をとどめた地点があり、多々良川下流域がかなり頻繁に氾濫を受けて来たことがわかる。旧海岸線の復元や調査の結果から、下流域の景観復元を行うと、多々良川の河口は現在よりもかなり奥まっており、内海が現在の浜田付近まで湾入していたと想像される。元寇に際しての河口の防備に関する記事[注4]からは、当時がまだ干潟を呈していなかったことを想起させ、また後年の多々良浜合戦の記事[注5]にみる潟の形成を含めて考えると、その間に、かなり急速に河口の沖積化が進んでいったことが考えられる。当時の河口から約

Fig. 1　戸原麦尾遺跡遠景（北東から）

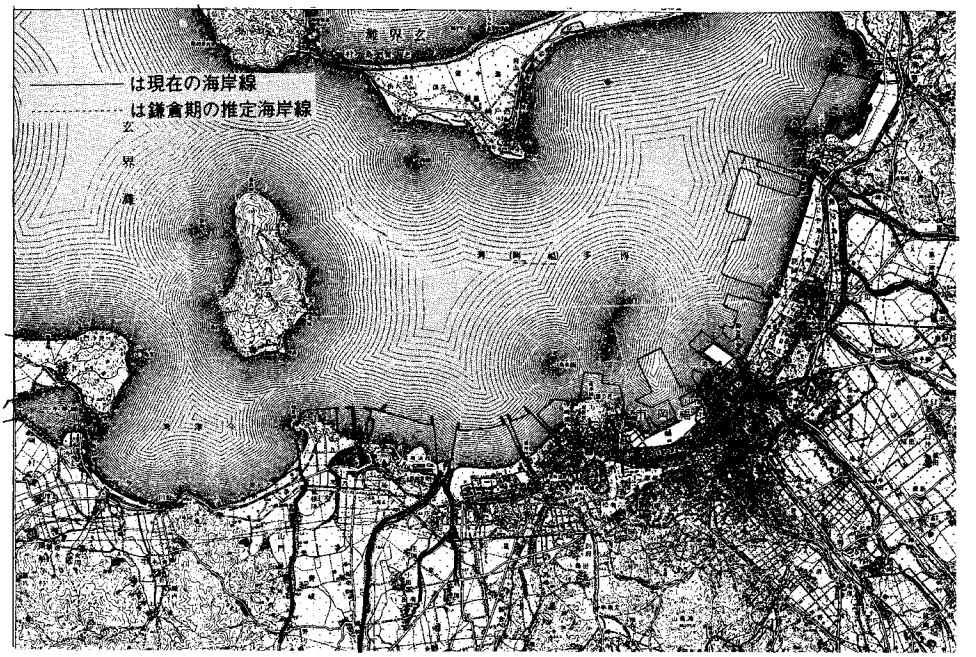


Fig. 2　博多湾旧海岸線の復元図（1/100000）
（7頁参考文献①、②をもとに作成）

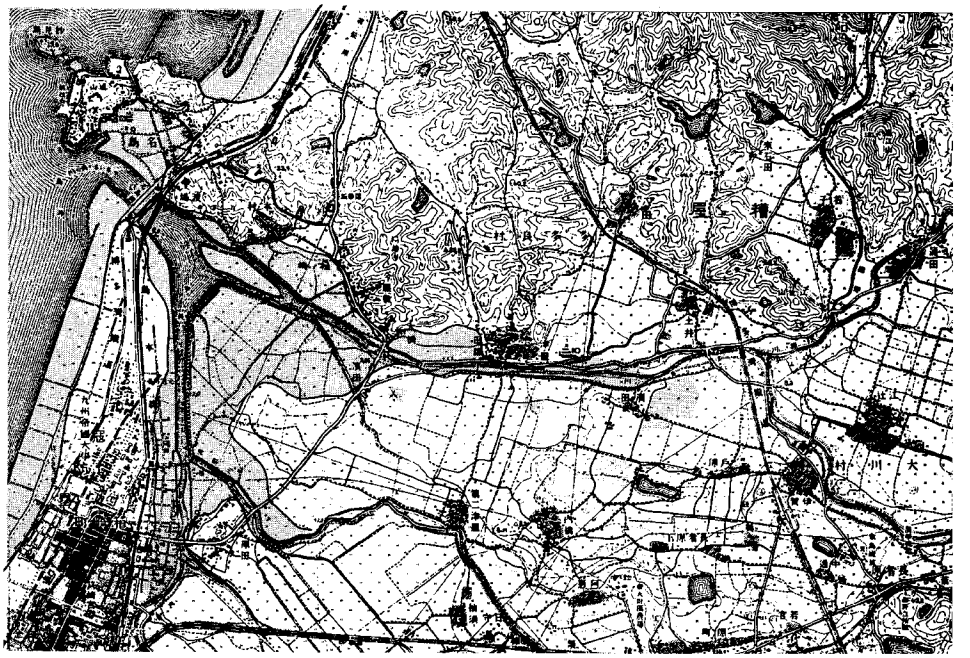


Fig. 3　戸原麦尾遺跡の位置と旧海岸線

1kmほど遡った地点に位置する本遺跡周辺は、蛇行によって形成された三ヶ月状をなす湿地が点在している時期から、水田営田のための人為的な地形改変が施されて、徐々に安定的な水田圃場の整備（おそらく条里制に基づいた）が進んでいた過程にあったと思われ、その水田景観は近世まで引き継がれていったものと考えられよう。

(2) 周辺の遺跡と歴史的環境

粕屋平野を中心とする粕屋郡は、磐井の乱の後の屯倉献上の記事[注6]にみられるように、古代から中世にかけて、博多大津の中にあって地理的に重要な位置を占めていた。それを物語る遺跡が周辺には数多くみられる。以下では、古墳時代から中世にかかる主要遺跡について述べてゆきたい。

古墳時代では、多々良河口近くの海に突き出た丘陵部に名島古墳（3）が立地する[注7]。全長約60mの前方後円墳で主体部は粘土槨である。三角縁神獣鏡が出土した。また多々良川の河口を2km遡った森江山の南端部に天神森古墳（23、前方後円墳）がある[注8]。墳丘を東西に横断する新道掘削工事に際して三角縁神獣鏡と盤龍鏡が出土した。これら二つの古墳は、畿内勢力の影響を考える上で示唆的であるが、前方後方墳を含む部木八幡古墳群[注9]などの存在は、粕屋平野における在地首長層の存在が窺われよう。

古代においては、多々良川下流域は、おそらく太宰府との関連で重要な地域として意味をもってくる[注10]。多々良込田遺跡（2）は、先述した旧海岸線のすぐ近くに位置している。遺構および出土遺物の内容（軒丸・軒平瓦、越州窯系青磁、緑釉陶器、三彩水注、石帯、イスラム陶器など）からみても、官衛的性格が強いものである。特に昭和62年度より調査が実施されている、福岡市中央区の鴻臚館推定地からの出土遺物との共通性[注11]は、その性格が客館的内容のものであることを示唆しているとともに、鴻臚館との関連を想起させる。ただし、当該地周辺は古代西海道の駅家の一つである夷守駅の推定域との関連が見逃せない地域でもあり、西海道の推定位置、条里制の施行とその実態の復元も含めて、検討されるべきであろう。

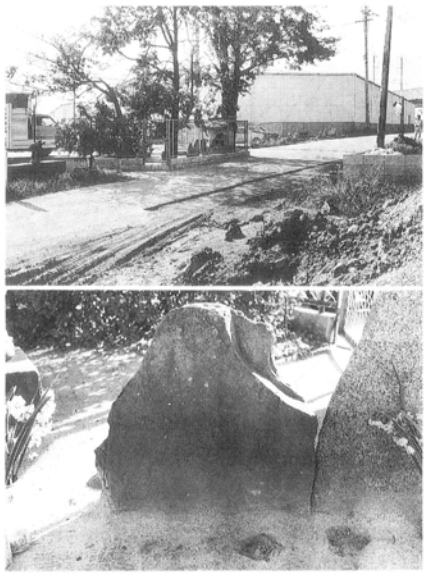


Fig. 4 広田板碑（14）

次に古代における条里と官道について若干触れておきたい。多々良川下流域の条里の復元は日野尚志氏によって試みられているところである[注12]。それによると条里の方向はN－20°－Eで、須恵川を境に南の福岡地区の条里とは方向を異にする。条里の施行の時期は、駅制の整備以前（713年以前）とされているが、考古

Fig. 5　戸原麦尾遺跡の位置と周辺の遺跡（1/40000）

1　戸原麦尾遺跡
2　多々良込田遺跡
3　多々良遺跡
4　戸原遺跡
5　戸原塚原遺跡
6　阿恵遺跡
7　鶴見塚甕棺墓群
8　箱崎遺跡群
9　箱崎遺跡群(第１次調査)
10　夷守駅推定地
11　柚須板碑
13　顕孝寺址
14　広田板碑
15　内橋廃寺
16　瑠璃山東円寺廃寺、東円寺址板碑
17　城の越城址
18　名島城址
19　石造九重塔(県指定)
20　正平甘一年板碑(市指定)
21　湯ヶ浦古墳群
22　名古道遺跡群
23　天神森古墳
24　江辻尾古墳群
25　舞松原古墳群
26　八田長坂古墳
27　名島古墳
28　王塚古墳

学的には現在のところ確認されていない。またこれとともに条里の方向に沿う官道が推定されている。官道の推定経路の当否については、現在までのところ意識的に取り上げられたことはないが、今回の発掘調査（第Ⅱ区の調査）ではその存在を考古学的に確認することはできなかった。先述したように本遺跡周辺が安定した状況を見せはじめるのは、おそらく、10世紀後半～11世紀以降である。地形的な条件を加味すれば、経路の推定は再検討を要すると考えられる。

Fig. 6　多々良遺跡(3)調査風景

Fig. 7　多々良込田(2)遺跡調査風景

本遺跡の主要な時期である中世については前年度の概要報告[注13]と重複する部分があるが、若干触れておく。本遺跡周辺の荘園分布をみると、まず隣接する多々良は、南北朝期の至徳元年（1384年）の記事に「安楽寺領筑前国多々良庄」として記載されている。多々良川の上流域に位置する蒲田は「かまたの別府」として文治三年（1187年）には筥崎宮の所領となっていた[注15]。また、本遺跡付近の戸原は文治三年（1187年）、文明十九年（1487年）、明応三年（1494年）の記事では筥崎宮の所領であったことがわかる[注16]。その他隣接するところでは安楽寺領酒殿庄、同領大祖社[注17]などが知られている。このように文献からは多々良川流域が、幾つかの寺社の所領下にあり、分割されていた事が窺われる。これらの荘園内における考古学的な発掘例は、多々良遺跡[注18]（3）、蒲田遺跡[注19]などの例があげられる。また筥崎宮に接して調査された例[注20]もある（箱崎遺跡・9）。いずれも中世集落址が検出されたものの、調査範囲が限られ、集落の全体像については不明である。そういった意味でも、今回の発掘は、多々良川流域における当該期の集落の在り方、景観復元を行う上で、またさらには、荘園経営の一端を知る上で意義深いものとなったといえよう。

参考文献

① 中山平次郎 1925「博多湾の海岸線」地球３－１
② 柳田純孝 1984「元寇防塁と博多湾の地形」Museum Kyushu 10
③ 福岡市教育委員会 1975 山陽新幹線関係埋蔵文化財報告 福市埋文調報第32集
福岡市教育委員会 1980 多々良込田遺跡Ⅱ 福市埋文調報第53集
福岡市教育委員会 1985 多々良込田遺跡Ⅲ 福市埋文調報第121集
④ 川添昭二編 「注解元寇防塁編年史料」所収
⑤ 後藤丹治校注 1961「多々良浜合戦時」太平記巻第十六 日本古典文学大系35所収
⑥ 坂本太郎校注 1965「継体天皇二十一年条」日本書紀十七 日本古典文学大系68所収
⑦ 福岡市教育委員会が昭和61年度に調査。
⑧ 下條信行 1977「考古学・柏屋平野―新発見の鋳型と鏡の紹介をかねて」
福岡市立歴史資料館研究報告書第１集
⑨ 国平健三 1971「部木遺跡採集の石器」福岡市遺跡地名表（総集編）
⑩ 板楠和子 1982「１ 文献から見た海の中道遺跡―太宰府主厨司考―」
海の中道遺跡 福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集所収
⑪ 福岡市立歴史資料館 1988 鴻臚館跡出土品速報展リーフレット
⑫ 日野尚志 1976「筑前那珂・席田・柏屋・御笠四郡における条里」
佐賀大学教育学部研究論集24（Ⅰ）
⑬ 福岡市教育委員会 1988「戸原麦尾遺跡（１）」福市埋文調報第189 集
⑭、⑰ 竹内理三編 1988 福岡県 角川日本地名大辞典40所収
⑮ 筥崎宮 1970「筥崎大宮司分糟屋西郷那珂西郷坪付帳写」筥崎宮史料所収
⑯ 筥崎宮 1970「田村大宮司文書」筥崎宮史料所収
⑱ 福岡市教育委員会 1972「多々良遺跡」福市埋文調報第20集
⑲ 福岡市教育委員会 1972「蒲田遺跡」福市埋文調報第33集
⑳ 福岡市教育委員会 1987「箱崎遺跡」福岡県文化財調査報告書第79集
（福岡市埋蔵文化財調査報告書は福市埋文調報と略した）

Fig. 8　顕孝寺跡遠景（南東から）

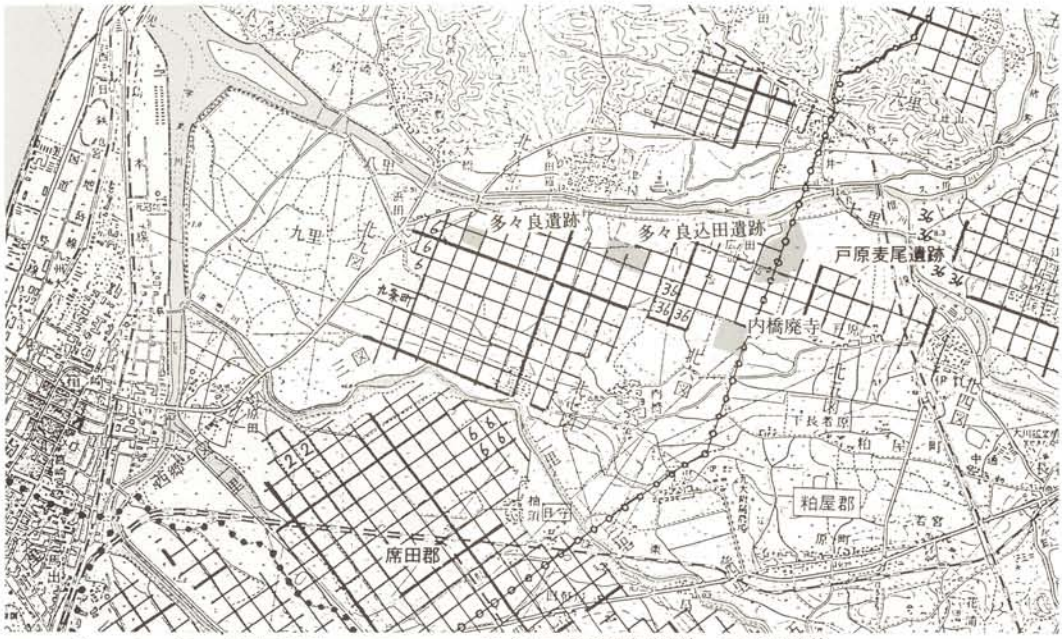


Fig. 9　多々良川下流域の条里の復元（1/40000）　⊖⊖⊖⊖駅路（西海道）　●●●は郡境

日野尚志「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」（『佐賀大学教育学部研究論文集24（Ⅰ）』1976）に一部加筆

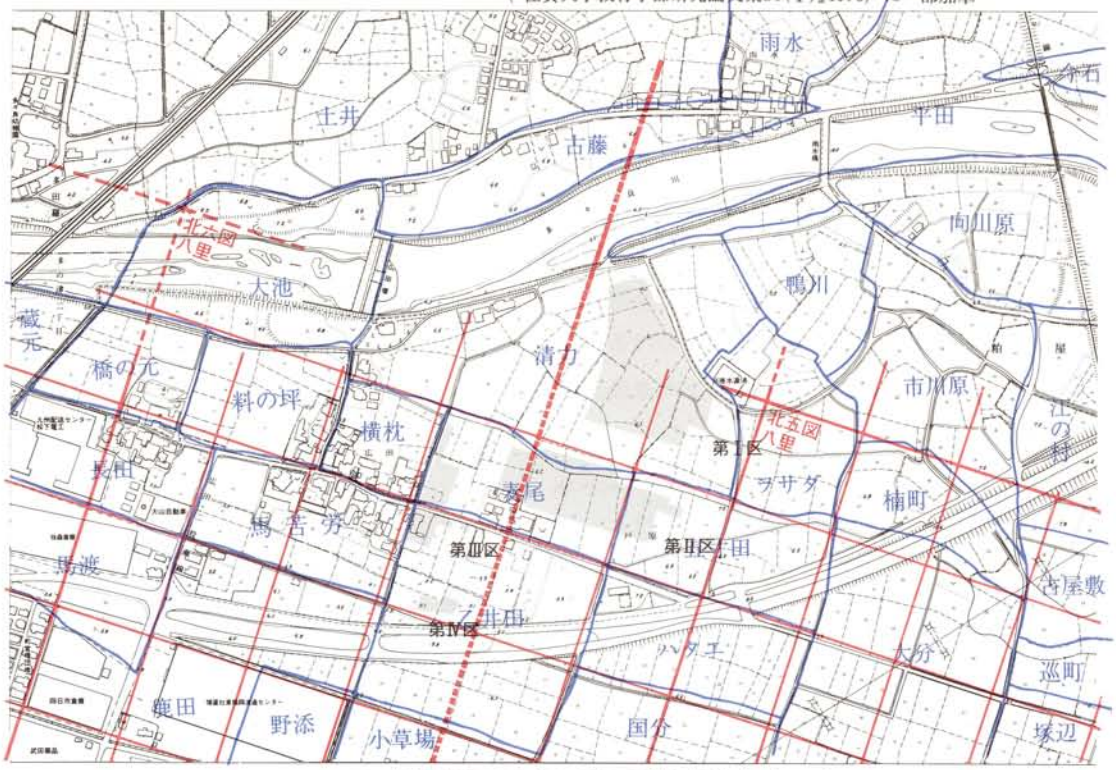


Fig. 10　遺跡周辺の字名と条里の推定復元（1/8000）

Ⅲ　発掘調査の記録

(1)　発掘調査の方法と経過

調査の経過と問題点

発掘調査は、昭和59年(1984)10月11日から同62年10月15日までの約３年間にわたって実施した。この間には、建設工事区域との調整や埋蔵文化財課の調査体制の組み直し、あるいは他の開発事業に係わる緊急調査の実施のために中断せざるを得ない期間があった。したがって実質的には約１年10ケ月ほどの期間を要したことになる。調査経過の大まかな流れについてはTab.１を参照されたい。

今回の発掘調査の遂行にあたって問題となったのは、建設工事と調査との調整が非常に難しかったことである。これは建設工事計画が実施段階になった時点で、埋蔵文化財の発掘調査が緊急に組み入れられたことによるが、本来は建設計画の計画段階から事前に協議が行われるべきであったと思われる。

やや蛇足であるがこういった事情が生じた理由を記しておく。

(1)　本市教育委員会では、公共および民間事業の各種の開発事業に係わる埋蔵文化財の事前審査を行っており、その対称となるのは原則として市域内における開発事業である。したがって市域外の開発については対称外とせざるを得ないが、市域の内外を問わず本市の主体事業である多々良浄水場の建設工事計画の内容について事前に十分知っておくべきであったこと。

(2)　浄水場建設予定地は、計画段階まで遺跡の存在は確認されておらず、したがって文化財分布地図にも記載は無い地点であった。水道局側からの県教育委員会および粕屋町教育委員会への、文化財関連の事前調査の照会では問題ないとして回答された。水道局側はこれを受け、文化財については問題ないと判断し計画を進めたこと。

(3)　遺跡の存在が明らかとなったのは、工事着手の直前に行われた試掘調査の結果であり、建設計画の見直しが不可能な時期であったこと。

これらの経過と処理対応の各段階には、いくつかの現保護行政がかかえている技術的な問題（周知化、事前協議制、自治体間の連絡の体制など）が表出しているところであるが、事前審査の在り方なども含めて今後の埋蔵文化財保護充実のための反省点としたい。

調査区の設定

試掘調査の結果では、浄水場建設予定地内（80000㎡）における遺構・遺物の分布状況は、大きく４つの地点にまとまって分布していることが確認された。遺構・遺物の遺存の程度、現

況地形などからみて、必要とされる発掘調査面積は全体で約23600㎡と予想された。４つの遺構のまとまりは、北東部から南側へ向かって便宜上第Ⅰ～Ⅳ区と呼称した。調査の進展によって当初予想されたよりも遺構の分布が広がり、実際の調査面積は第Ⅰ区が約27000㎡、第Ⅱ区が約10700㎡、第Ⅲ区が約2700㎡、第Ⅳ区が約1300㎡で、最終的な調査総面積は32600㎡である。

調査は、建設予定地内の建造物の位置、建設工事と調査工程との競合を調整して、先述の第Ⅰ～Ⅳ区を調査年度毎にさらに細分して行った。昭和59年度は第Ⅲａ区と第Ⅳａ区から着手し、第Ⅰａ区・第Ⅲａ区の調査へ移り、第Ⅱａ区で終了した。各年度ごとに数地点で同時に工事が進められたために、それに先行してそれらの地点の調査を実施したが、結果的にはまとまりのある遺構群を寸断しながらの調査となってしまった。特に第Ⅱ区においては一つの屋敷地を４つに分割し調査したために、掘立柱建物の復元や屋敷地全体の遺構間の関連などについては図面上でしか検討出来ない部分があるなど、分析にあたって若干の支障が生じた。

Fig. 11　第Ⅱ区作業風景(西から)

Fig. 12　第Ⅱ区作業風景(東から)

Fig. 13　第Ⅲ区作業風景(東から)

Fig. 14　第Ⅳ区作業風景(東から)

測量基準点、その他について

各調査区の測量実測上の基準点は、浄水場建設工事設計に際して行われた、現況測量時の基準点を利用した。

また建設予定地全体を覆って東西に420ｍ、南北に380ｍの軸線を取り、一辺20ｍの方眼を設定した。各方眼の名称は、西から東へＡ列からＵ列までのアルファベットを、北から南へ１列から19列までの算用数字を符し、それらの交差名を呼ぶこととし、各方眼の北西隅に位置する基準杭に方眼名を与えることとした(Fig.15)。

遺構名は確認順に便宜的に１から4467までの通し番号を符し、遺構の性格を表すアルファベットを数字の前に添えて呼称した。ＳＥ3321の場合は、3321番目に確認された遺構で、その性格は井戸（ＳＥ）と思われる遺構の意味である。本報告では遺構の種類ごとに通し番号を符している。

(2) 各調査区（第Ⅰ～Ⅳ区）の概要

ここでは多々良浄水場敷地内における発掘調査の成果について、第Ⅰ区を主として各調査区（第Ⅱ区～第Ⅳ区）毎にその概要を述べる。なお第Ⅱ区から第Ⅳ区については昨年度（1988年）刊行された概報を参照されたい。またこれらの調査区に係わる報告は次年度（1990年）に刊行予定である。

第Ⅰ区の概要

第Ⅰ区は浄水場敷地の北東部にあたり、多々良川左岸に近接する地点に位置している。調査区の面積は約18000㎡である。調査はａ～ｄの４つの小調査区に分けて昭和59・60・62年度にかけて実施した（Fig.15、Tab.１）。

調査の結果では、第Ⅰ区のほぼ中央に、多々良川の氾濫によって形成された、砂礫層を基盤とする沖積微高地があり、標高5.7～5.9ｍほどの高さで北東から南西へ緩やかに弧を描きながら続いていることが確認された。またのこの微高地をはさんで、北側（第Ⅰｂ区）と東南側（第Ⅰａ区）に、形成時期および埋没時期が異なると思われる２本の旧河川（ＳＲ01・02、ＳＲ3723）が検出された（付図１、Fig.59・60）。

第Ⅰ区における遺構の分布状況はおおまかに３つの群に分かれる。旧河川ＳＲ01・02の東側（第Ⅰａ区東側）の微高地、先述した調査区中央に位置する微高地の北東部（第Ⅰｂ区中央から東南部）および同微高地の西南側（第Ⅰａ区西側～第Ⅰｄ区中央から北東部）である。これらのうち最も遺構の分布密度が高い地点は、中央に位置する微高地の北東部（第Ⅰｂ区）の

調査区		調査実施面積(㎡)				総面積(㎡)	調査期間	備考
		59年度	60年度	61年度	62年度			
Ⅰ区	a	7,000				18,000	S59.10.18～60. 3. 1	(調査着手)
	b		2,000	6,000			S61. 1.27～61. 8.12	
	c			1,000			S61. 7.15～61. 8.12	
	d				2,000		S62. 7.13～62. 9.30	(調査終了)
Ⅱ区	a	2,000	2,500			10,700	S60. 2. 5～60. 4.30	
	b		2,000				S60. 4. 9～60. 6.27	
	c		2,000				S60. 8.22～60.10.30	
	d				2,200		S62. 4.23～62. 8.30	
Ⅲ区	a	200				2,650	S59.10.16～59.10.22	
	b	1,500	150				S60. 2.15～60. 4. 5	
	c			800			S61. 8.25～61.11.22	(Ａ～Ｃトレンチを設定)
Ⅳ区	a	70				1,320	S59.10.19～59.10.29	
	b				1,250		S61. 9. 3～61.11.22	
総面積㎡		10,770	8,650	9,050	4,200	32,670		

Tab. 1　戸原麦尾遺跡調査経過表

Fig. 15　戸原麦尾遺跡調査区設定位置図（1/3000）

遺構群である。特にこの地点では掘立柱建物や井戸、竪穴遺構などがかなりの切り合い関係をもって分布し、さらにそれらの回りを２条の溝状遺構が、ほぼ隅丸方形状に、一辺約50ｍの長さで三方に巡ることが確認され、中世の集落の在り方を知る上で貴重な事例となった。また第Ⅰｂ区では湖州六花鏡、ガラス製小玉、白磁碗・皿を副葬した墓址（ＳＫ10）なども検出された（付図１・２、Fig.19・54・55）。

旧河川ＳＲ01・02の東側（第Ⅰａ区東側）の遺構の分布は、第Ⅰｂ区比較して、密度がやや低いが掘立柱建物が一定のまとまりをもって分布し、調査区の外へ向かって、東側から東南側さらに広がっていることが認められた。なおこの地点では、出土例が極めて少ない青銅製鳳凰文柄鏡と青磁碗を副葬した墓址（ＳＫ36）なども検出されている（付図１、Fig.58）。

微高地の西南側では竪穴遺構や水田に伴う溝状遺構が多数分布している。

これらの遺構の遺存状況は各地点で少しずつ異なった状況であるが、おおまかにいえば東側から西側にかけて残りの程度が悪くなっている。柱穴などは５～10cmほどの遺存状況のものが多く、また第Ⅰｄ区西南に見られる溝状遺構は、後世の営田による削平が顕著で、わずか５cmほどしか残っていない。

第Ⅰ区の調査で出土した遺物は、土師器（皿・坏・碗）、土師質土器（土鍋・擂鉢）須恵質土器（甕・片口鉢）、瓦器（碗・皿）、瓦質土器（釜・三足釜・鉢）、輸入陶磁器[注1]（白磁碗・皿、青磁碗・皿、青白磁皿・合子、陶器甕・壺・鉢、天目碗）、滑石製品（石鍋）、鉄製品（釘・刀子・紡錘車・鉄滓など）、土製品（土錘）、銅銭、青銅製鏡（柄鏡・六花鏡）などである。主体を占めるのは、やはり土師器、土師質土器などの供膳、調理形態のもので、出土土器の約2/3～4/5の量を占めている。輸入陶磁器は約7.8％弱（破片の占める割合）の量である。[注2]

第Ⅱ区の概要

第Ⅱ区は浄水場建設地の中央部に位置する。浄水場施設の管理本館棟の建設位置にあたる。多々良川左岸から250ｍほど離れた地点で、周辺の標高は約5.6～5.80ｍを測る。調査面積は約10700㎡である。調査はａ～ｄ区の４つの小調査区に分けて、昭和59・60・62年度にかけて実施した。出土した遺構・遺物は掘立柱建物、井戸、土壙、木棺墓、竪穴遺構、杭列、溝状遺構などで、生活関連の遺構が主である。遺構の組み合わせは第Ⅰ区とほとんど変わらないが、墓址と思われる土壙の数は、

Fig. 16　第Ⅱａ区完掘状況（北から）

注1．輸入陶磁器の分類にあたっては、下記の文献を参考とした。
　　森本朝子・池崎譲二編1984「博多出土貿易陶磁分類表」福岡市埋蔵文化財調査報告書第105集所収
注2．137頁Tab.７参照

第Ⅰ区と比べて少ない。

第Ⅱ区の特徴としてあげられるのは、上記の遺構群を取り込んで長方形の区画の溝状遺構が巡る点である。ただし第Ⅰ区の屋敷地が2条の溝であったのに対して、ここでは1条である。溝状遺構は東南隅部が削平のため消滅しており、やや不正確であるが、一辺の長さが東西に約100m、南北に約50mの長さを測る規模のものである。またこの区画は多々良川左岸に展開している条里の坪並に合致するものであり、中世鎌倉期の集落の営みと条里との関連について考える上で貴重な事例となった。

出土遺物は鎌倉期の時期を中心とする日常雑器が主を占めている。第Ⅰ区でみられたような古代末期の遺物はほとんど無く、成立の時期や経緯が第Ⅰ区の屋敷地(注)とは異にする可能性がある。

第Ⅲ区の概要

第Ⅲ区は浄水場敷地の最も西側に位置し、広田の集落の東側に隣接している地点である。多々良川左岸からは南へ約300m離れた沖積微高地上に位置している。標高は約5.50mを測る。調査はa～c区の3つの小調査区と、3ケ所のトレンチを設定し、昭和59年から61年にかけて実施した。調査面積は約2700㎡である。検出された遺構・遺物は第Ⅰ・Ⅱ区と同様に掘立柱建物、井戸、溝状遺構などである。第Ⅰ・Ⅱ区で検出されなかった遺構として、埋甕や厠跡とも思える竪穴などが挙げられる。第Ⅲc区の北端では幅が少なくとも5m以上はあると思われる大溝が確認された。この溝の位置と方向性は復元条里と一致しており、出土遺物からみて、古代末にはすでに当該地周辺には条里地割りが施行されていたことを物語っているものとして注意された。

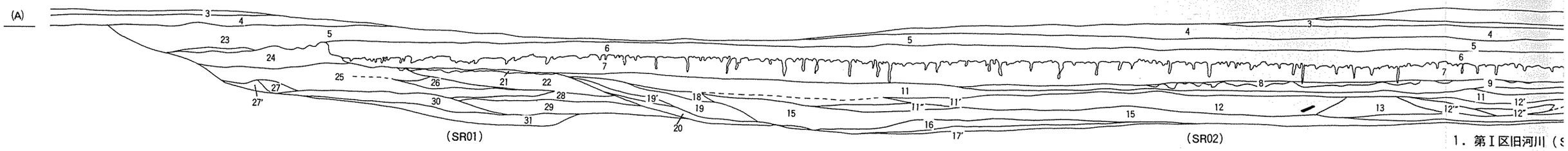
出土遺物は少ない。土師器や瓦器の日常雑器を中心とした土器が出土している。先述の大溝からは馬の描かれた板絵が出土している。古代祭祀の一端を知る上で貴重な出土例である。

第Ⅳ区の概要

第Ⅳ区は浄水場敷地の西南部に位置する。多々良川左岸からは南へ約400mほど離れた地点に位置する。調査面積は1320㎡で、a・b区の2つの調査区に分けて調査を行った。検出された遺構・遺物は少ない。南西隅に性格不明の円形竪穴が確認された以外は水田に伴う溝状遺構が4～5条認められたのみである。

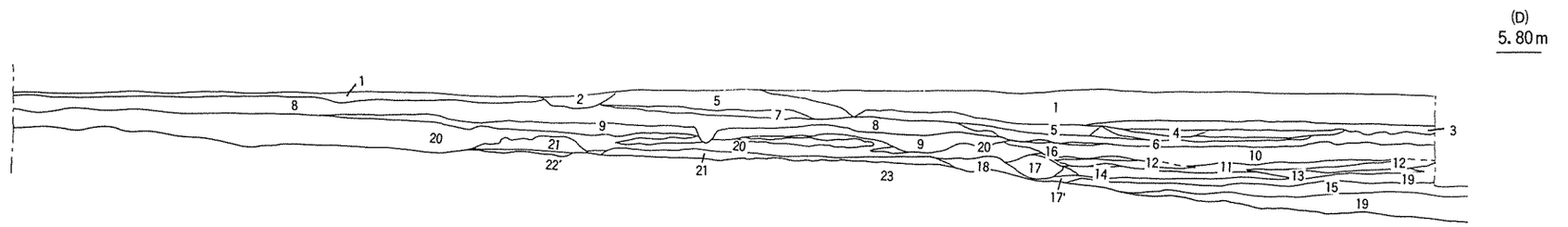
Fig. 17　第Ⅲb区完掘状況（北東から）

注：本書では、掘立柱建物、井戸、廃棄壙などの遺構、およびそれらと有機的な関連をもって配されている溝状遺構などの遺構が集中して分布する客観的な範囲を屋敷地と呼ぶ。



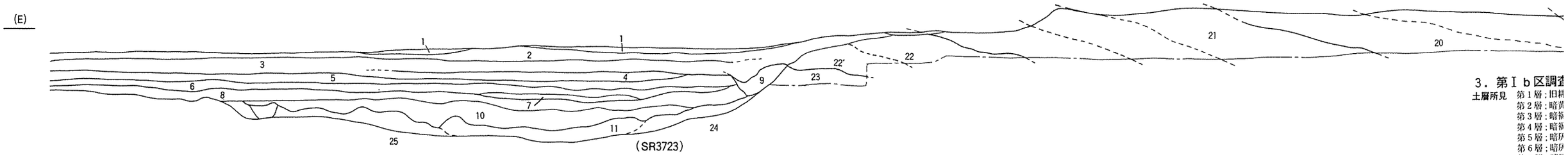
1．第Ⅰ区旧河川（S

土層所見　第１層；表土は欠
第２層；床土（灰
第３層；黄褐色粘
第４層；灰褐色粘
第５層；暗褐色粘
第６層；暗茶褐色
第７層；暗青灰色
第８層；青灰～灰
第９層；暗灰色～
第10層；明灰色粗
第11層；黒灰色粘
11′層 ｜ ；第11
11″層 ｜
第12層
12′層 ｜ ；灰色
12″層 ｜
12‴層
第13層；明灰色細
第14層；やや青っ



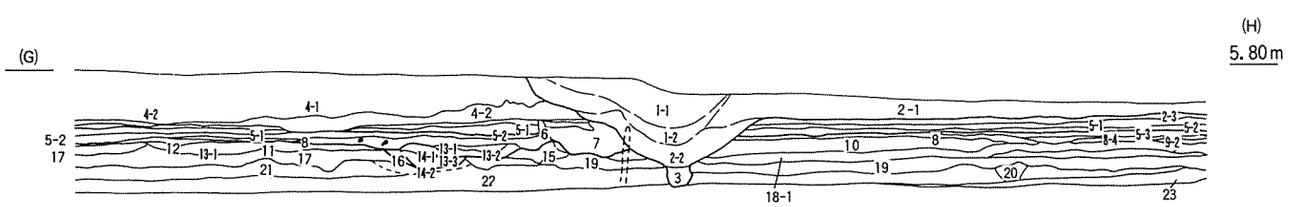
2．第Ⅰ区ＳＤ06横断南北土層断面図（付図１のＣ-Ｄライン）

土層所見
第１層；暗褐色～暗灰褐色粘質土
第２層；暗褐～黒褐色粘質土
第３層；灰色砂層
第４層；灰褐色砂層
第５層；暗褐色シルト～粘質土
第６層；灰色～灰褐色砂層
第７層；暗灰～灰色砂層
第８層；灰色シルト層
第９層；灰色～灰白色砂礫層
第10層；灰色粗砂層
第11層；灰色砂礫層
第12層；灰白色砂層
第13層；灰色粘質土層
第14層；灰色～暗灰色粘質土層
第15層；灰色砂礫層
第16層；灰色シルト層
第17層；青灰色シルト層
第18層；暗灰色シルト層
第19層；灰白色礫層
第20層；暗褐色粘質土層
第21層；暗青灰色粘質土層
第22層；暗青灰色砂層
第23層；灰色礫層



3．第Ⅰｂ区調査

土層所見　第１層；旧耕
第２層；暗黄
第３層；暗褐
第４層；暗褐
第５層；暗灰
第６層；暗灰
第７層；暗灰
第８層；暗灰
第９層；暗灰
第10層；黒灰
第11層；黒褐
第12層；明褐
第13層；褐色

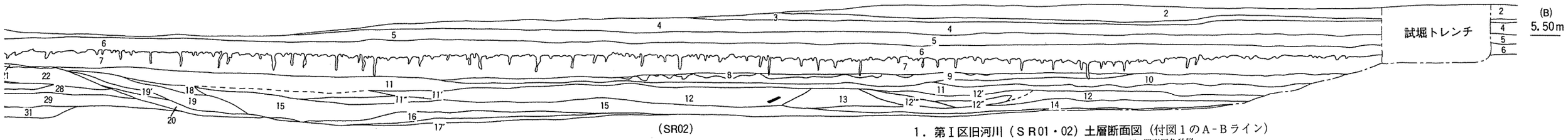


4．第Ⅰ区西壁土層断面図（付図１のＧ-Ｈライン）

土層所見
第１層；盛土
第2-1層；旧耕作土（暗灰色粘質土）
第2-2層；旧耕作土（やや黄灰色がかった灰～暗灰色粘質土）
第2-3層；旧耕作土（暗黄灰～黄灰色粘質土）
第３層；暗青灰色粘質土
第4-1層；暗灰色粘質土
第4-2層；淡黄灰色粘質土
第5-1層；淡黄灰色シルト
第5-2層；灰色～淡黄灰色シルト
第5-3層；灰色シルト
第６層；灰色粘土ブロック
第７層；淡黄灰色粘土とシルトの混合
第８層；黄灰～黄褐色粘土
第９層；淡黄灰色シルト
第10層；黄灰色＋明灰褐色シルト
第11層；灰～淡黄灰色シルト
第12層；淡黄灰～黄灰色シルト
第13-1層；灰黄色～灰色シルト
第13-2層；灰色～暗灰色粘土
第13-3層；灰色～淡黄灰色粘土
第14-1層；灰色～暗灰色シルト
第14-2層；灰色～暗灰色シルトと粘土との互層
第15層；黄灰～黄褐色砂層
第16層；灰～淡黄灰色砂層
第17層；黄灰色シルト層
第18-1層；灰色粘土～シルト
第18-2層；淡黄灰色シルト
第18-3層；黄灰色砂
第19層；黄褐色～やや暗い黄褐色砂層
第20層；暗灰色砂層
第21層；灰～暗茶灰色砂礫層
第22層；茶灰色砂層
第23層；淡茶灰色砂層
第24層；暗黄灰～暗茶灰色砂礫層
第25層；灰～暗灰色砂層
第26層；灰色砂礫層

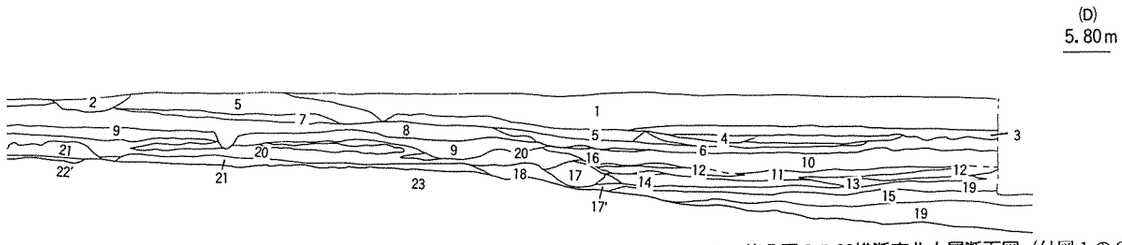
0

Fig. 18　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区土層断面図（1/50）



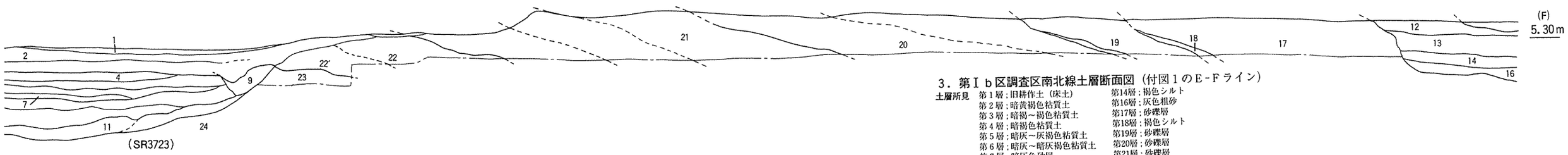
1．第Ⅰ区旧河川（ＳＲ01・02）土層断面図（付図１のＡ-Ｂライン）

土層所見
第１層；表土は欠失
第２層；床土（灰黄褐色粘土質土）
第３層；黄褐色粘質土層
第４層；灰褐色粘質土
第５層；暗褐色粘質土
第６層；暗茶褐色粘質土
第７層；暗青灰色シルト
第８層；青灰～灰色砂層
第９層；暗灰色～黒灰色シルト～粘土層
第10層；明灰色粗砂層
第11層；黒灰色粘質土
11′層、11″層；第11層と比べやや砂っぽい
第12層
12′層、12″層；灰色～灰褐色砂層
12‴層
第13層；明灰色細砂層
第14層；やや青っぽい灰色砂層
第15層；明青灰色砂層
第16層；灰色シルト層
第17層；黄褐色粗砂層
第18層；暗灰色粗砂層
第19層；灰色砂層
第19′層；灰色砂層
第20層；暗灰褐色粘質土
第21層；暗灰色砂礫層
第22層；灰色粗砂層
第23層；灰色砂礫層
第24層；灰色～青灰色シルト層
第25層；灰色中砂～粗砂層
第26層；明灰色シルト層
第27層；暗灰色シルト層
第27層；灰色シルト層
第28層；粗砂層
第29層；灰白色粗砂層
第30層；黄灰～灰褐色砂層
第31層；青灰色シルト層



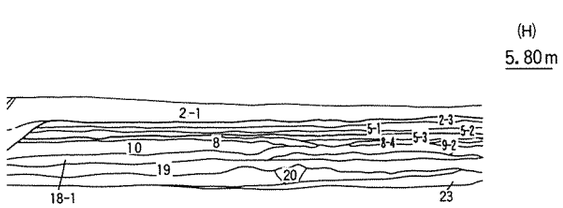
2．第Ⅰ区ＳＤ06横断南北土層断面図（付図１のＣ-Ｄライン）

土層所見
第１層；暗褐色～暗灰褐色粘質土
第２層；暗褐～黒褐色粘質土
第３層；灰色砂層
第４層；灰褐色砂層
第５層；暗褐色シルト～粘質土
第６層；灰色～灰褐色砂層
第７層；暗灰～灰色砂層
第８層；灰色シルト層
第９層；灰色～灰白色砂礫層
第10層；灰色粗砂層
第11層；灰色砂礫層
第12層；灰白色砂層
第13層；灰色粘質土層
第14層；灰色～暗灰色粘質土層
第15層；灰色砂礫層
第16層；灰色シルト層
第17層；青灰色シルト層
第18層；暗灰色シルト層
第19層；灰白色礫層
第20層；暗褐色粘質土層
第21層；暗青灰色粘質土層
第22層；暗青灰色砂層
第23層；灰色礫層



3．第Ⅰｂ区調査区南北線土層断面図（付図１のＥ-Ｆライン）

土層所見
第１層；旧耕作土（床土）
第２層；暗黄褐色粘質土
第３層；暗褐～褐色粘質土
第４層；暗褐色粘質土
第５層；暗灰～灰褐色粘質土
第６層；暗灰～暗灰褐色粘質土
第７層；暗灰色砂層
第８層；暗灰～黒灰色シルト
第９層；暗灰色砂礫層
第10層；黒灰色粘土層
第11層；黒褐色粘土
第12層；明褐色シルトの粘質土
第13層；褐色～明褐色シルト
第14層；褐色シルト
第16層；灰色粗砂
第17層；砂礫層
第18層；褐色シルト
第19層；砂礫層
第20層；砂礫層
第21層；砂礫層
第22層；明褐色シルト～砂層
第22層；黒褐色シルト
第23層；灰色粗砂層
第24層；砂礫層
第25層；やや青みがかった灰色砂（第15層は欠）



4．第Ⅰ区西壁土層断面図（付図１のＧ-Ｈライン）

土層所見
第１層；盛土
第2-1層；旧耕作土（暗灰色粘質土）
第2-2層；旧耕作土（やや黄灰色がかった灰～暗灰色粘質土）
第2-3層；旧耕作土（暗黄灰～黄灰色粘質土）
第３層；暗青灰色粘質土
第4-1層；暗灰色粘質土
第4-2層；淡黄灰色粘質土
第5-1層；淡黄灰色シルト
第5-2層；灰色～淡黄灰色シルト
第5-3層；灰色シルト
第６層；灰色粘土ブロック
第７層；淡黄灰色粘土とシルトの混合
第８層；黄灰～黄褐色粘土
第９層；淡黄灰色シルト
第10層；黄灰色＋明灰褐色シルト
第11層；灰～淡黄灰色シルト
第12層；淡黄灰～黄灰色シルト
第13-1層；灰黄色～灰色シルト
第13-2層；灰色～暗灰色粘土
第13-3層；灰色～淡黄灰色粘土
第14-1層；灰色～暗灰色シルト
第14-2層；灰色～暗灰色シルトと粘土との互層
第15層；黄灰～黄褐色砂層
第16層；灰～淡黄灰色砂層
第17層；黄灰色シルト層
第18-1層；灰色粘土～シルト
第18-2層；淡黄灰色シルト
第18-3層；黄灰色砂
第19層；黄褐色～やや暗い黄褐色砂層
第20層；暗灰色砂層
第21層；灰～暗茶灰色砂礫層
第22層；茶灰色砂層
第23層；淡茶灰色砂層
第24層；暗黄灰～暗茶灰色砂礫層
第25層；灰～暗灰色砂層
第26層；灰色砂礫層

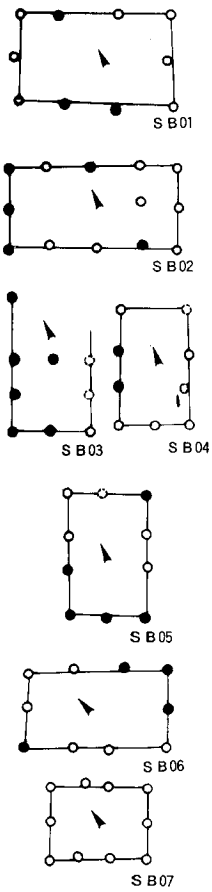
Fig. 18　戸原麦尾遺跡第Ⅰ区土層断面図（1/50）

(3) 遺構各説

1) 掘立柱建物（ＳＢ）(Fig.19～20、PL.３～９、Tab.２)

概要　第Ⅰ区では、掘立柱建物等の建物の柱穴は調査区の東南側(Ａ群と便宜的に呼ぶ)、西南部(Ｂ群)、および中央部から北側にかかる範囲(Ｃ群)に検出された。特にＣ群においては、60ｍ四方の範囲において他の遺構とともに、集中的に柱穴が分布し、まとまりのある建物群の存在が想定された。柱穴は、大きなもので直径40～50cm、深さ50～60cmで、平均的には直径が20～30cm、深さ30cm前後のものが最も多い。また埋土は、多量の焼土・木炭片を含むものが若干ある他は、ほとんどが褐色～暗褐色の砂礫混じりの粘質土である。柱穴の一部には青磁碗、土師器皿、坏、土鍋などの埋置が認められるもの(Fig.20)もある。

掘立柱建物は、調査時の所見と、図上操作により50棟を推定復元した。調査時にＳＢ01・02・20～23・29・35・42～47・49の15棟を確認した。分布上の特徴は柱穴と同様に大きく３つ（Ａ～Ｃ群）に別れる。特にＣ群では、建物群が共通の方向性を持ちつつ、一定の地点において３～５回ほど建て変わっており、屋敷地として長期に渡って利用されたことが考えられた。



ＳＢ01　Ｃ群の北側に位置する２×３間の東西棟である。確認できた２×３間の建物の中では比較的大きなグループに入る。特に梁行が長く、4.70～4.80ｍを測る。柱穴は四隅がやや小さく、径20cm程度で、木炭片、焼土を含んでいた。柱穴からは糸切り底の土師器皿の小片が出土。

ＳＢ02　Ｃ群の北東部に位置する、２×３間（東壁に庇）もしくは２×４間の東西棟である。南北の中央の桁柱柱穴は特に大きく径が50cmを測る。東側に並ぶ３つの柱穴はわずかに柱筋がズレており、２×４間とする根拠を弱くしている。柱穴からは土師器皿の小片が出土。

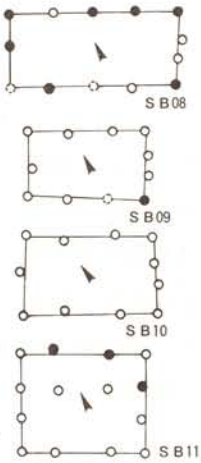
ＳＢ03　Ｃ群の北東部端に位置している。調査区壁にかかっており、全体の構造については不明。ＳＢ29（ＳＢ29は北側に庇が見られた）と同様に２×３間の北壁に庇がつくか、２×２間の建物にかなり長い庇がつくものなのか問題が残る。柱穴からは白磁・土師器皿の小片が出土している。

ＳＢ04　２×３間の南北棟である。ＳＢ03と重複する地点に位置する。調査区壁にかかっており、全体の構造については不明。東西の側柱の中央に位置する２本は４隅の柱よりやや大きいという特徴がある。

ＳＢ05　２×３間の南北棟である。ＳＢ03・04とは一部重複する位置にある。ＳＢ02とは直交し、重複している。東西の側柱の中央に位置する２本の柱間の距離が狭く、南北の側柱がやや離れているという特徴がある。

ＳＢ06　Ｃ群の東側に位置する、２×３間の東西棟である。２×３間の建

注　●は柱根痕跡が認められたもの
　　○は柱穴掘方のみのもの
　　◌は柱穴未検出のもの



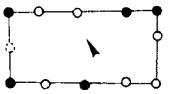
物の中では比較的大きなグループに入る。南桁行きが北側よりも長く、やや歪な平面形となっている。主軸方位が他と比べ北寄りである。

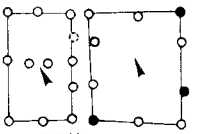
SB07　C群の東側に位置する、2×3間の小規模な東西棟である。SB07・15と重複する。西梁行が東側よりも長くやや歪な平面形である。

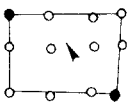
SB08　C群の中央から東側に位置する、2×4間の東西棟である。南側柱の柱穴以外は大きな掘方で、構造的に南側を意識した構成と思われる。井戸（SE21）との位置関係が注意される。

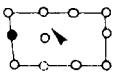
SB09　SB01と重複する位置にある、2×3間の東西棟である。東側梁行は4本の柱で、中央2本間の距離はやや南寄りとなっているが、東側と同様に2本柱だった可能性もある。

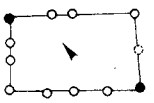
Fig. 19　掘立柱建物配置図(1/1500)

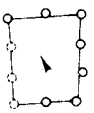

SB12

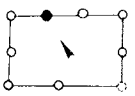

SB13 SB14

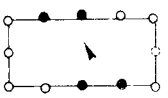

SB15

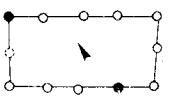

SB16

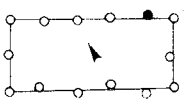

SB17

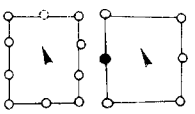

SB18


SB19


SB20


SB21


SB22


SB23 SB24

ＳＢ10　Ｃ群の中央に位置する２×３間の東西棟である。東側梁行は４本の柱で、中央２本間の距離はやや広く、四隅の柱側に寄っている。南北の桁行も同様に、中央の２本の柱が四隅の柱側に寄っている。

ＳＢ11　ＳＢ01の南側に位置する２×３間の東西棟で、北側に庇を持つ。南北の桁行の柱は、ＳＢ10同様に中央の２本の柱が四隅の柱側に寄っている。庇部の柱筋は北側柱筋にほぼ平行で、柱も対応して建てられている。

ＳＢ12　Ｃ群の中央に位置する、２×４間の東西棟である。西側棟柱は確認できていない。柱穴はいずれも径30～50cmでしっかりとした掘方である。

ＳＢ13　Ｃ群の中央からやや南側に位置する、２×４間の南北棟である。東側柱は５本と考えられるが、うち１本についてはＳＢ12の南側柱によって切られているために、確認できていない。中央の東西梁に当たる線上には二本の柱が見られる。束柱の可能性がある。

ＳＢ14　Ｃ群の中央からやや西側に位置する、２×３間の南北棟である。平面形はわずかに歪み、北西角の柱が柱筋から飛び出ている。

ＳＢ15　ＳＢ06・07に重複する地点に位置する、２×３間の東西棟である。間仕切りもしくは束柱と思われる小さな柱穴２本が棟筋に見られる。

ＳＢ16　Ｃ群の中央から南西に外れて位置する２×３間の東西棟である。間仕切りもしくは束柱と思われる柱穴１本が棟筋の西側に見られる。

ＳＢ17　Ｃ群の北西部に位置する、２×４間の東西棟である。東側棟柱は確認できていない。柱穴ははいずれも径30cm前後のしっかりとした掘方である。北側の側柱は中央の一本しか確認できていない。北側桁行が短い。

ＳＢ18　Ｃ群の北西端部に位置する、２×３間の南北棟である。西側側柱３本は確認できていない。南梁行が北よりもやや短く歪んだ平面形である。

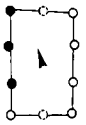
ＳＢ19　Ｃ群の北西部に位置する２×３間の東西棟である。南側柱は中央の１本のみ。東南角の柱が西へ寄っており平面形がやや歪んでいる。

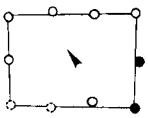
ＳＢ20　Ｃ群で最も建物の建て変えが顕著な地点に位置する、２×４間の東西棟である。南北の側柱は対称的に対応し平面形は整った長方形である。

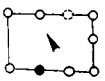
ＳＢ21　ＳＢ20に重複する地点に位置する２×４間の東西棟である。棟柱は東側に見られる。南北の側柱は対称的に対応し、整った長方形である。

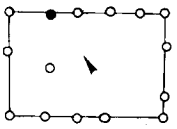
ＳＢ22　ＳＢ20・21に重複する２×４間の東西棟である。北側柱は５本で整然と並ぶ。南側は距離が一定しているが、並びに出入りがあり不揃いである。

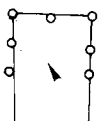
ＳＢ23　Ｃ群の中央西南部に位置する、２×３間の南北棟である。柱筋は整然としており、平面形は整った長方形となっている。西側棟柱は未確認。

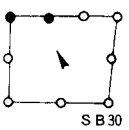

S B25

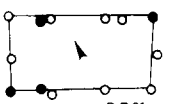

S B26

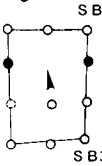

S B27

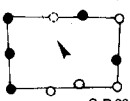

S B28

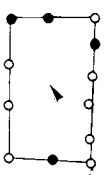

S B29

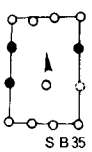

S B30

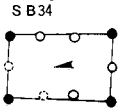

S B31


S B32


S B33


S B34


S B35


S B36

ＳＢ24　Ｃ群の中央西南端部に位置する、１(2)×３間の南北棟である。構造的には南北壁中央に柱があったものと思われるが、未確認である。

ＳＢ25　Ｃ群の西端部に位置する、２×３間の南北棟である。南北の棟柱は未確認。東西の側柱は対称的に対応し整った長方形である。規模は小さい。ＳＢ24に切られている。

ＳＢ26　Ｃ群の西端部に位置する、２×３間の東西棟である。西南角の柱は未検出。柱の並びは比較的整然としているが、平面形はやや歪である。

ＳＢ27　ＳＢ20・21に一部重複する地点に位置する、２×３間の東西棟である。最も規模の小さな建物である。西側の棟柱は未確認である。

ＳＢ28　Ｃ群の中央からやや西側に位置する、２×４間の東西棟である。基本的な構造は２×２間であるが、北側の側柱に見られるように１間の間隔を詰めている特徴がある。東側の棟柱は２本である。

ＳＢ29　Ｃ群の南側に離れて位置する、２×３間の南北棟である。東西の側柱はいずれも柱の間隔が長い箇所が南側にある。ＳＢ03と構造的に似る。

ＳＢ30　Ｃ群の中央からやや東側で、ＳＢ20等と隣接する地点に位置する。２×３間の東西棟である。南側が短くかなり歪な平面形となっている。

ＳＢ31　Ｃ群の中央からやや東側に位置する、２×３間の東西棟である。南北の側柱は対称的に配されている。南桁行がやや短く若干歪である。

ＳＢ32　Ｃ群の南側に離れて位置する、２×３間の南北棟である。主軸の方向はほぼ南北に沿う。柱の配列は整然としている。

ＳＢ33　Ｃ群の南側に離れて位置する、２×３間の東西棟である。南北の側柱の中央の２本の柱の間隔が狭く、中央寄りである。棟柱はやや西寄り。

ＳＢ34　Ｃ群の南側に離れて位置する、２×３間の南北棟である。東側柱は５間、西側柱は３間となっている。南梁行がやや短く若干歪である。

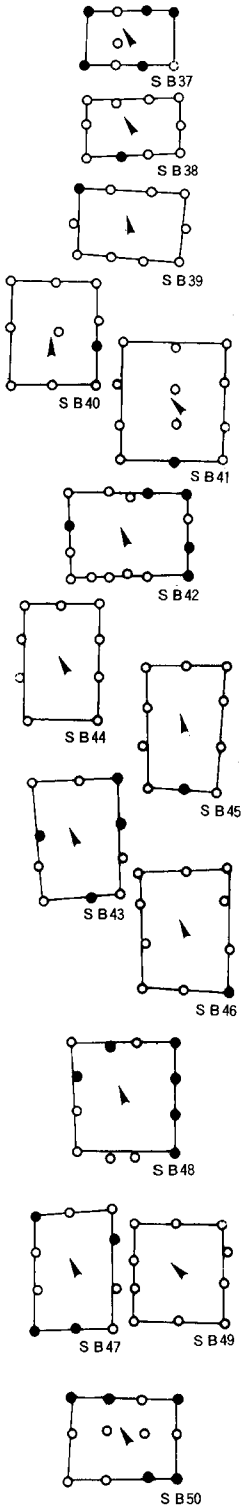
ＳＢ35　Ｃ群の南側に離れて位置する、３×３間の南北棟である。主軸の方向はＳＢ32・36と同様ほぼ南北に沿う。基本的には梁行は２間であろう。

ＳＢ36　Ｃ群の南側に離れて位置する、２×３間の南北棟である。北桁行がやや短かい。四隅の柱穴には柱痕跡がみられた。他の建物と異なり、ＳＢ32・35とともに、ほぼ磁北に主軸方位をとる特徴がある。

ＳＢ37　Ｃ群の南端に位置する、１×３間の東西棟である。桁行はいずれも短く、1,5ｍ前後である。東西の梁の中央では柱穴は未確認。

ＳＢ38　ＳＢ37と重複する位置にある、２×３間の東西棟である。南側柱は間隔が不揃いであるが、全体的に平面形はよく整った長方形である。

ＳＢ39　ＳＢ01と重複する地点にある２×３間の東西棟である。西側の棟



柱は柱筋から離れ、また小さい。南北の側柱は対称的によく対応している。

ＳＢ40　調査区西南部にまとまるＢ群に属する建物で、２×３間の南北棟である。西側柱は２間で、南側の棟柱は未確認である。

ＳＢ41　ＳＢ40と重複する位置にある、２×３間の東西棟である。南東隅の柱は確認できていない。柱穴はいずれも径20cm前後のやや小さな掘方で、残りは悪い。棟筋に二本の柱を配している。東柱かどうかは不明。

ＳＢ42　Ｂ群の北端に単独でみられる建物で、３×３間の東西棟である。南北の両側柱は５本で、うち３本が中央に寄っている。東西の側柱は150cm前後の間隔で、それぞれ２本の柱が配されている。

ＳＢ43～46　いずれもＡ群の西側の地点に位置する、２×３間の南北棟である。平面形はいずれもやや不整な長方形で、北側梁行が長いという共通性がある。ＳＢ44の南側の棟柱と、西側柱の１本が未確認以外はいずれも柱は構造的に対称性をもって配されている。ただしＳＢ43の南側の棟柱の位置は東側により過ぎている感がある。これら４棟の建物はおそらく一連の共通する建物の建て変えと思われる。直接の切り合い関係はＳＢ43→ＳＢ44、ＳＢ46→ＳＢ45で、可能性としてＳＢ43がもっとも古いことが想定される。

ＳＢ47　ＳＢ43～46が建て変わっている範囲の東側の地点に位置する、２×３間の南北棟である。北と東側柱の間隔が不均等であるほかは、柱筋は整然と並ぶ。平面形は整った長方形をなす。

ＳＢ48　ＳＢ47のやや南側に位置する３×３間の南北棟である。構造的には２×３間が基本にあるものと思われる。ＳＢ42に似る。平面形は梁行が短く寸づまりな長方形である。ＳＢ50を切っている。

ＳＢ49　Ａ群の北側に位置し、ＳＤ01と主軸が並行する、２×３間の南北棟である。東側の南北両隅の柱は未確認であるが、側柱、棟柱ともに対称的に配されて、平面形は整った長方形となっている。ＳＤ01との関係は明確でないが、ＳＤ01の方向に規制された位置関係にある。

ＳＢ50　ＳＢ48と重複する位置にある、２×３間の南北棟である。棟筋はやや北側に寄っており、東柱と思われる小さな柱穴が棟筋に沿ってみられる。平面形は整った長方形である。

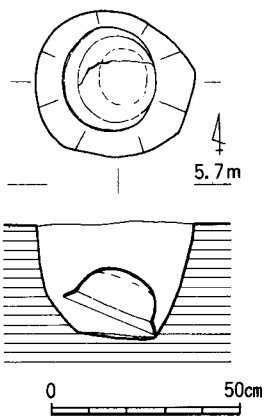


Fig. 20　柱穴(2359)遺物出土状況図(1/20)

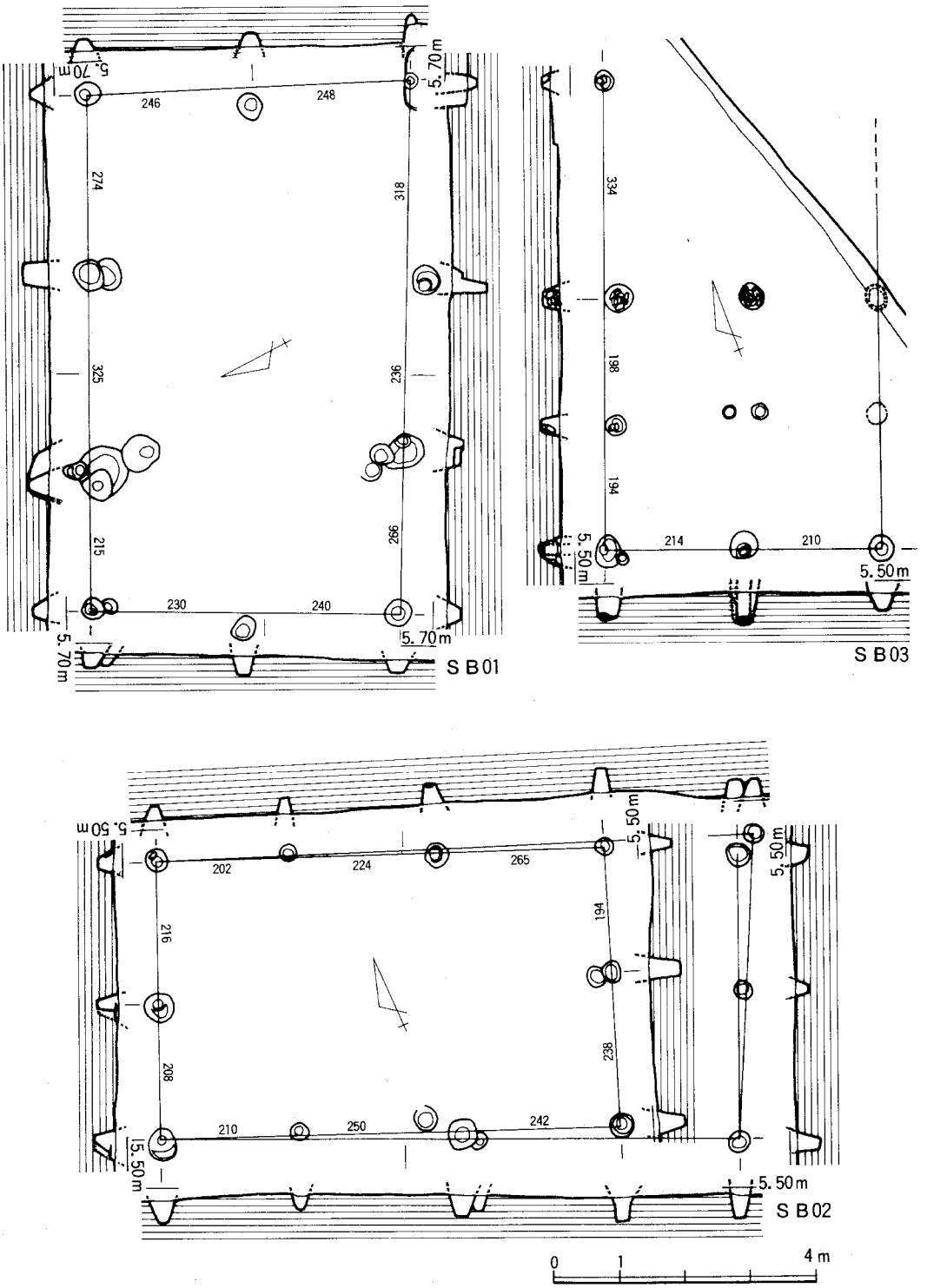


Fig. 21　掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ01～03)(1/100）その１

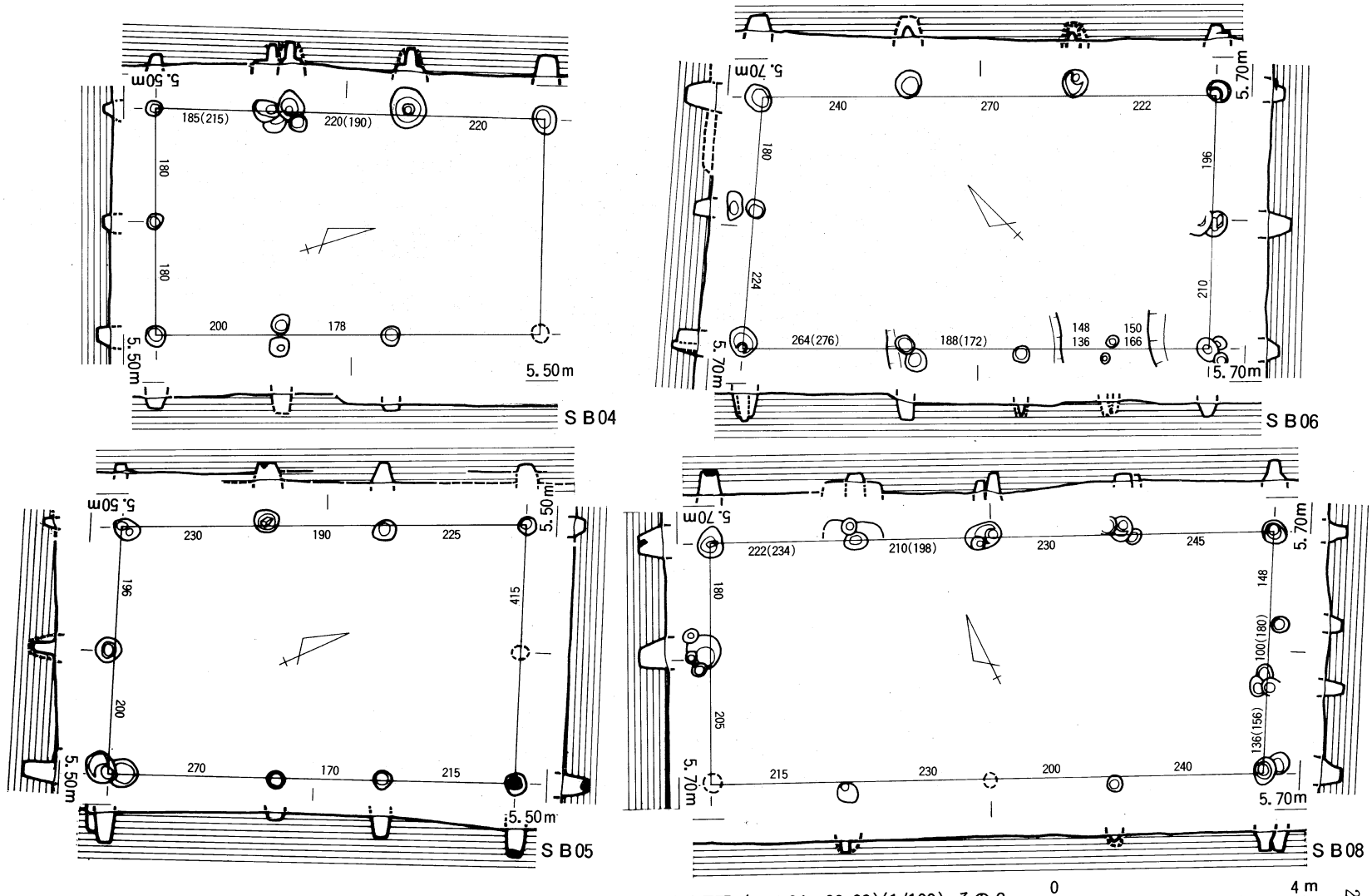


Fig. 22 掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ04～06･08)(1/100) その２

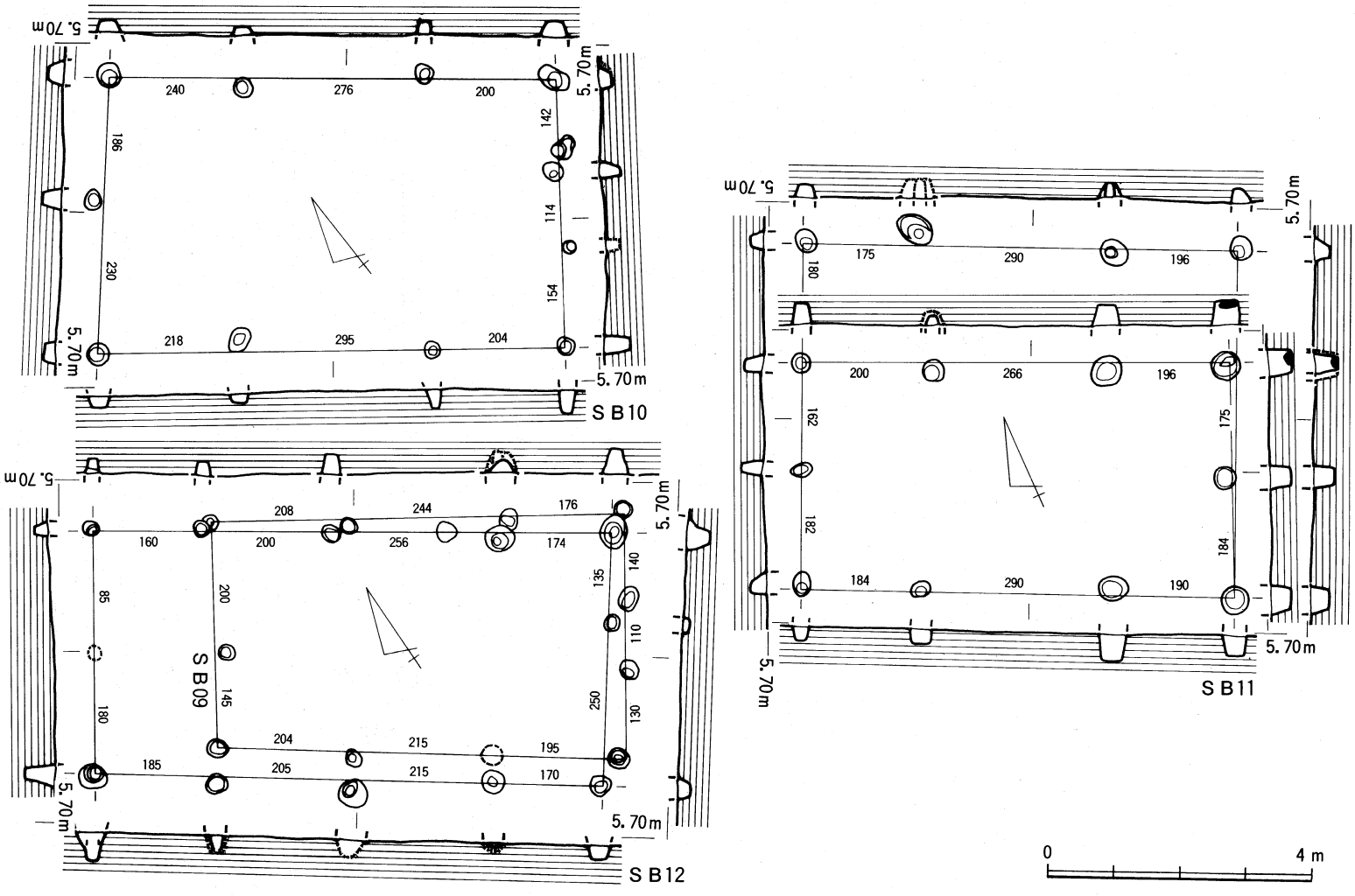


Fig. 23　掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ09～12)(1/100）その３

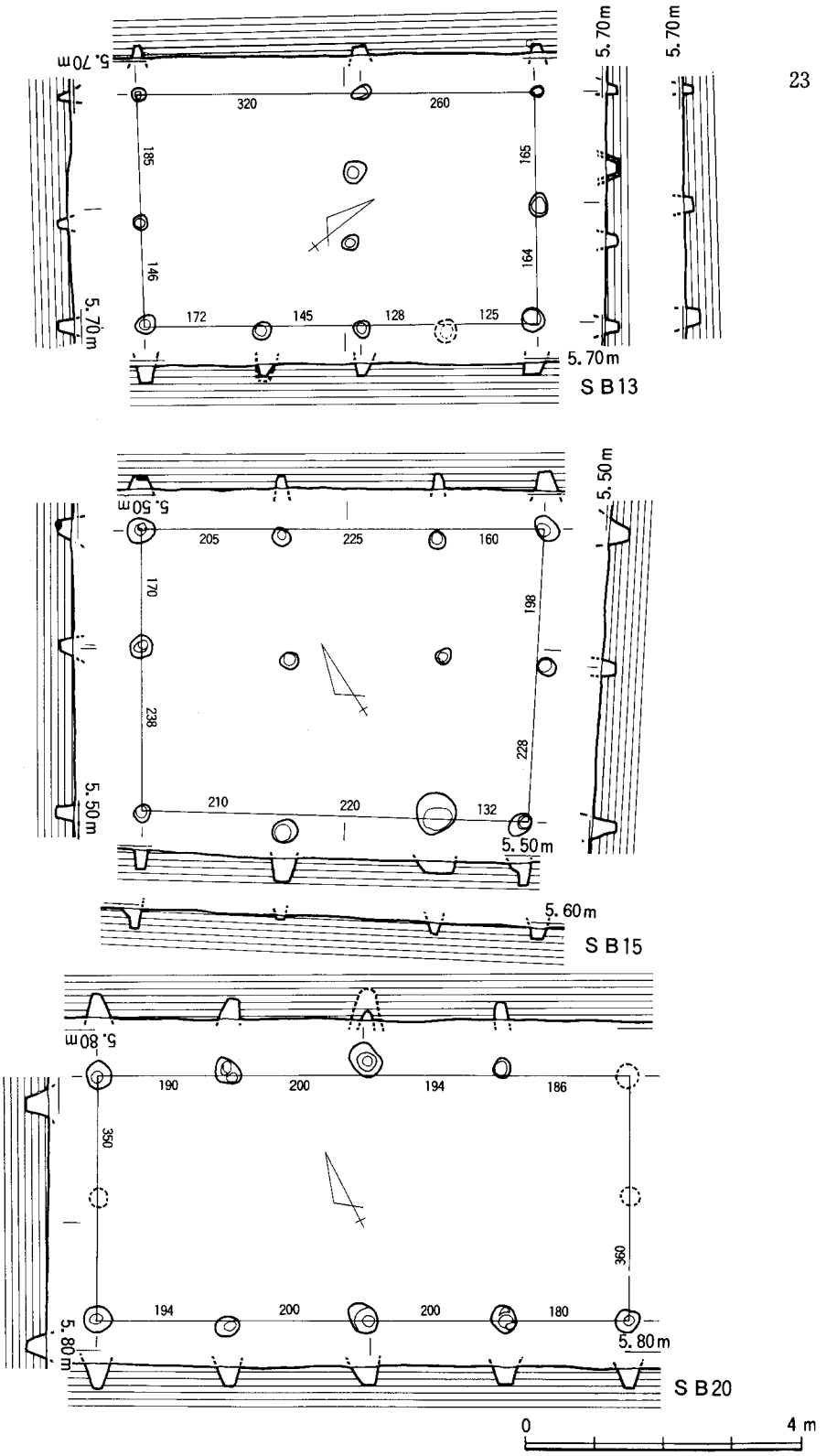


Fig. 24 掘立柱建物平面および断面図（SB13･15･20)(1/100) その4

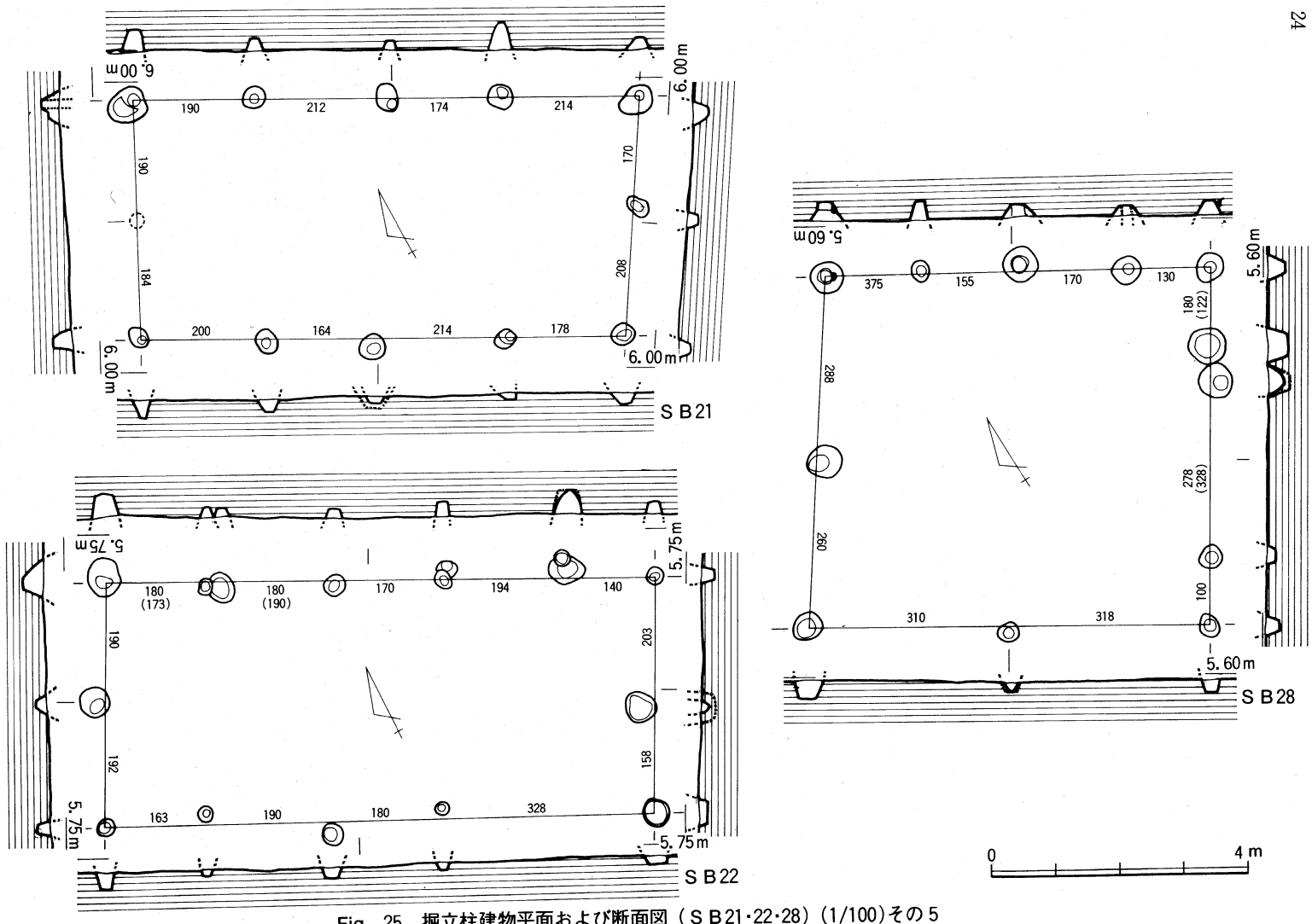


Fig. 25　掘立柱建物平面および断面図（SB21･22･28）(1/100)その5

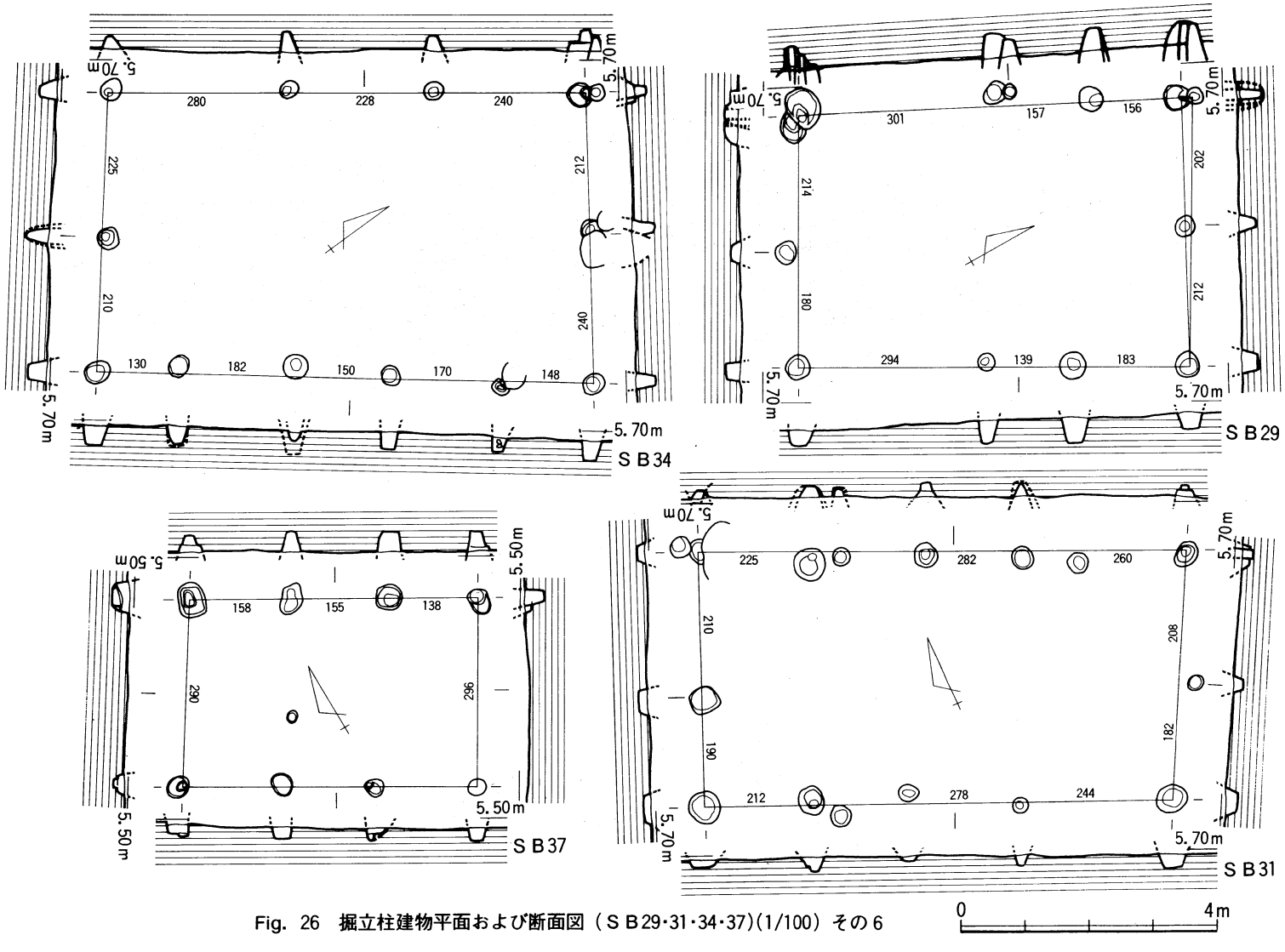


Fig. 26　掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ29･31･34･37)(1/100）その６

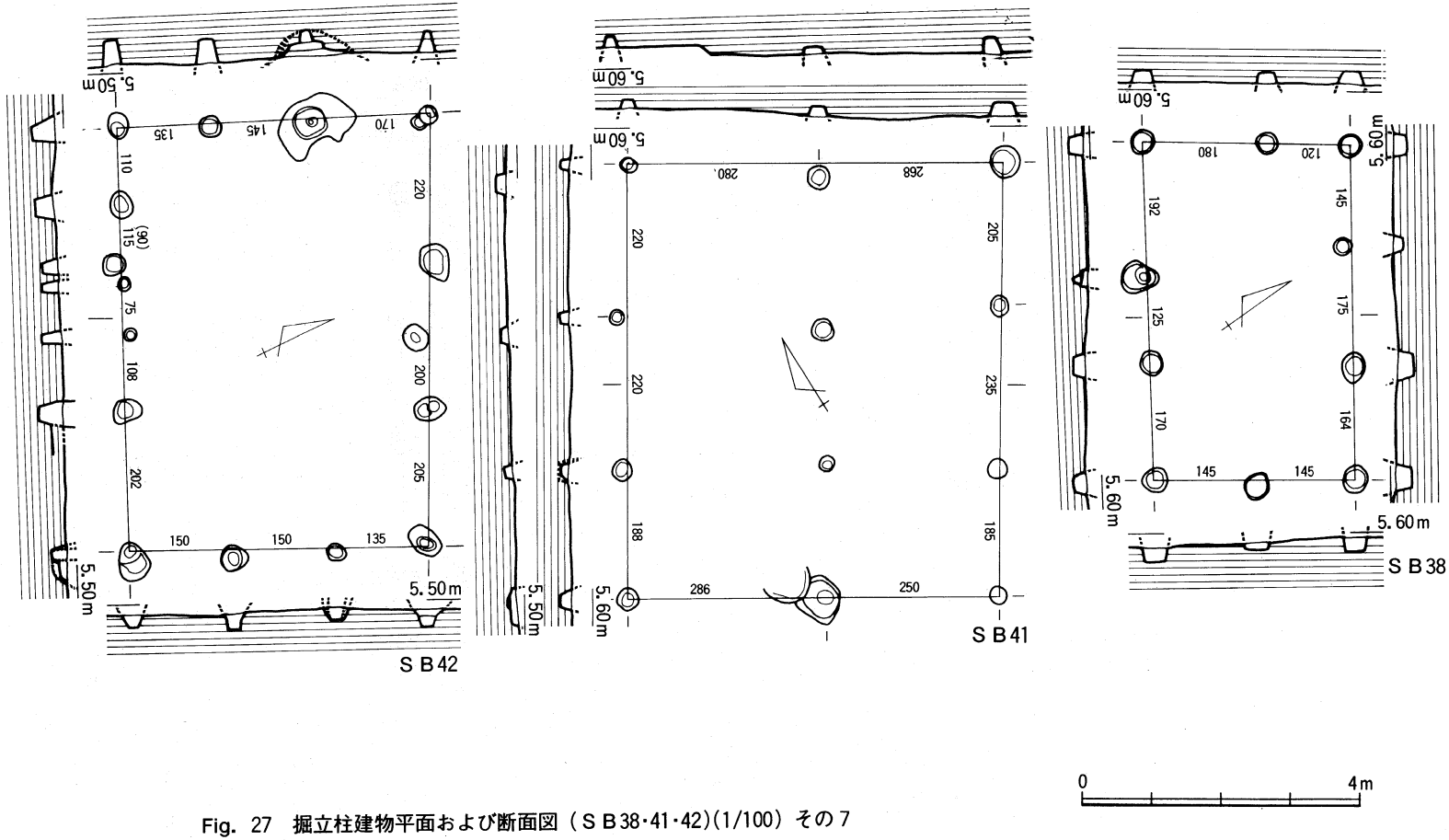


Fig. 27　掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ38･41･42)(1/100）その７

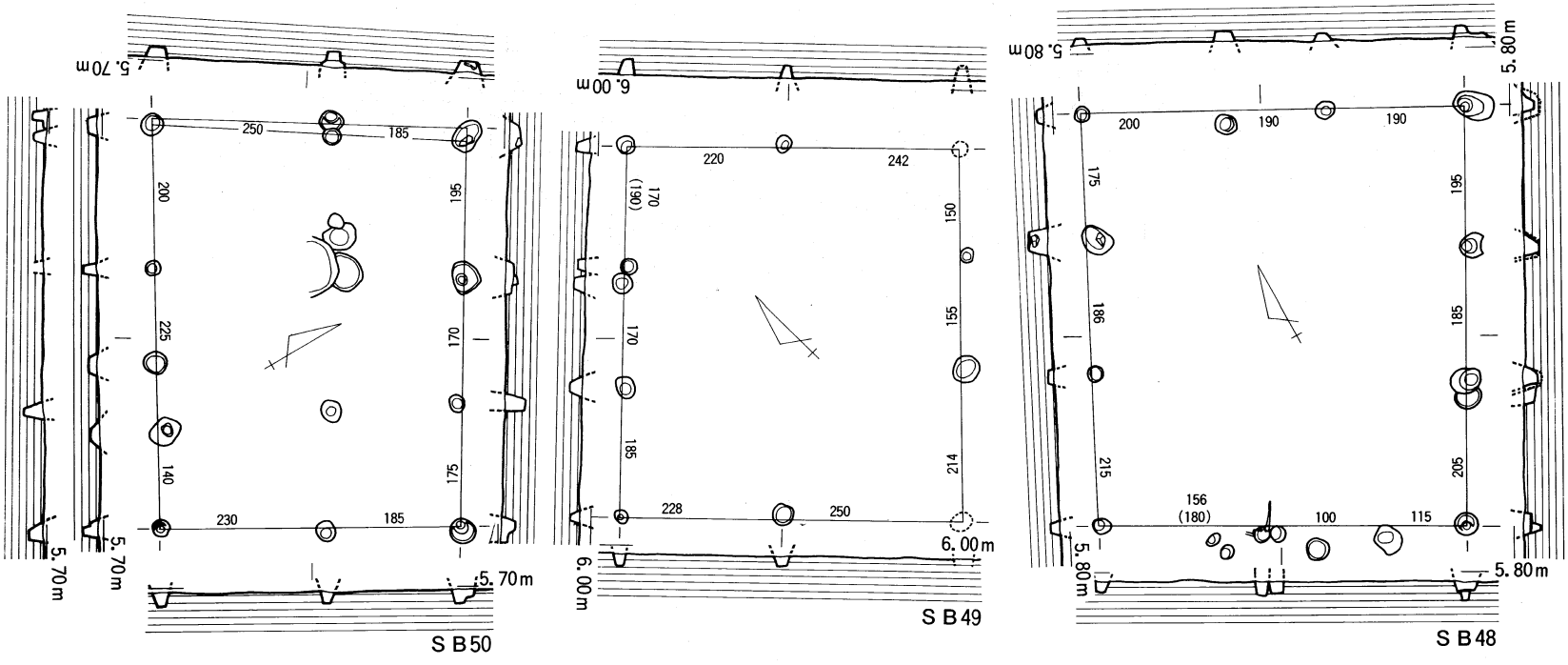


Fig. 28　掘立柱建物平面および断面図（ＳＢ48～50)(1/100）その８

建物番号	規模	長軸(cm) 桁	長軸(cm) 行	短軸(cm) 梁	短軸(cm) 行	南北基軸の方位	床面積(㎡)	Pit数
01	2×3	北 805 / 南	790 / 820	東 482 西 470	494	N-60°30′-W	39.0	10
02	2×3	北 902 / 南	916 / 887	449 424	473	N-67°-W	40.23	15
03	2×3	北 / 南	726		424	N-30°-E	30.48	9 (13)
04	2×3	東 620 西 623	374	北 ( ) / 南	360	N-17°30′-E	22.52	8 (9)
05	2×3	648 645	650	北 406 / 南	415 / 396	N-25°-E	26.40	9 (10)
06	2×3	北 740 / 南	730 / 750	東 405 西 404	406	N-45°-W	29.58	11
07	2×3	北 509 / 南	508 / 510	385 396	374	N-51°30′-W	19.54	10
08	2×4	北 896 / 南	907 / 885	385 385	384	N-65°-W	34.65	11 (13)
09	2×3	北 621 / 南	628 / 614	363 345	380	N-56°30′-W	22.32	10 (11)
10	2×3	北 697 / 南	682 / 712	413 416	410	N-53°-W	28.65	11
11	3×3	北 663 / 南	661 / 664	526 524	528	N-65°-W	34.55	14
12	2×4	北 783 / 南	790 / 775	325 265	385	N-55°30′-W	29.1	11 (12)
13	2×4	北 575 / 南	580 / 570	330 331	329	N-37°30′-E	19.35	11 (12)
14	2×3	北 595 / 南	580 / 609	480 470	490	N-55°30′-W	28.40	10
15	2×3	北 576 / 南	590 / 562	417 408	426	N-56°-W	24.06	12
16	2×3	北 491 / 南	500 / 482	309 285	333	N-52°30′-W	13,95	10 (11)
17		北 694 / 南	702 / 685	435 440	430	N-58°-W	29.96	15 (16)
18	2×3	北 461 / 南	461 / 460	351 372	330	N-30°-E	16.19	7 (10)
19	2×3	北 594 / 南	588 / 599	377 370	383	N-55°-W	22.25	11 (12)
20	2×4	北 772 / 南	770 / 774	355 350	360	N-63°30′-W	27.39	9 (12)
21	2×4	北 773 / 南	790 / 756	372 374	370	N-63°-W	28.81	11 (12)
22	2×5	北 863 / 南	864 / 861	374 382	365	N-63°-W	32.42	13 (14)
23	2×3	東 464 西 465	462	北 367 / 南	366 / 368	N-17°-E	17.11	9 (10)
24	1(2)×2	434 465	442	北 393 / 南	400 / 385	N-24°-E	17.85	7
25	2×3	554 563	545	北 329 / 南	338 / 320	N-14°-E	18.09	8 (10)

(ゴシック数字は平均値)

建物番号	規模	長軸(cm) 桁	長軸(cm) 行	短軸(cm) 梁	短軸(cm) 行	南北基軸の方位	床面積(㎡)	Pit数
26	2×3	北 669 / 南	680 / 658	東 488 西 476	500	N-54°-W	32.57	10 (12)
27	2×3	北 443 / 南	442 / 444	298 290	305	N-59°-W	13.26	10 (11)
28	2×3	北 824 / 南	830 / 818	555 560	550	N-58°-W	45.54	20
29	2×3	東 615 西 614	616	北 402 / 南	414 / 390	N-25°-E	25.24	10
30	2×3	北 543 / 南	560 / 525	東 462 西 459	465	N-63°-W	24.88	9
31	2×3	北 751 / 南	767 / 734	395 400	390	N-66°-W	29.96	11
32	2×3	北 598 / 南	586 / 610	401 420	382	N-6°-E	23.79	9 (11)
33	2×3	北 581 / 南	596 / 566	376 380	371	N-59°-W	21.74	9 (10)
34	2×3	北 764 / 南	780 / 748	444 452	435	N-35°30′-E	33.88	13
35	3×3	東 563 西 555	570	北 365 / 南	360 / 370	N-6°30′-E	20.77	11 (12)
36	2×3	548 545	550	北 344 / 南	330 / 358	N-9°-E	18.85	8 (9)
37	1×3	北 456 / 南	451 / 460	東 295 西 290	300	N-59°30′-W	13.38	8 (9)
38	2×3	北 486 / 南	484 / 487	295 300	290	N-56°-W	14.36	10
39	2×3	北 546 / 南	560 / 532	357 350	364	N-72°30′-W	19.35	14
40	2×2	東 553 西 556	549	北 456 / 南	450 / 462	(N-86°-W) N-5°-E	25.13	10 (11)
41	2×3	627 628	625	北 539 / 南	542 / 536	N-31°-E	33.87	10 (12)
42	3×3	北 618 / 南	625 / 610	東 443 西 450	435	N-65°30′-W	27.16	17
43	2×3	東 633 西 640	625	北 449 / 南	455 / 442	N-2°-E	28.12	12
44	2×3	633 623	627	北 400 / 南	400 / 400	N-28°-E	24.79	9 (10)
45	2×3	665 650	680	北 389 / 南	418 / 360	N-16°-E	25.72	11
46	2×3	642 620	663	北 453 / 南	465 / 440	N-21°-E	28.84	10
47	2×3	622 615	628	北 413 / 南	410 / 415	N-25°-E	25.55	10
48	3×3	581 576	585	北 523 / 南	530 / 516	N-26°-E	30.35	17
49	2×3	522 525	519	北 470 / 南	462 / 478	N-47°30′-E	24.32	9 (2)
50	2×3	北 553 / 南	540 / 565	東 425 西 435	415	N-60°-W	23.44	12

(ゴシック数字は平均値)

Tab. 2 第Ⅰ区掘立柱建物（ＳＢ01～50）計測値表

2) 井　戸（ＳＢ）(Fig.29～32、PL.11～13、Tab. 3)

概要　第Ⅰ区で検出された井戸は総数21基（９基については不確定）を数える。まずその形態と分布について概括的に触れておく。

形態による分類

Ⅰ類　石組みと桶側を組み合わせた井戸枠を有するもの。

ＳＥ06・08・10・11

Ⅱ類　石組みと曲物を組み合わせた井戸枠を有するもの。

ＳＥ01・12・13・17

Ⅲ類　横板による方形井戸側と桶側を組み合わせた井戸枠を有するもの。

ＳＥ07

Ⅳ類　掘方のみ遺存しており井戸枠は抜き取られたか、または腐植し、消滅したもの。

ＳＥ02・04・05・09・14・21

なおＳＥ03・15・16・18・19・20は素掘りで、形状、深さ等からは井戸と断定し難い。

分布について (Fig.33)

1)　Ⅰａ区東側に位置するもの。……ＳＥ01・04

2)　Ⅰｂ区の屋敷地北側に位置するもの。……ＳＥ05～11・21

Ⅰｂ区の台地部は遺構が最も集中し、これに対応して井戸も多い。また、分布が北側に片寄るのは、水脈の関係によるところが大きいと考えられる。

3)　Ⅰｂ区屋敷地南側に位置するもの。……ＳＥ02・12・13・14

4)　Ⅰｂ区西側に位置するもの。……ＳＥ15・17・18

5)　Ⅰ区の南西Ⅰｄ区に位置するもの。……ＳＥ03・16・19・20

ＳＥ01 (Fig.29、PL.11) 掘方平面形は径約１ｍの円形である。最下底面までの深さは90cmを測る。埋土の中位から人頭大の礫が10個ほど出土していることより、石組み井戸の可能性がある。最下底面には曲物の一部が遺存する。遺物は埋土中位～上位で多く出土した。

ＳＥ02 (Fig.29、PL.11) 掘方平面形は、復元径２ｍの円形に近い。最下底面までの深さは約70cmで、比較的浅い。最下底面に径60cm、深さ５cmのくぼみが検出され、井側を有していた可能性がある。なお、柱穴はすべてＳＥ02を切る。

ＳＥ03 (Fig.29、PL.11) 掘方平面形は長径2.6m、短径2.3mの楕円形である。最下底面までの深さは30cmで、極めて浅い。最下底面には井側の痕跡は検出されなかった。

ＳＥ04 (Fig.29、PL.11) 掘方平面形は不整な円形である。遺構の切り合いは見出せなかった。最下底面までの深さは55cmで、砂礫層まで達する。最下底面では、井側の痕跡と考えられる、径30cm、深さ５cmのくぼみを検出した。埋土は黄灰色シルト、灰褐色粘質土の混合土。

ＳＥ05 (Fig.30、PL.11) 掘方平面形は、復元長径1.5m、短径1.3mを測る楕円形を呈する。

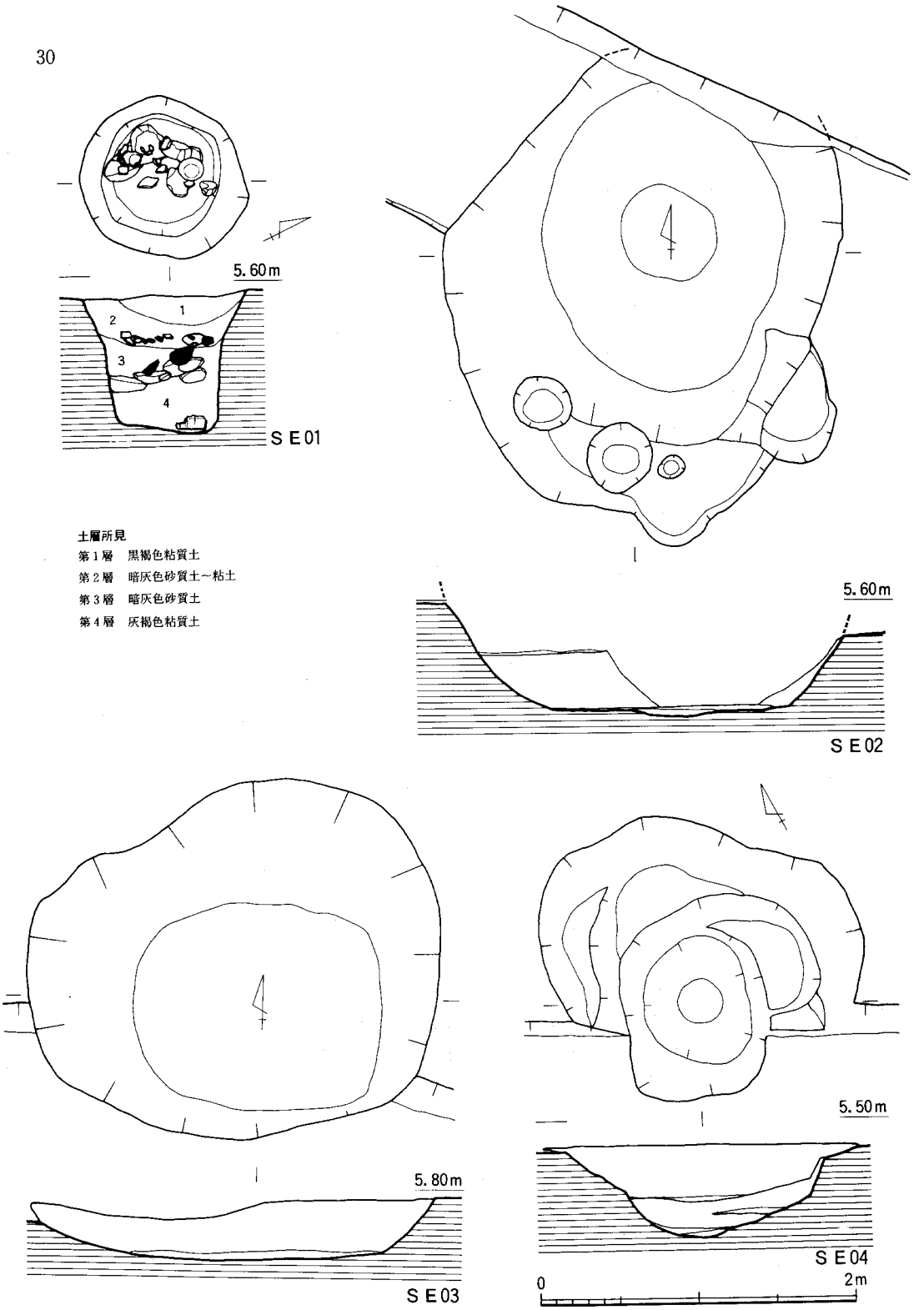


Fig. 29　井戸平面および断面図（SE01～04)(1/40）その1

検出面から埋土中位にかけて、人頭大の礫が数個出土した。土層堆積はレンズ状で、井側の痕跡は確認できない。

ＳＥ06（Fig.30、PL.11）掘方平面形は、長径1.8m、短径1.4mの楕円形で、断面形は漏斗状をなす。最下底面までの深さは105cmを測る。掘方の底面には、径45cmの桶側が一段遺存する。桶側の北側に外側から固定のための添板があてられている。桶側の上端より約10cm上位から、径10cm程の礫が出土した。石組みがあった可能性がある。

ＳＥ07（Fig.30、PL.11）ＳＥ08に切られて検出された。掘方平面形は、径2.9mの円形である。最下底面までの深さは、1.4mを測る。井戸枠は、横板を用いた方形井戸側と桶側の組合せである。方形井戸側は、幅25～30cm、厚さ３～４cmの横板を用い、一辺82cmの正方形に近い形状である。各コーナーの接合部は北西隅のみ凸凹の差し込み式であるが、他の３箇所は、鍵形の切り込みを相互に組み合わせたもので、釘で固定する。西南隅には、外側から、横長の添板が施され、東南隅と南辺中央付近の２箇所には、小刀状の板（Fig.65）が底面下に差し込まれ、桶側を固定している。桶側は、２段以上重ねたものであるが、２段目は下端のみ遺存する。２段目の桶側下端外周には、偏平な小礫が立てて配され、桶側を固定させている。１段目の桶側は径55cm、高さ65cmを測る。埋土の上層から桶側の上端まで、人頭大の礫が出土した。石組みを有していたものと思われる。

ＳＥ08（Fig.30、PL.11）掘方平面形は、径約２ｍの正円形に近い。最下底面までの深さは1.2mである。井戸枠は、石組みと桶側の組み合せである。石組みは、人頭大の礫を円形に乱積みし、高さは約60cmである。石組みの最上部には、30～40cmの比較的大きな礫が置かれている。桶側は径55cm、高さ50cmで遺存する。三段の竹製タガによって固定されている。

ＳＥ09（Fig.31、PL.12）掘方平面形は、径1.3ｍの円形である。最下底面までの深さは50cmである。最下底面には径40cmの浅いくぼみが検出され、また、土層断面の中央部が、深く落ち込むことから、井側が存在したものと思われる。

ＳＥ10（Fig.31、PL.12）掘方平面形は、径1.4ｍの円形で、最下底面までの深さは1.1mである。検出面から東側のテラスまでの深さは約25cmである。井戸枠は石組みと桶側の組み合わせである。石組みはかなり崩落し、原形をとどめていない。桶側は径50cm、高さ40cmで遺存する。桶側の下端は杭（１箇所）、添板（１箇所）、小礫で固定している。

ＳＥ11（Fig.31、PL.12）掘方平面形は、径１ｍの正円形に近い。最下底面までの深さは1.15ｍである。井戸枠は石組みと桶側の組み合わせである。石組みはかなり崩落し、井戸枠内にも多くの礫が混入する。礫は15～20cm大のものが多く用いられている。桶側は径40cm、高さ35cmが遺存する。桶側には竹製タガが２段残る。

ＳＥ12（Fig.31、PL.12）深さ約20cm、一辺が約5.5ｍの方形の掘方の東隅に、径1.7ｍの円形を呈する掘方を検出した。異なる遺構の可能性があるが、検出時には、切り合いを見出さな

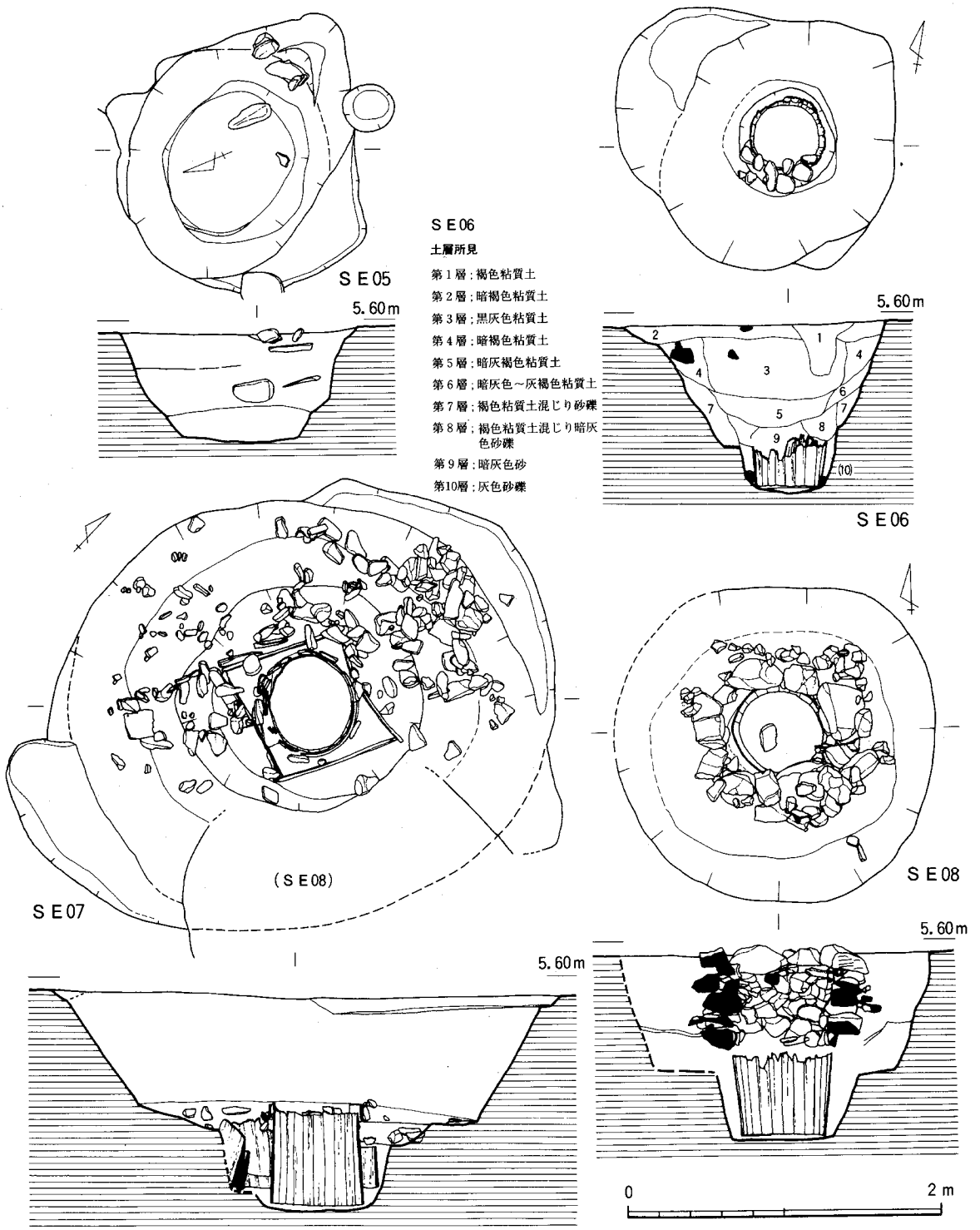


Fig. 30　井戸平面および断面図（SE05～08)(1/40）その2

かった。井戸枠は、石組みと曲物による組み合わせである。石組みは、20 ～ 30 cmの人頭大の礫を多く用いる。曲物は径52cmで、２段以上重ねられたと考えられるが、２段目の下端が一部遺存する。

ＳＥ13（Fig.31、PL.12）掘方はやや不整な円形で、検出面から床面まで約100cmの深さで残っている。井側は曲物を用いており、２段ないし３段組のものと思われるが、井側上半分は腐植し残りが悪い。曲物の径は約55cm。石組みは、曲物の上端からみられ、粘土と砂を裏込めしながら構築している。

ＳＥ14（Fig.32、PL.13）掘方平面形は、長径約２ｍ、短径約1.5ｍの楕円形を呈する。掘方の中央部に、径約１ｍの円形の落ち込みが検出された。この落ち込みは、井戸枠と考えられ、土層断面から、径30cm程の井側が存在した可能性がある。最下底面までの深さは65cmである。

ＳＥ15（Fig.32、PL.13）Ⅰｂ区北側のＳＲ3723掘り下げ時に検出された。上部はかなり削平を受ける。検出された掘方平面形は、長径２ｍ、短径1.7ｍの楕円形を呈する。断面形は浅皿状で、最下底面までの深さは35cmである。

ＳＥ16（Fig.32、PL.13）掘方は、復元径１ｍの円形であるが、中央部から西側は削平を受け、消滅している。最下底面までの深さは30cmと浅い。

ＳＥ17（Fig.32、PL.13）掘方平面形は、径70cmの比較的小さな円形である。最下底面までの深さは検出面から－80cmである。石組みがあったものと思われる。底面には曲物が一段遺存する。曲物は径35cm、高さ20cmである。曲物内には礫の混入はみられず、石組みの崩落は曲物内が埋没した後からのものである。

ＳＥ18（Fig.32、PL.13）掘方平面形は、径70cmの円形である。最下底面までの深さは40cmで浅い。埋土内には10～15cm大の礫が混入している。

ＳＥ19（Fig.32、PL.13）掘方平面形は、径70cmの円形である。最下底面までの深さは30cmで浅い。井戸枠、井側の痕跡は認められない。

ＳＥ20（Fig.32、PL.13）掘方平面形は、径70cmの円形を呈する。最下底面までの深さは30cmで、砂礫層に達する。

ＳＥ21（Fig.42、PL.13・16）掘方平面形は、径1.8ｍの正円形。最下底面までの深さは70cmである。最下底面には、径約40cm、深さ５cmのくぼみが検出され、井側が存在した可能性を有する。埋土中より、人頭大の礫が数個出土し、石組みを配していたと思われる。

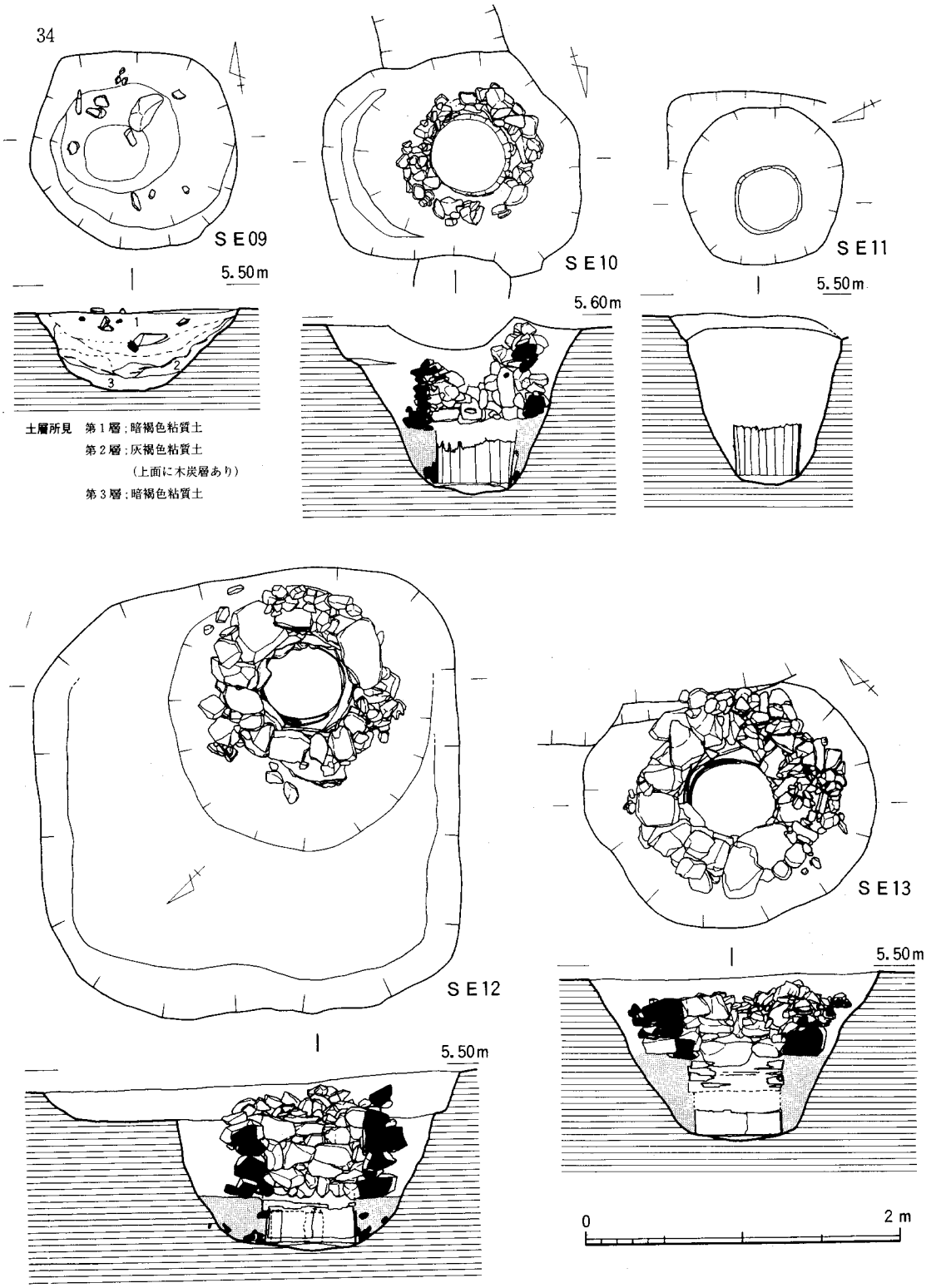


Fig. 31　井戸平面および断面図（SE09～13)(1/40）その3

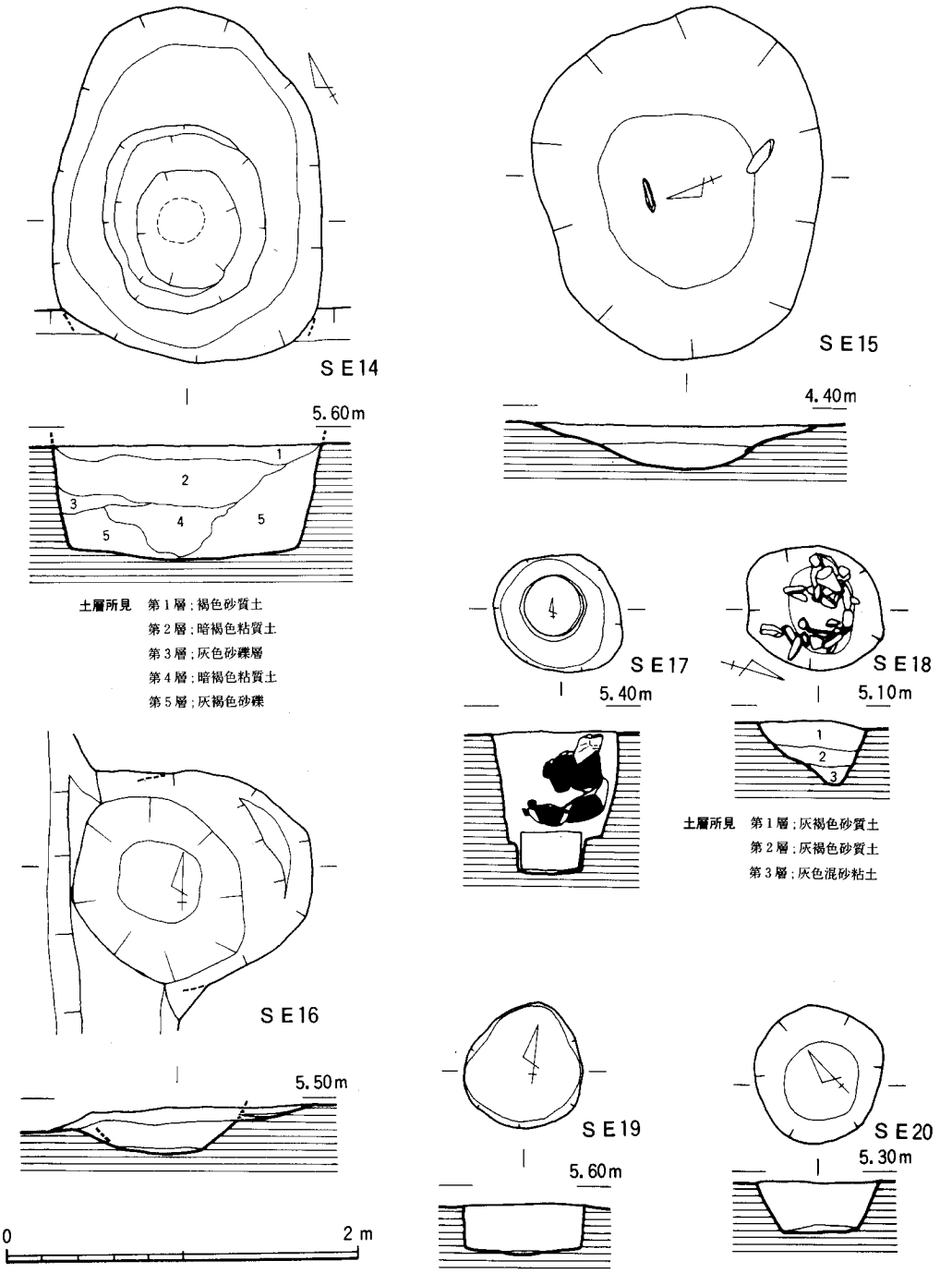


Fig. 32　井戸平面および断面図（SE14～20)(1/40) その4

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構 No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)m	出土遺物	出土遺物FigNo	備考
29	11-(1)	a区	SE01	SX03	1.06×1.06×0.90	土師器――碗・皿　瓦器碗・皿 白磁(玉・Ⅵ類)(Ⅳ類)、木炭片	64(57～69)	曲物
29	11-(2)	a区	SE02	SX23	3.06×2.54×0.26	白磁(Ⅳ類)、土師質土鍋 〃　(Ⅵ類)、土師器		
29		a区	SE03	SX36	2.72×2.34×0.39	土師器、瓦器碗、土師質土鍋		
29		a区	SE04	SX09	2.08×1.86×0.59	土師器――坏・皿　瓦器――皿 黒色土器、土師質土鍋		
30		b区	SE05	1737	1.91×1.81×0.73	土師器――坏　瓦器――碗 須恵質――擂鉢　弥生土器	64(86)	
30	11-(3) (4) 24-(1)	b区	SE06	1736	1.91×1.82×1.12	白磁―Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ,Ⅸ類)　土師質土鍋 土師器――坏・皿　弥生土器 瓦器――碗・皿　土師器(古墳) 須恵――カメ　輸入陶器 瓦質土器―捏鉢	64(70～92) 65(93～113)	桶側
30	11-(5) (6) (7) (8) 24-(1)	b区	SE07	2988	3.61×2.77×1.43	白磁(碗Ⅳ,Ⅵ類)、青磁(龍泉碗Ⅱ-2類) 白磁四耳壺 輸入陶器、土師器――碗、坏、皿 弥生土器、瓦器――碗、坏、須恵質――捏鉢、擂鉢	66(114～120)	桶側
30	11-(5) 24-(1)	b区	SE08	1729	2.07×2.04×1.21	白磁――碗Ⅲ類(Ⅱ類)、越磁壺か？小片 青磁――(Ⅱ類)、龍泉――碗Ⅰ-4、Ⅱ-1、Ⅲ類 土師器―坏・皿　須恵質――捏鉢、カメ 瓦器――碗・皿　弥生土器 土師質土器――土鍋・擂鉢	66(121～126)	
31	12-(1)	b区	SE09	2985	1.42×1.32×0.47	白磁――碗(Ⅳ-1,Ⅵ-1)(高台付Ⅱ類)(平底Ⅲ類) 青磁――(同安)、碗(Ⅰ類)、皿(Ⅰ類) 土師器―碗・坏・皿 瓦器――碗・坏 土師質土鍋 弥生土器	66(127～132)	
31	12-(2) (3)	b区	SE10	2987	1.76×1.59×1.13	白磁――皿(高台付Ⅱ類)、土師質土鉢 青磁――(同安碗Ⅰ類)、須恵質カメ 土師器―坏、皿、弥生土器 瓦器――碗	67(133)	桶側
31	12-(4) (5)	b区	SE11	3020	1.03×1.02×1.12	土師器―皿・坏　瓦器――碗 弥生土器、白磁小片、須恵質		桶側
31	12-(6) (7) (8)	b区	SE12	3086	3.29×3.16×1.13	白磁 不明小片		曲物
31	12-(7) 13-(1)	b区	SE13	3115	1.87×1.57×1.07	白磁(Ⅸ類)、白磁皿、青磁(龍泉碗Ⅰ類) 丸瓦片、輸入陶器、土師器――碗、坏、皿 瓦器碗、土師質土鍋、須恵質土器 弥生土器	67(134、135)	曲物
32	13-(2)	b区	SE14	3022	2.05×1.55×0.67	白磁――碗(Ⅳ類)、皿(平底)　土師器―坏、皿 瓦器――碗　土師質土鍋、弥生土器		
32	13-(3)	b区	SE15	3726	2.05×1.68×0.26	土師器―坏又は皿　土師質土器―擂鉢、土鍋片 陶器捏鉢	67(139、140)	
32		d区	SE16	4450	1.43×1.28×0.28	土師器―坏、弥生土器 白磁――碗(Ⅳ類)	67(137)	
32	13-(4) (5)	b区	SE17	3715	0.78×0.71×0.83	瓦器――碗	67(136)	
32		b区	SE18	3801	0.87×0.72×0.42	土師器片、弥生土器片 青磁――龍泉(碗Ⅱ類)	67(141)	
32		d区	SE19	4459	0.73×0.69×0.29	弥生土器片		
32		d区	SE20	4362	0.80×0.77×0.29	弥生土器片　土師器片	67(138)	
42	13-(6) 16-(7) 17-(1)	b区	SE21	3353	2.02×1.82×0.78	土師器―坏、皿　白磁――碗(Ⅳ,Ⅴ,Ⅵ類) 瓦器――碗、三足釜　青磁――(同安碗Ⅰ,Ⅱ類) 須恵器―カメ、鉢 土師質土鍋	66(142～153) 69(154～160)	

Tab. 3　第Ⅰ区検出井戸（ＳＥ01～21）所見表

注：輸入陶磁器の分類名は、13頁注１の文献による分類に従った。以下のTab４・５および(4)遺物各説の項でも同様である。また「土師質」は土師質土器の略である。

3) **竪穴遺構（ＳＸ）**（Fig.33～49、PL.14～19、Tab.４、付図１）

概要　第Ⅰ区からは大小様々の竪穴遺構が124基検出された。これらは形態、規模において多様であり、平面形は方形、長方形、円形、楕円形、あるいは不定形で、掘方の断面形は浅皿状、船底状、逆台形状となるもので、また規模は長さが１ｍ前後から５ｍほど、幅が0.6ｍほどから３ｍ前後ほどを測る。

これらの竪穴遺構の分布は先に述べた柱穴群の分布範囲とほぼ重複する範囲にみられ、大きく３つの群（第１～３群）にまとまる。ただしそのまとまりは集中的なものではなく、分布密度は低い。第１群は第Ⅰａ区の東側の約3000㎡ほどの範囲に広く分布している。先述した柱穴群のまとまり（Ａ群）とは、東側半分で重複している。第２群は第Ⅰａ区西側～第Ⅰｄ区南東側にかかる約1800㎡程の範囲にまとまり、柱穴群（Ｂ群）とほぼ同じ分布状況である。第３群は第Ⅰｂ区中央から北東側に散漫に分布している。柱穴・建物群（Ｃ群）とは分布範囲の南側で重複している。なおこれらの分布の形成過程、竪穴遺構間、および他の遺構との関連については項を改めて述べる。

ここでは124基の竪穴の形態的な特徴や遺物の出土状況等から以下のように分類を行い、性格づけにあたっての目安としておく。なお124基の竪穴遺構のうち39基については、遺物の出土の在り方を主な判断基準として、形態的な特徴や埋土の堆積状況などから、地鎮等の何らかの祭祀行為が想定される土壙、土壙墓、あるいは木棺墓と判断されたが、それらも含んだ分類である。個別の遺構所見、遺物の出土状況などの詳細についてはＴab.　４を参照されたい。

１類　平面形は隅丸の長方形もしくは長楕円形で、断面形は逆台形や浅皿状のもの。長さは1.5～２ｍ前後で幅は狭い。遺物が多量に出土するものと少ないものとがある。
ＳＸ　01・02・03・05・06・07・08・09・80

２類　平面形は隅丸長方形もしくは不整楕円形で規模は小さく長さ0.7～1.0ｍ、幅0.5ｍほど。木炭片・焼石・焼土を多く含むもの、竪穴内壁が火を受け赤く変色し、硬くしまっているもの、土師器の坏ないし皿の完形品や青磁碗が埋置されるものなど、遺物の出土状況は多様である。
ＳＸ　04・47・48・49・50、ＳＫ　01・02・03・04・05

３類　平面形は主軸のやや短い、寸づまりのやや不整な長方形あるいは正方形で、きちっとした掘方を持ち、壁はほぼ垂直に立ち上がる。長さが1.2～1.6ｍ、幅が0.7～1.0ｍを測る一群と、長さが1.7～2.0ｍ前後、幅が1.0～1.2ｍほどのやや大きなものとがある。遺物はほとんど出土しないものが多いが、土師器皿・坏や青磁碗、白磁碗、青銅製鏡などを埋置しているものもある。
ＳＸ　　小型　10・26

ＳＫ　　小型　06・07・08・09・10・11・12・13・14・15・16・17・19・20・21・22・23・24・26・27・30　36

やや大型　18・25・28・29・31・32・33・35・37

4類　平面形は不整な円形または楕円形で、断面形が浅皿状になるものや逆台形になるものなどがある。大きさは、長径が1.0～1.8m、短径が0.8～1.5mほどで、遺物が多量に出土するものと少ないものとがある。出土する遺物は自然礫や（木炭片）を含み、土器等は小片で数量も少なく、二次的な混入のものが主である。

ＳＸ（不整な円形）35・36・37・38・39・40・41・42・43・44・45・46・83

（不整な楕円形）51・52・53・54・55・56・59・60・63・64・65・66・67

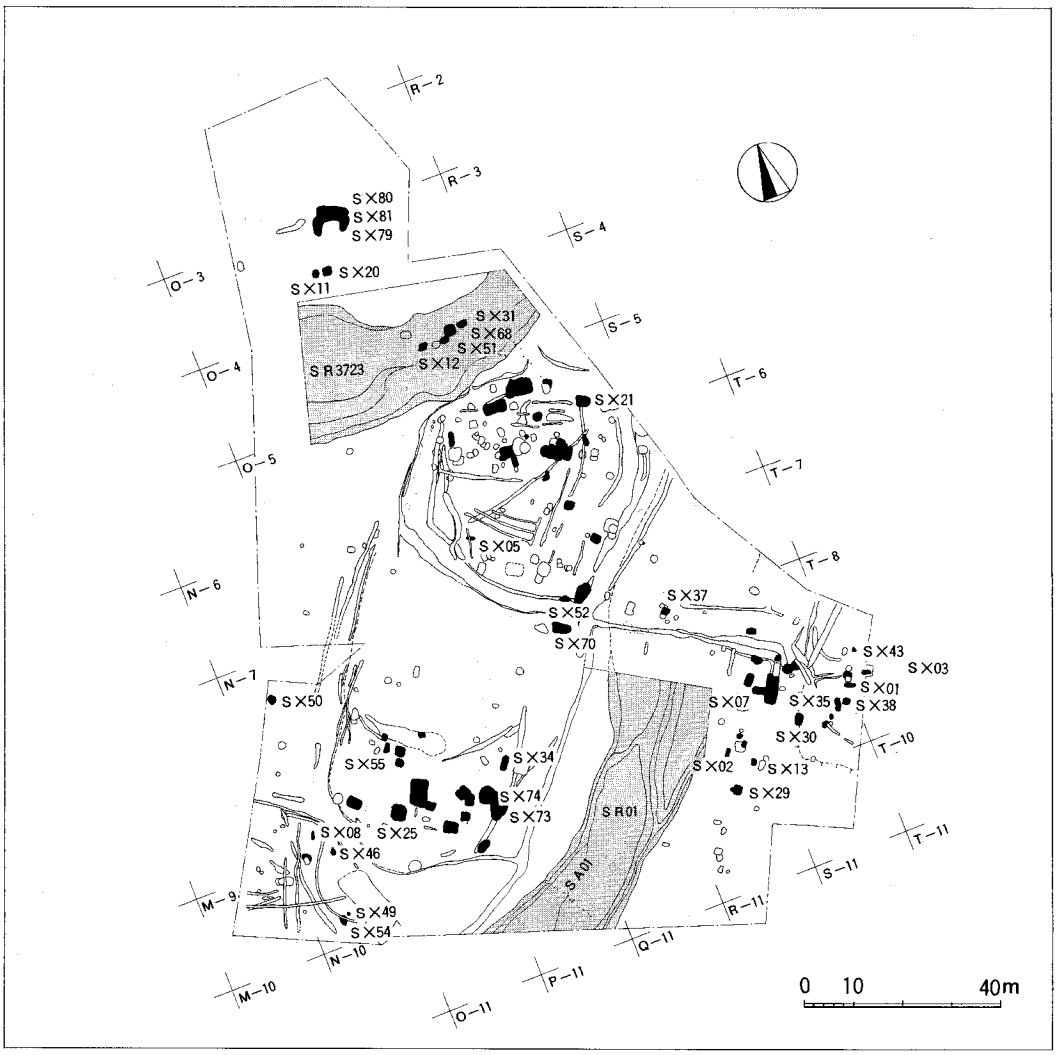


Fig. 33　竪穴遺構配置図（1/1500）

ＳＫ　34・　38

5類　平面形はやや不整な正方形や長方形が主で、やや不整な楕円形もある。規模はやや大きく長さが２～３ｍ、幅は1.5～2.5ｍを測る。比較的しっかりした掘方を持ち、床面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。遺物は量的にやや多いものと無遺物のものとがある。

（正方形に近いもの）

ＳＸ　11・12・13・14・15・16・17・18・19・20・21・22・23・24・25・29・58

（長方形に近いもの）

ＳＸ　27・28・30・31・32・33・34・61・62・68、ＳＫ39

（不整な楕円形）

ＳＸ　69・80

6類　平面形は不定形の竪穴で比較的大きな竪穴である。長楕円形、隅丸の長方形やコの字形に近いものがあり、断面形は浅皿状で床面は凹凸が顕著である。遺物は投棄もしくは二次的な混入の状況で出土する。

ＳＸ　70・71・72・73・74・79・81・82、(57・84・85)

(57・84・85は図示していない。)

7類　平面形は隅丸の長方形で、長さは４～５ｍ、幅は2.5～４ｍの長大な竪穴である。床面は平坦で、柱穴を持つものと持たないものとがある。遺物は比較的多く出土するが、ほとんどが破片で、投棄または二次混入によるものである。

ＳＸ　75・76・77・78

ＳＸ01（Fig.34）第Ⅰａ区東北側に位置する。埋土は木炭片をわずかに含む暗褐色の粘質土である。平面形は長めの隅丸長方形で、長さ2.29ｍ、幅0.96ｍを測る。遺存状況はあまり良くなく床面から10ｃｍほどしか残っていない。床面はほぼ平坦で、掘方は比較的しっかりとした輪郭である。遺物は鞴の羽口の破片や土師器小片が二次的な堆積状況で出土。

ＳＸ02（Fig.34）第Ⅰａ区東南部に位置する。埋土は暗灰色シルトである。平面形は長めの長方形で、長さ1.9ｍを測る。床面から５cmほどしか残っていない。床面は平坦で、掘方は明確な輪郭である。土師器小片、龍泉窯系青磁碗片が少量出土。

ＳＸ03（Fig.34、PL.14）第Ⅰａ区東端部に位置する。東壁にかかって検出。埋土は暗褐色土である。平面形はやや不整な長方形。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。これも遺存状況は良くなく、床面から10cmほどしか残っていない。床面は平坦である。遺物は床面から５cmほど浮いた状態で、土師器皿、土師質土鍋等の小片が出土。

ＳＸ04（Fig.34、PL.14）第Ⅰｂ区南側に位置する。ＳＸ53を切る。埋土は木炭片・焼土および小礫を多く含む暗灰褐色の粘質土である。遺存状況は良好。平面形は隅丸長方形。木炭片

は小礫とともに4cmほどの厚さでレンズ状に堆積している。掘方壁は約3cmの厚さで赤変し、硬く焼きしまっている。土師器坏、瓦器片が出土。

ＳＸ05（Fig.34、PL.14）第Ⅰｂ区南側に位置。ＳＤ27から切られている。埋土は木炭片・赤褐色の焼土を多く含む暗灰褐～黒褐色粘質土である。不定形で、長さ2.05ｍ、幅0.7ｍを測る。掘方壁は焼けていない。床面からは鉄滓片が出土。

ＳＸ06（Fig.34、PL.14）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＤ33・69を切っている。埋土は木炭片・赤褐色の焼土・拳大から人頭大の礫石を多く含む暗灰褐粘質土である。不整な長楕円形で長さ2.41ｍ、幅1.03ｍを測る。検出面から15ｃｍの深さで残っている。木炭片は中央のやや東側に薄く層を成している。掘方壁は焼けていない。

ＳＸ07（Fig.34、PL.14）第Ⅰａ区東側に位置。平面形はＬ字形。東西の長さ1.98ｍ、幅0.7ｍ、南北の長さ2.26ｍ、幅0.6～0.8ｍを測る。埋土は暗褐色土である。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。床面から15ｃｍほど残っている。長方形の竪穴がほぼ直交して切り合っている可能性があるが、検出にあたっては確認されていない。遺物は床面から土師器皿、土師質土鍋、瓦器碗、などの破片が出土している。

ＳＸ08（Fig.34）第Ⅰｄ区南側に位置する。埋土は木炭片・焼土および小礫を若干含む暗灰褐色の粘質土（砂混入）である。遺存状況はやや良好。平面形は溝状の長楕円形で、長さ2.43ｍ、幅0.78ｍ、深さ16cmで、断面形は船底状。木炭片は多量の土師器とともに10ｃｍほどの厚さでレンズ状に西側半分に堆積。土師器坏、皿などは投棄された状況で出土。

ＳＸ09（Fig.34）第Ⅰｂ区中央に位置する。平面形は長めの隅丸長方形。埋土は木炭片・赤褐色の焼土を若干含む暗灰褐粘質土である。北側にわずかに窪む箇所がある。掘方の壁の立ち上がりは弱い。遺物は、二次堆積の状況で数点出土。

ＳＸ10（Fig.35、PL.14）第Ⅰａ区東側に位置。埋土は木炭片・細砂を若干含む灰褐色の粘質土である。遺存状況はあまり良くない。ＳＤ06を切っている。遺物は、二次堆積の状況で白磁、土師器皿、瓦器片が数点出土。墓址の可能性もある。

ＳＸ11（Fig.35、PL.14）第Ⅰｂ区北側に位置する。平面形は隅丸のやや歪な方形で一辺約1.6ｍを測る。埋土は砂礫を多量に含む黄褐色土と褐色粘質土でよくしまっている。木炭片も若干混入している。遺物は、土師器、白磁の小片が二次堆積の状況で数点出土。

ＳＸ12（Fig.35）第Ⅰｂ区中央から北側に位置する。旧河川ＳＲ3723の埋没後のもの。平面形はＳＸ11によく似た隅丸のやや歪な方形で、一辺約1.6ｍを測る。埋土はやや青みのある灰色粘質土。遺物は土師器小片が二次的に堆積。

ＳＸ13（Fig.35）第Ⅰａ区東側に位置する。埋土は木炭片をわずかに含み、やや青みのある灰褐色粘質土である。遺存状況はあまり良くない。西側角に浅い窪みがある。遺物は土師器小片が二次的堆積で出土。

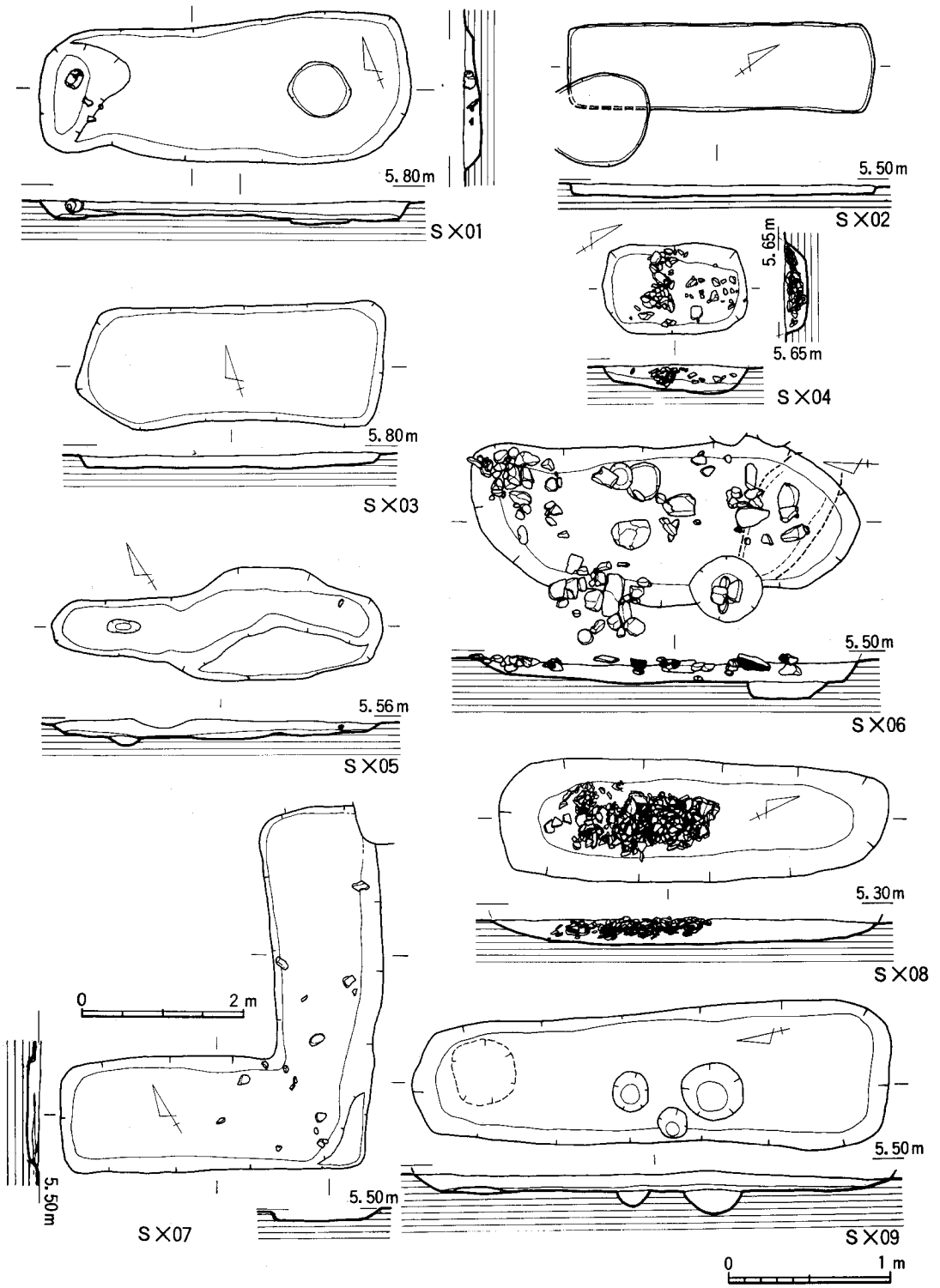


Fig. 34　竪穴遺構平面および断面図（SX01～06･08･09；1/40、07；1/80）その1

ＳＸ14（Fig.35、PL.14）第Ⅰｂ区中央から北側に位置する。遺構の切り合いが最も多い地点にあり、また遺存状況が悪いために正確な遺構の形状については把握し切っていない。平面形はやや歪な方形と思われる。図中の柱穴はいずれもＳＸ14を切っている。埋土は灰色砂質土、暗褐色土、黄褐色土の混合土。壁には灰色の粘土が貼ってあった可能性がある。

ＳＸ15（Fig.35、PL.14）第Ⅰａ区西南側に位置する。平面形は隅丸のやや歪な方形で一辺約1.9ｍを測る。埋土は茶褐色土で、木炭片、小礫を多く含んでいる。北側の床面は一段低いところがあり、この部分に小礫が多く見られた。ＳＸ22・23とは形状や配置の在り方から見て相互に関連し合っているものと思われる。

ＳＸ16（Fig.36、PL.15）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＥ12・13の西側に隣接する。平面形は方形である。埋土は砂礫混じりの灰褐色土で、わずかに木炭片・焼土を含む。礫は拳大で西北側に多く見られる。土師器小片や、粘土塊が若干出土。

ＳＸ17（Fig.36、PL.15）第Ⅰｄ区北西側に位置する。西側隅がやや飛び出た方形。床面はほぼ平坦。壁の立ち上がりは弱い。土師皿の小片が多く混入。

ＳＸ18（Fig.36、PL.15）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＸ16と形状はよく似る。東隅が飛び出た方形で一辺約２ｍを測る。床面はほぼ平坦。壁の立ち上がりは弱い。土師皿の小片が多く混入。赤褐色の粘土塊も若干見られる。

ＳＸ19（Fig.36、PL.15）第Ⅰｂ区西南端に位置し、ＳＸ75の東側に隣接。隅丸方形で一辺約1.7～2.18ｍを測る。断面形は船底状で、比較的残りは良好である。埋土は上層が茶褐色粘質土で、下層が小礫を多く含む暗茶褐色粘質土である。土師器のほか青磁碗、鉄滓、鉄釘片が二次堆積の状況で少量出土した。

ＳＸ20（Fig.36、PL.15）第Ⅰｂ区北側に位置し、ＳＸ11の東側に隣接。平面形は隅丸のやや歪な方形で一辺約1.8～2.2ｍを測る。埋土はＳＸ11と同じく砂礫を多量に含む黄褐色土と褐色粘質土でよくしまっている。遺物は、土師器小片が二次堆積の状況で数点出土。

ＳＸ21（Fig.36）第Ⅰｂ区東側、第３群の東北端に位置している。ＳＤ69を切る。歪な長方形で、長辺2.96ｍ、短辺1.5～2.2ｍを測る。床面は平坦で、壁の立ち上がりは東壁以外は明瞭である。埋土は明褐色土。遺物は、土師器の小片が若干出土している。

ＳＸ22（Fig.37、PL.15）第Ⅰａ区西南部に位置。ＳＸ15・19・23などの主軸方向とはほぼ等しく、またＳＸ24・25とはほぼ一直線にならんでいる。平面形は長方形で、一辺2.63～2.99ｍを測る。遺存状況は良好で検出面から32ｍの深さで残っている。埋土は木炭片、礫を多く含む暗褐色粘質土。出土遺物は土師器の小片や、捏鉢などの日常雑器の破片が目立つ。

ＳＸ23（Fig.37、PL.15）第Ⅰａ区西南部に位置。ＳＸ22と同様にＳＸ15・19などと主軸方向を同じくする。ＳＸ82を切る。平面形は端正な方形で、残りも良好である。埋土は暗褐色粘質土で、木炭片・礫を多く含んでいる。礫はかなり焼けたものと焼けていないものが混ざって

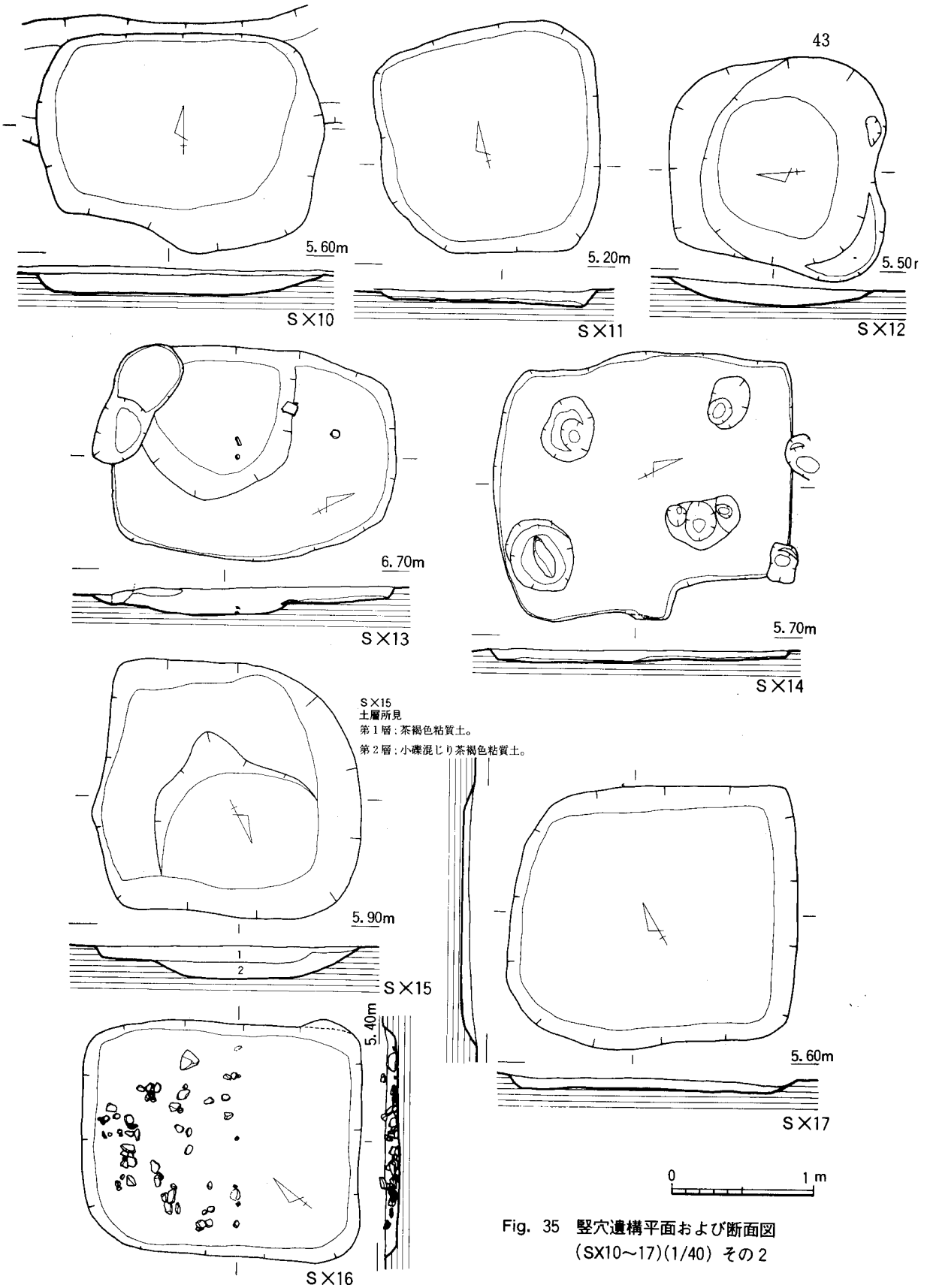


Fig. 35 竪穴遺構平面および断面図
(SX10～17)(1/40) その2

みられ、竪穴の東側床面に多く見られた。

ＳＸ24（Fig.37）第Ⅰｄ区東南側に位置する。平面形は端正な隅丸の長方形で、一辺約2.4～2.81ｍを測る。埋土は暗褐色土で黄褐色砂質土が混入し硬くしまっている。床面はわずかに凹凸があり、壁の立ち上がりは不明瞭。土師器小片、瓦器碗片が出土している。

ＳＸ25（Fig.37）第Ⅰｄ区東南側に位置する。ＳＸ24・22とは東西にほぼ一直線に連なっている。北側角がやや張り出す方形である。非常に残りが悪く床面はわずかに３～５cm程の深さである。土師器、捏鉢などの小片が若干出土している。

ＳＸ26（Fig.38、PL.15）第Ⅰｄ区北側に位置し、ＳＸ17の南側に隣接している。やや不整な隅丸の長方形で、長辺1.89ｍ、短辺1.32ｍを測る。床面はほぼ平坦。壁の立ち上がりは明確である。土師皿や日常雑器のの小片が多く混入している。

ＳＸ27（Fig.38）第Ⅰａ区東南側に位置する。ＳＫ01・02、ＳＸ02などと小さな群を成している。平面形は隅丸の長方形で床面は浅皿状に窪んでいる。掘方壁は垂直に近い。埋土は暗褐色土。赤褐色の粘土塊・木炭片が若干見られる。

ＳＸ28（Fig.38）第Ⅰａ区東南側、第１群の南端部に位置する。ＳＸ29を切る。平面形は隅丸の長方形で、長軸が2.61ｍを測る。掘方はあまり明確でない。残りは悪く、13cm程の深さしか残っていない。埋土はやや青みがかった灰色粘質土。床面はほぼ平坦である。

ＳＸ29（Fig.38）第Ⅰａ区東南側、第１群の南端部に位置する。ＳＸ28から西側半分を切られている。平面形は端正な隅丸方形で、一辺が1.83～2.04ｍを測る。床面は検出面から10cmほどの深さ。埋土は青みがかった明灰色粘質土。遺物は土師器等の小片のみ。

ＳＸ30（Fig.38）第Ⅰａ区東南側、第１群の中央部に位置する。平面形は端正な隅丸の長方形。掘方は明確で遺存状況は良好。埋土は暗灰褐色粘質土で、木炭片、砂礫を多く含みよくしまっている。日常雑器の小片が多く出土している。

ＳＸ31（Fig.38、PL.16）第Ⅰｂ区中央部、第３群の北東部に位置する。ＳＸ12などと同様に、旧河川ＳＲ3723を切っている。平面形は端正な隅丸長方形。掘方は明確で遺存状況はあまりよくない。埋土はやや青みのある灰色粘質土で、遺物は出土していない。床面は平坦。

ＳＸ32（Fig.38、PL.16）第Ⅰｂ区中央から東南側に位置し、井戸ＳＥ07の南に隣接している。平面形は長方形。埋土は褐色粘質土で、木炭片、礫を多く含む。礫は床面から５～10cmほど浮いて出土。床面は平坦で、掘方壁の立ち上がりは垂直に近い。遺物は日常雑器の小片が主に出土している。

ＳＸ33（Fig.38）第Ⅰａ区東側に位置する。平面形はやや歪な長方形。残りはよくなく、検出面から深さ５cmほどである。埋土は青灰褐色。遺物は土師器皿などが二次堆積の状況で出土している。掘方は明確で、壁の立ち上がりは垂直に近い。

ＳＸ34（Fig.38、PL.16）第Ⅰａ区西側に位置する。平面形は歪な隅丸の長方形で、長軸は2.98ｍを測る。残りはあまり良くなく検出面から５cmほどの深さである。埋土は暗褐色土で木炭片、小礫を含む。小礫は一部焼けている。遺物は土師器皿などが出土。

ＳＸ35（Fig.39）第Ⅰａ区東側に位置する。平面形は直径1.46ｍ円形である。埋土は暗褐色砂質土でよくまっている。周辺に分布する柱穴の検出面の下位の面で確認されたもので、時期的には古いものと思われるが、遺物は出土していない。

ＳＸ36（Fig.39）第Ⅰａ区東側に位置する。ＳＤ04を切る。平面形はやや不整な円形である。埋土は４層に分かれる。床面近くに堆積している第３層は木炭片、礫を多量に包含している。

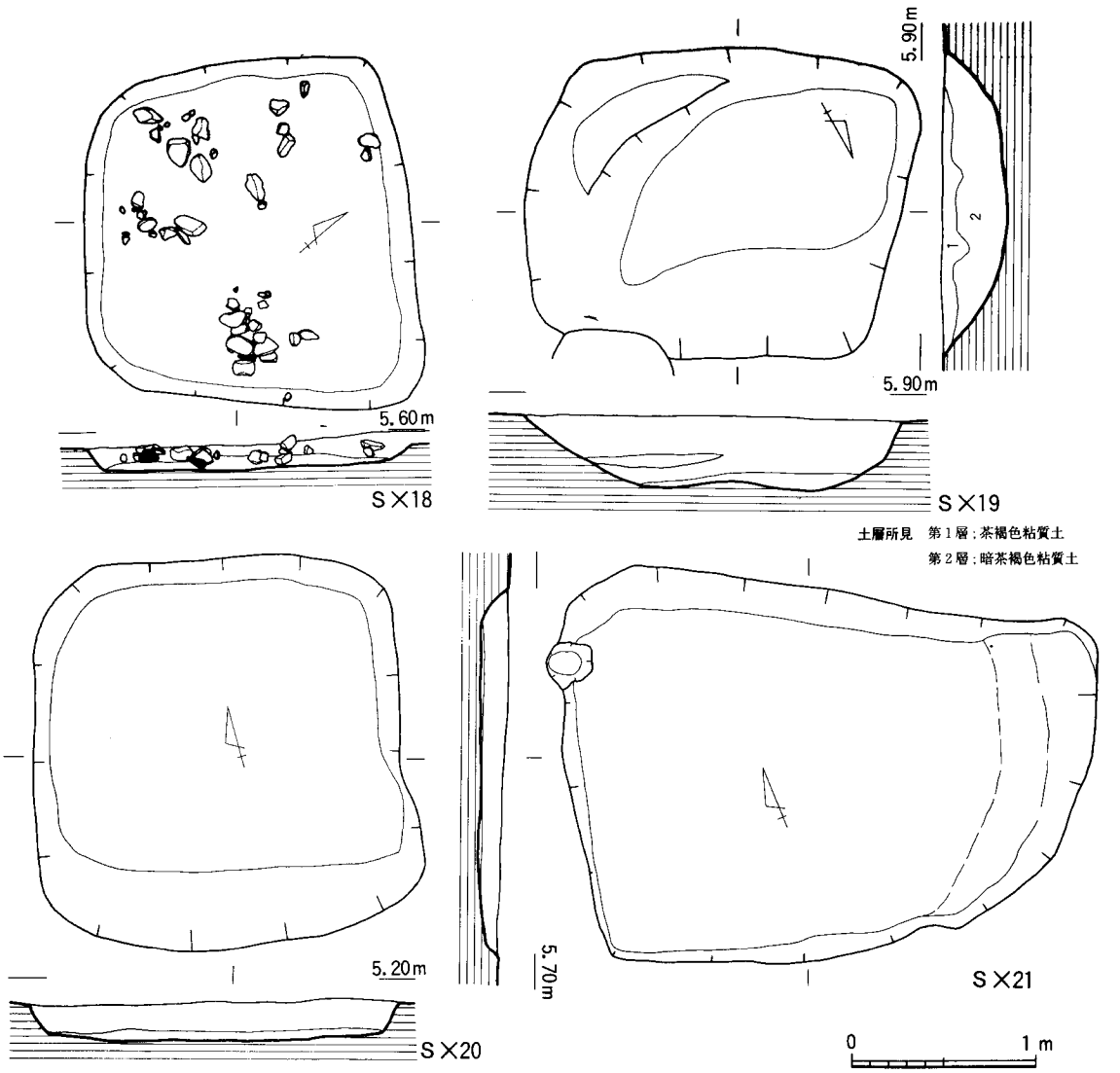


Fig. 36　竪穴遺構平面および断面図（SX18～21)(1/40）その３

床面は平坦で、その直上には鉄分が沈着している。

ＳＸ37（Fig.39）第Ⅰａ区北側、ＳＤ03と04との間に位置する。平面形は不整な円形である。残りは良くない。埋土は灰褐色粘質土で若干の木炭片を含む。

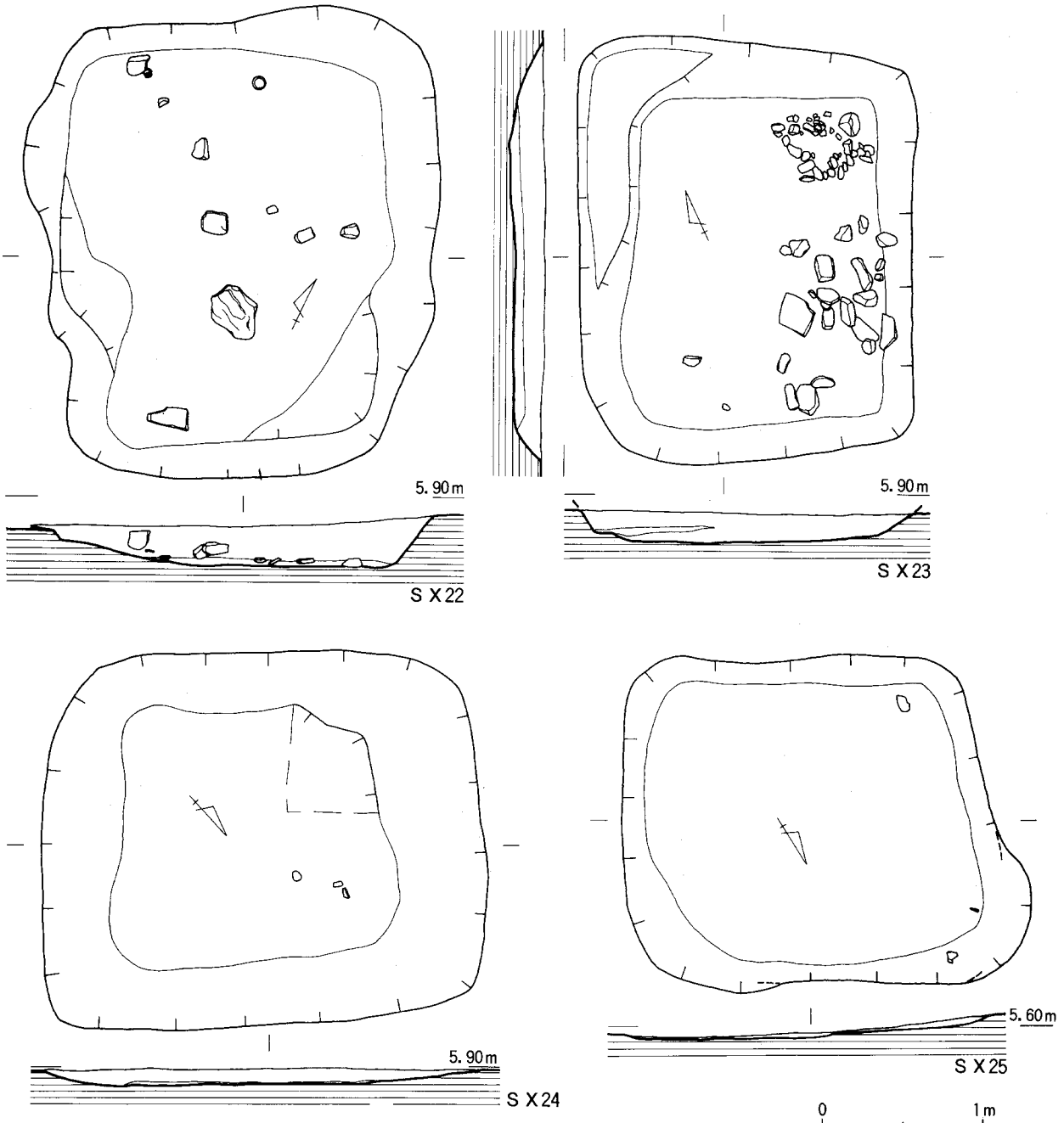


Fig. 37　竪穴遺構平面および断面図（SX22～25)(1/40）その４

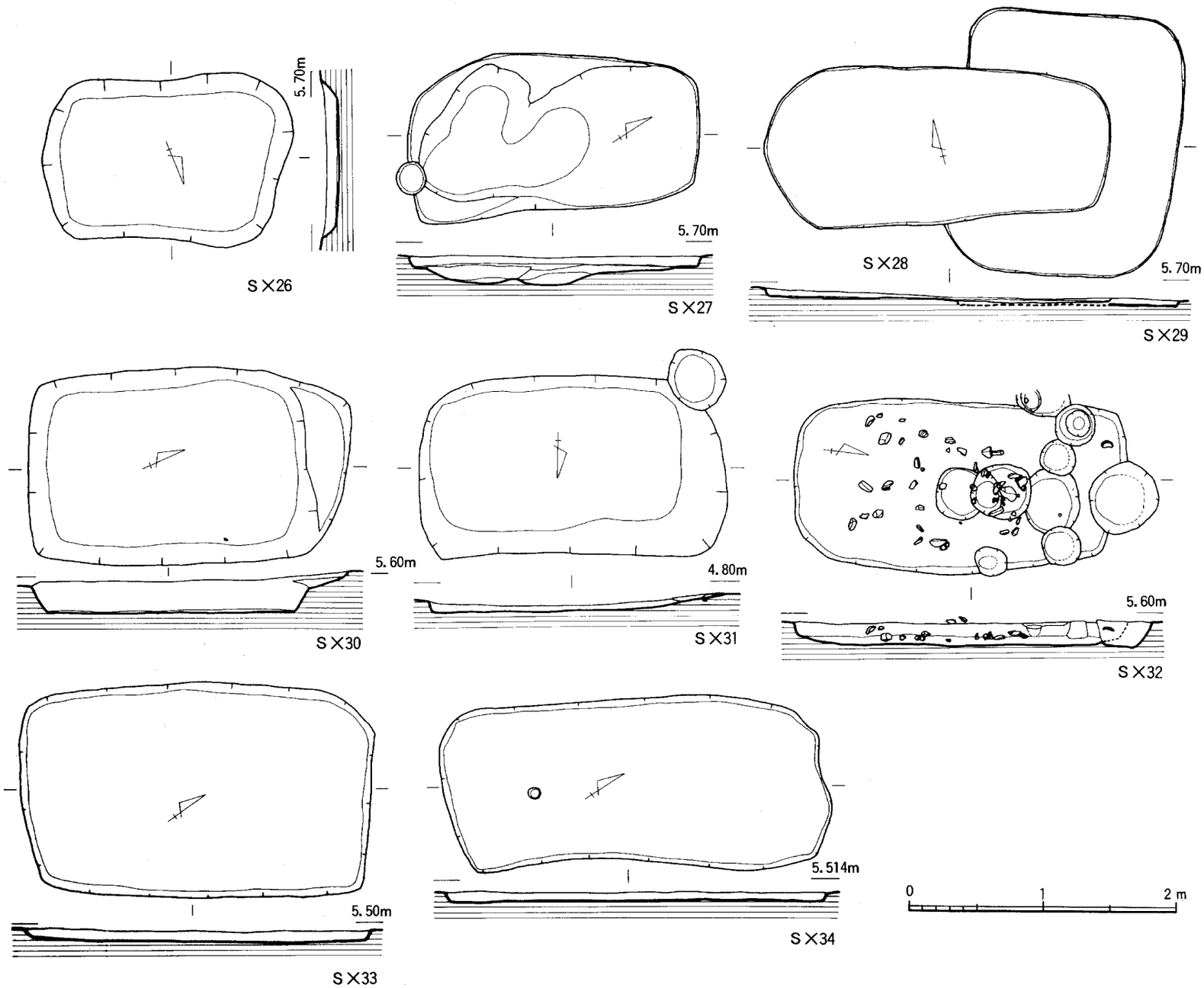


Fig. 38　竪穴遺構平面および断面図（SX26～34)(1/40）その5

ＳＸ38（Fig.39）第Ⅰａ区北東部に位置する。掘立柱建物群（ＳＢ・など）からは切られている。また、ＳＸ39を切っている。平面形は不整な楕円形。掘方はあまり明確ではない。床面はほぼ平坦。遺物は土師質擂鉢などの日常雑器の小片が若干出土している。

ＳＸ39（Fig.39）第Ⅰａ区北東部に位置し、ＳＸ38から切られている。全形は窺えないが不整な楕円形と思われる。残りは良くない。埋土は褐色粘質土。遺物は土師器坏などの日常雑器や・白磁の小片が若干出土している。

ＳＸ40（Fig.39）第Ⅰａ区北東部に位置し、ＳＸ38・39の南側に隣接している。掘立柱建物群（ＳＢ46・47など）から切られている。平面形は楕円形で規模は小さい。埋土は褐色粘質土でよくしまっている。残りは悪いが掘方は明確である。遺物は出土していない。

ＳＸ41（Fig.39）第Ⅰａ区東側に位置し、ＳＸ27の北西側に隣接している。平面形はやや歪な長径1.56ｍほどの円形。床面は平坦で、掘方壁の立ち上がりはほぼ垂直に近い。埋土は青灰褐色粘質土で木炭片が若干混じる。土師器・坏の小片などが若干出土。

ＳＸ42（Fig.39）第Ⅰａ区北東部に位置し、ＳＸ03の西側に隣接する。平面形はやや歪な楕円形である。埋土は小礫、砂、木炭片などを含む暗褐色粘質土である。掘方は明確で、残りも良好。土師器皿・坏の破片などが、二次堆積の状況で出土している。

ＳＸ43（Fig.39）第Ⅰａ区北東部、第１群の北東端部に位置する。平面形は不整な楕円形である。埋土は暗褐色土で砂礫を多く含む。出土遺物は無し。

ＳＸ44（Fig.39）第ⅠａとⅠｄ区との境で検出された。第２群の北側に位置する。ＳＤ40からその上半分を削平されている。平面形は不整な楕円形。断面形は船底状である。埋土は砂礫混じりの暗褐色粘質土。遺物は土師器・坏、褐釉陶器などの小片が若干出土している。

ＳＸ45（Fig.39）第Ⅰａ区東側に位置し、ＳＤ05・ＳＫ01に切られている。平面形は隅丸の長方形に近い不整な楕円形。床面は平坦で、掘方壁の立ち上がりはやや不明確である。遺物は土師器・坏、瓦器碗、輸入陶器などのの小片が二次堆積の状況で若干出土。

ＳＸ46（Fig.39、PL.16）第Ⅰｄ区南側に位置する。平面形はやや歪な楕円形。断面形は船底状である。埋土は褐色シルトでやや砂っぽい。遺物は土師器皿・坏小片が若干出土。

ＳＸ47（Fig.40）第Ⅰｂ区東南側に位置する。井戸ＳＥ07・08の北側に隣接し、直接の切り合い関係はないが、これらの井戸よりも下位の検出面で確認された。平面形は卵形。断面は船底状である。埋土は褐色粘質土で礫を多く含む。出土遺物は無い。

ＳＸ48（Fig.40）第Ⅰｄ区南側に位置する。平面形は楕円形。埋土は暗灰褐色粘質土で若干の木炭を含む。床面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは弱い。土師器片が数点出土。

ＳＸ49（Fig.40）第Ⅰｄ区南側に位置する。平面形はやや不整な円形。掘方壁の立ち上がりは弱く下端は明確でない。埋土は黄灰色シルト。出土遺物は無し。

ＳＸ50（Fig.40、PL.16）第Ⅰｄ区西北側に位置する。平面形はやや不整な円形。断面形は

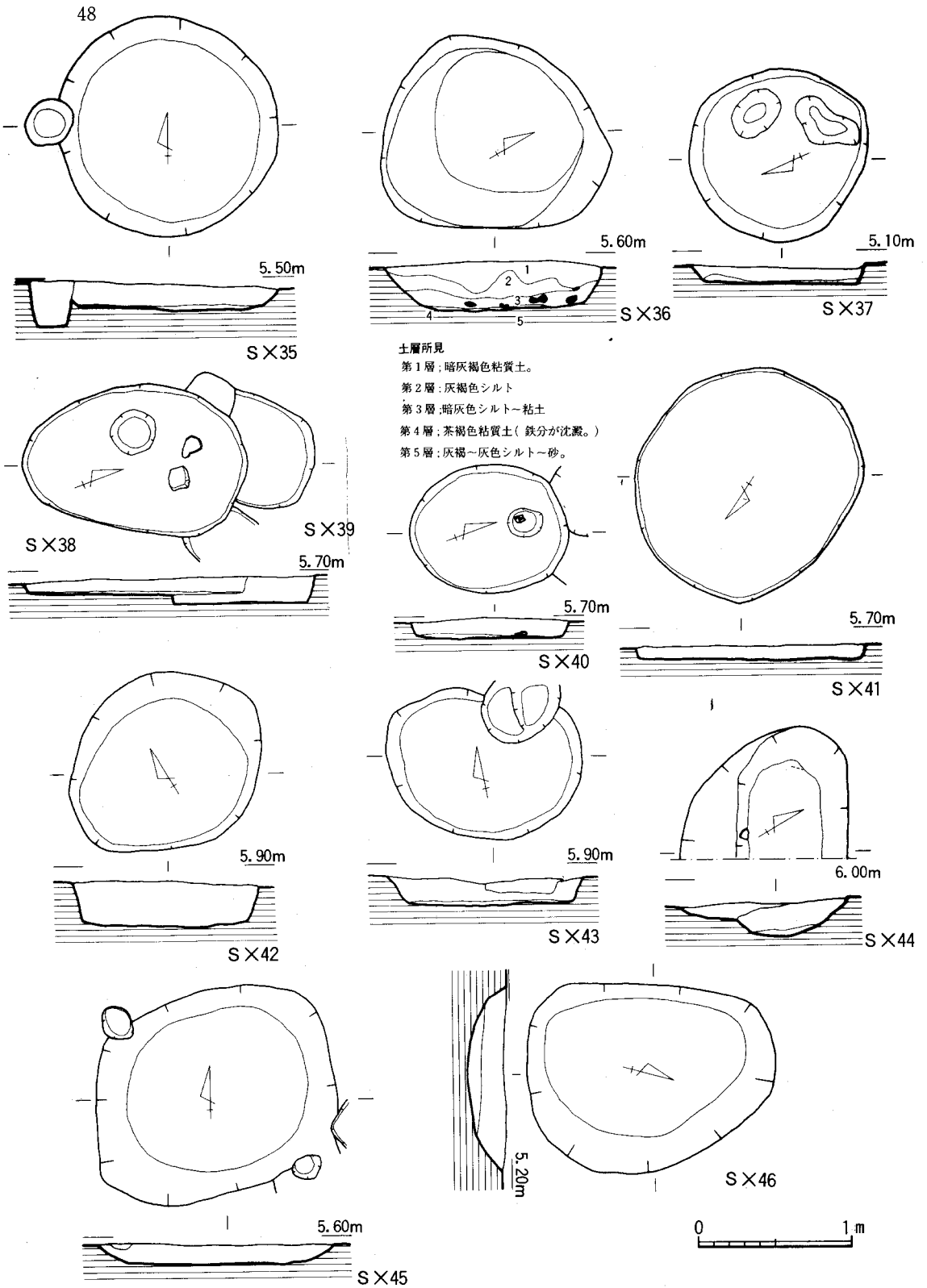


Fig. 39 竪穴遺構平面および断面図（SX35～46)(1/40）その6

浅皿状である。埋土は青灰色粘質土で一時的に埋まった状況である。出土遺物は無し。

ＳＸ51（Fig.40、PL.33）第Ⅰｂ区中央に位置し、ＳＸ18・31・68と小さな群をなす。旧河川ＳＲ3723を切り、ＳＸ68から切られている。平面形はやや大型の不整な楕円形。遺存状況は悪くわずか５cm程しか残っていない。埋土は褐色がかった明灰色砂質土。床面は平坦である。出土遺物は土師質土鍋片などが二次的な堆積状況で数点出土している。

ＳＸ52（Fig.40）第Ⅰａ区北側に位置し、屋敷地の南東端部においてＳＤ07を切っている。平面形は不正な楕円形で断面形は船底状となっている。埋土は１～８層に分かれ、第３層に木炭、焼土がやや目立った。埋土は自然堆積ではなく一時的に埋め戻されたものと思われる。出土遺物は土師器などの日常雑器の小片が二次的な状況で出土している。

ＳＸ53（Fig.40）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＤ33を切り、ＳＸ04から切られている。平面形は不整な長楕円形。掘方はあまり明確ではなかった。埋土は暗褐色粘質土で砂礫を含む。床面は凹凸に富む。土師器碗・坏の小片・粘土塊が二次的な状況で出土している。

ＳＸ54（Fig.40）第Ⅰｄ区南側に位置する。溝状遺構ＳＤ46から切られている。ＳＸ49の西側に隣接する。平面形は不整な隅丸の長方形。埋土はＳＸ49とよく似た黄灰色シルトで、砂が比較的多い。出土遺物は無し。

ＳＸ55（Fig.40）第Ⅰｄ区東側、ＳＸ83の南に位置する。平面形は不定形で、かなり残りが悪く、掘方などは明確でない。埋土は暗褐色粘質土で砂礫が混入している。遺物は土師器皿・坏の小片が二次的な堆積状況で出土している。

ＳＸ56（Fig.40）第Ⅰａ区東側、溝状遺構ＳＤ04の北側に位置する。不整な楕円形で、長軸は2.07ｍを測る。埋土はやや青みがかった灰褐色粘質土で、土師器皿の小片が若干出土している。

ＳＸ57（付図１）第Ⅰｄ区西南側に位置し、ＳＤ50からその中央を切られている。平面形は不正な長方形で、埋土は、灰褐色土、灰色シルト、茶灰色粘土などの混合土。一時的に埋没した状況である。土師器皿・坏・青磁片が若干出土している。（個別図は無い）

ＳＸ58（Fig.41、PL.16）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＸ59を切り、ＳＥ07・ＳＫ14から切られている。遺構がかなり切り合っているために全形は不明であるが、一辺2.5～3.00ｍを測る不整な隅丸方形である。埋土は暗灰褐色粘質土で木炭片・焼土を含む。出土遺物は土師器皿・坏の小片を主として、瓦器碗、青磁碗片などが出土している。

ＳＸ59（Fig.41、PL.16）第Ⅰｂ区東南側に位置する。ＳＸ58・ＳＥ07から切られている。やや不正な円形で断面形は浅皿状である。埋土は暗灰～灰褐色で、かなりの量の遺物を含んでいるが、ほとんどが細片で二次堆積のものである。

ＳＸ60（Fig.42、PL.16）第Ⅰｂ区東南側に位置する。この遺構の周辺はもっとも遺構の切り合いが顕著な所で、少なくとも６～７期にわたる遺構の切り合い関係が数えられる。以下に

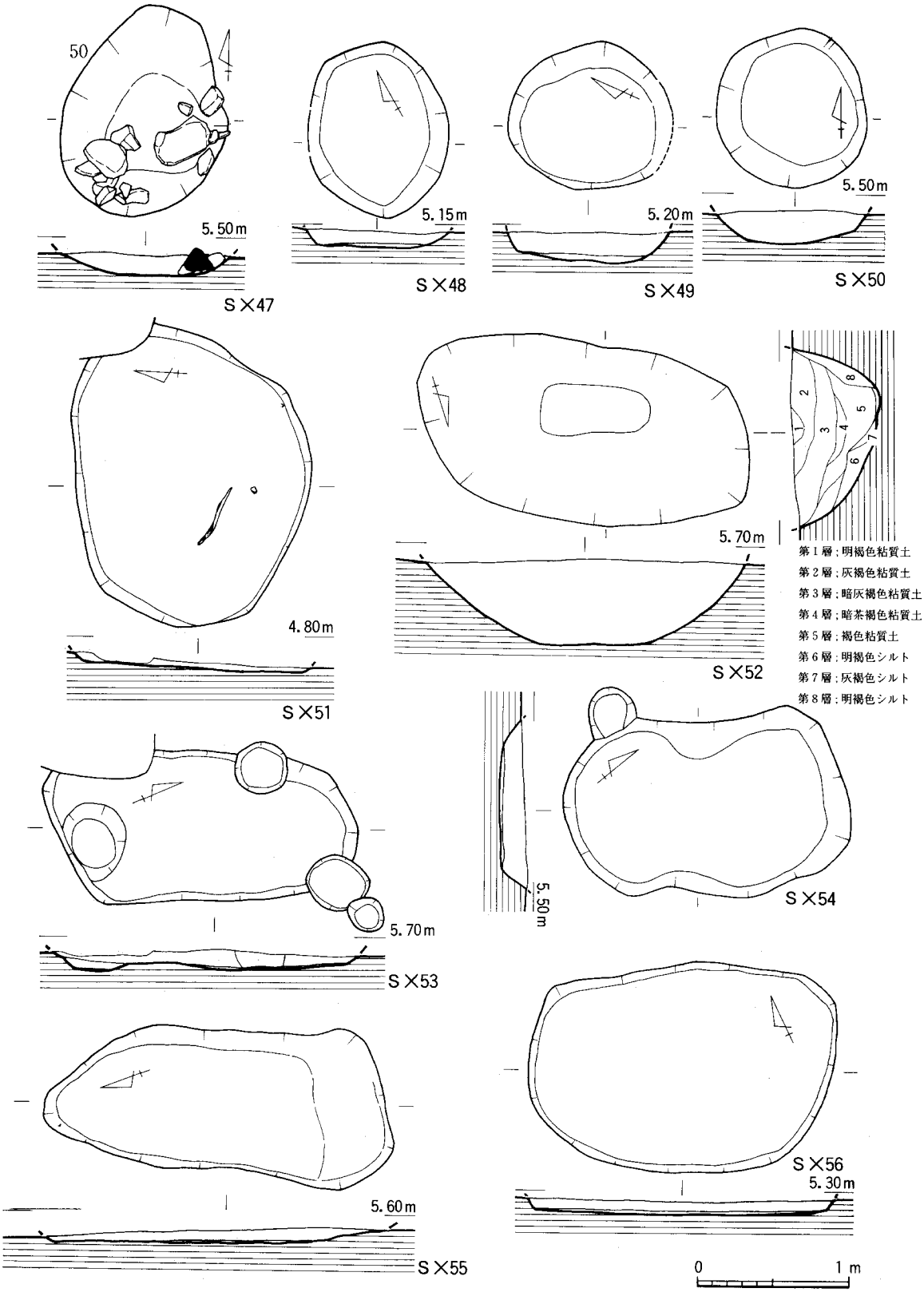


Fig. 40　竪穴遺構平面および断面図（SX47～56)(1/40）その7

述べるＳＸ60～64・ＳＤ30・ＳＥ21の切り合いからみた遺構間の先後関係については次のようになる。ＳＤ30→ＳＸ62→60→61→ＳＥ21→ＳＸ64→63（先→後）。さらにこれらの上位の検出面でＳＸ14が確認されている。ＳＸ60の平面形は約2,56ｍを測る円形で、床面は浅皿状にくぼんでいる。埋土は褐色粘質土で、木炭片、小礫を比較的多く含んでいる。遺物は投棄された状況で土師器などの細片が出土。

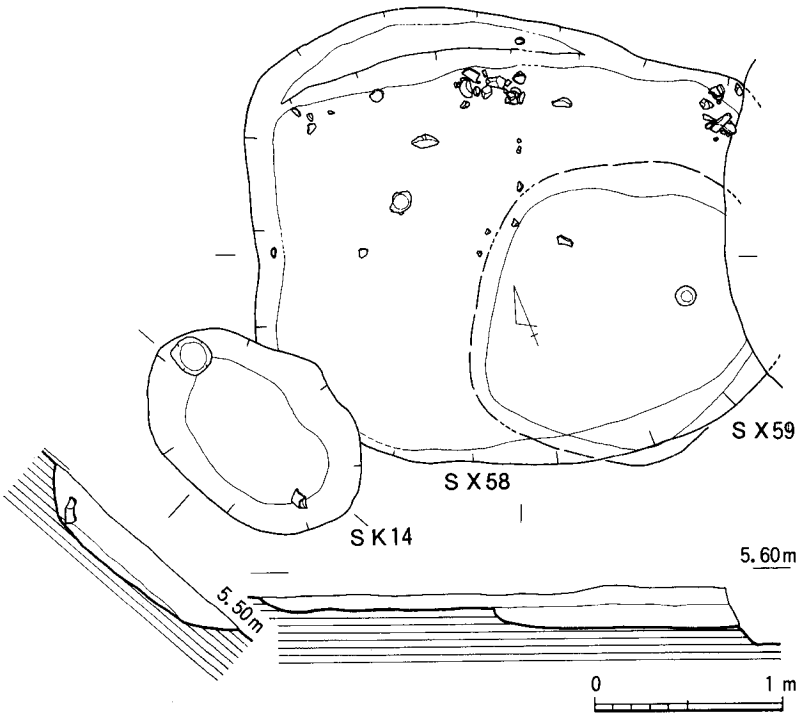


Fig. 41　土壙・竪穴遺構平面および断面図（SK14、SX58・59)(1/40）その８

ＳＸ61（Fig.42、PL.16）ＳＸ60の北側を切っている。ＳＥ21が西側を切っている。平面形は端正な長方形で掘方も明確である。床面は平坦。埋土は暗褐色粘質土で、木炭片、小礫がやや目立つ。図中の柱穴はいずれもＳＸ61を切っている。

ＳＸ62（Fig.42、PL.16）ＳＸ60・61から西側を切られている。平面形は隅丸の長方形で、床面は平坦である。埋土は砂礫・木炭片を多く含む暗褐色粘質土でよくしまっている。図中の柱穴はいずれもＳＸ62を切る。遺物は土師器などの日常雑器の細片が出土している。

ＳＸ63（Fig.42、PL.16）ＳＸ64の西側に位置し、切っている。平面形はやや不整な円形で、断面形は浅皿状となっている。埋土は暗褐色粘質土と明褐色シルトの混合土で木炭・焼土・小礫を若干含んでいる。出土遺物は土師器の小片が数点出土。

ＳＸ64（Fig.42、PL.16）ＳＸ60・61・ＳＥ21を切る。ＳＸ14・63から切られている。平面形はやや不整な円形で、断面形は浅皿状である。大きさはＳＸ60にほぼ等しい。埋土はＳＸ63と比べ明褐色シルトがやや多く、全体に明るい感じのする褐色粘質土。土師器皿・坏・土師質土鍋などの日常雑器の小片が出土している。

ＳＸ65（Fig.43）第Ⅰａ区東側に位置する。ＳＤ05・ＳＸ72に接し、切られている。平面形はやや不整な楕円形で、暗灰褐色砂質土を埋土とする。土師器皿などの日常雑器のほかに青白

磁の合子なども出土している。

ＳＸ66（Fig.43）第Ⅰｂ区中央から東側に位置する。不定形で掘方、壁の立ち上がりなども不明確である。埋土は灰褐色土で遺存状況はかなり悪い。土師器の小片が若干出土しているが、二次堆積によるもの。

ＳＸ67（Fig.43、PL.17）第Ⅰｂ区中央から東側に位置する。ＳＸ67同様、平面形は不定形で掘方、壁の立ち上がりなどは不明確で、遺存状況はかなり悪い。

ＳＸ68（Fig.43、PL.17）第Ⅰｂ区中央から東側に位置する。ＳＸ12・31・51、ＳＥ15などと小さな群を成している。旧河川ＳＲ3723を切る。平面形は不整な隅丸の方形で、断面は浅皿状をなす。埋土は青みがかった灰褐色粘質土。出土遺物は土師器皿の小片が若干出土。

ＳＸ69（Fig.44）第Ⅰａ区西南部に位置する。ＳＤ11を切る。平面形は長大な楕円形で、断面形は浅皿状となる。埋土は暗灰褐色粘質土で、砂礫、焼土、木炭片を若干含む。土師器皿・坏、土鍋、須恵質擂鉢などの日常雑器の破片が出土している。

ＳＸ70（Fig.44、PL.17）第Ⅰａ区北側、第２群の南端部に位置する。平面形は不定形で、断面は浅皿～船底状をなす。埋土は大きく２層に分かれる。第２層は木炭が約５～10cmの厚さで堆積しており、火をかなり使ったことが窺われた。出土した遺物は土師器皿・坏を主として擂鉢・捏鉢などの日常雑器へんが多く出土している。

ＳＸ71（Fig.44、PL.17）第Ⅰａ区北側、ＳＸ52の東側に隣接している。ＳＤ07を切る。円形の竪穴が２つ接していた可能性もあるが、調査時には確認されていない。平面形は不定形で、断面形は浅皿状である。埋土は木炭片・礫を多く含んだ暗褐色粘質土。

ＳＸ72（Fig.44、PL.17）第Ⅰａ区東側、ＳＸ65の西側に接している。平面形はやや不整な長方形で、断面は船底状になる。埋土は多量の拳大の礫、木炭片を含んだ暗灰褐色粘質土。礫は床面に密着してみられ、意図的に敷きつめられた感がある。出土遺物は土師器皿・坏の破片を主として、青磁碗、青白磁皿、白磁などの破片が比較的多く出土している。

ＳＸ73（Fig.45、PL.17）第Ⅰａ区西側で、第２群の東端に位置する。ＳＤ11・ＳＸ74を切る。平面形は長大な不定形で、断面形は浅皿状である。埋土は焼土・木炭片・礫を含んだ暗褐色粘質土である。土師器皿・坏、須恵質捏鉢などの日常雑器のほか、青・白磁などの輸入陶磁器が比較的多く出土している。

ＳＸ74（Fig.45、PL.17）ＳＸ73の西側で接し、切られている。ＳＸ73同様に、平面形は長大な不定形で断面形は浅皿状である。埋土は焼土・木炭片・礫を含んだ暗褐色粘質土である。土師器皿・坏、須恵質捏鉢などの日常雑器や青磁・青白磁などの輸入陶磁器が出土している。

ＳＸ75（Fig.46、PL.18）第Ⅰａと Ⅰｄ区の境で確認された。第２群の中央に位置。平面形は端正な長方形である。床面は平坦で、掘方壁はほぼ垂直に立ち上がる。南側床面は一段（約10cmほど）低くなっている箇所がある。埋土は砂礫を含む暗褐色砂質土。土師器皿・坏、須

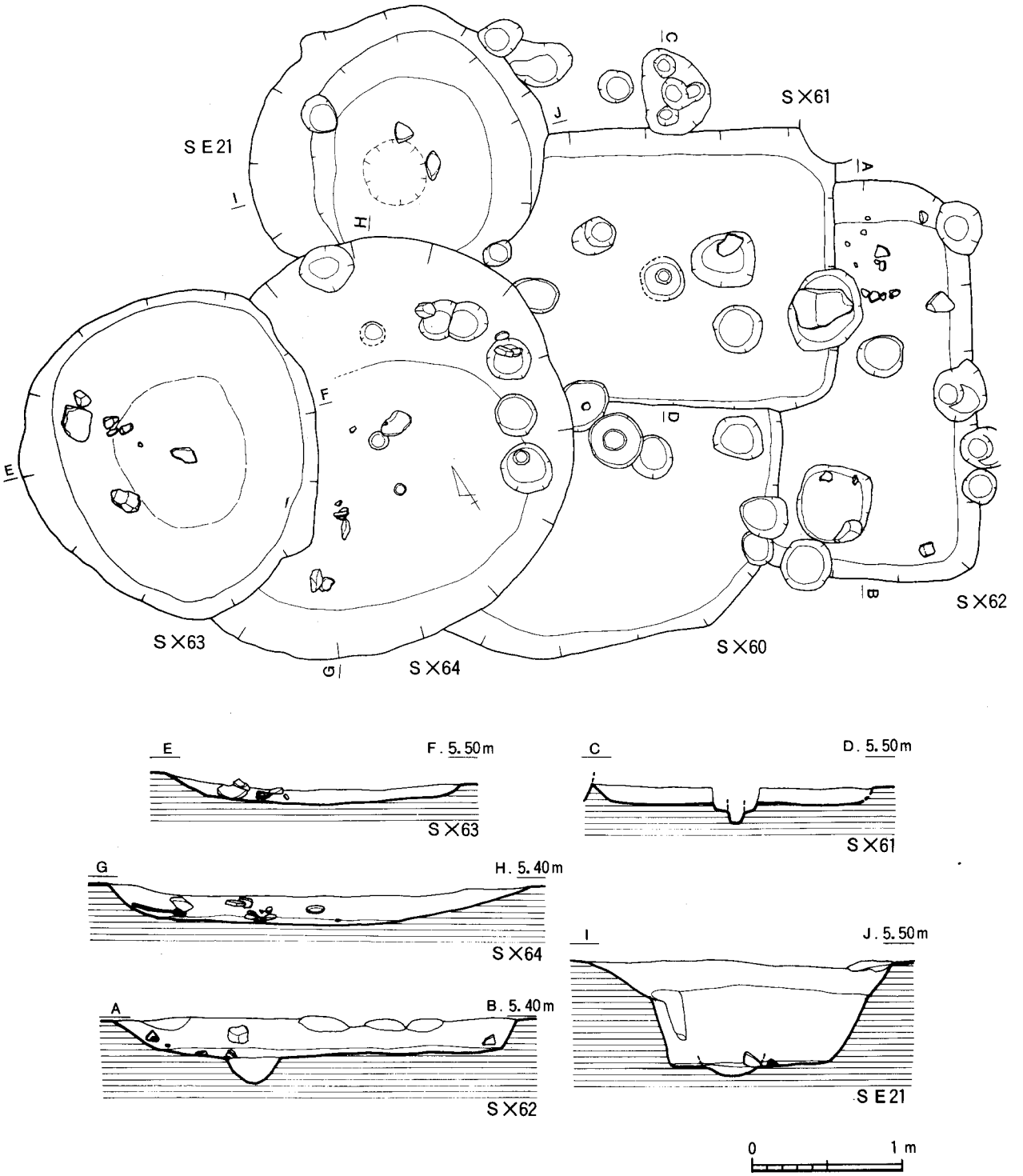


Fig. 42 井戸・竪穴遺構平面および断面図（SE21・SX60～64)(1/40) その9

恵質捏鉢、瓦器などの日常雑器のほかに青磁・白磁片などが出土している。

ＳＸ76（Fig.46）第Ⅰａ区東側に位置する。ＳＸ07・ＳＫ39から切られている。平面形は端正な長方形で、床面は平坦である。床面の南側に木炭が集中的に見られるところがあった。この竪穴に伴う柱穴は確認されていない。埋土は暗褐色粘質土である。遺物の出土状況はＳＸ74・75と同様に日常雑器が多い。

ＳＸ77（Fig.46、PL.18）第Ⅰｂ区中央に位置する。掘立柱建物の分布する範囲の北側にはずれた地点に位置している。遺存状況は非常に悪い。平面形はやや不整な長方形で、掘方は不

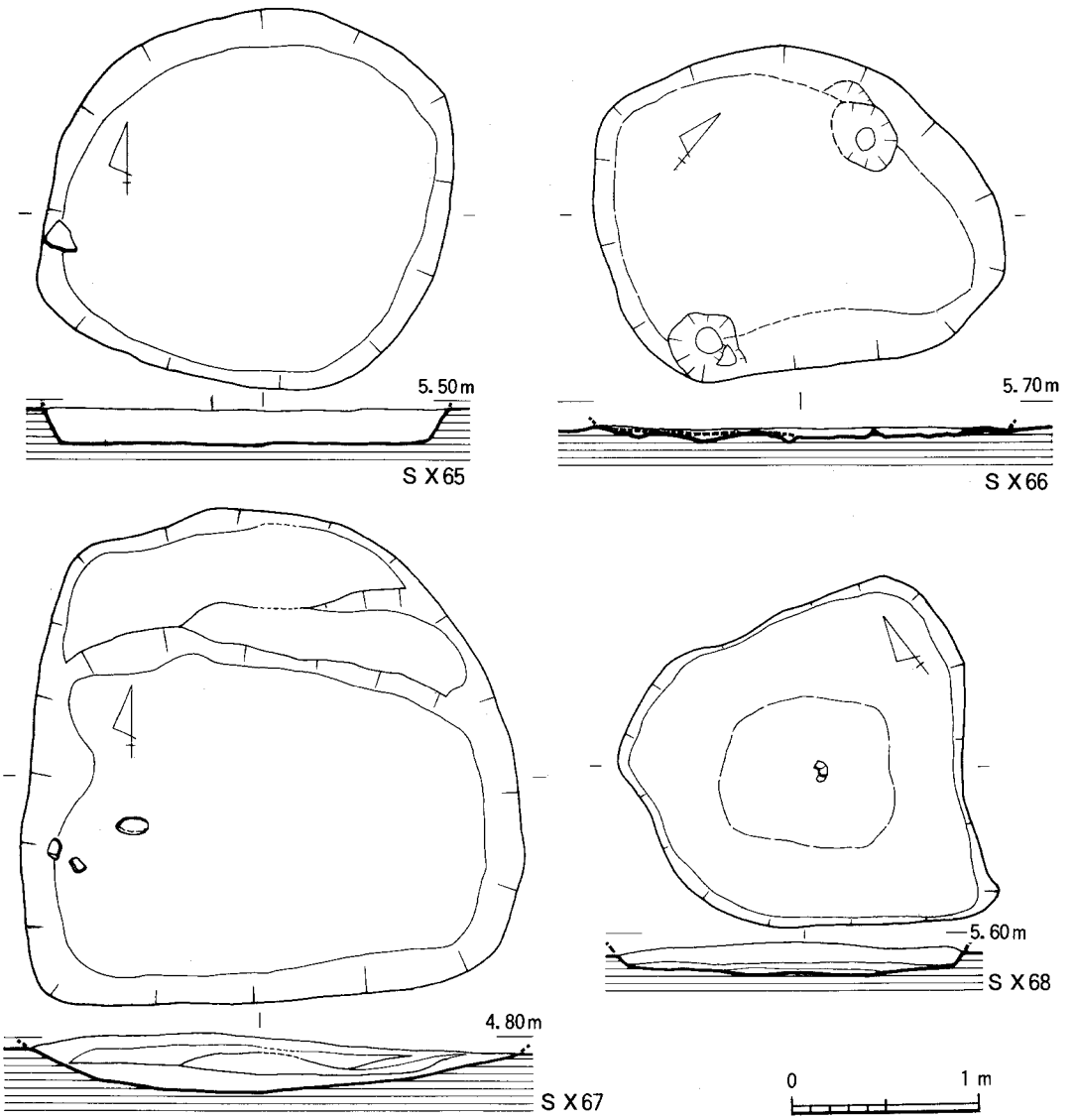


Fig. 43　竪穴遺構平面および断面図（SX65～68)(1/40）その10

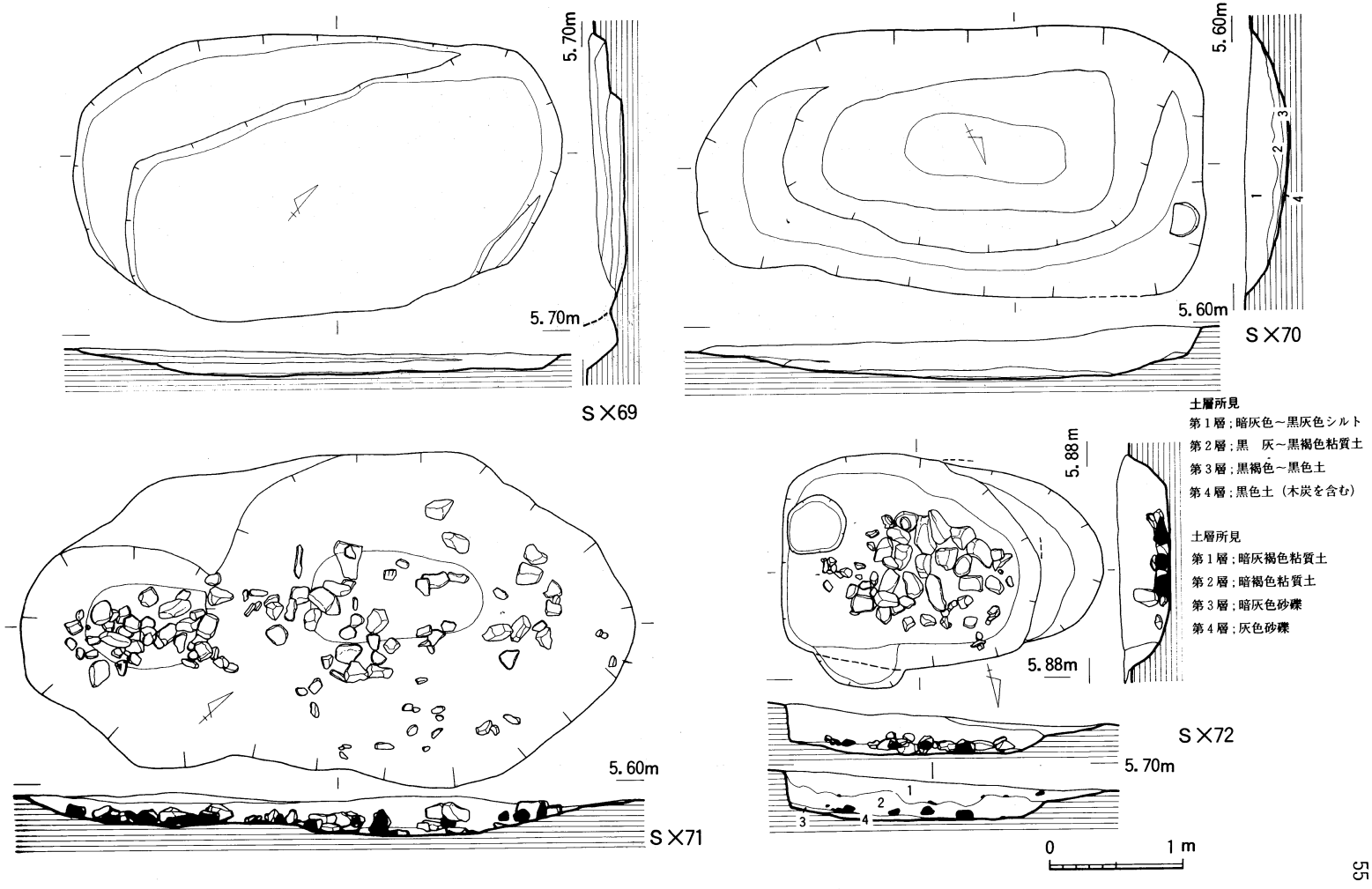


Fig. 44　竪穴遺構平面および断面図（SX69～72)(1/40）その11

明確である。床面は凹凸がやや目立つ。図中の柱穴は、ＳＸ78を切っている。埋土は灰褐色砂質土で、砂礫を含む。出土遺物はＳＸ74～76と同様な内容で、日常雑器が目立つ。

ＳＸ78（Fig.47、PL.19）第Ⅰｂ区中央に位置する。ＳＸ77同様に掘立柱建物の分布する範囲の北側にはずれた地点に位置している。遺存状況は悪い。平面形は長方形で、床面はほぼ平坦である。壁の立ち上がりはあまり明確でない。埋土は灰褐色砂質土で、砂礫が多い。出土遺物はＳＸ74～77と同様な内容で、日常雑器が傾向として多い。

ＳＸ79（Fig.48、PL.19）第Ⅰｂ区北側に位置する。ＳＸ80・81を切っている。平面形はコの字形である。床面はほぼ平坦だが、部分的に凹凸がある。埋土は褐色土と明褐色シルトの混合土である。砂礫を若干含む。

ＳＸ80（Fig.48、PL.19）第Ⅰｂ区北側に位置する。ＳＸ81を切り、ＳＸ79から切られている。平面形は不定形。埋土は焼土・木炭を若干含む灰褐色砂質土。

ＳＸ81（Fig.48、PL.19）第Ⅰｂ区北側に位置する。ＳＸ79・80から切られている。平面形

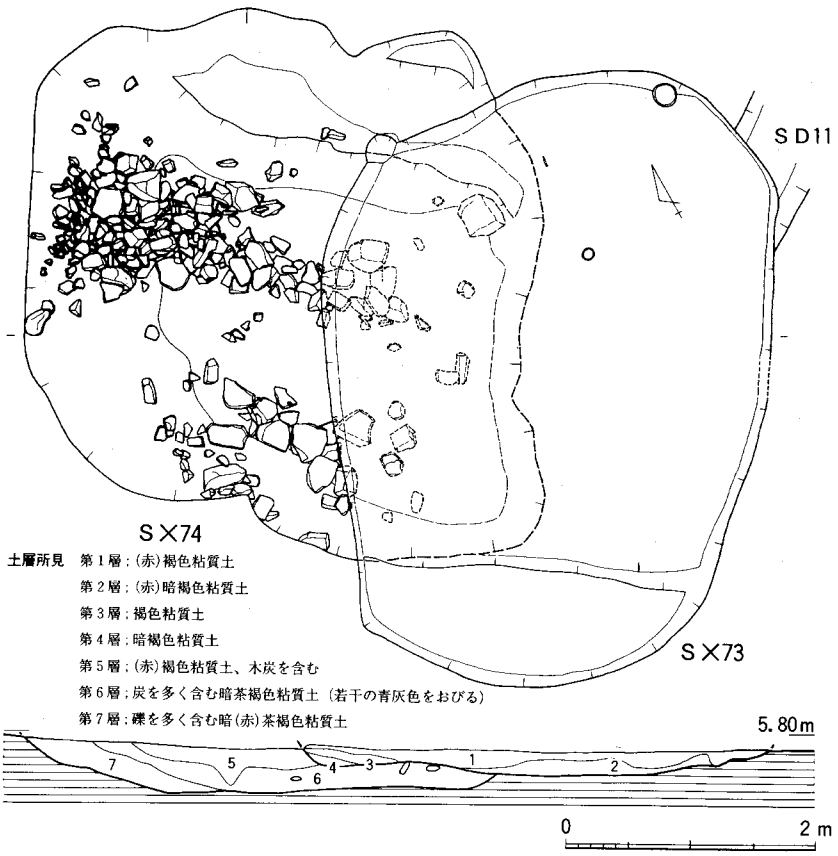


Fig. 45　竪穴遺構平面および断面図（SX73･74)(1/60）その12

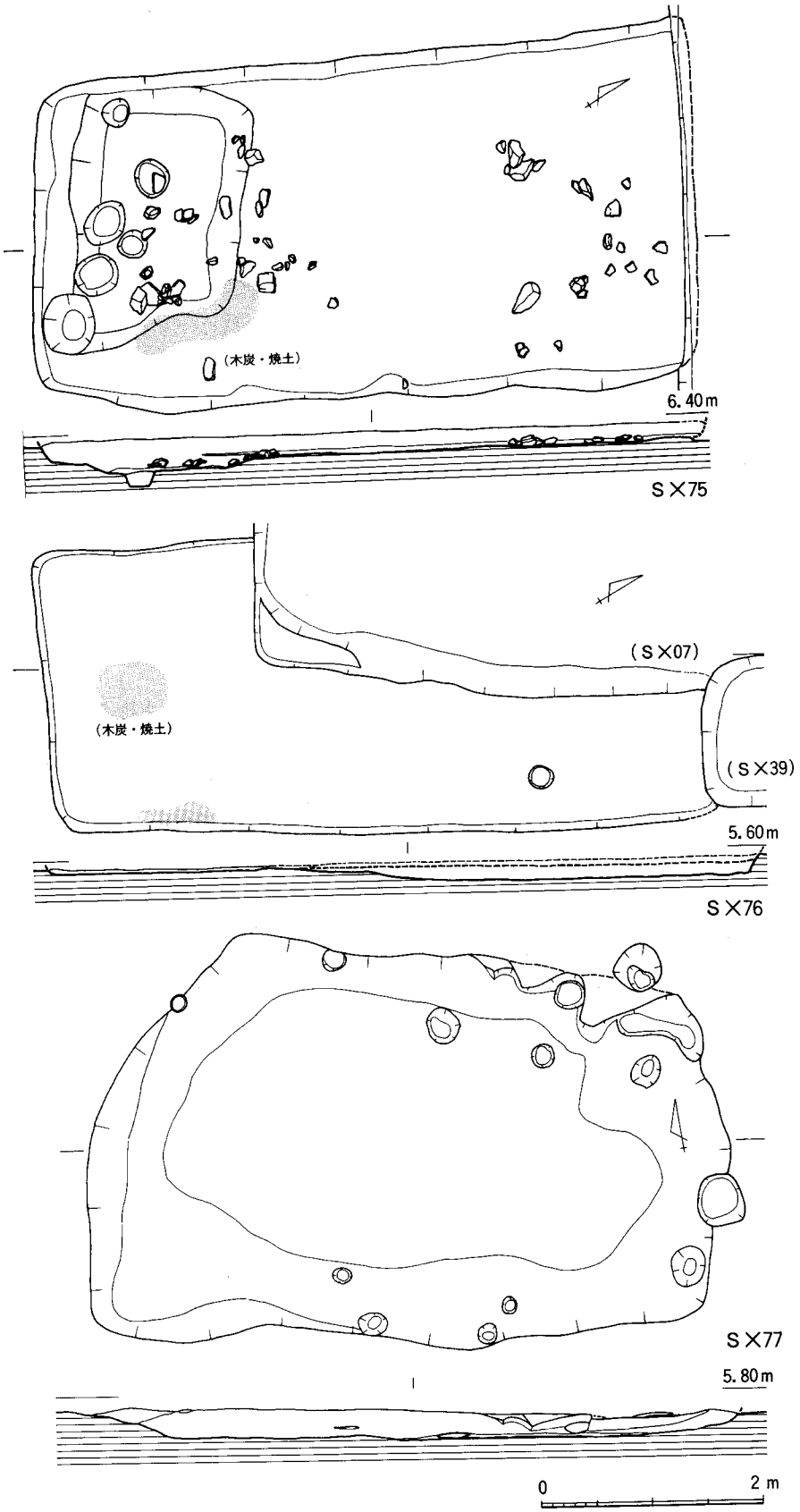


Fig. 46 竪穴遺構平面および断面図（SX75～77)(1/60) その13

は不整な長楕円形で、特異な形態である。埋土は暗灰褐色砂質土で、焼土塊、木炭片を含んでいる。

ＳＸ82（Fig.48、PL.19）第Ⅰａ区西側に位置する。ＳＸ23から切られている。平面形は不定形である。掘方は不明確。埋土は暗褐色粘質土で、砂礫・粘土塊・焼土を含む。

ＳＸ83（Fig.49、PL.19）第Ⅰｄ区北側に位置する。ＳＤ40から切られ、ＳＤ58を切っている。ＳＸ08と同様に土師器皿・坏を多量に包含している。土師器はいずれも一時的に投棄されたものと思われる。埋土は暗褐色砂質土。掘方は不明確だが隅丸方形と思われる。断面は浅皿状である。土師器の一部は後世の攪乱で南側に二次的に動いているものもある。

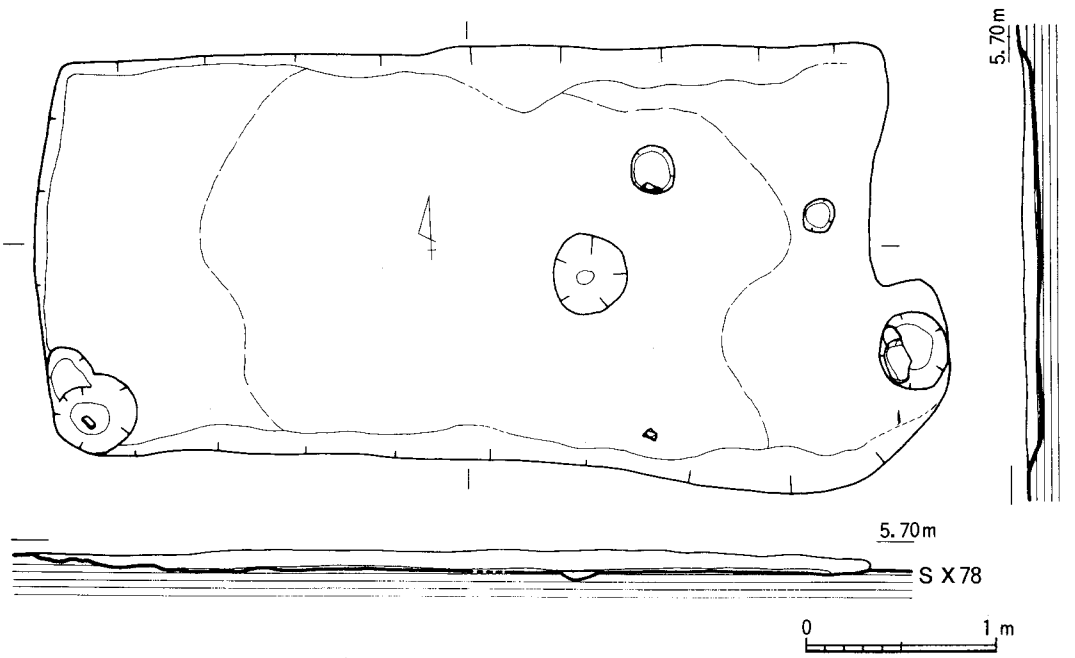


Fig. 47　竪穴遺構平面および断面図（SX78)(1/40）その14

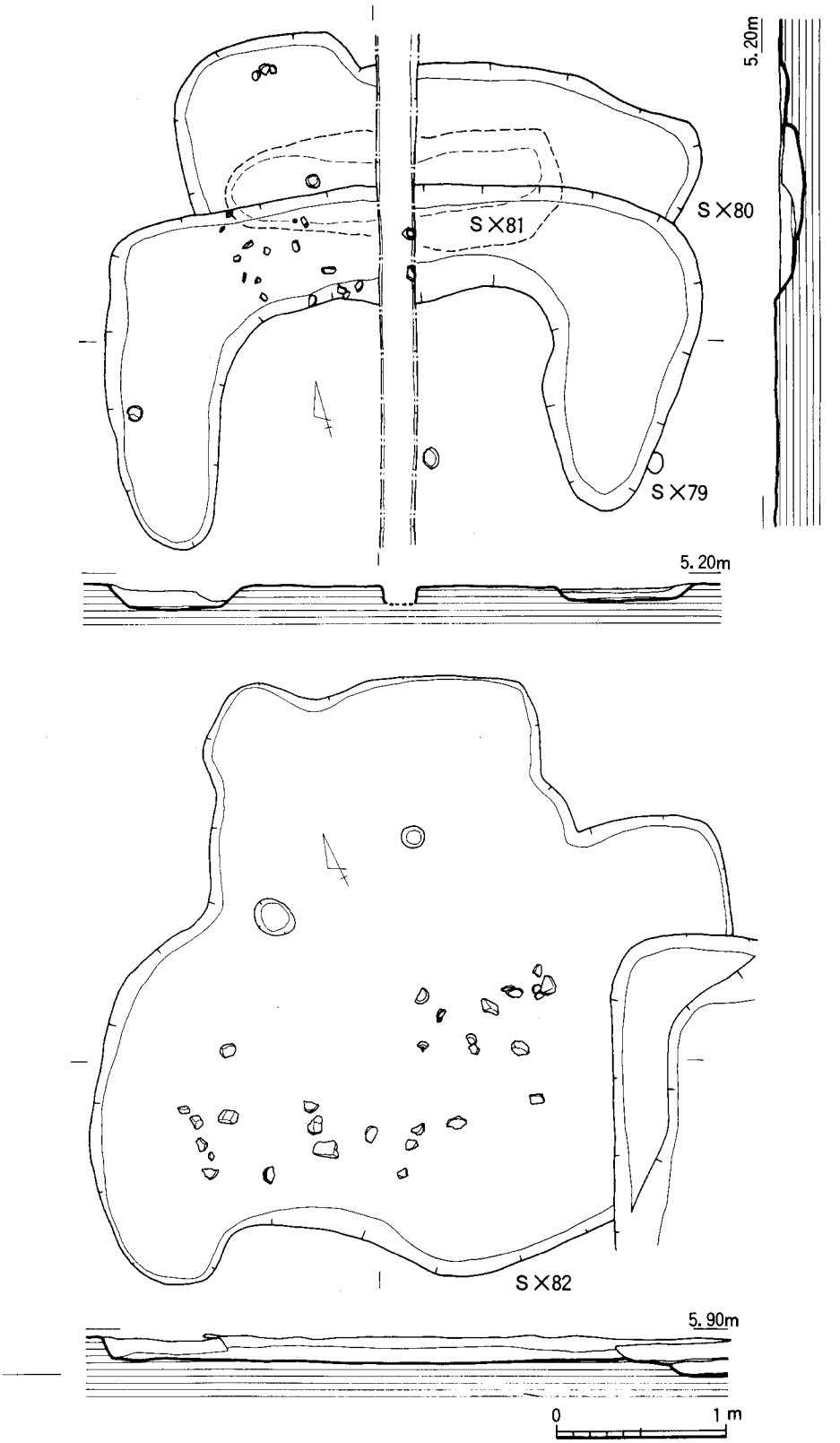


Fig. 48 竪穴遺構平面および断面図（SX79～82)(1/40) その15

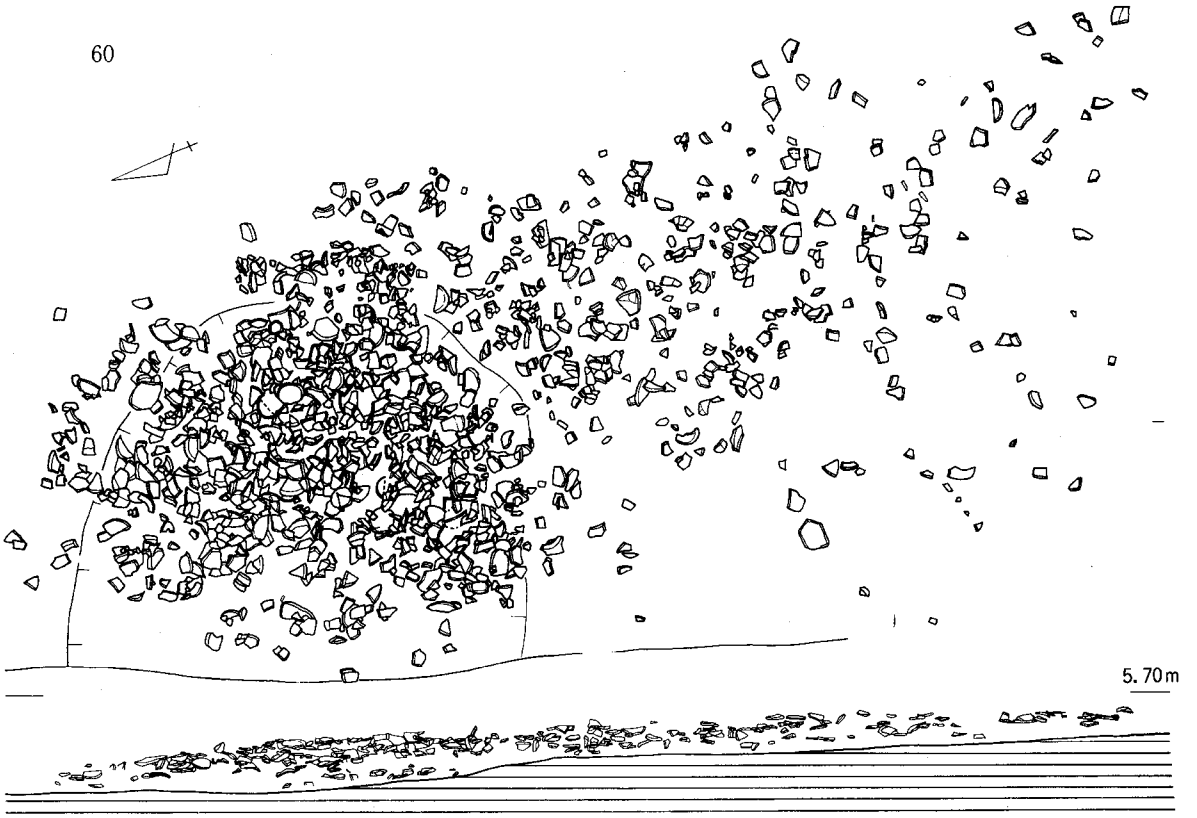


Fig. 49　竪穴遺構平面および断面図（SX83)(1/40）その16

0　1　2m

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物FigNo	備考
34		a区	SX01	SX01	隅丸長方形　(m) 2.29×0.96×0.12	弥生土器、土師器皿、青磁－龍泉皿（Ⅲ類）		
34		a区	SX02	SX04	長方形 1.90×0.55×0.07	土師器皿、青磁－龍泉碗片		
34	14-(1)	a区	SX03	SK08	不整な長方形 1.92×0.81×0.10	白磁－碗（Ⅵ類）、口禿碗、皿口禿、弥生土器－器台片、土師器皿、瓦器碗、土師質土鍋	70 (161.162.163)	
34	14-(2)	b区	SX04	1773	隅丸長方形 0.90×0.56×0.22	焼土、木炭、瓦器小片、土師器坏		SX53を切る。
34	14-(3)	b区	SX05	2418	不定形 2.05×0.70×0.13	白磁碗（Ⅵ類）、龍泉青磁（碗Ⅱ－1類）、輸入陶器、土師器－碗、坏、皿、瓦器小片、土師質土鍋、弥生土器、鉄器、木炭		SD27から切られている。
34	14-(4)	b区	SX06	2079	長楕円形 2.41×1.03×0.15	木炭片、小礫、焼土、貨銭	90	SD33、SD67を切っている。
34	14-(5)	a区	SX07	SX06	L字形 2.26×1.98×0.15	白磁－碗（Ⅳ-2、Ⅵ類）、高台付皿（Ⅱ・Ⅲ類）、青磁－（龍泉碗Ⅰ・Ⅱ類）、(同安碗Ⅰ・Ⅱ類)、輸入陶器－鉢、土師器、カメ、その他－合子、碗		SX76を切る。SK39から切られている。
34		d区	SX08	4466	溝状の長楕円形 2.43×0.78×0.16	土師器皿、坏、碗、須恵質捏鉢、青磁(龍泉)、その他	70 (164～175)	
34		b区	SX09	1738	隅丸長方形 2.99×0.94×0.15	陶器－壺、土師器－坏・皿、瓦器碗、土師質－土鍋・擂鉢・粘土塊、弥生土器カメ	70 (176～181)	
35	14-(6)	a区	SX10	SX08	不整な方形 2.04×1.57×0.15	白磁－碗（Ⅵ類）・皿（Ⅱ類）、瓦器碗、土師器小片、土師質土鍋		SD06を切る。
35	14-(7)	c区	SX11	3725	歪な隅丸方形 1.66×1.62×0.12	土師器－碗・坏・皿、白磁－碗		

Tab. 4　第Ⅰ区検出竪穴遺構（SX01～83）所見表（その1）

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物FigNo	備考
35		b区	SX12	3789	歪な隅丸方形 (m) 1.59×1.54×0.20	土師器小片		SR3723を切る。
35		a区	SX13	SK16	2.00×1.53×0.22	白磁－碗（Ⅳ類）龍泉青磁－碗（Ⅰ・2）、同安青磁－皿（Ⅱ類）、土師器－坏、瓦器－碗、土師質土鍋、須恵質－捏鉢		SP04から切られる。
35		b区	SX14	3085	歪な方形 2.14×1.92×0.10	白磁－口禿皿、陶器－輸入、龍泉青磁－小碗、土師器－坏、瓦器－碗、土師質土器－土鍋、須恵器小片	70 (182)	
35	14-(8)	a区	SX15	SK27	歪な隅丸方形 1.91×1.85×0.23	陶器－ツボ、土師器片、瓦器片、弥生土器		
35	15-(1)	b区	SX16	3087	方形 1.99×1.73×0.13	土師器－坏・碗、弥生土器、瓦器碗、須恵器片、粘土塊		
35	15-(2)	d区	SX17	SK4370	西側隅が飛び出た方形 2.07×1.89×0.14	粘土塊、須恵器カメ、土師器－坏・皿、土師質－土鍋、弥生土器		
36	15-(3)	b区	SX18	3099	東側隅が飛び出た方形 1.93×1.87×0.22	木炭、粘土塊、土師器－坏・不明片・カメ		
36		a区	SX19	SK29	隅丸方形 2.18×1.70×0.43	土師質土器、土師器－皿、青磁龍泉(碗Ⅰ・Ⅱ類)陶器片		SP2644に切られる。
36	15-(5)	d区	SX20	3724	歪な隅丸方形 2.18×2.15×0.25	土師質土鍋、白磁－碗小片、土師器－皿		
36		b区	SX21	2075	歪な長方形 2.96×2.19×0.15	土師質－土鍋・擂鉢、土師器－坏、瓦器－碗、青磁龍泉－碗（Ⅱ－1類）、陶器（輸）－カメ		
37	15-(6)	a区	SX22	SK28	長方形 2.99×2.63×0.32	須恵質－捏鉢、弥生土器、土師質－土鍋・捏鉢・擂鉢、土師器－皿、瓦器－皿、青磁龍泉－碗（Ⅱ類）、陶器－輸入壺	70 (183～186)	
37	15-(7)	a区	SX23	SK31	端正な方形 2.70×2.15×0.24	土師質－鉢、須恵質－捏鉢、土師器－皿、弥生土器、青磁龍泉－碗(Ⅱ－1類)、白磁－口禿碗、平底皿(Ⅶ類)、口禿皿	70 (187. 188)	
37		d区	SX24	4379	端正な隅丸長方形 2.81×2.39×0.12	土師質土鍋、須恵質カメ、瓦器－碗、弥生土器、土師器－坏・皿、釘、白磁－碗（Ⅳ－1類）粘土塊	72 (192)	
37		d区	SX25	4381	北側が張り出す方形 2.59×2.13×0.16	瓦器－碗、須恵器捏鉢、陶器小片、土師質土鍋、弥生土器、土師器－碗・坏・皿	72 (193～195)	
38	15-(8)	d区	SX26	SK 4360	不整な隅丸長方形 1.89×1.32×0.14	陶器小片、瓦器碗、弥生土器、土師質カメ、土師器－坏、皿	72 (196)	
38		a区	SX27	SK12	隅丸長方形 2.20×1.28×0.23	陶器－壺、瓦器碗、土師質土鍋、弥生土器		
38		a区	SX28	SK14	隅丸長方形 2.61×1.23×0.13	瓦器－碗、土師器－坏、白磁－碗（Ⅵ類）		
38		a区	SX29	SK15	端正な隅丸方形 2.04×1.83×0.50	土師質土鍋、須恵質土器片、土師器－不明小片、坏か皿、青磁同安－碗（Ⅰ類）弥生土器、白磁－碗（Ⅳ－1類）瓦器片		
38		a区	SX30	SX39	端正な隅丸長方形 2.99×0.94×0.15	土師質－土鍋、須恵質土器片、土師器－不明小片、坏・皿、同安青磁－碗(Ⅰ類)弥生土器、白磁－碗(Ⅳ-Ⅰ類)瓦器片		
38	16-(1)	b区	SX31	3727	端正な隅丸長方形 2.33×1.39×0.11			
38	16-(2)	b区	SX32	2991	長方形 2.52×1.34×0.19	白磁碗（Ⅳ類）、瓦器碗、土師質土鍋、土師器－坏・皿、須恵器捏鉢		
38		a区	SX33	SK20	歪な長方形 2.68×1.63×0.13	土師質土鍋、瓦器碗、土師器坏、白磁碗（Ⅵ類）、青磁龍泉皿（Ⅰ類）		
38	16-(3)	a区	SX34	SK23	歪な隅丸長方形 2.98×1.35×0.10	土師器坏、土師質土鍋、陶器片、青磁龍泉碗（Ⅱ類）、弥生土器	71 (189、190、191)	
39		a区	SX35	5001	円形 1.46×1.46×0.20			
39		a区	SX36	SX07	不整な円形 1.52×1.23×0.33			
39		a区	SX37	SX14	不整な円形 1.18×1.15×0.15	土師質土鍋、須恵器捏鉢		
39		a区	SX38	SK04	不整な楕円形 1.49×1.01×0.13	土師器坏、天目片、白磁碗小片		
39		a区	SX39	SX05	不整な楕円形 0.95×0.80×0.19	土師器－坏・皿、瓦器、土師質－土鍋、擂鉢、須恵質－捏鉢、輸入陶器、壺、カメ、擂鉢、瓦質－擂鉢、白磁－碗（Ⅵ－1類）、平底皿（Ⅱ－1類）、青磁同安－碗（Ⅱ類）	72 (205)	

Tab. 4　第Ⅰ区検出竪穴遺構（SX01～83）所見表（その2）

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構 No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物FigNo	備考
39		a区	SX40	SK09	楕円形 (m) 1.05×0.85×0.14			
39		a区	SX41	SX13	歪な円形 1.56×1.51×1.10	瓦器碗、土師器－坏、陶器片、土師質土鍋、白磁－皿（Ⅳ・Ⅵ類）、青磁龍泉－碗小片		
39		a区	SX42	SK06	歪な楕円形 1.28×1.19×0.31	弥生土器、瓦器－碗、土師器－坏・皿、白磁－碗（Ⅳ－1・Ⅵ－1類）、青磁龍泉－碗（Ⅰ－1類）		
39		a区	SX43	SK32	不整な楕円形 1.30×1.00×0.12			
39		d区	SX44	4458	不整な楕円形 1.13×0.88×0.26	褐釉陶器小碗、土師器小片	72 (206)	
39		a区	SX45	SX29	不整な楕円形 1.59×1.47×0.15	弥生土器、陶器、土師器皿、瓦器碗、土師質土鍋		
39	16-(4)	d区	SX46	4468	歪な楕円形 1.69×1.25×0.26	土師器－坏・皿		
40		b区	SX47	3532	卵形 1.42×1.13×0.11			
40		d区	SX48	4467	楕円形 1.18×0.95×0.14	弥生土器片3、土師器小片2		
40		d区	SX49	4670	不整な円形 1.10×1.00×0.22			
40	16-(5)	d区	SX50	4425	不整な円形 1.08×1.02×0.22			
40		b区	SX51	3787	大型の不整な楕円形 2.05×1.57×0.13	土師質土鍋、土師器皿		
40		a区	SX52	SX21	不整な楕円形 2.23×1.26×0.57	土師質土鍋、土師器皿、青磁龍泉碗（Ⅱ類）、陶器片、白磁碗、瓦質土師片		
40		b区	SX53	2292	不整な長楕円形 2.11×1.30×1.30	粘土塊、弥生壺、土師器－碗・坏、青磁同安碗小片、須恵器片		
40		d区	SX54	4469	不整な隅丸長方形 1.92×1.29×0.19	弥生土器、土師器皿、瓦器碗		
40		d区	SX55	4465	不定形 2.33×1.09×0.10	弥生土器、土師器－坏又は皿、瓦器碗		
40		a区	SX56	SX12	不整な楕円形 2.07×1.42×0.09	土師器－碗・皿		
		d区	SX57		不整な長方形	遺物なし		(図示していない)
41	16-(2) 24-(1)	b区	SX58	2989	不整な隅丸方形 3.00×2.45×0.12		72 (207)	
41	16-(2)(6) 24-(1)	b区	SX59	2992	不整な円形 1.62×1.55×0.12	土師質－土鍋、須恵質－捏鉢・カメ、土師器－坏・皿、陶器－輸入壺、白磁－碗（Ⅳ－1．Ⅵ－1類）、瓦器－碗・皿	72 (208)	
42	16－(7) 17－(1)	b区	SX60	3519	円形 2.59×2.56×0.12	土師質－土鍋・捏鉢、須恵質－捏鉢、瓦器－碗、石鍋、木炭、土製品、土師器－坏・皿、弥生土器－カメ・高坏、青磁龍泉－碗（Ⅰ－1類）、青磁同安－碗（Ⅱ類）	72 (209・210)	
42	16-(7) 17-(1)	b区	SX61	3502	端正な長方形 2.68×1.56×0.45	白磁－碗（Ⅲ類）、輸入陶器－鉢、青磁同安－碗（Ⅱ類）、天目小片、弥生土器、滑石製小片、木炭、土師器－碗・坏・皿、瓦器－碗、土師質－土鍋・擂鉢、須恵質－捏鉢		
42	16-(7) 17-(1)	b区	SX62	3521	隅丸長方形 2.68×1.56×0.45	白磁－碗（Ⅲ・Ⅸ類）・ハゲ皿、青磁龍泉－碗（Ⅱ類）、陶器－輸入カメ、木炭片、土師器－碗・坏・皿・高台付皿、瓦器－碗、弥生土器－高坏の脚、土師質－土鍋・捏鉢、須恵質－捏鉢	72 (211、212)	
42	16-(7) 17-(1)	b区	SX63	3349	不整な円形 2.21×1.98×0.22			
42	16-(7) 17-(1)	b区	SX64	3350	不整な円形 2.83×2.67×0.30	土師質－土鍋・捏鉢、土師器－碗・坏・皿・弥生土器・陶器片、青磁同安－碗小片・不明小片、瓦器小片、粘土塊、白磁（Ⅳ－1・Ⅵ・Ⅸ類）・碗・皿不明小片、青磁龍泉－不明片	72 (213～218)	
43		a区	SX65	SX38	不整な楕円形 2.27×2.06×0.18	土師器－碗・坏・皿、瓦質土器－捏鉢、青磁同安－碗（Ⅱ類）・不明片、弥生土器、瓦器碗、青磁龍泉－碗（Ⅰ類）、青白磁、白磁（Ⅳ・Ⅵ類）－碗・高台付皿（Ⅱ類）、陶器｛四耳壺 短頸壺	72 (219、223)	
43		b区	SX66	1691	不定形 2.22×1.82×0.09	弥生土器、土師質土鍋、土師器－坏・皿		
43	17-(2)	b区	SX67	SK3190	不定形 2.04×1.87×0.18	土師質土鍋、土師器－坏・皿、弥生土器、瓦器－碗、陶器片、白磁小片	72 (224～225)	

Tab. 4　第Ⅰ区検出竪穴遺構（SX01～83）所見表（その3）

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	形状・寸法(長×幅×深さ)	出土遺物	出土遺物FigNo	備考
43	17-(3)	b区	SX68	3786	不整な隅丸方形 (m) 2.72×2.70×0.32	土師器－皿		
44		a区	SX69	S×30	長大な楕円形 3.67×2.15×0.23	土師質－土鍋、須恵質－捏鉢その他、青磁龍泉－碗、不明小片、輸入陶器－捏鉢、青磁同安－碗（Ⅱ類）、瓦器小片、白磁－碗（Ⅵ類）、口禿皿、土師器小片	73 (226～229)	
44		a区	SX70	SK22	不定形 3.84×2.02×0.38	粘土塊、土師質－土鍋・不明片、須恵質－捏鉢、瓦器－碗、須恵器－坏蓋、瓦質－捏鉢、輸入陶器、土師器－碗・坏・皿・内黒土器、白磁－碗（Ⅵ・Ⅸ類）・平底皿・口禿皿・不明皿、青磁碗（龍泉Ⅰ・Ⅱ類）	73 (230～233)	
44	17-(4)	a区	SX71	SX22	不定形 4.64×2.54×0.29	弥生土器、土師質土鍋、土師器不明小片、白磁不明小片、青磁皿（Ⅰ類）		
44	17-(5) (6)	a区	SX72	SK17	不整な長方形 2.56×1.64×0.37	土師器不明小片、土師質－土鍋、青磁同安－碗（無文）・皿（Ⅱ類）、瓦器－碗、青磁龍泉－碗（Ⅰ・Ⅱ類）、平底皿（Ⅰ－1類）、輸入陶器、白磁－碗（Ⅳ・Ⅵ・Ⅸ類）、高台付皿（Ⅱ類）、口禿皿	73 (234～238)	
45	17-(7) (8)	a区	SX73	SX32	長大な不定形 4.99×3.67×0.18	土師質土鍋、須恵質－捏鉢・すり鉢、土師器－皿、瓦器－碗、弥生土器、青磁龍泉－碗（Ⅱ類）、不明小片、鉄器、青磁同安－不明小片、輸入陶器 捏鉢・壺、白磁－碗（Ⅵ類）、平底皿（Ⅱ類）、合子、口禿皿	74 (239～242)	
45	17-(8)	a区	SX74	SX34	長大な不定形 4.48×4.20×0.45	瓦器－碗、土師器不明小片、青磁同安－碗（無文）・皿（無文）、青磁龍泉－碗（Ⅰ・Ⅱ類）、貨銭 輸入陶器 捏鉢・壺、白磁－高台付皿（Ⅱ類）、平底皿（Ⅳ・Ⅵ類）、口禿皿	75 (243～254) 90	
46	18-(1) (2)	a区	SX75	SX31	端正な長方形 6.01×3.44×0.32	土師質－土鍋・土釜、須恵質－捏鉢・壺、土師器片、瓦器土器片、青磁龍泉－碗（Ⅰ・Ⅱ類）・平底皿（Ⅰ－1類）、青磁同安－碗（無文）、弥生土器、白磁－高台付皿（Ⅰ類）、平底皿（Ⅵ類）、口禿皿	76 (255、263)	
46		a区	SX76	SX10	端正な長方形 6.48×2.72×0.24	瓦器碗、須恵質－捏鉢、土師質土鍋、白磁皿（Ⅳ・Ⅵ類）、土師器－碗・皿	77 (264)	
46	18-(3)	b区	SX77	1679	不整な長方形 5.78×3.83×0.31	土師質－土鍋・捏鉢、須恵器－坏蓋、土師器－坏・碗・皿、須恵質－捏鉢ツボ、青磁同安－碗・皿、瓦器－碗、皿、青磁龍泉－碗（Ⅰ・Ⅱ類）、輸入陶器、弥生土器、白磁－碗（Ⅱ－1・Ⅵ－1・Ⅵ・Ⅸ類）、高付台皿（Ⅲ類）、平底皿（Ⅵ類）、口禿皿	77 (265、267)	
47	19-(1)	b区	SX78	1728	長方形 4.88×2.41×0.15	土師質土鍋、青磁同安－碗（Ⅱ類）、瓦器－碗、龍泉青磁－碗（Ⅴ類）、土師器－碗・坏・皿、白磁－碗（Ⅳ類）・平底皿（Ⅵ類）、輸入陶器		
48	19-(2)	b区	SX79	3529	不定形 3.58×2.14×0.88	土師質土鍋、土師器－坏・皿・カメ		
48	19-(2)	b区	SX80	3551	不整な長楕円形 3.14×1.53×0.06	木炭、弥生土器、土師器－坏・カメ、土師質－捏鉢・土鍋		
48	19-(2)	b区	SX81	3722	コの字形 2.02×0.73×0.16	粘土塊、土師質－土鍋、土師器－坏又は皿か	77 (266)	
48	19-(3)	a区	SX82	SX33	不定形 3.83×3.62×0.20	瓦器－碗、土師器－坏又は皿か、青磁龍泉－碗（Ⅰ類）、白磁－碗（Ⅵ類）、口禿皿、木炭片	72 (197～204)	
49	19-(4)	d区	SX83	4358	隅丸方形 2.39×2.25×0.20	瓦器－皿・碗、青磁龍泉－碗、土師器－皿・坏・碗	78 (268～314)	

Tab. 4 第Ⅰ区検出竪穴遺構（SX01～83）所見表（その4）

4) **溝状遺構（ＳＤ）**（Fig.50～53、PL.３～10、付図１・２）

概要　第Ⅰ区で検出された溝状遺構は大小あわせて69条である。これらは掘立柱建物、竪穴遺構などの分布とほぼ同じ範囲に重複してみられるものと、水田に伴うと考えられるもの、その性格が不明なものとに大きく分かれる。

第Ⅰｂ区の屋敷地、あるいは屋敷地およびそのほかの地点に分布している遺構と関連すると思われる溝状遺構は

ＳＤ　(01)・07・08・(17)・(18)・(19)・23・24・(25)・26・29・32・34・35・(62)・64・68

水田に伴うと思われる溝状遺構は

ＳＤ　02～06・13・14・27・28・30・31・37・39・41～45・46～57・(58)・59・60・63・

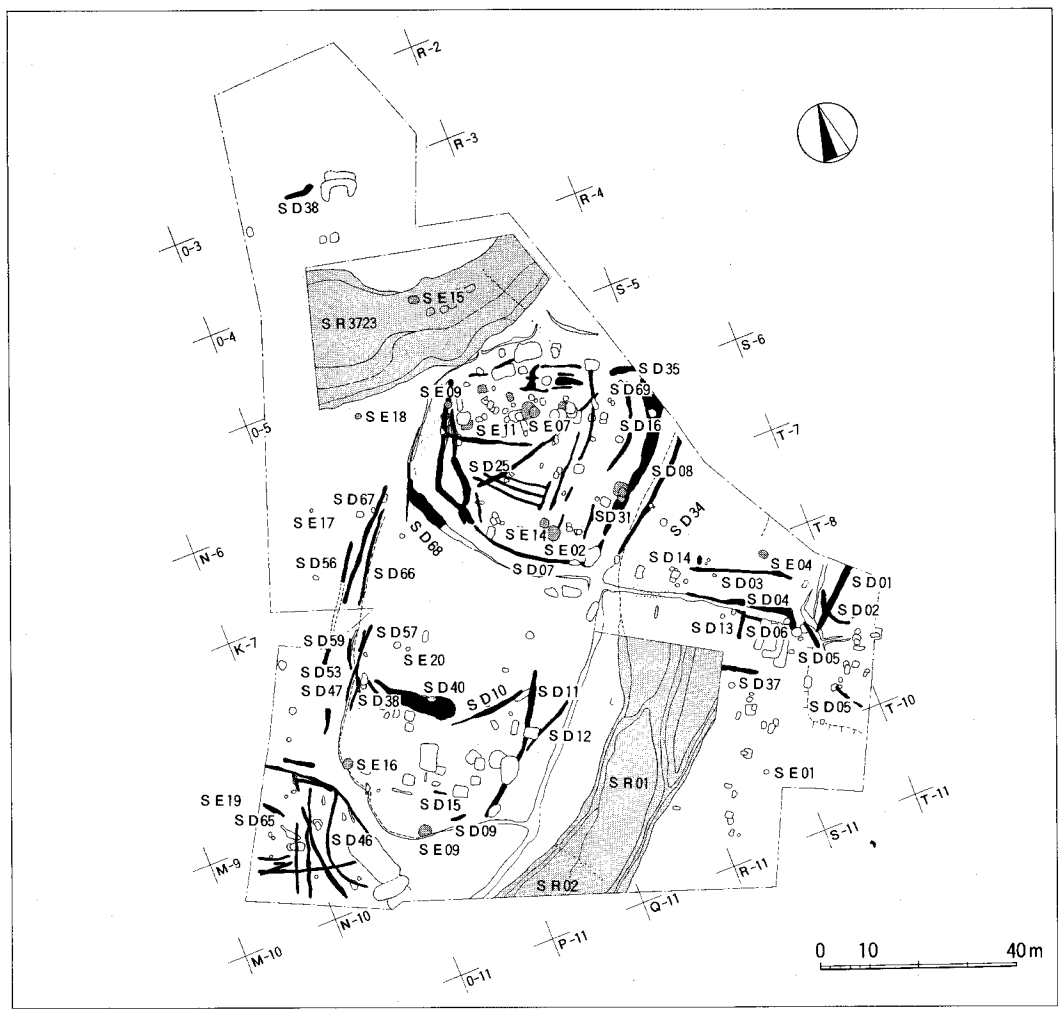


Fig. 50　井戸および溝状遺構配置図（1/1500）

65～67・70

不明の溝状遺構は

ＳＤ　09～12・15・16・20～22・33・36・38・40・61

これらの溝状遺構の時期は、出土遺物がなく、また他の遺構との切り合いがないために時期の比定が困難なもの（ＳＤ15・19・20・49・54・56・62・66・67)、あるいは近世から近代にかけてのものと思われるもの（ＳＤ22・25・27・28・30・31・36・42・43・45・48・52・60・63・69）を除いては、概ね13世紀～14世紀にかかる時期以降のものであるが、詳細な時期の比定については別項で述べる。

ＳＤ01（付図１、PL.20）第Ⅰａ区の北東端部に位置する。溝の主軸方向はＮ－50°－Ｅをほぼ直線的にとり、ＳＢ49とは並行している。幅は1.5ｍ前後、深さは検出面から0.5～0.75ｍを測り、溝の基底面は西南の方向へわずかに低くなっている。溝は基盤層である砂礫層を掘りこみ、断面形はＶ字形となっている。埋土は砂礫が多く混じる暗灰色土で、よくしまっている。

ＳＤ02（付図１、PL.20）第Ⅰａ区の北東部に位置する。平面形は弓なりに曲がっており、その両端で自然に消滅している。断面形は浅皿状で10cmほどしか残っていない。埋土は褐色の粘質土。ＳＤ01から切られている。

ＳＤ03（付図１、PL.３）第Ⅰａ区の北東部に位置する。ＳＤ04・06とほぼ並行して東西に通じている。主軸はＮ－67°－Ｗの方位を取りほぼ直線的に21.7ｍの長さで確認された。残りはよくなく、深さは７cmほどしか残っていない。幅は0.6～1.0ｍを測る。断面形は浅皿状で、やや青みがかった灰褐色土を埋土とする。

ＳＤ04・06（付図１、PL.３）第Ⅰａ区の北東部から北側中央部に位置する。ＳＤ03とほぼ並行して東西に通じている。主軸はＳＤ03同様Ｎ－67°－Ｗの方位を取りほぼ直線的に22.8ｍの長さで確認された。東端ではいずれも南へ折れ曲がっている。幅はＳＤ04が0.6～1.5ｍを測る。断面形は浅皿状で、やや青みがかった灰褐色土を埋土とする。ＳＤ04と06の間は、残りはかなり悪いが、高さが0.03～0.05ｍ、幅が0.7～0.9ｍほどの道状となっており、西側へさらに続き、後述する杭列ＳＡ02のちょうど直上に重なっている。水田に伴う畦畔もしくは道路と考えられ、その構築法、復元条里との位置関係などが注意される遺構である。なおこの道状の遺構は現代の水田の畦畔にもほぼ重複する位置にある。

ＳＤ05（付図１、PL.３）第Ⅰａ区の北東部に位置する。ほぼ南北に約8.5ｍの長さで確認された。幅は0.8ｍ前後で、深さは0,30ｍほどの断面がＵ字形の溝である。東端からは断続的に東南方向へ続いている。この溝の位置は現代の水田の畦畔におおよそ沿っている。

ＳＤ07（付図１、Fig.51、PL.６）第Ⅰａ区の北西部に位置する。緩やかな弧を描いて東西に通じている。幅は0.6～1.1ｍを測り、断面はＵ字形である。深さは0.5～0.7ｍである。基底部は西にむかって低くなっており、東端では徐々に高くなり、自然に消滅している。埋土はよ

くしまった暗褐色粘質土で、木炭片、焼土、小礫を含んでいる。東側でＳＸ52・71によって切られ、西側においてＳＫ34を切っている。第Ⅰｂ区で検出されたＳＤ08・64とは、位置関係、埋土の状況、出土遺物の同時期性などから、本来同一の溝であった可能性がある。

ＳＤ08（Fig.53、PL.23）第Ⅰｂ区の東側に位置している。北東から南へむかって徐々にせばまり、また基底部も浅くなりながら、ちょうど第Ⅰａと第Ⅰｂ区の境で自然に消滅している。ＳＤ07の東端とは約1.5ｍ離れて終わっている。もっとも幅の広いところで2.10ｍで、深さは0.4～ 1.1ｍを測る。調査区壁にかかる東北端で最も深くなる。断面形は浅皿～Ｕ字形で、溝底面には小礫が多く見られた。埋土は暗褐色～灰褐色粘質土で、砂礫を多く含む。東北端は調査区外へさらに続くものと思われる。溝が掘立柱建物群（Ｃ群）の回りを巡るものと考え、北側部分の掘下げを行ったが、ＳＤ08の延長部分と思われる溝などは確認できなかった。掘立柱建物群の検出面と比べ、北側部分は後世の削平のために約0.50ｍほど低いが、ＳＤ08の全体的な深さから見て、消滅したとは考えられず、本来Ｃ群の乗る微高地の北側には溝は巡っていなかったのではないかと思われた。ＳＤ07とは形状および位置関係、出土遺物から見た同時期性から同一の溝と判断される。ＳＤ08の東側に帯状に礫が続いている（ＳＸ3137）が、土層観察の結果では、ＳＤ08がＳＸ3137を切っていることが確認できた（Ｆig.52)。またさらに東に並行しているＳＤ34とは、相互の位置関係、出土遺物から見た同時期性から同一時期に併存していたものと判断された。

ＳＤ09・10・11・12・15・20（付図１、PL.４～６）第Ⅰａ区西部～南西部に位置する。ＳＤ09・10・・12・20は，東西に続く溝である。残りはいずれも悪く、幅は0.4～0.6ｍほど、深さは0.20～0.40ｍである。断面形は浅皿もしくはＵ字形。ＳＤ11は比較的残りがよく長さ16.6ｍにわたって認められた。、幅0.6ｍほどで、わずかに 弧を描いて東北から南西へ続いている。これらの埋土は暗褐色～灰褐色粘質土で、出土遺物は隣接する竪穴遺構の出土傾向とよく似ており土師器皿・坏のほか捏鉢などの日常雑器が多い。ＳＤ10・11はＳＤ20を切り、ＳＤ11はＳＸ69・73から切られている。

これらの溝は、砂礫層を基盤とする微高地の縁辺部を巡る溝と思われ、西側に位置し、同様な配置の在り方を見せるＳＤ39・47などと関連性があると思われる。

ＳＤ13（付図１、PL.３）第Ⅰａ区東側に位置する。ＳＤ06とほぼ直交し、これを切っている。幅は0.4～0.6ｍほどで、深さは0.05ｍほどしか残っていない。埋土は青灰褐色粘質土。

ＳＤ14（付図１、PL.３）第Ⅰａ区東側に位置する。ＳＤ03とほぼ直交している。残りは悪く、わずか0.05ｍほどしか残っていない。埋土は灰褐色粘質土である。ＳＤ03の東側に直交する溝の痕跡があるが、この溝とＳＤ14間は約15ｍで、これらの２つの溝の範囲とその周辺に水田があった可能性がある。

ＳＤ16・21（付図２、PL.８）第Ⅰｂ区東側に並行して位置する。これらはいずれもＳＤ

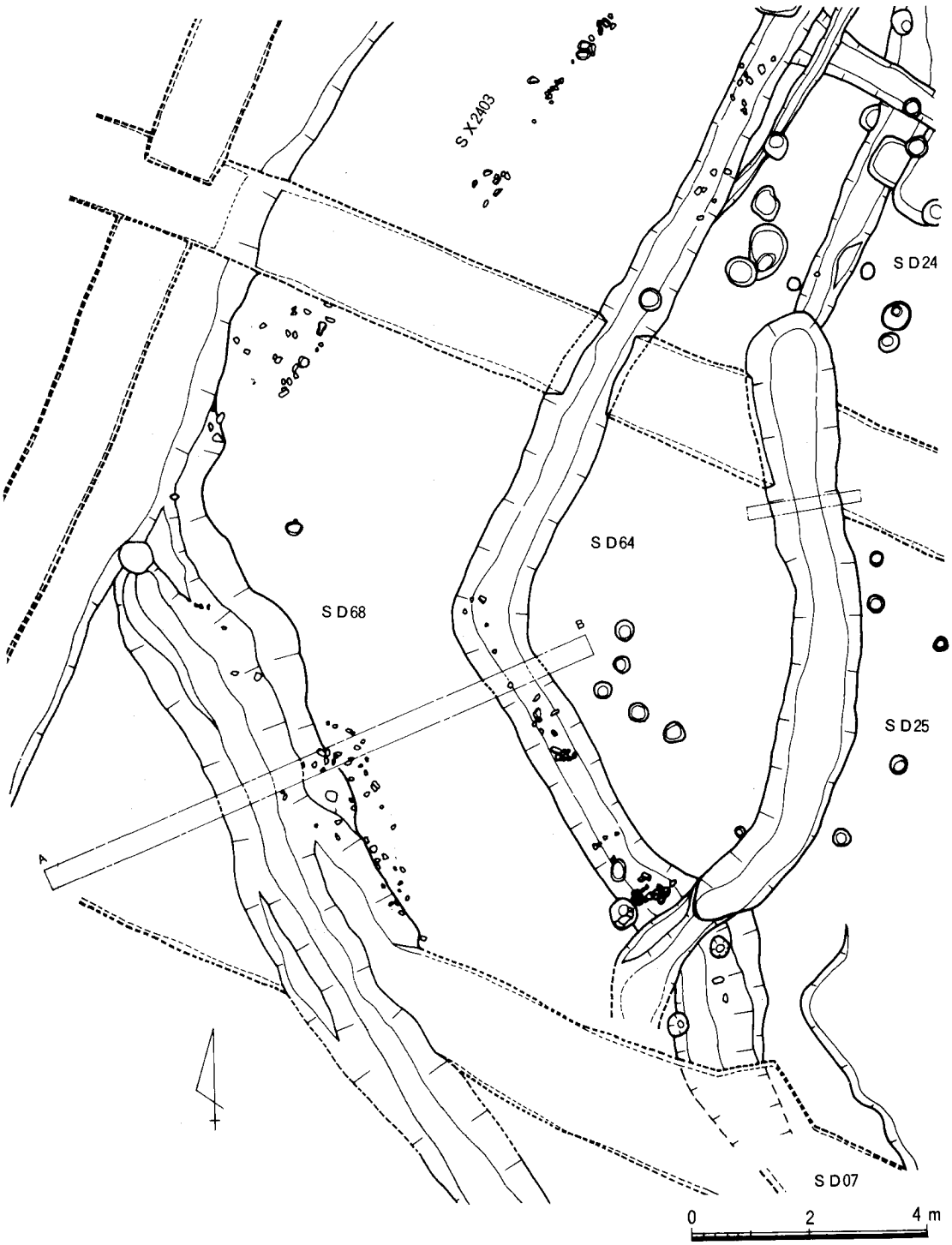


Fig. 51　ＳＤ07南西部平面図（1/160）

08・34の西側で、ほぼ並行しながら弧を描いて南北に続いている。幅は最大で３～４ｍを測り、断面形は浅皿状で、深さは0.10～0.15ｍほどで浅い。明確な壁の立ち上がりはなく、浅い窪みが水田などの耕作の際に形成され帯状に続いていると考えられ、溝としての機能を持っていたかどうか疑問である。埋土は暗灰褐色粘質土で多量の遺物が（二次的な混入の状況で）出土している。またＣ群中の東側に分布する柱穴はそのほとんどがこの溝の下部で検出されており、ＳＤ16・21は柱穴ならびに復元された掘立柱建物より時期が新しいといえる。

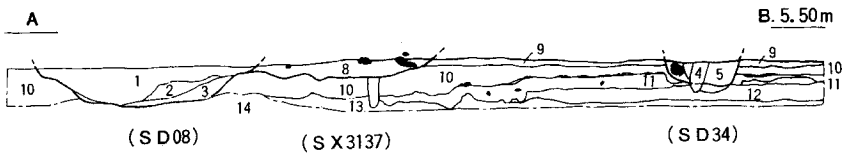
ＳＤ17・18・19・29・32・61・62（付図２、PL.８・９）第Ⅰｂ区中央から東にかけて位置する。ＳＤ29以外はＮ－68°－Ｗの方向をとり、後述するＳＤ26とほぼ並行する。いずれも残りが悪く、深さ0.05～0.10ｍほどしか残っていない。幅は0.25～0.40ｍ前後で規模は小さい。断面形は浅皿状もしくはＵ字形である。木炭片、焼土等を含んだ灰褐色粘質土を埋土としている。他の遺構の分布の在り方も含めて考えると、ＳＤ17の北側周辺が掘立柱建物群（Ｃ群）の北限であろうと思われる。なおこれらの溝の機能は、建物との関連で見ると、雨だれ溝のような、建物に付随する簡易な排水用の溝かとも思われるが、明確でない。

ＳＤ22・25・27・28・30・31・36・60・63・69（付図２、PL.７～９）第Ⅰｂ区の南側に位置する。いずれも比較的残りはよく、その形状からみて水田あるいは畑に伴う溝または畝と考えられるものである。幅は0.30～0.40ｍほどで、断面形はＵ字形を成している。埋土は暗灰色粘質土を主として褐色シルト、砂礫などが混入している。遺物は中世の時期の土師器小片が主であるが、近世の染め付片も若干出土しており、時期的にはかなり新しいものと思われる。遺物の出土状況、埋土の堆積状況から見て掘立柱建物群よりは時期的に新しいと考えられる。ＳＤ30と69、31と60は同じ溝の可能性がある。ＳＤ28は38を、ＳＤ69はＳＤ33とＳＸ06・21を切っている。

ＳＤ23（付図２、PL.７～９）第Ⅰｂ区の南側に位置する。やや不明確であるが、ＳＤ64から切られている。ＳＤ26との関係は明らかでないが、埋土がよく似た褐色～暗褐色土であることから同一の溝の可能性がある。幅は0.40～0.50ｍほどで深さは0.15～0.20ｍを測る。断面形はＵ字形である。土師器坏・瓦器の小片が若干出土している。

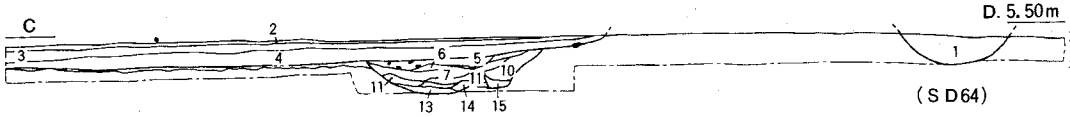
ＳＤ24（付図２、PL.７～９）第Ⅰｂ区の南側に位置する。南側でＳＤ25から切られている。ＳＤ26との関係は不明確であるが、切られている可能性がある。幅は0.30～0.40ｍで深さ0.20ｍほどである。埋土は暗褐色粘質土で輪郭はやや不明瞭である。南側ではＳＤ25から切られ消滅しており不明確であるが、やや東側に弧を描きながらＳＤ07の西端部に続いていたものと思われる。北端部では自然消滅している。土師器皿・坏、土師質土鍋、白磁皿（口禿）、青磁片などが出土している。

ＳＤ26（付図２、PL.７～９）第Ⅰｂ区の南側に位置する。ＳＤ24を切っている可能性がある。Ｎ－61°50′－Ｗに方向を取り、掘立柱建物Ｃ群中をほぼ直線的に延びている。東端部では



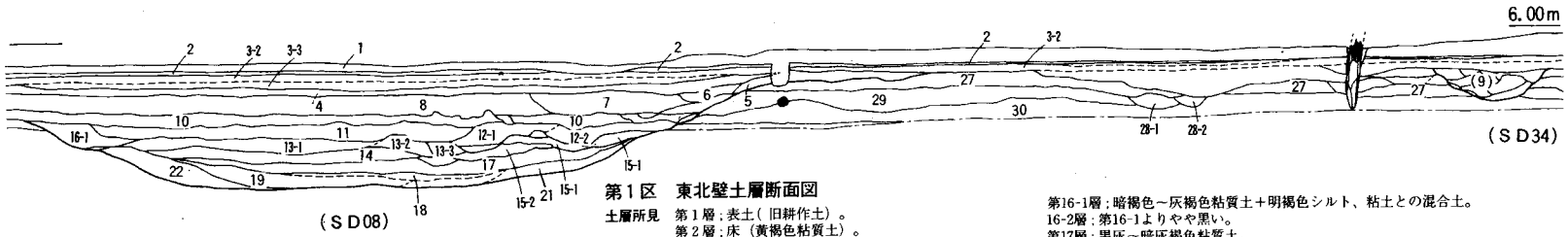
第１区　ＳＤ08　南側土層断面図 (Fig. 53のＡ－Ｂライン)

土層所見
第１層；暗褐色粘質土。
第２層；褐色粘質土。
第３層；褐色粘土。
第４層；暗褐色粘質土。
第５層；灰褐色粘質土。
第６層；明褐色シルト。
第７層；褐色シルト。
第８層；灰褐色土。
第９層；明褐色粘質土。
第10層；明褐色シルト層。
第11層；明茶褐色粘質土。
第12層；灰色砂層。
第13層；灰色粘土層。
第14層；砂礫層。



第１区　第３トレンチ西壁土層断面図 (Fig. 51のＡ－Ｂライン)

土層所見
第１層；暗褐色シルト。
第２層；灰褐色シルト層～粘質土。
第３層；灰褐色シルト層。
第４層；灰褐色粘質土。
第５層；暗灰～暗灰褐色粘質土。
第６層；茶褐色粘質土。
第７層；暗褐色粘質土。
第８層；暗黄褐色粘質土。
第９層；褐色粘質土。
第10層；明褐色粘質土。
第11層；暗褐～灰褐色粘質土。
第12層；暗褐色粘質土。
第13層；暗褐色シルト層。
第14層；暗褐色粘質土。
第15層；褐色粘質土。



第１区　東北壁土層断面図

土層所見
第１層；表土（旧耕作土）。
第２層；床（黄褐色粘質土）。
第3-1層；黄灰褐色粘質土。
3-2層；黄灰褐色粘質土＋若干の砂礫。
3-3層；黄灰褐色粘質土＋若干の砂礫。
第４層；暗黄灰色土。
第５層；灰褐色粘質土。
第６層；暗褐色粘質土。
第７層；褐色粘質土。砂礫。
第８層；暗褐色～暗灰褐色粘質土。
第９層；灰褐色～暗灰色粘質土。
第10層；明褐色シルト＋暗褐色粘質土の混合土。
第11層；暗褐色粘質土＋明褐色粘質土が若干混入。
第12-1層；暗灰褐色粘土。
12-2層；暗褐色粘質土。
第13-1層；暗灰褐色粘質土。
13-2層；暗灰褐～黒灰色粘土。
第14層；暗褐色粘質土。
第15-1層；灰色砂ブロック。
15-2層；砂礫ブロック。
第16-1層；暗褐色～灰褐色粘質土＋明褐色シルト、粘土との混合土。
16-2層；第16-1よりやや黒い。
第17層；黒灰～暗灰褐色粘質土。
第18層；明褐色粘質土＋暗灰褐色粘質土。
第19層；暗色～黒灰褐色粘質土。
第20層；暗青灰～暗灰色粘質土。
第21層；暗灰～暗灰色粘質土。
第22層；砂礫＋褐色粘質土。
第23層；黄灰＋明褐色粘質土。
第24層；褐色シルト。
第25層；灰褐色粘質土。
第26層；明褐色シルト。
第26'層；明褐色シルト～砂礫を含む。
第27層；褐色シルト～粘質土。
第28-1層；褐色～明褐色。
第28-2層；砂＋粘土。
第29層；明褐色～褐色粘質土～シルト。
第30層；明褐色～褐色シルト。
第31層；青灰色砂。
第32層；柱穴（黒灰、黒褐色粘質土）
第33層；砂礫層。

Fig. 52　溝状遺構土層断面図 (1/60)

基底部が徐々に高くなり自然に消滅している。西側ではＳＤ23と直交しており同一の溝の可能性がある。幅は0.30～0.45ｍほどで、断面形はＵ字形となっている。出土遺物は日常雑器が多い。

ＳＤ33（付図２、PL.７～９）第Ⅰｂ区の南側に位置する。掘立柱建物Ｃ群の分布の中央を東西に延びている。幅は0.4～0.5ｍほどで、断面形はＵ字形である。埋土は暗灰褐色粘質土で砂を多く含んでいる。その方向性は他と異なっており、また切り合い関係では、ＳＤ28・69、ＳＸ06・53・60・61・62などから切られていることから、屋敷地と考えられる遺構群の集中しているこの地点ではこの溝が最も古い遺構群のうちの一つと考えられる。

ＳＤ34（付図２、Fig.52・53、PL.７～９・23）第Ⅰｂ区の東南側に位置する。ＳＤ08や後述する礫群ＳＸ3137の検出面よりも約５cmほど低いレベルで検出された。この検出状況はＳＤ68と64の検出レベルの高低差とよく似た状況である。溝の幅は0.6～1.0ｍほどで、深さは0.50ｍ前後を測る。溝は東北側でわずかに弧を描いて北東から南西へ（Ｎ－40°－Ｅ）続いている。東北端は調査区外へ延びているため明らかでないがＳＤ08と並行して、さらに北東～北側へ続くものと思われる。西南端は少しづつせばまり、また基底部も徐々に高くなりながら自然に消滅している。並行しているＳＤ08との間隔は3.2～4.2ｍである。このＳＤ34の位置は旧河川ＳＲ01の西岸のラインからやや内側に入る線上にあり、地形の変換する線に沿っていることは注意される。出土遺物は土師器、須恵質捏鉢などの日常雑器が出土している。なおＳＤ34から東側からは遺構は検出されていない。ＳＤ34を境に遺構分布の在り方に歴然とした違いがあることは、屋敷地とその周辺の景観の復元にあたって注意される点である。

ＳＤ37（付図１、PL.３）第Ⅰａ区の東側に位置する。ＳＤ03・04・06と並行して東西に続いている。残りは非常に悪く５cmほどの深さで残っているのみである。断面形は浅皿状で、埋土は褐色がかった暗灰色粘質土。

ＳＤ38（付図１、PL.10）第Ⅰｂ区の北側、ＳＸ79の西側に位置する。ほぼ東西に続いており、幅は約1.2ｍ、深さは５cmほどを測る。東西に本来は長く続いていた溝の最深部の一部がかろうじて残ったものと思われる。土師器皿、青磁、須恵質甕などが出土している。

ＳＤ39・41・47・53・56・57・59・66・67（付図２、PL.10）第Ⅰｂ区の西南端から第Ⅰｄ区の北西側および南西側にかけては、第Ⅰｂ区の掘立柱建物群が集中してみられる微高地よりも0.30ｍほど低くなっている。この高低差は後世の水田造営に際して形成されたものと思われるが、ＳＤ39などの溝はこの段差のある地形変換線に沿ってそれぞれ北東から南西へ交差または並行しながら続いている。幅は0.30～0.40ｍで、深さは0.15～0.20ｍ前後である。いずれも残りはあまり良くない。基底面はおおむね南から北へ徐々に低くなって続いている。埋土はいずれも暗褐色から暗灰褐色粘質土で細砂、粗砂、木炭片などを含む。断面形は浅皿もしくはＵ字形で床面には大小の凹凸がある。溝の先後関係はＳＤ57をＳＤ39・47が切っている。またＳ

D59が66を切っている。なおＳＤ53とＳＤ56は同じ溝と思われる。以上の溝の機能としては、畦畔に伴う溝として水田灌漑用に利用されていたものと思われる。時期については、ＳＤ66・67は遺物が出土していないため不明であるが、ＳＤ39・47は染め付などが出土し近世・近代以降のもので、他は掘立柱建物群（Ｃ群）の時期と並行もしくはそれ以降のものと考えられる。

ＳＤ40（付図１、PL.10）第Ⅰｄ区の北側に位置する。幅は2.5～2.9ｍで、暗褐色粘質土（砂を多く含む）を埋土とする。断面は浅皿状で、壁の立ち上がりは不明瞭である。ＳＤ40を境にして南側が約15～20cmほど高くなった地形変換点の下段部分にあたっている。浅い溜り状のものであった可能性もある。ＳＸ44を切っている。

ＳＤ42・43・44・45・46・48・49・50・51・52・54・55・65（付図２、PL.10）第Ⅰｄ区の南側にまとまって13条の溝がみられた。幅は0.3～0.5ｍで、深さは0.10～0.20ｍである。残りが悪く明確でないが断面形は浅皿状もしくはＵ字形である。埋土はＳＤ42・43・44・45・48・52・54・55がやや青みがかった灰褐色粘質土で、その他は暗褐色～灰褐色粘質土である。いずれも細砂、粗砂、小礫を含んでいる。溝間の切り合い関係からみた先後関係はＳＤ46→43、45→44、46→48、51→49→48、50→48、55→48となる。これらはいずれも水田に伴う溝と考えられる。ＳＤ42・43・45・48・52は現在の水田の形状によく合っており、埋土や土層の在り方からみて時期的には新しいものと思われる。ＳＤ46・49・50・ 51は出土遺物から みて中世まで遡るものと思われる溝であり、北側に位置するＳＤ56・67と関連すると思われる。

ＳＤ58（付図１）第Ⅰｄ区の北側、ＳＤ40の西側に隣接している。ＳＸ83下部で検出された。幅は約0.40～0.50ｍで、深さは約0.20ｍである。時期的には古代末まで遡る溝であり、ＳＤ20・33等と関連するものと思われる。

ＳＤ64（Fig.51・52、PL.８・20）第Ⅰｂ区の南西側に位置する。掘立柱建物群（Ｃ群）の西側を画するかのように、直線的に方向をＮ－30°－Ｅにとって約25ｍの長さで南へ続いた後、明確な角をなし、約125°の角度をもって南東へ向きを変えてＳＤ07の西端部へと続いている。溝の幅は0.8～1.2ｍで、深さは0.3～0.5ｍを測る。ＳＤ07とは同一の溝と思われる。

ＳＤ68（Fig.51・52、PL.８・20）第Ⅰｂ区の南西側に位置する。最大幅は2.2ｍで、深さは0.5～0.65ｍを測る。基底部は東南から北西へ徐々に低くなっている。埋土は暗褐色～暗灰褐色を主として細かくは11層に分かれる。溝上部は、おそらくは14世紀後半以降の水田面によって削平されている。断面形はＵ字形に近い（Fig.52）。北西～北側および東側は後世の削平によって消滅している。なおＳＤ64とは３～4.4ｍ間隔をもって並行しながら屋敷地を画していたものと思われる。

礫群（ＳＸ2403・3137）第Ⅰｂ区の東南側および西南側に、帯び状に続く自然礫群が検出された。ＳＸ2403は２条、ＳＸ3137は１条である。

ＳＸ2403は屋敷地の西側に位置し、ＳＤ64とほぼ並行して北東から南西へ延びている。２条の礫群はそれぞれの幅が約0.7～0.8ｍを測り、約1.3～1.5ｍの間隔をもってＳＫ29・30周辺から南西へ続き西側礫群が７ｍ、東側礫群が17ｍの長さで遺存している。

ＳＸ3137は屋敷地の東側に位置し、西側をＳＤ08によって切られながら、ほぼ並行して北東から南西へと続く。幅は1.0～1.6ｍで、長さは27ｍを測る。断面観察では、おそらく溝の基底面に堆積した礫群であろうと思われ（Fig.52）、浅皿状のくぼみが確認されている。ＳＸ2403も同様に溝の基底部と思われる。

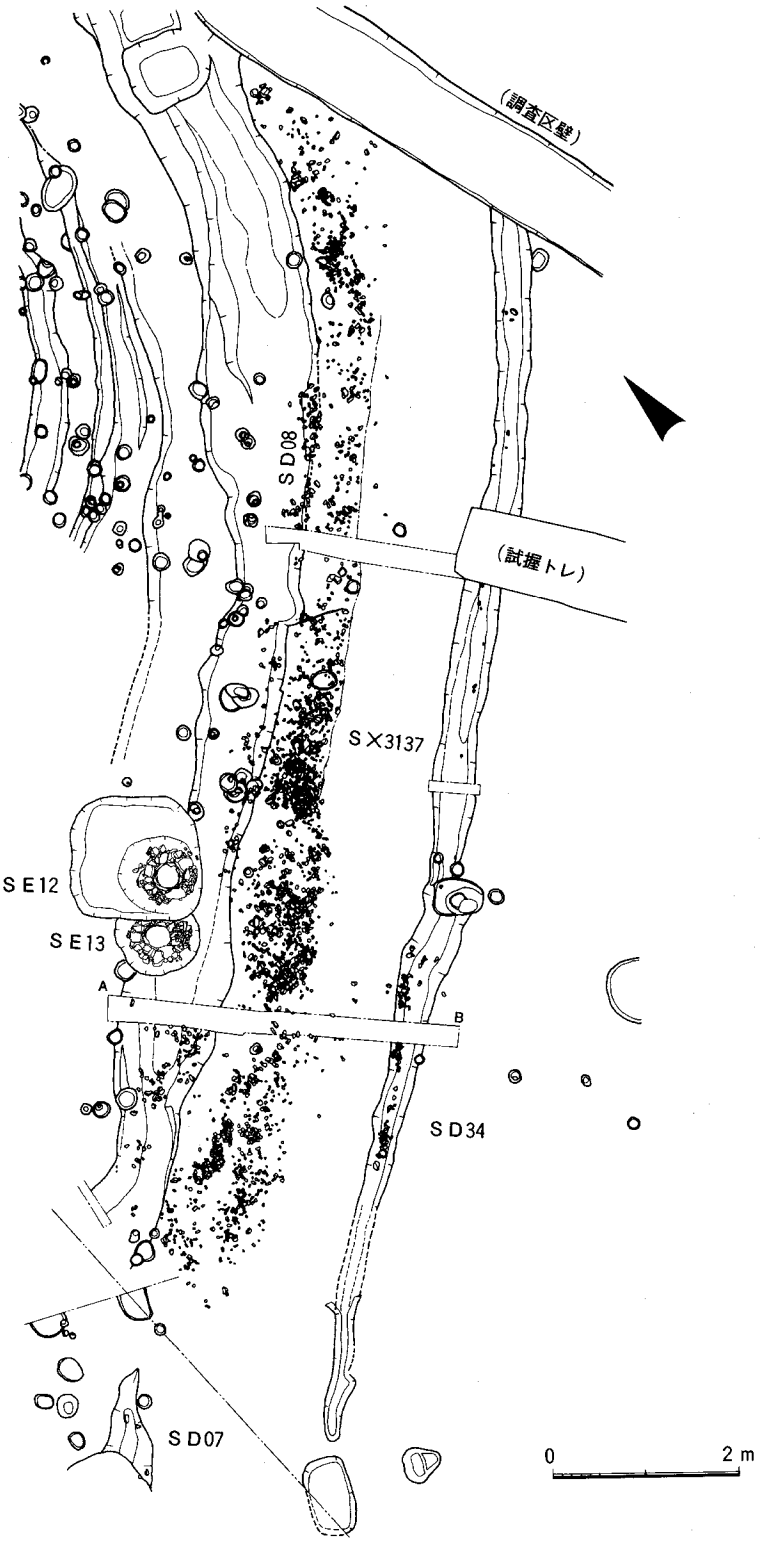


Fig. 53　ＳＤ08・ＳＸ3137平面図（1/160）

5) 土壙・土壙墓・木棺墓（ＳＫ）(Fig.54～58、PL.24～36、Tab.５、付図１・２)

概要　竪穴遺構の項で述べたように、第Ⅰ区では124基の竪穴遺構が検出されたなかで、遺物の出土状況、竪穴の形態等からみて、何らかの呪い、祭祀、墓址と判断された遺構は39基である。ただし、竪穴遺構と類別した中で墓址あるいは祭祀に関連して用いられた竪穴もあるものと思われるが、それらについては可能性を指摘したにとどめた。

39基の内訳は、主に副葬や、礫の埋置状況、鉄釘（棺釘）の有無などの出土遺物からみてあきらかに木棺墓と思われるものが11基、これ以外のもので竪穴の形態的な特徴と類似性からみて土壙墓ないし木棺墓あるいは祭祀に用いられた土壙の可能性があると考えられるもの28基である。これらの分布はやや散漫であるが、掘立柱建物群（Ａ～Ｃ群)、竪穴遺構（１～３群)

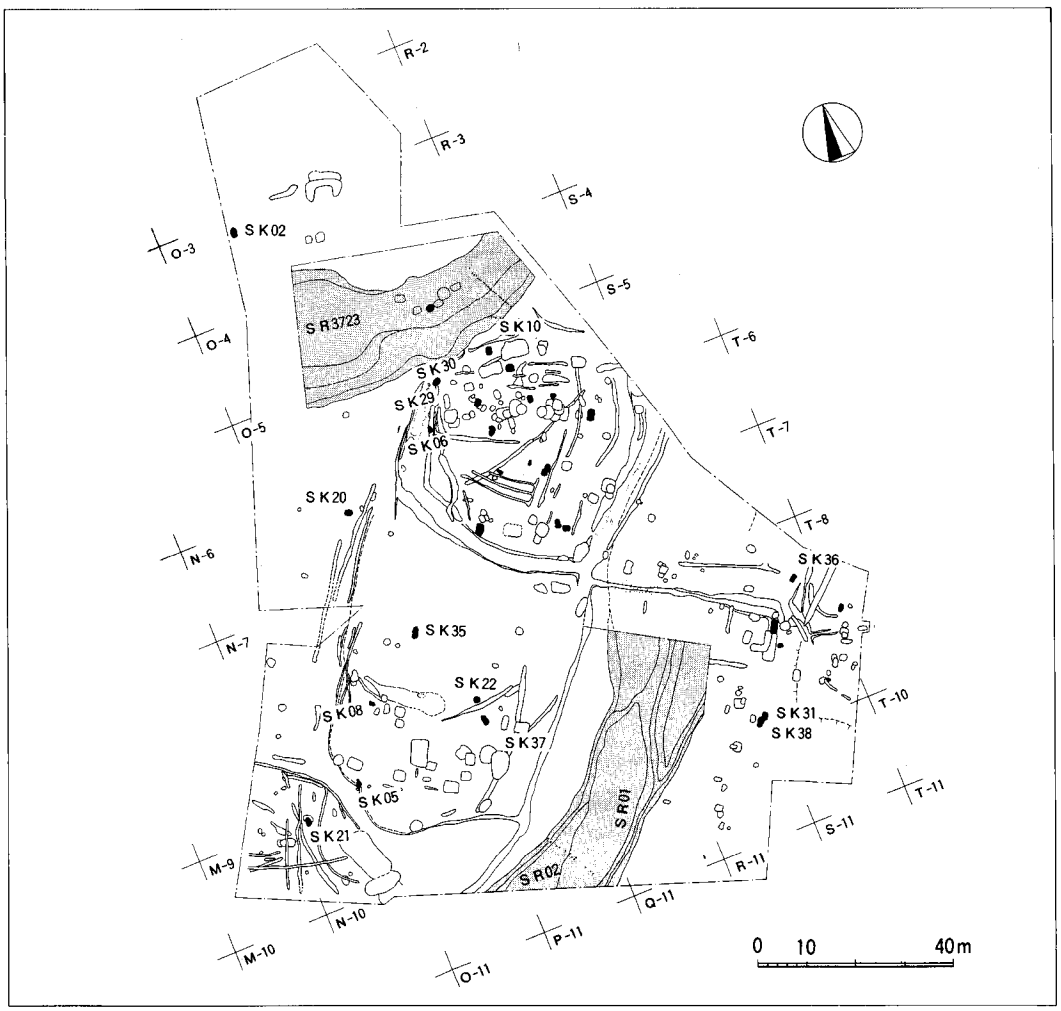


Fig. 54　土壙・土壙墓・木棺墓配置図（1/1500）

などの分布とほぼ重複している。分布状況からみて一定の範囲を墓域としていたとは思えるが、墓域内の分布密度は低く、また墓壙形態や墓壙主軸の方向などに一定のまとまりがないなど、群としての明確なまとまりが見られないことは注意される。また分布の在り方で特徴的なのは土壙間で切り合う例が少ない点である。切り合い関係から先後関係が明らかなものは、ＳＫ31→38、16→15、18→17、29→30、26→25、の５例である。他の遺構との関係でみると、現象的には掘立柱建物群の分布域の周辺部に位置する反面では、他の遺構と相互に密接に関連した位置関係にあることが特徴としてあげられる。

以上の土壙はおおむね12世紀から14世紀半ばの約２世紀間にわたる時期のものである。なお個別の土壙の所見についてはＴab. 5を参照されたい。

ＳＫ01（Fig.55、PL. 4）第Ⅰａ区の東側に位置する。やや歪な隅丸の長方形（２類）である。床面は平坦で、掘方も明確である。埋土はしまりのない暗褐色粘質土である。掘方中央の床面に、土師器皿・坏がそれぞれ一点埋置されている。

ＳＫ02（Fig.55、PL.24）第Ⅰｂ区の北西側に他の遺構とはかなり離れて位置する。残りは悪い。やや不整な楕円形で、焼土、木炭片を多く含む灰褐色土を埋土とする。掘方は明確な輪郭を描き床面は平坦である。土師器皿（５点）が南側壁近くに床面からやや浮いた状態で自然礫と共に見られた。礫は焼けていない。

ＳＫ03（Fig.55、PL.24）第Ⅰｂ区の南側に位置する。ＳＤ33を切っている。遺存状況はよい。平面形はやや不整な楕円形で断面形は船底状である。形態的にはＳＫ04・05とよく似る。南壁側にまとまって木炭片、焼土、粘土塊、土師器が、また北側で瓦器皿が床面から浮いて一点出土している。

ＳＫ04（Fig.55、PL.25）第Ⅰｂ区の南側に位置する。掘立柱建物群（Ｃ群）中央に位置している。遺存状況は比較的良好である。平面形は楕円形で断面は船底状を呈す。南側壁近くの床面直上に小刀（刀子か）を埋置している。埋土は暗褐色土でやや砂が目立つ。

ＳＫ05（Fig.55、PL.25）第Ⅰｄ区の中央からやや南側に位置する。現在の水田面が一段低くなる地点に位置しており、西南部が削平されている他は、遺存状況は良好である。掘方の中央からやや東側に寄った箇所に龍泉窯系青磁碗と土師器皿を埋置している。

ＳＫ06（Fig.55、PL.26）第Ⅰｂ区の南側に位置する。ＳＤ64を切っている。平面形はやや歪な長方形である。残りは良好である。埋土は暗褐色粘質土。床面の南西側が若干くぼんでいる。中央から南側にかけて土師器皿、青磁、白磁、鉄滓、鉄釘の破片が出土している。木棺墓と思われる。

ＳＫ07（Fig.55、PL.27）第Ⅰａ区の東側、ＳＸ76の東側に隣接している。掘方は端正な隅丸長方形。床面は平坦で壁の立ち上がりは明確である。埋土は暗褐色粘質土で、木炭片が若干混入している。

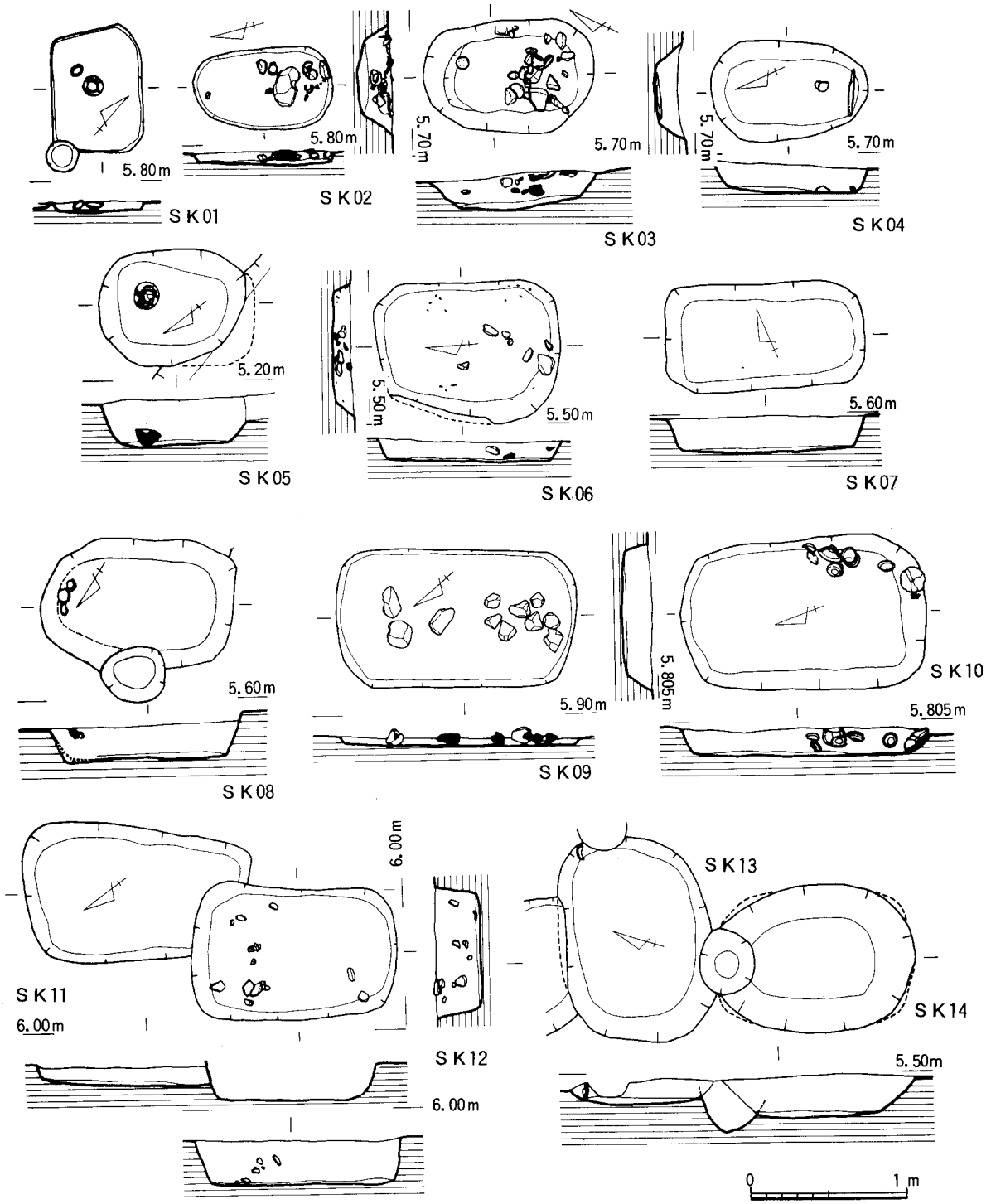


Fig. 55 土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK01～14)(1/40) その1

ＳＫ08（Fig.55、PL.27）第Ⅰｄ区中央からやや北寄りの地点で検出された。ＳＸ83Ｋの西側に隣接している。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面形は船底状である。残りは良好。埋土は暗褐色粘質土で、小礫、細砂を含む。北東壁際に床面からかなり浮いた状態で土師器皿が出土している。

ＳＫ09（Fig.55、PL.27）第Ⅰａ区の東北側に位置する。02の東側に隣接している。削平を受けており残りは悪く、掘方は５cmほどしか残っていない。平面形は端正な隅丸長方形で、壁の立ち上がりは明確である。棺の下敷きのためと思われる偏平な自然礫が床面直上に配されている。棺釘は検出されていない。

ＳＫ10（Fig.55、PL.28）第Ⅰｂ区の中央からやや南側に位置する。屋敷地内では最北端に位置しており、また他の遺構と比べ、最も高いレベルで検出された。平面形は端正な隅丸方形で、床面は平面である。壁の立ち上がりはやや不明確。埋土は暗灰～灰褐色粘質土で、木炭片を若干含む。南東角から南側壁にかけて、白磁碗１、皿５、青銅製六花鏡１、ガラス製小玉９個が出土している。床面からはいずれも３～６cmほど浮いている。これは墓壙内がある程度埋没した後の堆積であり、棺外に、埋置されていたものが、斜めになって落ちこんだものと思われる。

ＳＫ11（Fig.55、PL.29）第Ⅰｂ区南側、屋敷地のほぼ中央に位置している。ＳＫ12に南西角を切られている。残りはやや悪い。掘方の平面形はやや歪な長方形である。床面は平坦であるが、中央がわずかに凹んでいる。埋土は暗褐色～暗灰褐色粘質土。土師皿等の副葬品はみられないが、棺釘（？）が出土していることより木棺の可能性がある。

ＳＫ12（Fig.55、PL.29）ＳＫ11を切っている。残りは良好。掘形の平面形、規模はともにＳＫ11とよく似ており端正な隅丸長方形である。掘方の断面形は逆台形で、壁の立ち上がりは、ほぼ直角に近い。埋土は暗褐色粘質土で砂礫を含む。遺物は、土師皿片などが二次堆積しているのみで、副葬品はみられない。

ＳＫ13（Fig.55、PL.29）第Ⅰｂ区南側に位置する。屋敷地内ではＳＫ14、34とともに最も南側に位置する。ＳＫ14との切り合いは不明。だがＳＫ14から切られている可能性がある。残りは良好。平面形はやや不整な隅丸長方形で、断面形は船底状。埋土は砂、小礫をわずかに含む暗褐色粘質土である。出土遺物は土師皿、坏、瓦片が出土しているが、二次的な堆積によるものである。

ＳＫ14（Fig.41・55、PL.30）ＳＫ13の南側に接している。他の土壙等の例からみれば、新しい時期のものの方が、残りが良好で、床面も深いという傾向があり、したがって、ＳＫ13を切っている可能性がある。平面形は楕円形で、断面形は船底状。埋土は暗灰～暗褐色粘質土。遺物には、土師器皿・坏片・白磁碗片があり、いずれも流れ込みである。

ＳＫ15（Fig.56、PL.30）第Ⅰｂ区南側、屋敷地の南東部に位置する。ＳＫ16の北壁を切っ

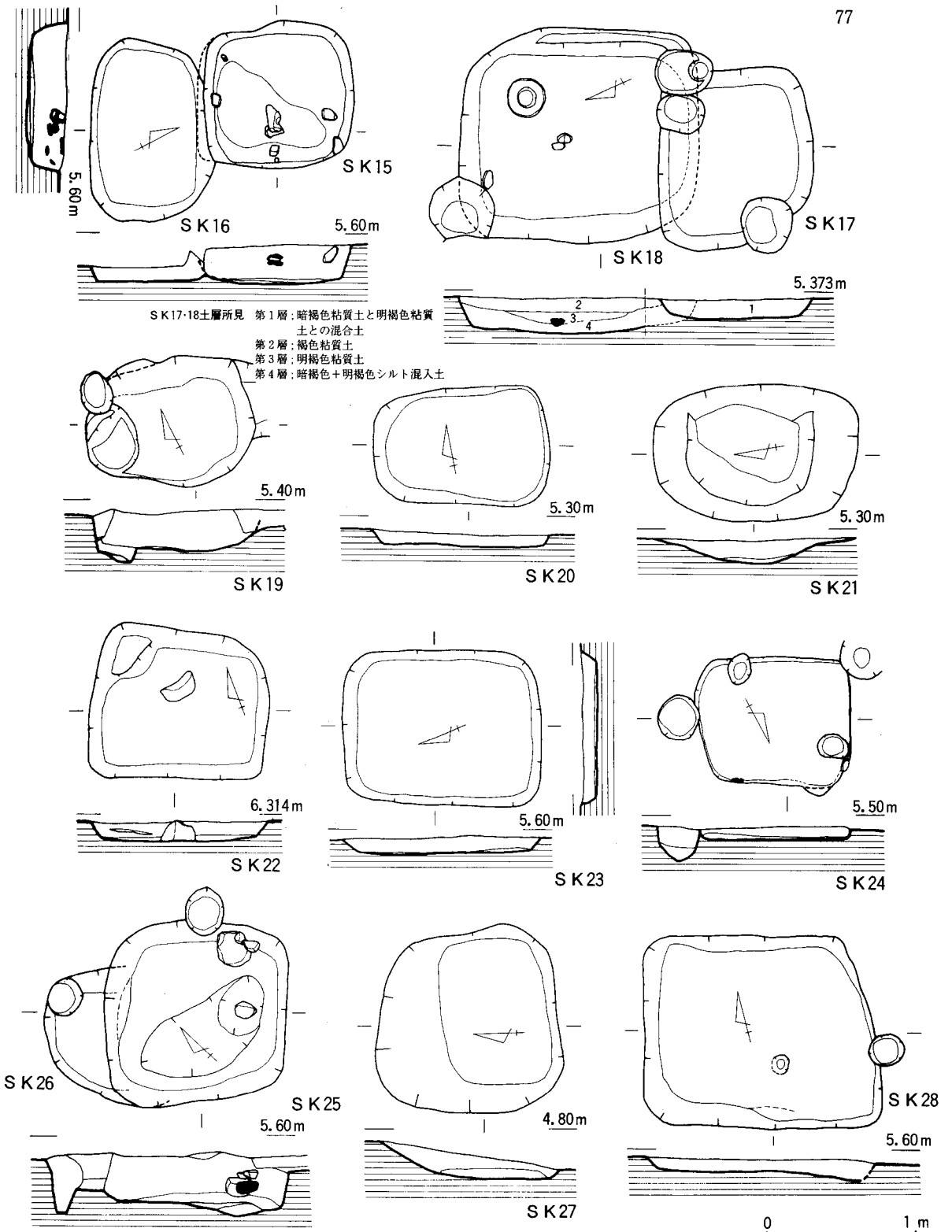


Fig. 56　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK15～28)(1/40) その2

ている。残りは良好で、平面形は端正な正方形である。掘方の壁は、ほぼ垂直に立ち上がり、床面は平坦。床面までの深さは約22cmである。埋土は、木炭片を若干含む暗灰褐色粘質土である。

ＳＫ16（Fig.56、PL.30）ＳＫ15の南に接している。平面形は、やや不整な隅丸の長方形である。床面は平坦だが、南東部がわずかにくぼんでいる。掘方は明確で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。埋土は砂・小礫を含む、暗灰～灰褐色粘質土で、比較的よくしまっている。遺物は、土師皿片等の小片が出土しており、いずれも流れ込みである。

ＳＫ17（Fig.56、PL.31）第Ⅰｂ区の東側、屋敷地の東側に位置している。ＳＫ18の南壁を切っている。平面形は、やや歪な隅丸方形である。床面は平坦であるが、壁の立ち上がりは、やや不明確である。埋土は、砂礫・木炭片を含む暗灰褐色粘質土と、明褐色土との混合土。遺物は、土師器片が若干出土している。

ＳＫ18（Fig.56、PL.31）ＳＫ17の北側に接している。ＳＫ17から南壁を切られているが、残りは良好である。平面形は隅丸方形で、断面は逆台形。床面は、中央部がややくぼむが、ほぼ平坦である。埋土は三層に分かれている。床面直上には、明褐色シルトと、暗褐色粘質土の混合土が堆積している。遺物は、土師器片が少量出土している。

ＳＫ19（Fig.56、PL.31）第Ⅰｂ区南側、屋敷地の中央から北側に位置する。平面形は、やや不整な隅丸方形である。西壁を２つの柱穴が切っている。断面形は船底状で、壁の立ち上がりは不明瞭である。埋土は砂を含む暗灰～灰褐色粘質土。土師器小片・瓦器片などが出土している。

ＳＫ20（Fig.56）第Ⅰｂ区の西南端部に位置する。平面形は、東壁が長めの隅丸長方形である。床面は平坦。壁の立ち上がりはなだらかで不明確である。埋土は、砂を多く含む暗灰～暗灰褐色粘質土。

ＳＫ21（Fig.56、PL.32）第Ⅰｂ区南西部に位置する。ＳＸ48の南壁を切っている。平面形は、不整な隅丸長方形で、断面形は浅皿状である。壁と床面との境は不明瞭で、壁の立ち上がりはなだらかである。埋土は灰黄褐色シルトで、目の粗い砂を含んでいる。遺物は土師器片が、少量出土している。

ＳＫ22（Fig.56）第Ⅰａ区西側、ＳＤ10の北側に隣接している。平面形は、西壁が長めの歪な方形で、断面形は浅皿状である。埋土は、暗灰褐色～褐色粘質土で、木炭片・焼土などを含んでいる。床面中央からやや北側に、人頭大の自然礫が一点出土している。遺物は、土師器碗・皿・坏片、白磁・青磁片などが出土している。

ＳＫ23（Fig.56）第Ⅰｂ区の東南側、屋敷地の中央からやや西側に位置する。竪穴遺構（ＳＸ57～59）の南西部に近接している。平面形は、端正な隅丸長方形である。床面は平坦で、壁との境は明確である。埋土は、暗褐色～褐色粘質土。遺存状況は悪く、７cmほどの深さしか

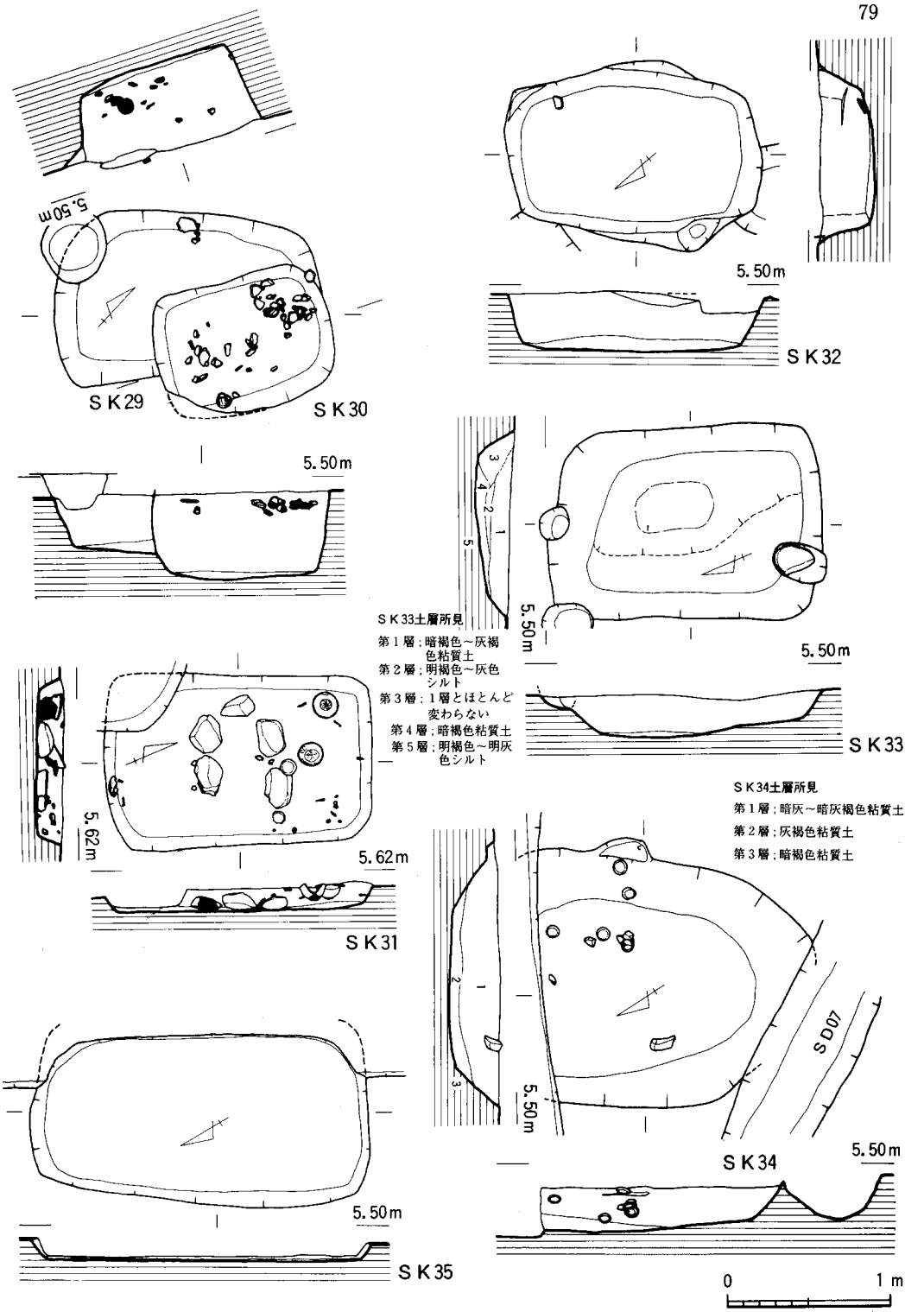


Fig. 57　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（SK29～35)(1/40）その3

残っていない。

ＳＫ24（Fig.56）第Ⅰｂ区東南側、竪穴遺構（ＳＸ60～62）の北側に近接している。平面形は不整な方形。床面まで５～６cmの壁が残っているのみである。埋土は、褐色～暗黄褐色粘質土で、木炭片を少量含む。土師器坏の小片が出土。

ＳＫ25（Fig.56、PL.32）第Ⅰｂ区の東南側、屋敷地東南隅に位置する。ＳＫ15・16の東側に隣接している。ＳＫ26の半分を切っている。壁面は、深さ約35～40cm残っており、残りは良好である。平面形は、北西壁がやや長めの歪な隅丸長方形。床面は、南側に浅いくぼみがある。埋土は、暗灰～暗灰褐色粘質土で、砂・小礫を含む。床面東側隅に、20cm大の角礫がやや床面から浮いて出土している。遺物は、土師器・瓦器片が少量出土している。

ＳＫ26（Fig.56、PL.32）ＳＫ25の西北に重複し、東南半分を切られている。形状は不明確だが、歪な隅丸長方形～楕円形をなすと思われる。埋土は、灰褐色粘質土で、砂を含む。遺物は、土師器片・青磁片が出土している。

ＳＫ27（Fig.56、PL.33）第Ⅰｂ区の中央に位置する。旧河川ＳＲ3723を切り、ＳＸ51により、東壁を切られている。平面形は、掘方上端は隅丸方形だが、床面は長方形である。壁の立ち上がりはなだらかで、床面との境は不明瞭である。埋土は、灰(褐)色～暗灰(褐)色粘質土で、砂礫を少量含む。

ＳＫ28（Fig.56）第Ⅰｂ区中央から東南側に位置する。屋敷地の北側に位置し、ＳＸ77の南に隣接している。遺存状況は悪い。平面形は、南東隅がやや張り出した長方形である。断面形は浅皿状で、壁の立ち上がりは不明確である。

ＳＫ29（Fig.57、PL.33）第Ⅰｂ区中央からやや南寄りに位置する。ＳＤ64の北端部に隣接する。ＳＤ64およびＳＫ30に切られているが、残りは良好。平面形は、西南壁がやや長い隅丸長方形である。壁の深さは、床面まで約48cmである。埋土は、暗灰～暗灰褐色粘質土で、砂礫がやや目立つ。土師器皿・坏・土鍋片が出土している。

ＳＫ30（Fig.57、PL.34）ＳＫ29と重複して検出される。ＳＫ29の北東部を切り、ＳＤ64に切られている。土壙の中では、最も遺存状況が良く、壁の深さは約50cmである。平面形は、端正な隅丸長方形。埋土は、少量の木炭片と多量の砂礫を含む、暗灰(褐)色粘質土。砂礫は、礫群ＳＸ2403からの混入とみられる。床面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。土師器皿・坏片が出土している。棺釘が出土していることより、木棺墓と思われる。

ＳＫ31（Fig.57、PL.34）第Ⅰａ区南東に位置する。ＳＫ38に南西壁を切られる。平面形は端正な長方形で、断面形は逆台形である。埋土は、やや青味を帯びた灰(褐)色粘質土で、少量の木炭を含む。現耕作土の床土直下の包含層(暗褐色粘質土)の下部で検出された。床面直上に、５個の自然礫があり、おそらく木棺の下敷きと思われる。棺釘が11点出土しており、龍泉窯系青磁碗２・土師器皿２・刀子１が副葬されている。これらの出土状況からみて、青磁碗・刀子は

棺内、土師皿は棺外にあったと思われる。

ＳＫ32（Fig.57、PL.35）第Ⅰｂ区東南に位置する。平面形はやや端正な長方形で、断面形は逆台形である。遺存状況は良好。検出面から床面まで35～37cmを測る。埋土はレンズ状に８層に分かれ堆積しているが、ほぼ一時的に埋まったものと思われる。青白磁合子が１点、床面からやや浮いて出土している。棺釘が出土していることより、木棺墓の可能性がある。

ＳＫ33（Fig.57、PL.35）第Ⅰｂ区東南に位置する。屋敷地の中央からやや北西側の、最も遺構の切り合いが多い地点にある。ＳＥ21の検出面の下部で確認された。平面形は、端正な長方形である。埋土は、レンズ状に４層に分かれる。土師器皿・坏片が出土している。

ＳＫ34（Fig.57、PL.36）第Ⅰａ区北西端に位置する。屋敷地の南西端部で、ＳＤ07に南側を切られている。平面形はやや不整形な楕円形で、断面形は、船底状である。埋土は、暗灰褐色粘質土で、木炭片を少量含む。一時的に埋め戻されたと思われる。東壁の上～下端にかけて、壁の傾斜に沿って落ち込んだと思われる状況で、土師器皿が５点出土した。土壙墓の可能性がある。

ＳＫ35（Fig.57）第Ⅰｄ区北東部に位置する。平面形は端正な長方形で、断面形は逆台形である。床面は平坦。埋土は暗褐色粘質土で、焼土塊・木炭片を少量含む。土師器片が少量出土している。

ＳＫ36（Fig.58、PL.36）第Ⅰａ区北東部に位置する。平面形は遺存状況が悪く、不明瞭であるが、不整な隅丸方形である。埋土は暗褐色～暗灰(褐)色粘質土。墓壙の北東壁に、副葬品として、青銅製柄鏡、土師器皿が出土している。また、柄鏡の下部に海綿状組織がわずかに残る頭骨片が検出された。柄鏡鏡背には、布目の痕跡と、木質がわずかに付着しており、木箱に納められていた可能性がある。頭蓋骨の下には、木質様の繊維痕が残るが、これは、鏡背の木質とは異なる。また、頭蓋骨と繊維痕との間には、銅錆がみられ、柄鏡以外の銅製品があった可能性がある。

ＳＫ37（Fig.58）第Ⅰａ区西側、ＳＫ22の東南に位置する。平面形は不整な隅丸長方形。床面西側には、一段のテラスがある。床面からやや浮いた状態で、土師器坏が出土した。

ＳＫ38（Fig.58）第Ⅰａ区東南側に位置する。ＳＫ31を切る。平面形は不整な長楕円形で、床面は平坦である。埋土は暗灰(褐)色粘質土で、木炭片を含む。棺釘が、床面北東部に集中して出土しているが、これは、ＳＫ31からの流れ込みと思われる。

ＳＫ39（Fig.58、PL.36）第Ⅰａ区東北側に位置する。ＳＸ07・76の北東壁を切っている。平面形は端正な隅丸長方形で、断面形は台形である。埋土は６層に細分できるが、それらの土質はほとんど同一のもので、一時的に埋没したものと思われる。土師器皿、坏の小片が出土している。

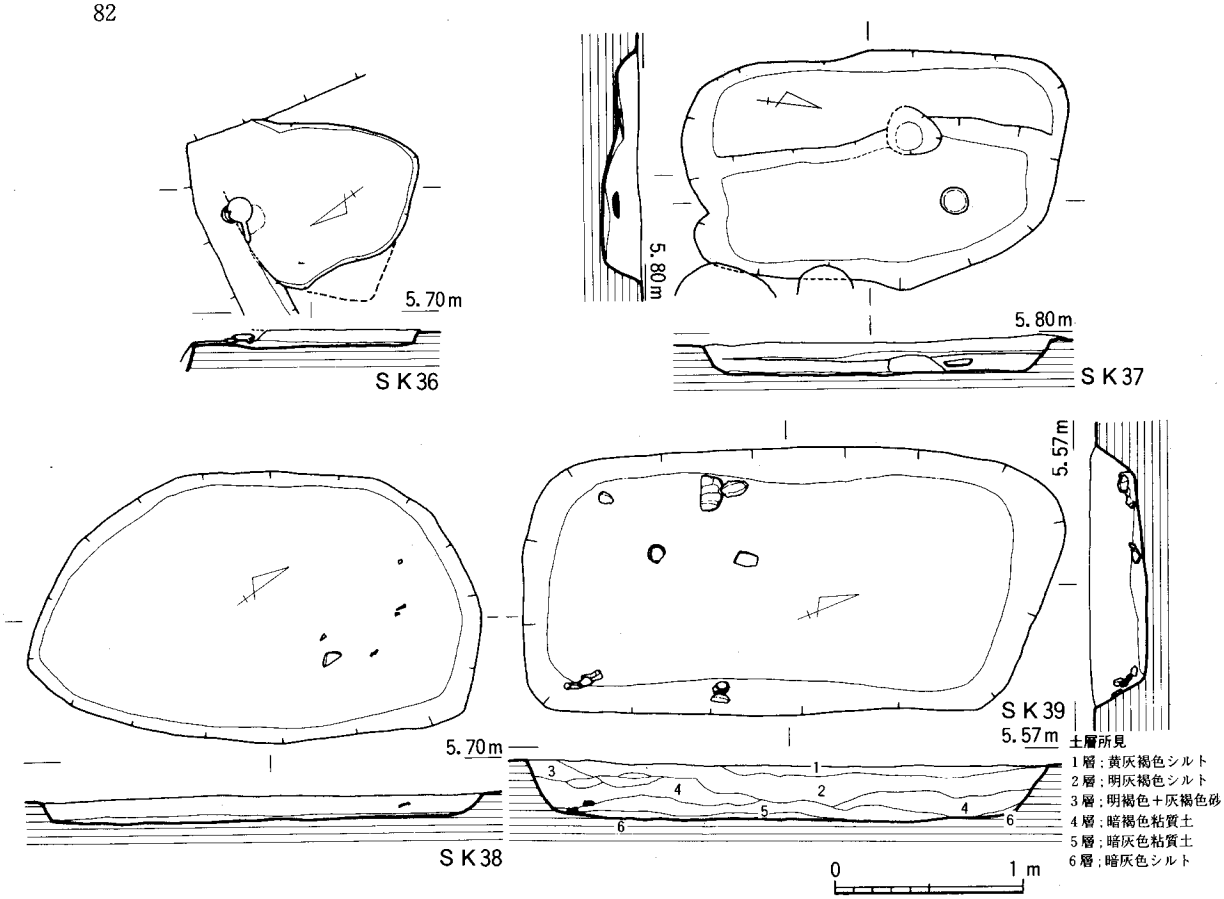


Fig. 58　土壙・土壙墓・木棺墓平面および断面図（ＳＫ36～39)(1/40）その４

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構 No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)(m)	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
55	28-(2)	a区	ＳＫ01	Ｓ×02	歪な隅丸の長方形 0.82×0.58×0.07	白磁（碗小片）、土師質土鍋、土師器（皿）、瓦器（皿）	84 (381、382)	
55	24-(2)	b区	ＳＫ02	3613	不整な楕円形 0.90×0.53×0.90	土師器（皿）	84 (383～387)	
55	24-(3)	b区	ＳＫ03	1741	不整な楕円形 1.10×0.73×0.26	土師器（皿又は坏）、弥生土器（カメ）、陶器（ツボ）、粘土塊	84 (388～396)	
55	24-(4)	b区	ＳＫ04	2414	楕円形 1.02×0.64×0.23	土師器（皿・坏）、瓦器小片、土師質土鍋、弥生、鉄製（刀子？）	85 (418)	
55	24-(5)	d区	ＳＫ05	4449	歪な隅丸長方形 1.00×0.75×0.33	土師器（碗・坏・皿）、染付、弥生土器、不明小片	85 (397)	
55	24-(6)	b区	ＳＫ06	2402	歪な長方形 1.21×0.93×0.17	白磁（碗小片）、青磁龍泉、碗Ⅱ-1類、土師器（坏）、瓦器（碗）、土師質土鍋		木棺墓

Tab. 5　第Ⅰ区検出土壙・土壙墓・木棺墓（ＳＫ01～39）所見表（その１）

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)(m)	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
55	24-(7) (8)	a区	SK07	SK19	隅丸長方形 1.29×0.73×0.24	白磁（碗）、弥生土器、青磁（同安Ⅲ）、土師器（碗・坏）、瓦器小片、土師質土鍋	85 (398)	木棺墓か
55		d区	SK08	4361	歪な隅丸長方形 1.28×0.87×0.27	土師器（坏・Ⅲ）、弥生土器、粘土塊、土師質土器、カメ小片、白磁碗（Ⅸ類）、滑石片	85 (399、400)	
55	25-(1)	a区	SK09	SK21	端正な隅丸長方形 1.56×0.90×0.08	遺物なし		木棺墓か
55	25-(2) (3) (4)	b区	SK10	1677	端正な隅丸長方形 1.60×1.01×0.17	白磁碗Ⅳ類、ⅢⅢ類、ガラス製小玉、青銅製六花鏡、土師器（坏）、瓦器（碗）、弥生土器などの小片	85 (401～417)	木棺墓か
55	26-(1)	b区	SK11	2156	長方形 1.47×0.90×0.13	青磁同安、碗Ⅰ・Ⅱ類、土師器（坏・Ⅲ・カメ）、瓦器（碗）、土師質土鍋、輸入陶器、瓦質土器、火鉢、弥生土器		木棺墓か
55	26-(1)	b区	SK12	2157	端正な隅丸長方形 1.33×0.89×0.33	土師器（Ⅲ・坏）、土鍋片、瓦器（碗）		木棺墓か
55	26-(2)	b区	SK13	2424	1,32×1.00×0.17	瓦器（碗）、土師器（Ⅲ・坏）、土師質土鍋、炭小片	85 (419)	
55	16-(2) 24-(1) 26-(3)	b区	SK14	2422	楕円形 1.30×0.95×0.36	土師器（Ⅲ・坏）、瓦器（碗）、弥生土器、炭片	85 (420)	
56	26-(4)	b区	SK15	2401	正方形 1.06×1.01×0.26	白磁（碗Ⅵ・Ⅸ類）、瓦質土器片、土師器（碗・坏・Ⅲ）、弥生土器片、瓦器（碗・坏）、陶器、土師質土鍋片		
56	26-(4)	b区	SK16	3013	隅丸長方形 1.24×0.72×0.28	土師器（Ⅲ・坏）、土師質土鍋片、木炭片		
56	26-(5)	b区	SK17	3191	隅丸長方形 1.27×1.05×0.13	土師器（坏）、弥生土器片、瓦器碗		
56	26-(5)	b区	SK18	3192	隅丸長方形 1.63×1.44×0.28	土師器（坏）、弥生土器片、瓦器碗	85 (421)	
56	27-(1)	b区	SK19	3531	隅丸長方形 1.15×0.89×0.37	白磁（碗Ⅳ-1・Ⅵ-1類）、Ⅲ、青磁同安碗Ⅱ類、土師器（坏・Ⅲ）、土鍋片、瓦器（碗）、捏鉢、弥生土器片	85 (422)	
56		b区	SK20	3689	長めの隅丸長方形 1.20×0.82×0.10	遺物なし		
56	2-(2)	d区	SK21	4457	不整な隅丸長方形 1.40×0.93×0.18	土師器小片、土師質土鍋、弥生土器片		
56		a区	SK22	SK24	歪な方形 1.17×1.05×0.13	遺物なし		
56		b区	SK23	2731	端正な隅丸長方形 1.37×1.06×0.12	遺物なし		

Tab. 5　第Ⅰ区検出土壙・土壙墓・木棺墓（SK01～39）所見表（その2）

遺構 Fig.No	PL.No	調査区	遺構No	調査時No	寸法(長×幅×深さ)(m)	出土遺物	出土遺物 Fig.No	備考
56		b区	SK24	3227	歪な方形 1.06×0.93×0.23	土師器（Ⅲ・坏）		
56	27-(3)	b区	SK25	3125	歪な隅丸長方形 1.28×1.24×0.43	瓦器（Ⅲ）、土師器（カメ・坏・Ⅲ）		
56	27-(3)	b区	SK26		楕円形 1.26×1.14×0.38	青磁龍泉、碗Ⅱ類、白磁（碗・Ⅳ類）、陶器片、土師器（坏）、須恵器片		
56	27-(5)	b区	SK27	3788	長方形 1.28×1.28×0.26	土師器小片、粘土塊		
56		b区	SK28	1683	長方形 1.63×1.31×0.21	土師不明片、弥生土器		
57	27-(4)	b区	SK29	2993	隅丸長方形 1.66×0.94×0.39	なし		
57	28-(1)	b区	SK30	3021	隅丸長方形 1.12×0.88×0.56	白磁（碗－Ⅱ-1・Ⅳ-1・Ⅵ-1類）、土師土鍋、青磁（龍泉壺？）、弥生土器、土師器（坏・Ⅲ）、木炭片、瓦器（碗・Ⅲ）		木棺墓
57		a区	SK31	SK02	端正な隅丸長方形 1.67×1.10×0.14	白磁（碗・Ⅵ-1類）、青磁龍泉碗Ⅰ類、（同安）、土師器（Ⅲ）、土師質（鉢、捏鉢）、瓦器（碗）、弥生土器	86 (423～439)	木棺墓
57	28-(3)	b区	SK32	1735	長方形 1.60×1.19×0.37	白磁（碗・Ⅵ-類）、土師質（鉢・捏鉢）、青磁（龍泉・Ⅲ類）、弥生土器、土師器（Ⅲ）、瓦器（碗）	87 (440～444)	木棺墓
57	29-(1)	b区	SK33	3530	長方形 1.70×1.23×0.29	白磁（碗・Ⅳ-1類）、青磁同安碗Ⅱ類、Ⅲ（同安Ⅰ類）、土師器（坏）、土師質（土鍋・擂鉢）、瓦器、碗、弥生土器、釘		木棺墓
57	29-(2)	a区	SK34	SK33	不整な楕円形 2.23×1.67×0.28	土師器Ⅲ（完形）5個	87(445～449)	土壙墓か
57		d区	SK35	4350	長方形 2.10×1.16×0.13	土師器（坏又はⅢ）、瓦器（碗）、白磁小片、土師小片		
58	29-(3)	a区	SK36	SK03	隅丸長方形 1.22×1.00×0.93	青銅製柄鏡、土師器（Ⅲ）、青磁龍泉碗Ⅲ類	87 (450～453)	木棺墓
58		a区	SK37	SK25	不整な隅丸長方形 2.07×1.28×0.19	土師器（坏）、弥生土器	87 (454)	
58		a区	SK38	SK01	長楕円形 2.43×1.46×0.15	白磁（碗・Ⅵ-1類）、土師質土鍋、青磁同安（碗）、Ⅰ類、（龍泉碗）、瓦器捏鉢、土師器（Ⅲ）、黒曜石、瓦器（碗）、輸入陶器	87 (455～459)	
58	29-(4)	a区	SK39	SK18	隅丸長方形 2.90×1.42×0.34	白磁（碗・0-1～3・Ⅳ-1、Ⅵ-1類）、青磁（同安Ⅲ）、土師器（碗・Ⅲ）、瓦器（碗）、輸入陶器、土師質擂鉢、弥生土器	87 (460)	

Tab. 5　第Ⅰ区検出土壙・土壙墓・木棺墓（SK01～39）所見表（その3）

6) 旧河川（ＳＲ）および杭列（ＳＡ）（Fig.59～61、PL.37～40、付図１・３）

概要　第Ⅰ区では、遺跡周辺の旧地形の復元を主な目的として３本の旧河川（ＳＲ01・02・3723）の掘り下げを行った。第Ⅰａ区では、調査区の中央に幅約20ｍの河川（ＳＲ01・02）が、第Ⅰｂ区では15ｍ前後の河川（ＳＲ3723）が確認された。これらはいずれも多々良川下流域に多く見られる蛇行河道の一つである。これらの河道の形成時期については不明だが、少なくとも遺跡が形成される以前に河川として流れていたか、もしくは淀み状になっていたものと思われる。また出土遺物からみて、遺跡が営まれていた時期には部分的には湿地状を呈して、未だ安定した土地となっていない箇所もあったものと思われる。

ＳＲ01・02（Fig.59、PL.37、付図１）第Ⅰａ区の中央を南北に緩やかに弧を描きながら横断している。幅は最大で21,5ｍを測るが、この範囲のなかで数本の幅の狭い川がしばしば蛇行しながら流れていたものと思われる。流路として確認できたのはＳＲ01と02の２本の河道である。南側の土層観察ではＳＲ02は砂および砂礫層を埋土としており、水量の多い河川であったことが想定できるが、ＳＲ01はその下部で砂礫層が見られるものの、上部では粘土、シルトの互層となっていることから、02が埋没した後の緩やかな流れ、もしくは淀みだったものと思われる。ＳＲ02の下部では、10世紀代に比定される白磁や黒色土器の破片が出土している。またＳＲ01の左岸（東岸）の埋土上層では、12世紀後半ごろに比定される遺物が出土していることからみて、ＳＲ01・02は少なくとも10～11世紀ごろには河川として流れており、12世紀ごろにすでに淀みだしていたことがわかる。完全に埋没した時期は、旧河川を覆う灰色シルト層を切っている第Ⅰａ区北側の遺構および第Ⅰｂ区のＳＤ34などの遺構の年代からみて、13世紀初頭にはすでに埋没していたものと想像される。

ＳＡ01（Fig.59・61、PL.38）ＳＲ01・02を横断して、第Ⅰａ区の南側に検出された。杭列は方向をＮ－30°－Ｗにとり、ほぼ一直線に南東から北西に続いている。杭はおそらく全長の2/3～1/2ほどの遺存状況と思われるが、21本遺存している。杭には直径が７～10cmの主として松の丸太材を用いている。杭が打ち込まれた土層は、杭の本来の頭部が残っていないため明確でないが、杭の先端部のレベルを見ると平均的に4,54ｍ前後のレベルにまとまって打たれている。また、杭No10～14をみるとほぼ水平に堆積している第２層よりも上位の土層から打たれたことが考えられる（Fig.61）。これらのことよりＳＡ01は、旧河川ＳＲ01が淀んでいる状態もしくはＳＲ01・02がすでに埋没しつつあった段階において打たれた可能性が指摘できる。先述した旧河川の埋没時期からみて、ＳＡ01は最も古くみても 12世紀後半から13世紀初頭以降の時期のものと考えられる。

ＳＡ02（Fig.59、PL.39、付図３）ＳＡ01と同様にＳＲ01・02を横断して、第Ⅰａ区の北側に幅2,5ｍ、長さ約9,0ｍにわたって検出された。本来は旧河川ＳＲ01・02の幅以上の長さで東西に続いていたものと思われる。杭列の主な構造は２列の杭列によって構成されているが、方

向をN－60°－Wにとり、ほぼ直線的にに南東から北西に続いている。遺存していた杭は、松を主とした丸太材や、木の枝をそのまま用いたものなどがあるが、打ち込まれた状態で残っていた杭が74本、横木として杭と杭の間に渡してあるもので、人為的な加工が残っているものが24本、である。そのほか、杭列間に、松の木の大枝を払ったものや板材、人頭大の自然礫、粗砂などが意図的に埋置された状況で出土している。杭の遺存状況はおそらく全長の2/3～1/2ほどの残りと思われる。したがって本来の杭の頭部が残っているものはなく、どの層位から打ち込まれたものかは不明であるが、杭列間に渡された横木や、また２列の杭列間に埋置されたと思われる松の木などはＳＸ37などの遺構検出面である灰褐色粘質土層下部に相当する青灰色粘質土中に包含されていることからみて、ＳＡ02は周辺の灰褐色粘質土層上面を検出面とする他の遺構よりも古いものと考えられる。おそらくＳＲ01・02がまだ淀んでいる段階のものと思われ、ＳＤ34の時期を下限とみて12世紀後半ごろまで遡ることが考えられる。このＳＡ02は、ＳＤ04と06との間の畦畔状の高まりの直下に位置しており方向性、杭列間の幅、およびその構造的な特徴から、畦畔状の高まりの基盤となる構造体とみることが出来る。

ＳＲ3723（Fig.60・61、PL.37・40）第Ⅰｂ区の中央を緩やかに弧を描きながら東西に横断している。幅は最大幅で28ｍ、最小幅で14ｍである。最深部は左岸（南岸）側で約1.1ｍである。河道内の埋土は大きく５層に分かれる。出土遺物が少ないために明確でないが、５層（Fig. 61-3）から出土している遺物（462や口禿の白磁皿など）からみて、14世紀前半ごろまで湿地状ないし淀み状であった可能性がある。第３層は整地層と思われる土層で比較的新しい時期の土層である。ＳＲ3723の北側に見られるＳＥ15やＳＫ27などは、この第３層の下部、第４層の上面で検出されている。

ＳＡ06・07（Fig.60・61、PL.40）ＳＲ3723を南北に横断して出土している。ＳＡ06は長さが1.5ｍにわたり５本の杭が確認された。ＳＡ07は長さ10ｍに渡って22本の杭が確認された。いずれも上部が腐食しておりどの土層からのものか明確でないが、少なくともＳＡ06は４層（Fig,61-3）上面、ＳＡ07は３層（Fig,61-2）上面、から上位の面で打ち込まれたものである。３層と４層は同一層であり、５層（Fig,61-3）の推定時期が古くみて、14世紀前半ごろと思われることから、これよりもさらに新しい時期の所産のものと思われる。

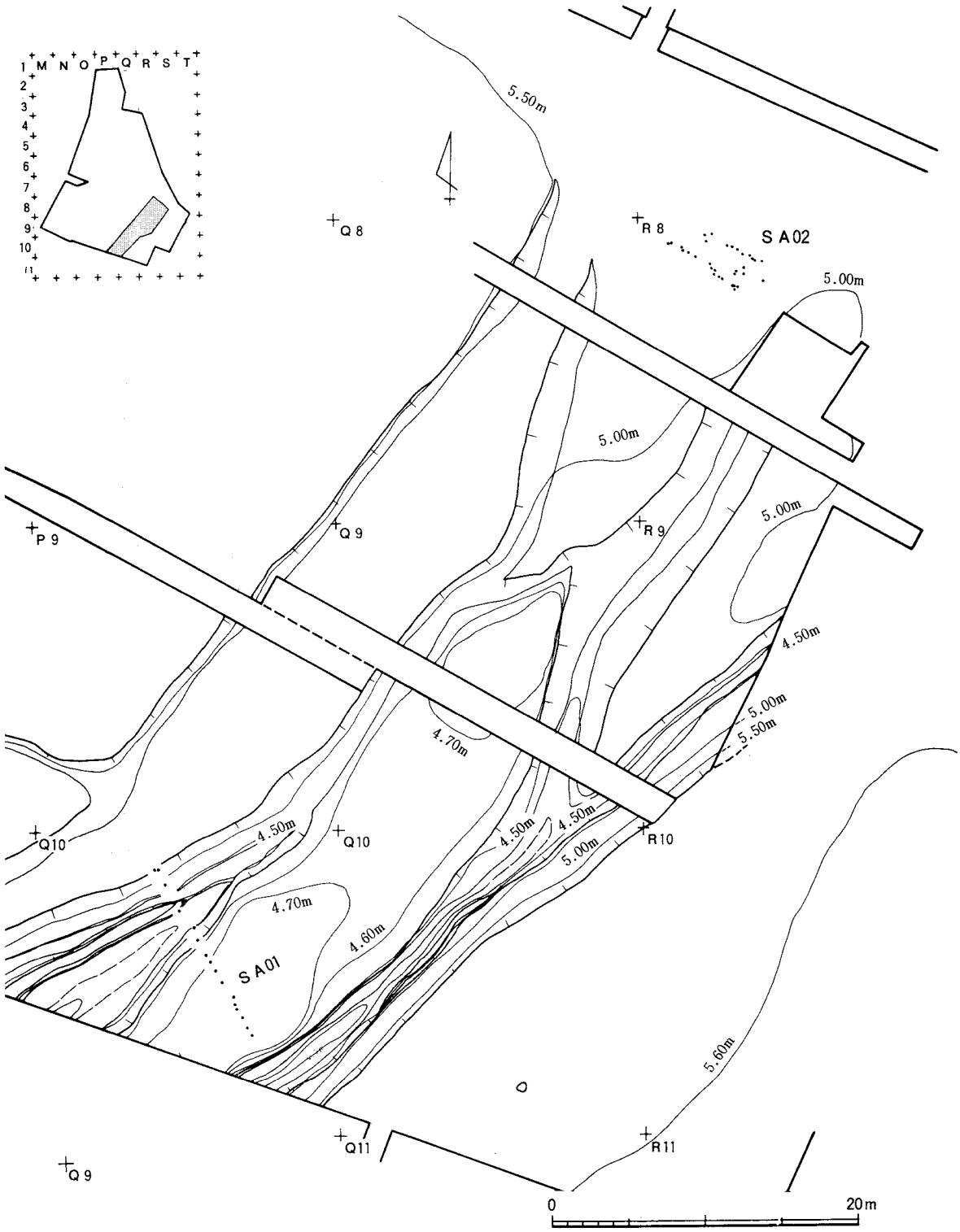


Fig. 59 杭列（S A01・02）配置図（1/400）

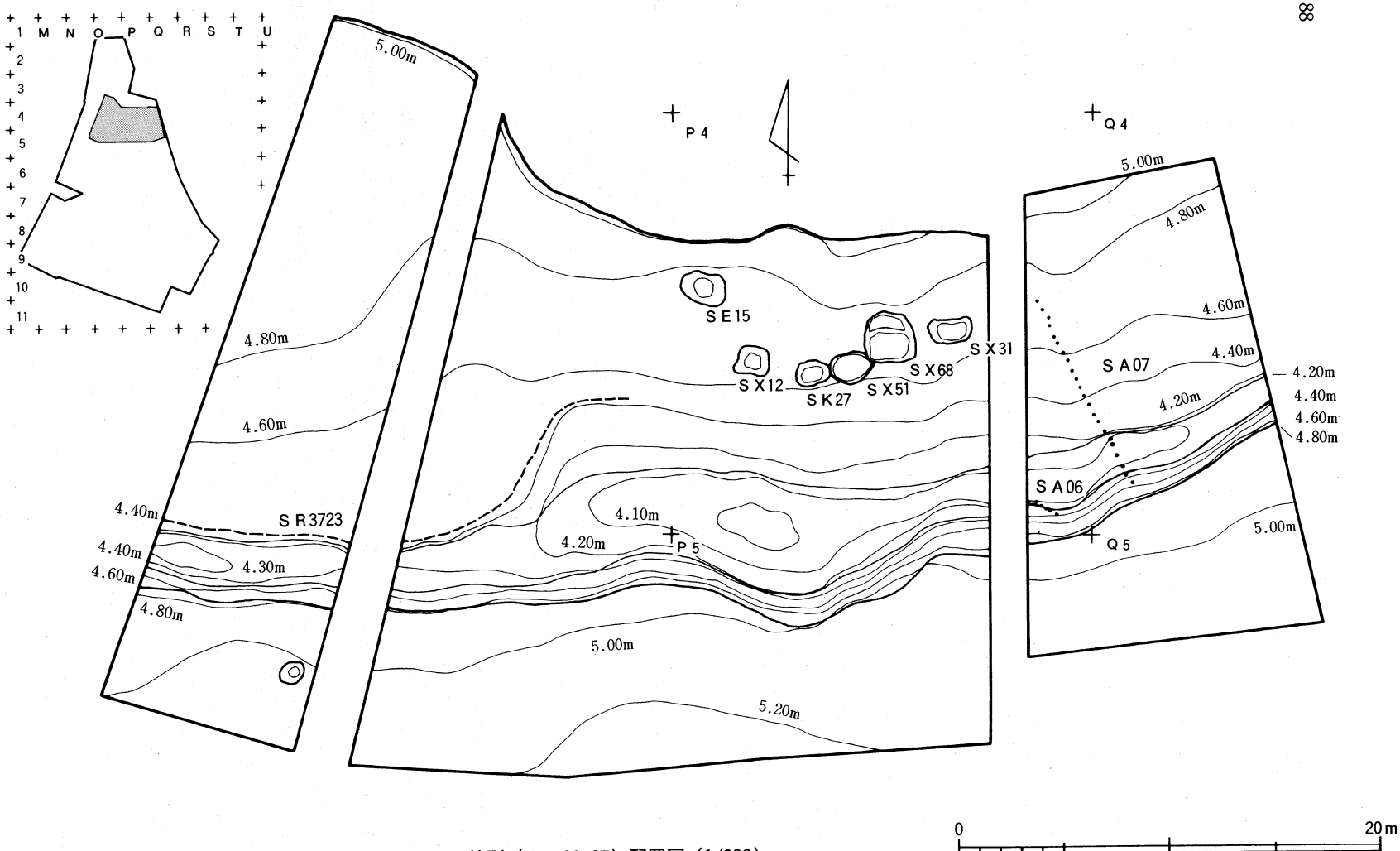
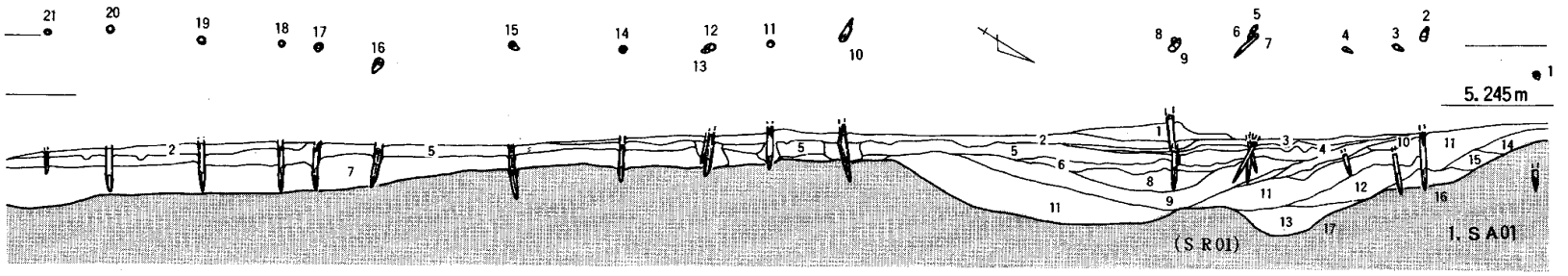
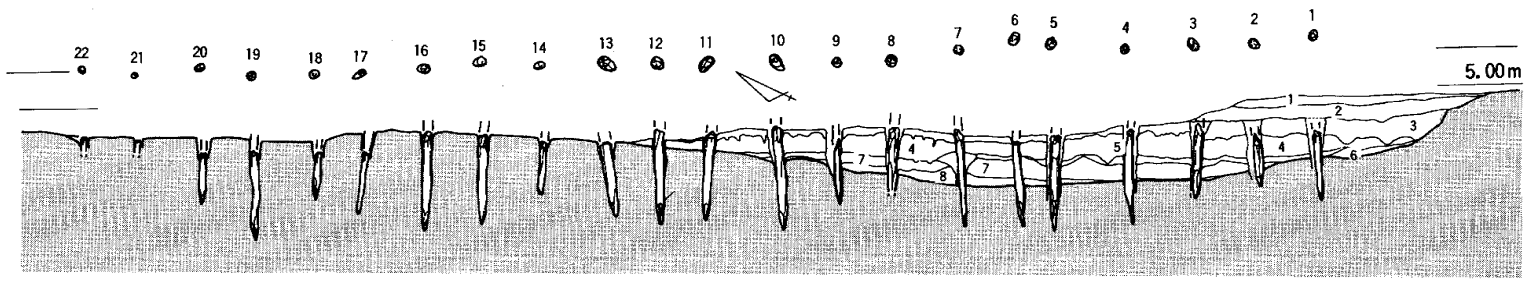


Fig. 60　杭列（ＳＡ06･07）配置図（1/300）



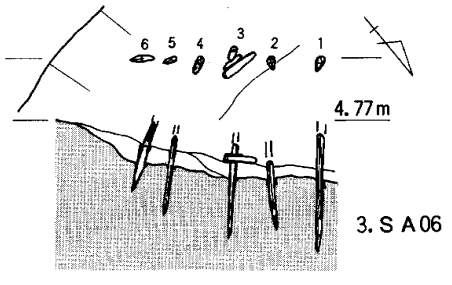
1. S A01土層所見

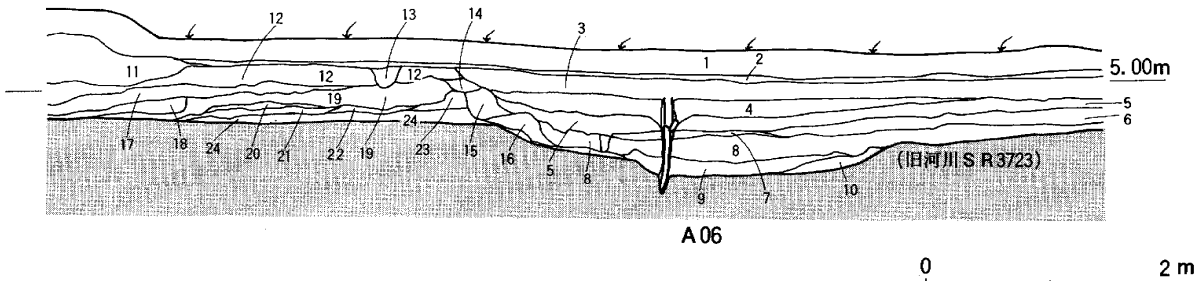
第1層；黄灰色シルト層
第2層；黄白色～黄灰色シルト層
第3層；灰色シルト層
第4層；黄灰色粗砂層
第5層；黄灰色シルト層
第6層；青灰色細砂層
第7層；明灰色粗砂と黄灰色細砂の互層
第8層；明灰色細砂層
第9層；青灰色細砂～シルト層
第10層；黄白色細砂層
；黄白色シルト層
第11層；灰褐色粘質土層
第12層；黄灰色シルト層
第13層；黄白色粗砂層
第14層；明黄褐色粘質層
第15層；明褐色シルト層
第16層；黄褐色土層
第17層；灰色粗砂・礫層



2, S A07土層所見

第1層；暗黄褐色土（砂礫混入）層
第2層；暗褐色～褐色土層
第3層；灰褐色粘質土層
第4層；暗灰～黒灰褐色土層
第5層；青灰色砂礫層
第6層；（青）灰色粗砂層
第7層；（青）灰白色粗砂層
第8層；明灰色砂礫層
第9層；灰色礫層





3. S A06土層所見

第1層；現耕作土
第2層；現耕作土床土（黄灰色粘質土）
第3層；明褐色シルトと褐色粘質土の混合土層
（下部には礫が多い。整地層）
第4層；暗灰～黒灰褐色土層
第5層；灰褐色粘質土層
第6層；暗灰色粘質土層
第7層；暗灰色砂層
第8層；暗灰褐色粘質土層
第9層；黒褐色～暗灰色粘土
第10層；暗灰色粘土
第11層；灰色砂礫層
第12層；明褐色～褐色シルト層
第13層；褐色粘質土
第14層；暗灰色砂ブロック
第15層；暗灰色シルト
第16層；褐色シルト（砂礫混じり）
第17層；褐色砂層
第18層；灰褐色砂層
第19層；黒灰色砂層
第20層；褐色粗砂層
第21層；灰色粘土層
第22層；灰褐色粗砂層
第23層；灰色粗砂層
第24層；褐色砂層～礫層

Fig. 61　杭列（S A01・06・07）出土状況平面および断面図（1/40）

(4) 遺物各説

1) 柱穴出土の遺物（Fig.62・63、PL.42～44）

柱穴からは主として土師器皿・坏が柱穴掘方内に埋置された状況で出土する例が多かった。図示したのはそういった例のうちの一部である。なお柱穴出土の遺物は一括して説明する。

土師器

皿（1～26）口径・器高は、1～16が8.1～8.4cm・0.8～1.4cm、17～22が8.5～8.8cm・0.9～1.2cm、23～25が8.9～9.4cm・0.9～1.4cmで、26がやや大きく10.2cm・1.5cmを測る。24がヘラ切りと思われるほかはすべて糸切りである。全体に表面が荒れているため調整痕は不明瞭。色調はおおむね褐色～明褐色で焼成はややあまい。

坏（27～35）27～33は糸切りで、34・35はヘラ切りである。口径・器高は27～31が12.4～13.1cm・2.0～2.7cm、31～34が14.5～15.6cm・2.7～3.1cmである。35は口径・器高が16.1・3.6cmの丸底の坏で、内面は丁寧なヘラミガキが施されている。以上の坏の色調は35が黒灰色～暗褐色のほかはおおむね褐色～明褐色で、また焼成はややあまい。

土師質土器

土鍋（39・42）口径・器高は39が27.8・(12.5)cm、42が24.2・11.7cmを測る。いずれも口縁部と体部の境は明瞭である。口縁部はわずかに内湾しており、口縁から体部内面は横方向のやや目の粗いハケ目調整が施されている。色調は暗褐色で焼成はよくしまっている。

瓦質土器

擂鉢（38）復元口径は24.2cm。器高は不明。口縁部はわずかに肥厚している。内面は斜位のハケ目調整が施されている。外面はハケ目後ナデ。灰白色を呈し、良く焼きしまっている。

釜（40）復元口径は22.2cm。器高は不明。口縁部に鍔が貼付されている。暗灰褐色。

須恵質土器

片口鉢（41）復元口径は25.9cm、器高は不明。口縁部は玉縁状をなし、黒灰色を呈す。口縁部以外はやや青みのある灰色を呈し、全体に良く焼きしまっている。内外面とも回転ナデ。

陶器

壺（43）水注もしくは四耳壺の底部。底径7.6cm。胎土は赤褐色土、釉は暗赤褐色。焼成堅。

天目碗（44）内外面とも黒釉が施され、細いシノギが見られる。口縁端部の釉は掻取り。

合子身（45）口径5.0cm、器高2.2cm。胎土は褐白色の泥土。型押しによる成形か。体部内外面に薄く緑がかった褐色を呈する鉄釉を施釉している。底部外面は露胎。

白磁

碗（46～48）復元口径は、46が16.6cm、47が12.2cm、48が14.3cm。器高はいずれも不明。46は外面にヘラによる片切彫りの縦線文を施している。体部は球形に近く、口縁部はわずかに

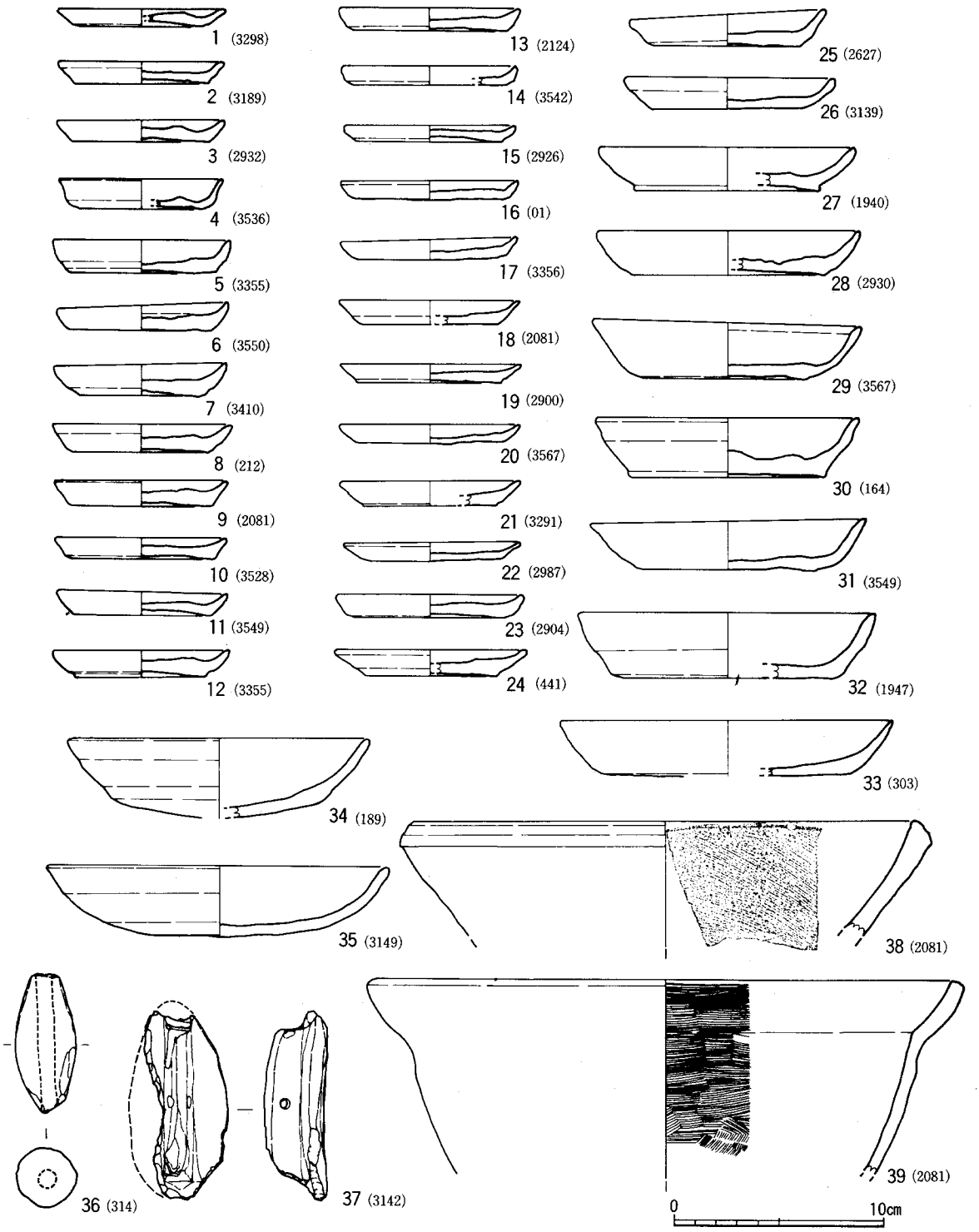


Fig. 62 柱穴出土遺物実測図（1/3）その1

（（ ）内の数字は柱穴番号）

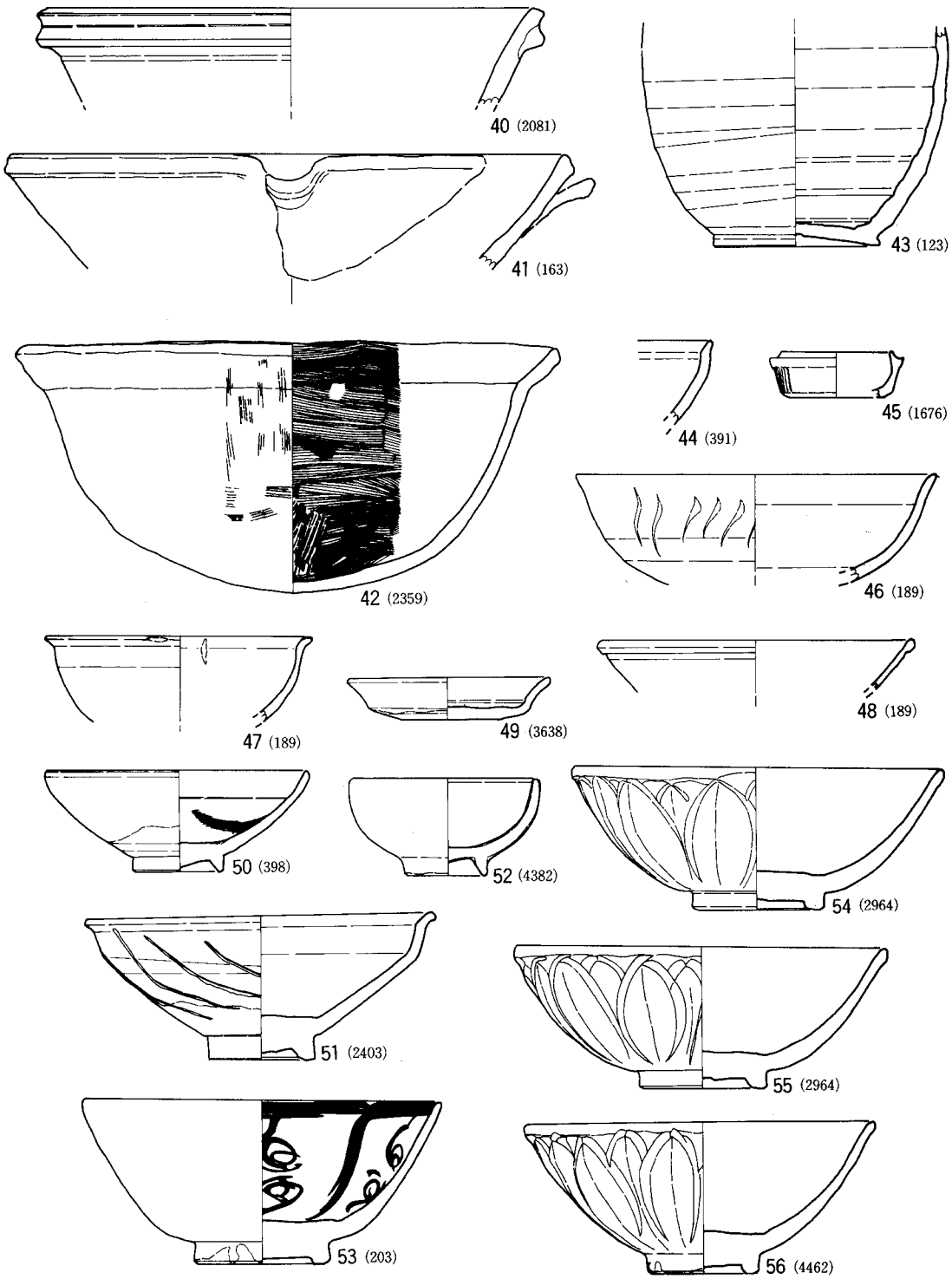


Fig. 63 柱穴出土遺物実測図（1/3）その2

外反する（碗０-3類）。47は半球形の体部で口縁部がやや強く外反するこぶりの碗である。口唇部に刻み目を入れ、内面には白堆線がはいる（碗０-1類）。48は口縁部が小玉縁となる。

青磁

碗（50～56）50・51は同安窯系に近い器形と釉調のものである。口径・器高は50が11.8・4.7cm、51が16.0・6.8cmである。50は小碗で内面に櫛描文を施文。やや青みのある灰黄色（そ青-Ⅲ類）[注]。51は体部が屈曲し、口縁部がやや強く外反するもので、外面にヘラ沈線を施す。やや褐色がかったモスグリーン。53～56は龍泉窯系である。52は小碗３類で口径・器高は8.0・3.6cm。釉は厚くかかり深いモスグリーン。53は雲文を施す碗Ⅰ-6類、54～56は蓮弁文を外面に施す碗Ⅱ-1類で、口径・器高はおおむね16.4～17.2・6.4～7.4cmである。釉色はやや青みのある透明な緑色。

皿（49）同安窯系である（皿Ⅰ-2類）。口径・器高は9.3・1.9cm。灰緑色。

土製品

管状土錐（36）長さ6.7cm、径2.9～3.3cm、孔径0.8cm、重さ47.2gである。

石製品

滑石製蓋？（37）長さ9.5cm、幅4.7cm。石鍋の鍔部分を再加工し転用している。

2）井戸出土の遺物

ＳＥ01出土遺物（Fig.64、PL.43）

土師器

皿（57～61）57～59は丸底皿である。外底部はヘラ切り。57・58は作りが薄手である。口径は57が9.4cm、58が9.9cm、59が9.2cmを測る。60は平底で、推定口径9.8cmを測る。61は体部の内面および外面上半にヘラミガキを施している。外底部はヘラ切り。色調は黒灰～明灰褐色で、瓦器の可能性がある。口径・器高は10.1・2.0cmを測る。

瓦器

皿（62・63）口径は10.4～10.6cm。外底部は、62がヘラ切りの後ナデ、63がヘラ切りの後ミガキを施している。黒灰色～灰褐色を呈す。

碗（64～66）64は体部のやや下位で屈曲しほぼ直線的に口縁部へ続いている。内外面のミガキは不明瞭である。口径・器高・高台径は15.5・5.8・6.0cmを測る。65は体部の中位で屈曲し、外反しながら口縁へ続く。口縁部は丸く肥厚する。高台断面形は三角形である。口径・器高・高台径は15.9・5.3・6.6cm。66は体部が球形に近い。外面は横位のヘラミガキ、内底部にはジグザグのミガキを施す。口径・器高・高台形は16.6・5.2～5.8・5.6cm。いずれも暗灰～黒灰色を呈す。焼成はややしまり悪い。

白磁

碗（69）碗Ⅳ類。内面見込み近くに沈圏線を巡らす。外面体部下半は露胎である。釉は灰乳

注：13頁注１の文献（森本1984）では、龍泉窯系、同安窯系、越州窯系、耀州窯系、高麗青磁以外の青磁を「その他の青磁」として扱い、形態的特徴から大きく４類（Ⅰ～Ⅳ類）に分けている。

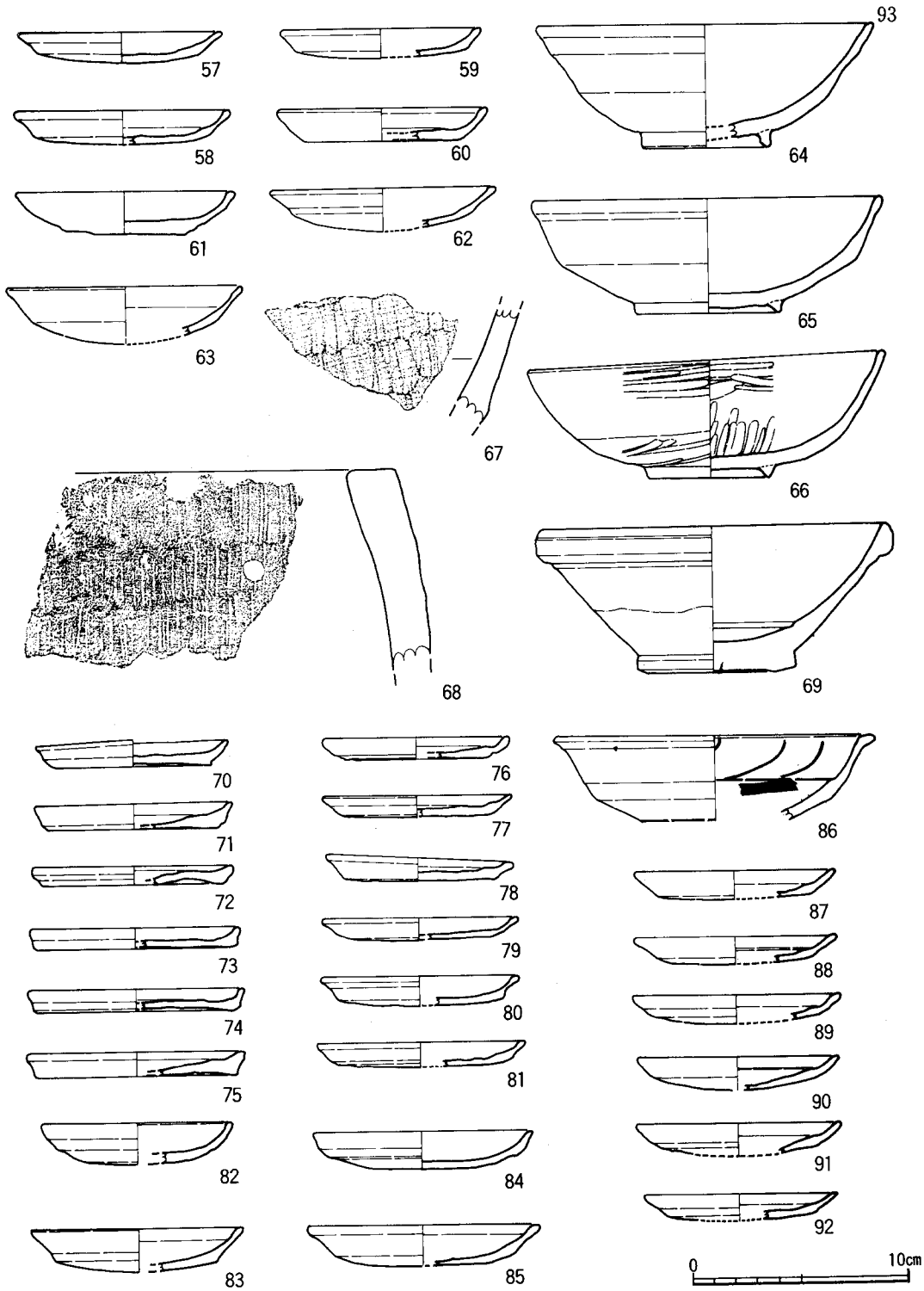


Fig. 64　井戸（ＳＥ01･05･06）出土遺物実測図（1/3）その１

(57～69：ＳＥ01、86：ＳＥ05、70～92：ＳＥ06)

白色で細かな氷裂を有す。口径・器高・高台径は、16.0・6.7・7.3cm。

石製品

滑石製石鍋（67・68）いずれも灰白～灰白の良質の滑石製である。68には補修孔がある。

ＳＥ05出土遺物（Fig.64）

白磁

碗（86）口径は14.8cm。内面に櫛描文を施す。体部中位でやや強く屈曲し、口縁部は肥厚し強く外反している。釉色は明灰白色。

ＳＥ06出土遺物（Fig.65、PL.43・44）

土師器

皿（70～81、87～92）80・87～92は丸底皿で、底部はヘラ切り底である。焼成はいずれも良好で、明褐～明褐白色を呈す。口径・器高は9.0～9.4・1.2～1.5cmを測る。70～79・81は平底で、70～75が糸切り、77・81はヘラ切りで、76・78は不明。71・73・78・79の底部には板目圧痕が残る。焼成は71以外はしまりが悪くもろい。褐色～明褐色を呈す。

坏（93～97）95～97は糸切り底で、95には板目圧痕を残す。口径・器高は16～17.0・2.3～2.7cm。93・94は口径・器高14.6～14.8・2.5～2.7cmを測る。器形はほぼ同一である。93の底部はヘラ切り底。94は不明。以上はいずれも焼成は良好。褐色～赤褐色を呈す。

瓦器

皿（82～85）内外面のミガキの痕跡はいずれも不明瞭。83の底部に板目圧痕が、84にはヘラ切り痕を残す。口径・器高は82が8.6・1.9cmと小ぶりであるのに対して、他は9.9～10.6・1.7～2.0cmを測る。いずれも焼成はよく焼きしまっている。灰～黒灰色。

碗（98～103）98～100は口径が15.8～16.7cmほどで、いずれも体部の下位で屈曲し、弱い稜が巡る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさめている。焼成は良好で、硬くしまっている。101は口径・器高・高台径が15.2・4.0・5.6cmで浅い器形である。外面には横位のヘラミガキ、内面は斜位のヘラミガキを施す。102は口径・器高・高台径が15.8・5.0・5.1cmである。体部の屈曲は弱い。位部下半に指頭圧痕を残す。ミガキの痕跡は不明瞭。高台付近に糸切り離痕が残る。103は体部中位でやや強く屈曲する。口縁部はわずかに肥厚する。口径15.3cm。104は全体に厚手の作りである。調整痕は不明。口径15.6cm。体部下半でわずかに屈曲する。105は球形の体部で、口縁部は肥厚し、外面上位には段を有している。内面は横位のヘラミガキ、外面は粗いミガキを施す。外面見込みに⤫印のヘラ沈線が認められる。

白磁

碗（106・107）いずれも碗Ⅳ類。口径は106が17.2cm、107が16.6cm。

ＳＥ07出土遺物（Fig.65・66）

土師器

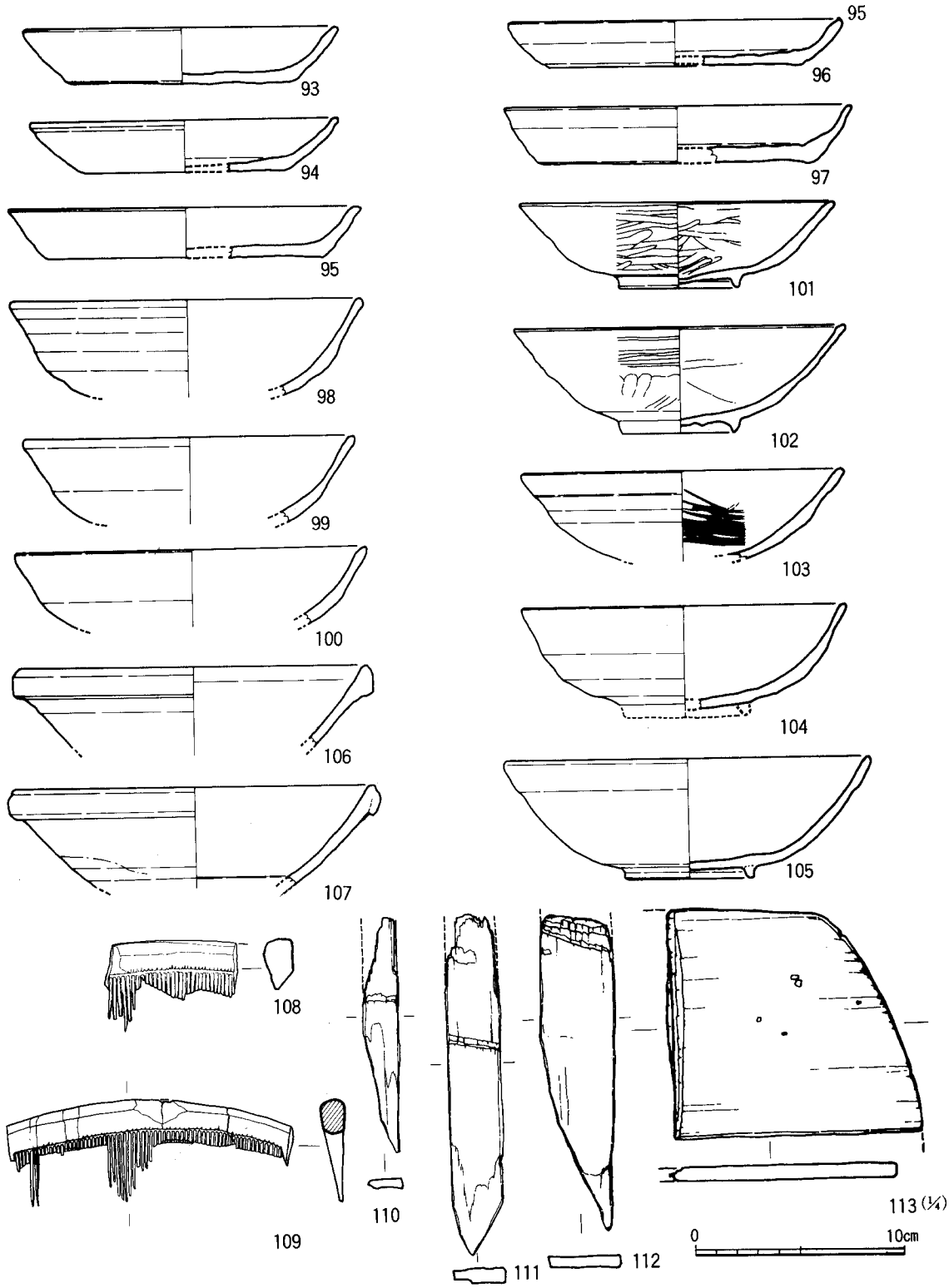


Fig. 65　井戸（ＳＥ06･07）出土遺物実測図（1/3･1/4）その２

(93～107：ＳＥ06、108～113：ＳＥ07)

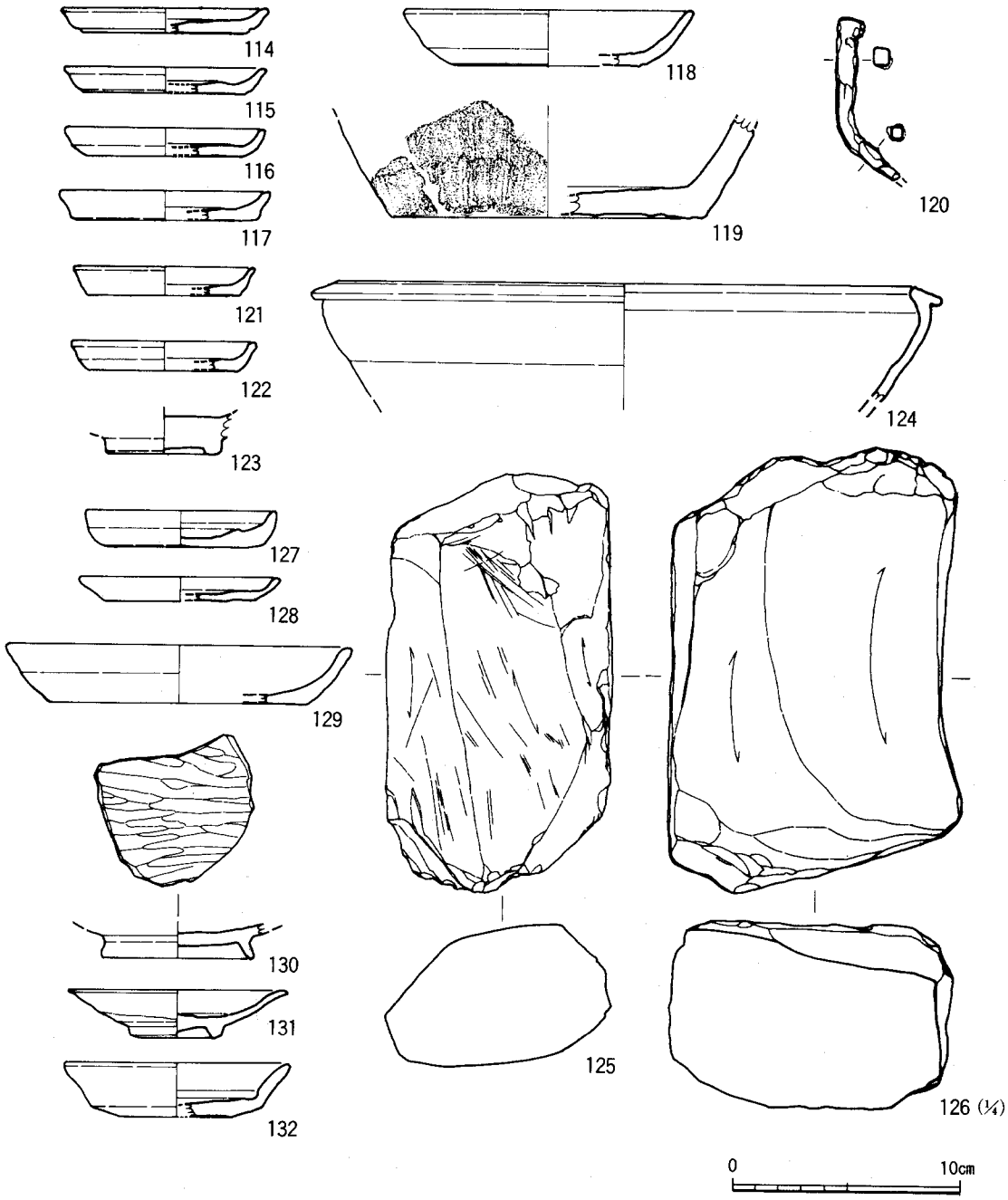


Fig. 66　井戸（ＳＥ07･08･09）出土遺物実測図（1/3･1/4）その３
(114～120：ＳＥ07、121～126：ＳＥ08、127～132：ＳＥ09)

皿（114～117）口径・器高は8.6～9.0・1.1 ～1.3cm を測る。いずれも糸切り底である。褐色～明褐色を呈し、ややもろい。

坏（118）口径・器高は12.8～12.9・2.5cmである。底部は糸切り底。明褐色。

石製品

滑石製石鍋（119）石鍋の底部片である。底径は13.8cmを測る。内面は平滑に研磨。

木製品

櫛（108・109）横櫛である。歯はやや密である。背部は曲線的で、109は全長9.1cm。

板材（110～112）方形井戸側の固定に用いられた板材である。先端部を小刀状に切りこんでいる。いずれも杉の柾目材である。

底板（113）曲物の底部である。現存長16.5cm、幅14.8cm、厚さ0.9～1.0cm。３ヶ所に長方形の穿孔が認められ、桜皮が２ヶ所に遺存する。

鉄製品

鉄釘（120）埋土上層から出土。断面形は一辺0.7cmの方形である。頭部は逆Ｌ字形である。

ＳＥ08出土遺物（Fig.66）

土師器

皿（121・122）口径・器高は7.8～8.2・1.2～1.3cm。底部は糸切り底。焼成はよくなくしまり悪い。褐色を呈す。

青磁

碗（123）龍泉窯系碗Ⅰ類の高台片である。高台径5.1cm。

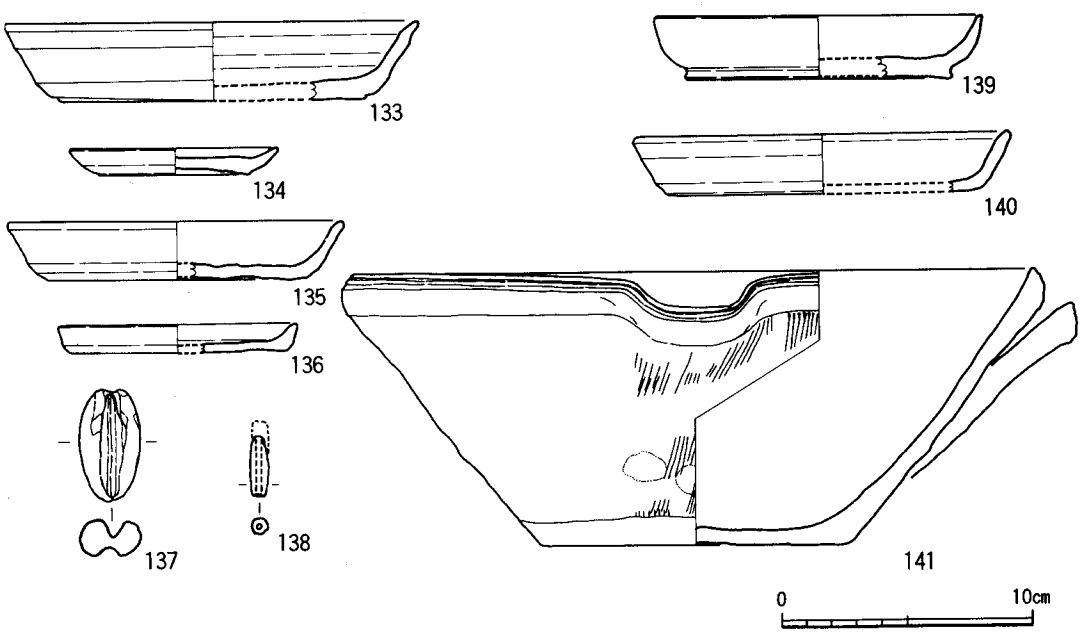


Fig. 67　井戸（ＳＥ10･13･15～18･20）出土遺物実測図（1/3）その４
（133：ＳＥ10、134～135：ＳＥ13、139～140：ＳＥ15、137：ＳＥ16、136：ＳＥ17、141：ＳＥ18、138：ＳＥ20）

陶器鉢（124）陶器C群に含まれる鉢である。器面全体に薄く褐色の釉を施釉する。口径（外径）27.9cmを測る。

石製品

砥石（125・126）125はほぼ完形で、全長18.5cm、最大幅9.8cmを測る。図示した上・下両面以外は砥面として利用されている。泥質の砂岩製。中砥用か。126は大型で、現存長39.4cm、幅25.7cm、厚さ25.7cm測る。A面は砥面で、大きく湾曲している。B～D面の周辺は打ち欠かれ平坦面となる。砂岩製で荒砥用か。

ＳＥ09出土遺物（Fig.66）

土師器

皿（127・128）口径・器高は127が8.5・1.6cm、128が9.0・1.0cmである。127はやや厚手の底部から丸みのある体部を引き出す。内面には水挽き痕をそのまま残す。128はヘラ切り底で、全体に薄手の作りである。いずれも焼成よく、赤褐～明褐色。

坏（129）口径・器高は15.1・2.6cmほどである。底部は糸切り底。焼成良好で、褐白色。

瓦器

碗（130）碗底部片である。内底部には左右両方向からのヘラミガキ痕を残す。

白磁

皿（131）高台付皿Ⅱ類。口径・器高は9.6・2.1cmを測る。内底部は輪状掻き取り。

青磁

皿（132）同安窯系皿Ⅰ類。口径・器高は9.8・2.4cm。底部は全面施釉後掻き取り。

ＳＥ10出土遺物（Fig.67）

土師器

坏（133）口径16.4cm、器高3.1cm。底部は糸切り底。焼成良好でよくしまっている。

ＳＥ13出土遺物（Fig.67）

土師器

皿（134）底部は糸切り底である。口径8.3cm、器高1.1cmを測る。

坏（135）口径・器高は13.0・2.3cm。焼成はやや不良でしまり悪い。明褐色。糸切り底。

ＳＥ15出土遺物（Fig.67）

土師器

坏（139・140）口径・器高は139が13.2・2.3cm、140が14.9・2.4cm。139の底部は糸切り底。明褐色～明黄褐色を呈す。

ＳＥ16出土遺物（Fig.67）

土錘（137）有溝土錘である。長さ4.5cm、厚さ1.4cm、幅2.4cm、重さ15.5ｇを測る。

ＳＥ17出土遺物（Fig.67）

土師器

皿（136）底部は糸切り底で板目圧痕が残る。体部断面形は三角形。口径・器高は9.4・1.2cmを測る。焼成はやや不良。黄褐色を呈す。

ＳＥ18出土遺物（Fig.67）

土師質土器

片口鉢（141）摺鉢か。口径27cm、器高10.8cmを測る。内面の下半部は使用によってハケ目調整痕は磨耗しほとんど残っていない。内外面とも灰白～灰褐白色。

ＳＥ20出土遺物（Fig.67）

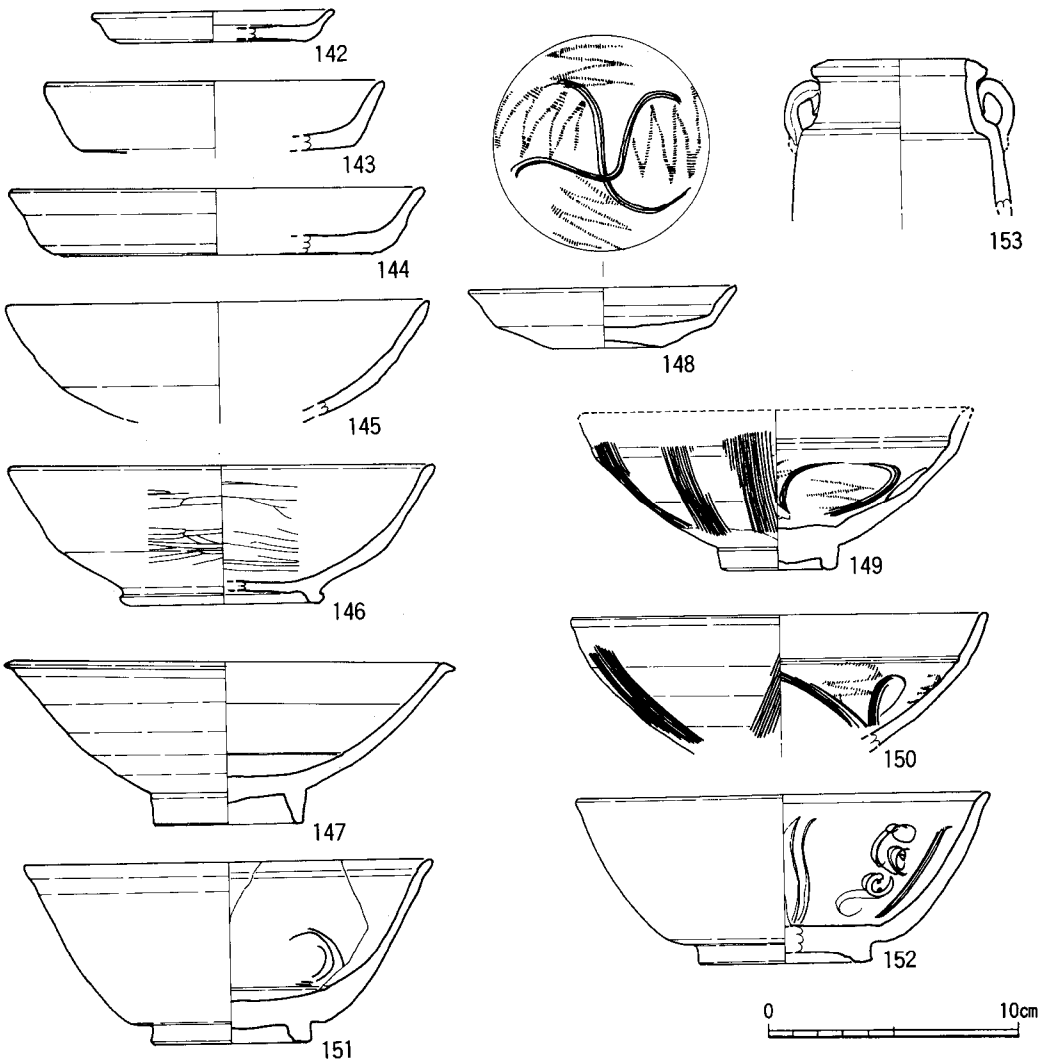


Fig. 68　井戸（ＳＥ21）出土遺物実測図（1/3）その５

土製品

土錘（138）管状土錘である。現存長2.5cm、径0.7cm、孔径0.2cm、現存の重さ１ｇ（推定２ｇほど）を測る。

ＳＥ21出土遺物（Fig.68・69、PL.44）

土師器

皿（142）口径・器高は9.7・1.1cm。底部切り離しは不明。褐白色。

坏（143・144）口径・器高は143が13.5・2.8cm、144が16.4・2.6cm。143は糸切り底。

瓦器

碗（145・146）いずれも口径に比して器高の低い器形のもので、体部中位に弱い屈曲がみら

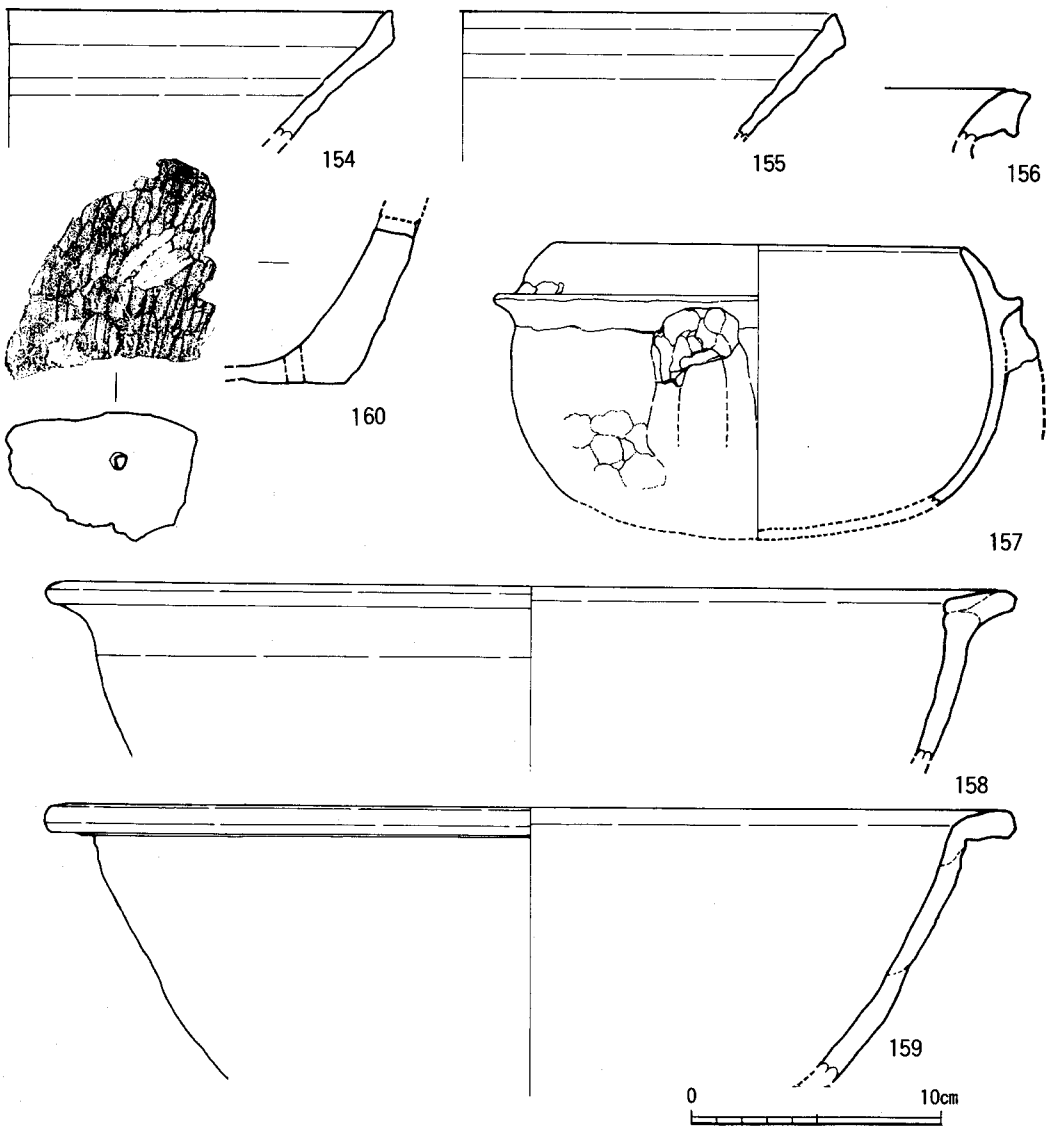


Fig. 69　井戸（ＳＥ21）出土遺物実測図（1/3）その６

れる。口径・器高は145が16.8・（5.0）cm、146が17.2・5.6cmである。いずれも焼成は良好。暗灰～黒灰色。

土師質土器

土鍋（158・159）口径・（外径）38.8cmをいずれも測る。口縁部は逆L字形に外反する。内外面ともにナデ仕上げ。焼成良好。硬くしまる。暗褐色を呈す。

瓦質土器

足釜（157）口径16.4cm、胴部最大径20cmを測る。内面はヨコナデ。口縁部に指頭圧痕が残る。黒灰色を呈し、焼成はややあまくもろい。脚は剝落している。

須恵質土器

片口鉢（154・155）口径は30cm前後を測る。内外面とも水挽き痕を強く残す。いずれもやや青みがかった灰白色を呈す。焼成堅緻。

甕（156）口縁部片である。口縁端部にはヘラ先による沈線を巡らす。暗灰色。焼成堅緻。

白磁

碗（147）碗Ⅵ類。口径・器高・高台径は17.8・6.5・6.1cmを測る。灰白～白色。

青磁

皿（148）同安窯系皿Ⅰ類。口径・器高は10.8・2.4cm。淡い褐緑色。氷裂あり。

碗（149～152）149・150は同安窯系碗Ⅱ類。口径は149が15.7cm、150が16.5cm。色調はうすく褐色がかった灰緑色。151・152は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。口径・器高は151が16.4・7.2cm、152が16.6・6.7cm。152の高台畳付部には目跡が残る。

陶器

双耳壺（153）口径は7.3cmほど。口縁端部は輪状に釉が剝落している。内外面に褐色～暗茶褐色の釉が薄くかかる。

石製品

滑石製石鍋（160）底部片である。体部と底部に一箇所ずつ補修孔が認められる。

3) 竪穴遺構出土の遺物（Fig.70～78、PL.44・45）

ＳＸ03出土遺物（Fig.70－161～163、PL.44）

土師器

皿（161・162）口径・器高は161が9.2・1.2cm、162が9.6cm。いずれもヘラ切り。

碗（163）高台部片。高台径は7.0cm。内外面ともヘラミガキ。焼成良。明褐白色を呈す。

ＳＸ08出土遺物（Fig.70－164～175、PL.44）

土師器

皿（164～166）口径・器高はおおむね8.8～9.2・0.9～1.1cmを測る。切離痕は166は不明164・165は糸切り。いずれも焼成は良くない。褐色～明褐色を呈す。

坏（167～172）171が糸切りで、他は器面が荒れているため糸切りかヘラ切りか不明。口径・器高はおおむね14.1～16.2・2.3～2.9cmを測る。形態上特徴的なものとして172があげられる。口縁部がやや肥厚し弱い段を作っている。色調は明褐色～褐色。焼成はあまく、もろい。

高台付坏（173）口径・器高は15.2・4.1cm。おそらく坏部はヘラ切りか。切り離し後ナデ消している。

碗（174・175）器形はいずれも半球形。175の器形はやや低い。内外面ともミガキもしくは丁寧なナデ仕上げである。高台はやや高くしっかりした作りである。口径・器高は174が16.0・6.1cm、175が15.4・5.5cm。

ＳＸ09出土遺物（Fig.70－176～181）

土師器

皿（176・177）口径・器高は8.4～9.4cm・1.0～1.2cm。いずれも糸切りである。

坏（179・180）口径は179が11.9～12.1cm、180が15.0cmほど。179は口縁端部がわずかに外反する。以上の皿、坏は褐色～明褐色で、焼成は良くなくもろい。

瓦器

碗（178）復元口径は約15cm。浅い器形のもの。内面は丁寧なヘラミガキ。明灰色。

白磁

碗（181）碗Ⅵ-1類。口径は16.1cm。口縁部の外反はやや弱い。やや透明な明灰白色。

ＳＸ14出土遺物（Fig.70－182）

土師器

皿（182）口径・器高は7.5・1.4cm。糸切り。板目圧痕がみられる。明黄褐色。焼成良好。

ＳＸ22出土遺物（Fig.70－183～186、PL.44）

土師器

皿（183～186）口径・器高はおおむね8.2・1.1cm前後である。いずれも糸切り。焼成はあまり良くなく、もろい。褐色～明褐色。

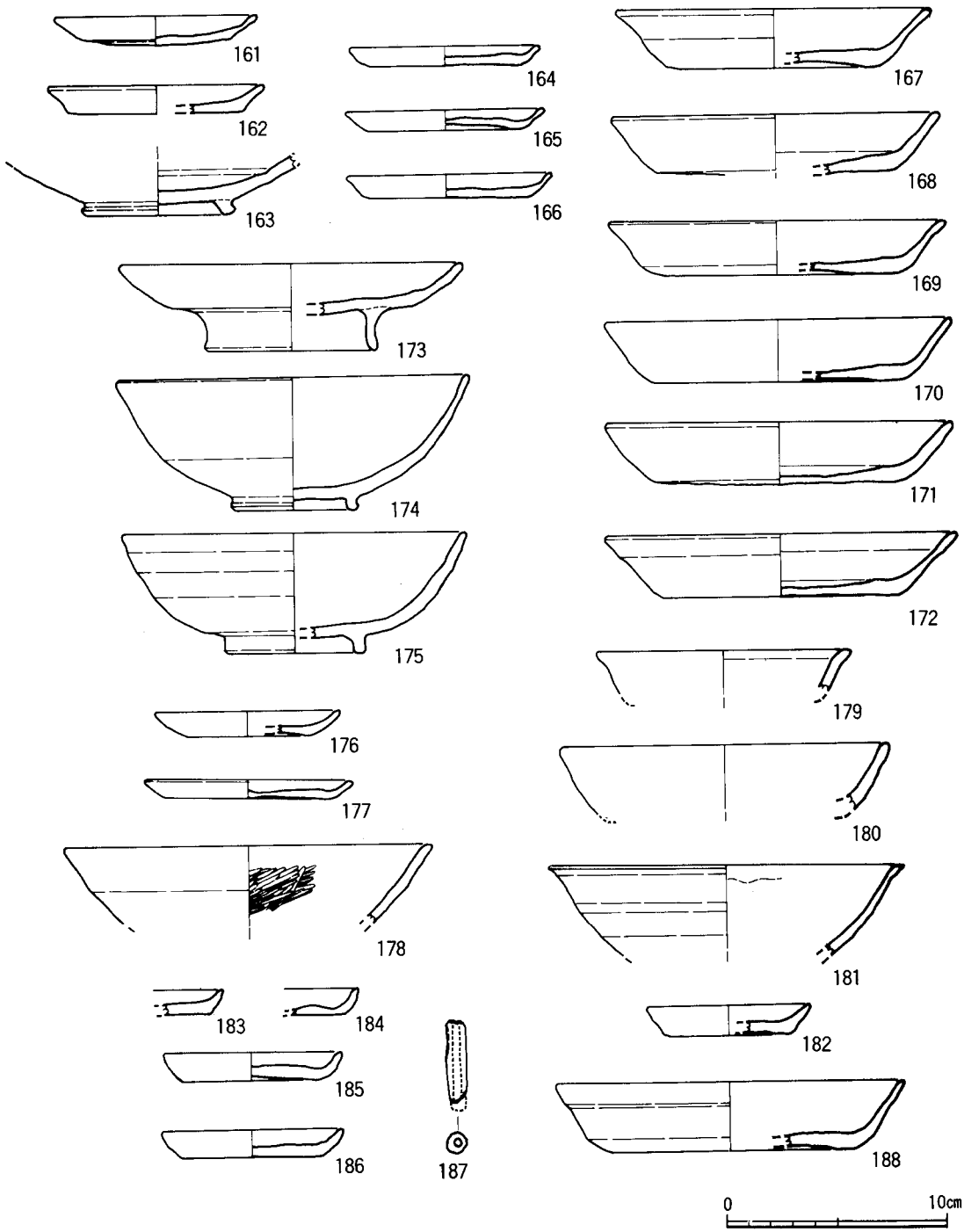


Fig. 70　竪穴遺構（ＳＸ03･08･09･14･22･23）出土遺物実測図（1/3）その１

(161～163：ＳＸ03、164・165：ＳＸ08、176～181：ＳＸ09、182：ＳＸ14、183～186：ＳＸ22、187・188：ＳＸ23)

ＳＸ23出土遺物

(Fig.70－187)

土師器

坏（188）口径・器高は15.7・3.1cm。焼成良好。明褐色を呈す。

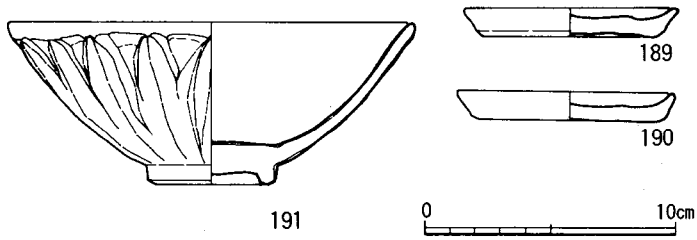


Fig. 71　竪穴遺構（ＳＸ34）出土遺物実測図（1/3）その２

土製品

管状土錘（187）長さ3.7cm、径0.9～1.0cm。重さ3g。焼成良好。しまりよい。明褐白色。

ＳＸ24（Fig.72－192）・**25**（Fig.70－193～195）**出土遺物**

土師質土器

土鍋（195）復元口径29.2cm、器高不明。口縁部はやや強く外反し、内面は明確な稜線を作る。体部内面は横位のハケ目調整。外面はハケ目の後ナデ仕上げ。明灰褐色。

須恵質土器

片口鉢（194）口径は不明。内外面とも水挽き痕が強く残る。焼成良好。青灰色を呈す。

土製品

管状土錘（192・193）192は長さ4.3cm、径1.1～1.2cm。孔径３～４mm。重さ6.3g。193は長さ4.3cm、径1.0cm。孔径３mm。重さ4.0g。いずれも焼成良好。明褐白色。

ＳＸ26　出土遺物（Fig.70－196）

石製品

滑石製匙（196）長さ10.5cm、幅5.9cm、厚さ1.3～2.4cm。石鍋の体部分を再加工し転用している。裏面には炭化物が付着している。

ＳＸ34　出土遺物（Fig.71－189～191、PL.44）

土師器

皿（189・190）口径・器高は8.5～8.7cm・1.0～1.1cm。いずれも糸切りである。焼成はあまり良くなく、焼き歪みあり。色調は褐色～明褐色。

青磁

碗（191）碗Ⅱ-1類。口径16.1cm、器高6.5cm。口径に比して器高がやや低い形態である。半透明の青みのある緑色で発色は良好。蓮弁文は細身で丁寧な作りである。

ＳＸ39出土遺物（Fig.72－205）

白磁

高台付皿（205）高台付皿Ⅲ類に形態的に似るが、内面に施文は見られない。見込み内底を輪状に掻き取っている。口径・器高は11.8・3.0cm。透明な灰白色。

ＳＸ44出土遺物（Fig.72－206）

陶器

坏（206）口径・器高は10.5・3.3cm。底部はヘラ切り離し。内面には褐色の薄い釉を施釉。

ＳＸ58出土遺物（Fig.72－207、PL.44）

土師器

坏（207）口径・器高は12.7・5.3cm。口縁部内面に弱い稜がつく。底部は糸切り離しか。

ＳＸ59出土遺物（Fig.72－208、PL.44）

瓦器

皿（208）口径・器高は10.9・2.6cm。内面はヘラミガキで、外面底部はヘラ切り。焼成は硬くしまり、良好。色調は黒灰～灰白色を呈す。

ＳＸ60出土遺物（Fig.72－209・210）

土師器

皿（209）口径・器高は8.6・1.2cm。底部は糸切り底。器面は荒れている。胎土精良。焼成は良好。色調は赤褐色を呈す。

坏（210）口径・器高は8.6・1.2cm。体部は直線的に体部から延びる。焼成はあまくもろい。暗褐色を呈す。底部は糸切り底である。

ＳＸ62出土遺物（Fig.72－211・212）

土師器

皿（211・212）いずれも糸切り底である。口径・器高は211が8.2・0.95cm、212が8.2・1.5cm。焼成はあまり良くない。色調は褐色～明褐色を呈す。

ＳＸ64出土遺物（Fig.72－213～218、PL.44）

土師器

皿（213・214）いずれも糸切り底である。214は軽くナデ消している。口径・器高は213が8.1・1.4cm、214が8.6・1.2cm。いずれもよくしまっており焼成良好。明褐色～褐白色。

坏（215～218）いずれも糸切り底である。215～217は形態的にほとんど同じで、体部中央に弱い稜が巡る。口径・器高はおおむね12.1～13.0・2.4～2.8cm。焼成はあまり良くなく、もろい。色調は褐色～明褐色である。

ＳＸ65出土遺物（Fig.72－219～223、PL.45）

白磁（219・221）口径・器高は219が11.6・4.2cm、221が17.8・（不明）である。219は小碗で胎土、成形、釉調・色は第Ⅵ-1類によく似る。口縁端部はわずかに外反。薄い灰緑白色。221は碗第Ⅵ-1類である。口縁部は水平に引き出されている。やや不透明な灰白色。

青白磁

合子身（222）胴部の復元径は6.4cmである。胎土焼成ともに良好。肩部の施文は型押しによる。釉色は淡く青みがかった白色。胴部中央で接合し成形している。底部はヘラ切り。

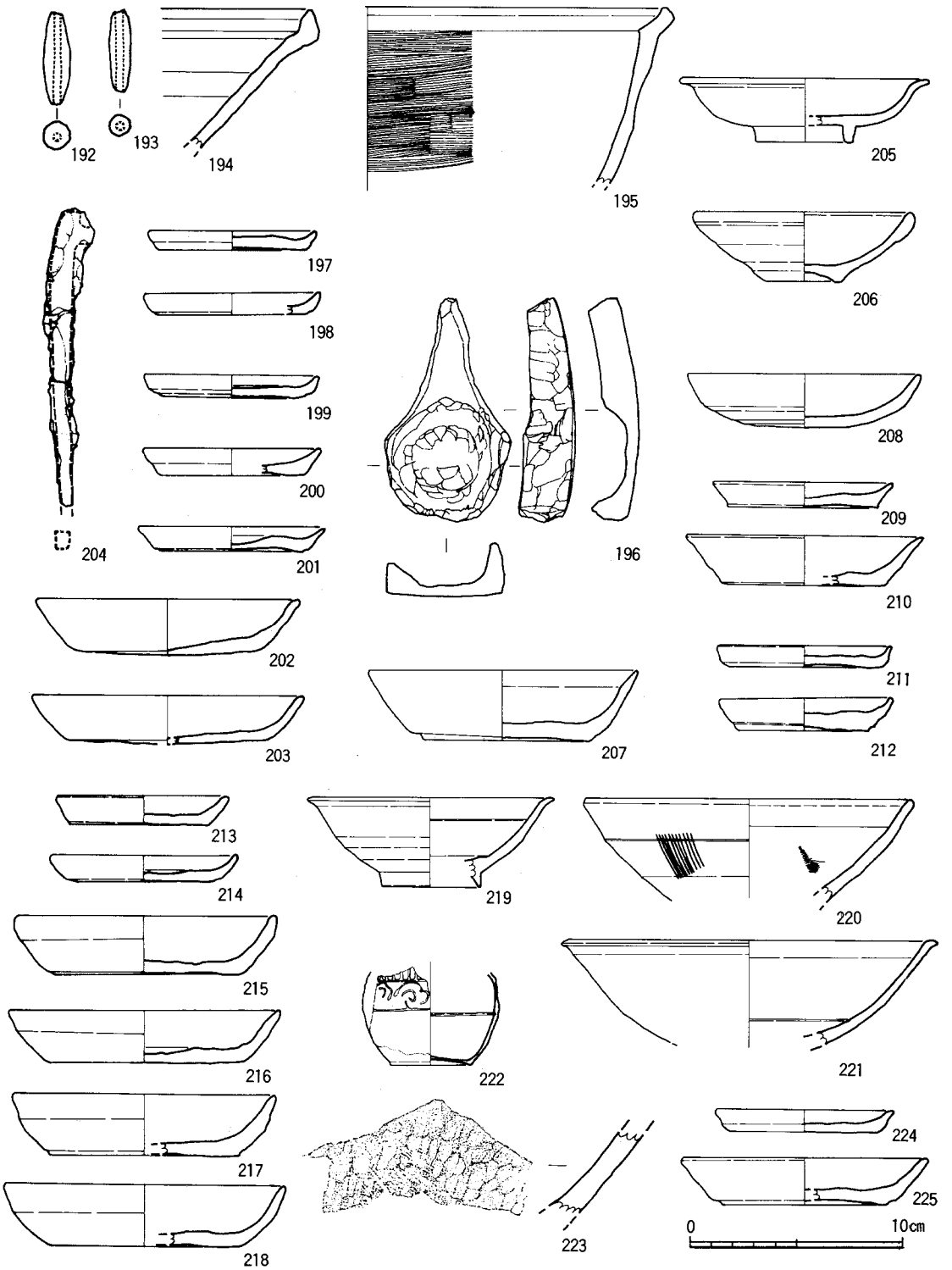


Fig. 72　竪穴遺構（SX24～26・39・44・58～60・62・64・65・67・82）出土遺物実測図（1/3）その3

（192：SX24、193～195：SX25、196：SX26、197～204：SX82、205：SX39、206：SX44、207：SX58、208：SX58、208：SX59、209～210：SX60、211・212：SX62、213～218：SX64、219～223：SX65、224・225：SX67）

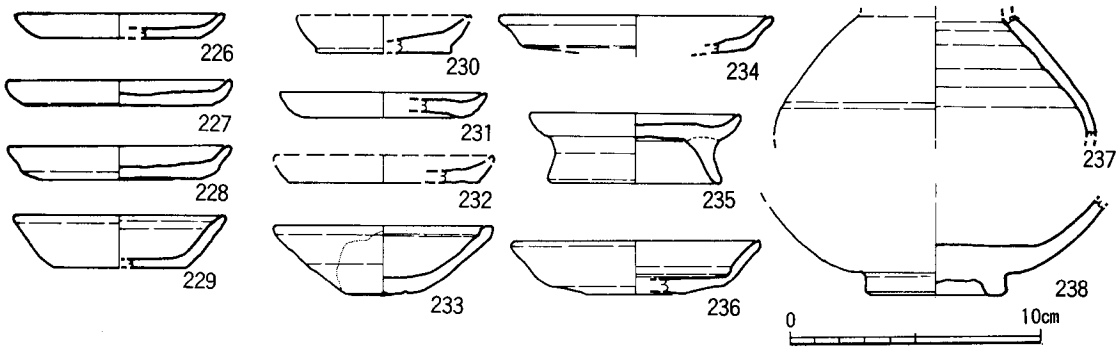


Fig. 73 竪穴遺構（ＳＸ69･70･72）出土遺物実測図（1/3）その４

(226～229：ＳＸ69、230～233：ＳＸ70、234～238：ＳＸ72)

青磁

碗（220） 同安窯系である。碗Ⅱ類。復元口径15.2cm。内面および外面に櫛描文を施文。淡い灰青色を呈し、釉は透明なガラス質である。やや粗製である。

石製品

滑石製石鍋（223）石鍋底部近くの破片である。内面は磨研され平滑。外面はケズリ成形。

ＳＸ67出土遺物（Fig.72－224・225）

土師器

皿（224）口径・器高は8.4・1.0cm。糸切り底である。焼成あまくもろい。褐色を呈す。

坏（225）口径・器高は11.8・2.2cm。こぶりの坏である。底部は糸切り底。焼成はあまく軟質でもろい。色調は褐色を呈す。

ＳＸ69出土遺物（Fig.73－226～229）

土師器

皿（226～228）口径・器高は8.2～9.0・0.9～1.3cmにおさまる。胎土はいずれも精良であるが、焼成はあまくもろい。色調は褐色～明褐色。227がヘラ切りで、他は糸切り底である。

白磁

皿（229）口縁端部を施釉の後掻き取っている。いわゆる口禿の白磁である。底部も掻き取っている。復元口径・器高は8.4・2.1cmである。底部は平坦。不透明な灰白色を呈す。

ＳＸ70出土遺物（Fig.73－230～233、PL.45）

土師器

皿（230～232）口径・器高は7.1～8.6・1.1～1.5cm。いずれも糸切り底である。胎土は精良だが焼成不良。色調は褐色～明褐色を呈す。

陶器

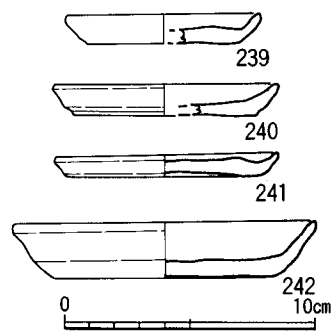


Fig. 74 竪穴遺構（ＳＸ73）出土遺物実測図（1/3）その５

坏（233）口径・器高は8.8・2.8cmを測る。胎土は精緻で黒灰褐色。内面から口縁部外面まで暗灰褐色の釉を薄く施釉。底部はヘラ切り。

ＳＸ72出土遺物（Fig.73－234～238）

土師器

皿（234）口径・器高は10.8・1.3cmを測る。底部はヘラ切り離しである。明赤褐色。

高台付皿（235）口径・器高・高台高は8.4・2.8・1.9cmを測る。坏底部は糸切り。褐色。

青磁

皿（236）同安窯系（皿Ⅰ-1類）。口径・器高は9.6・2.1cm。釉はガラス質の淡い灰緑色。

碗（238）龍泉窯系（碗Ⅰ-5類）である。高台径・高は5.6・0.8cm。釉は厚いモスグリーン。

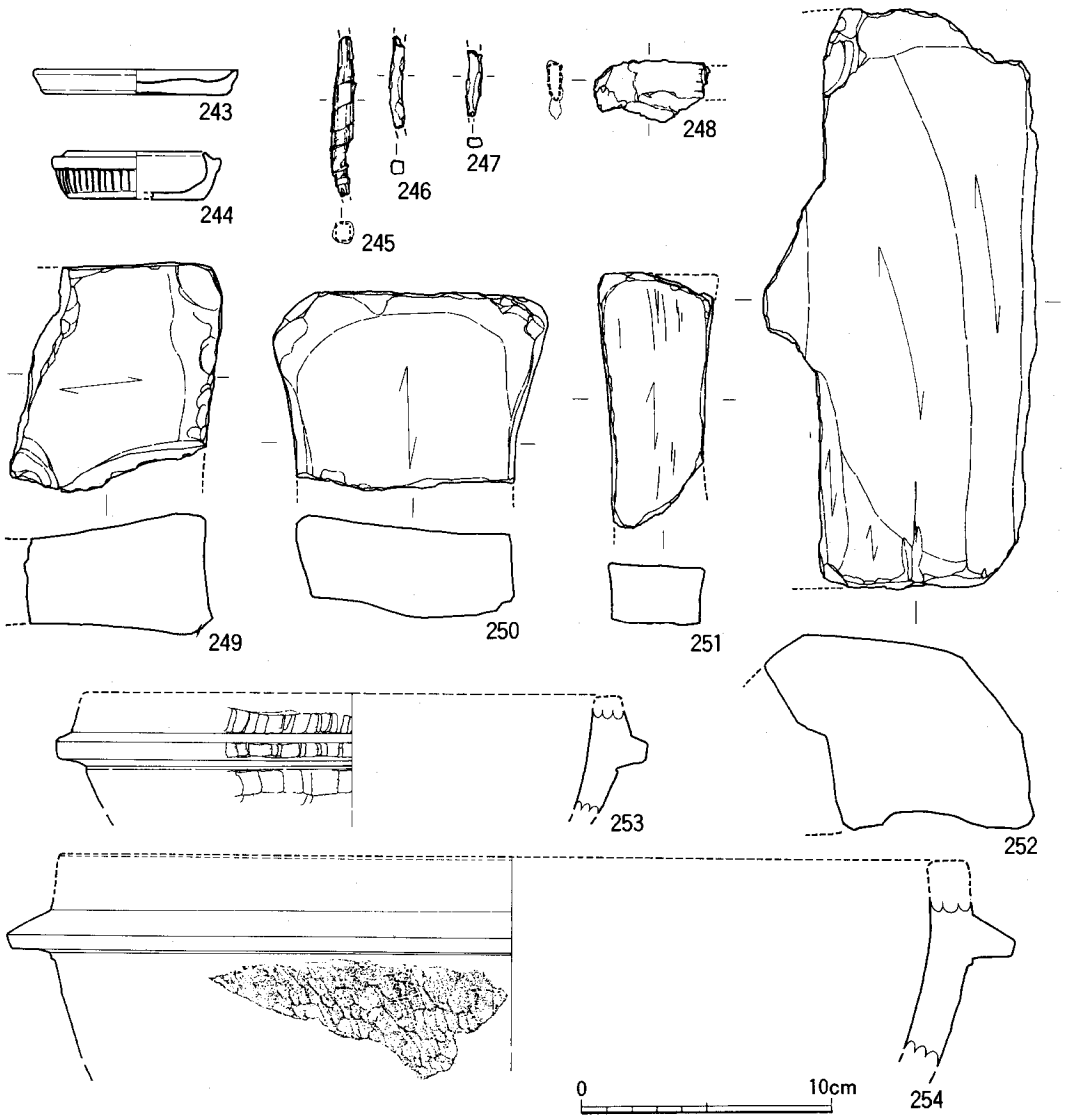


Fig. 75　竪穴遺構（ＳＸ74）出土遺物実測図（1/3）その６

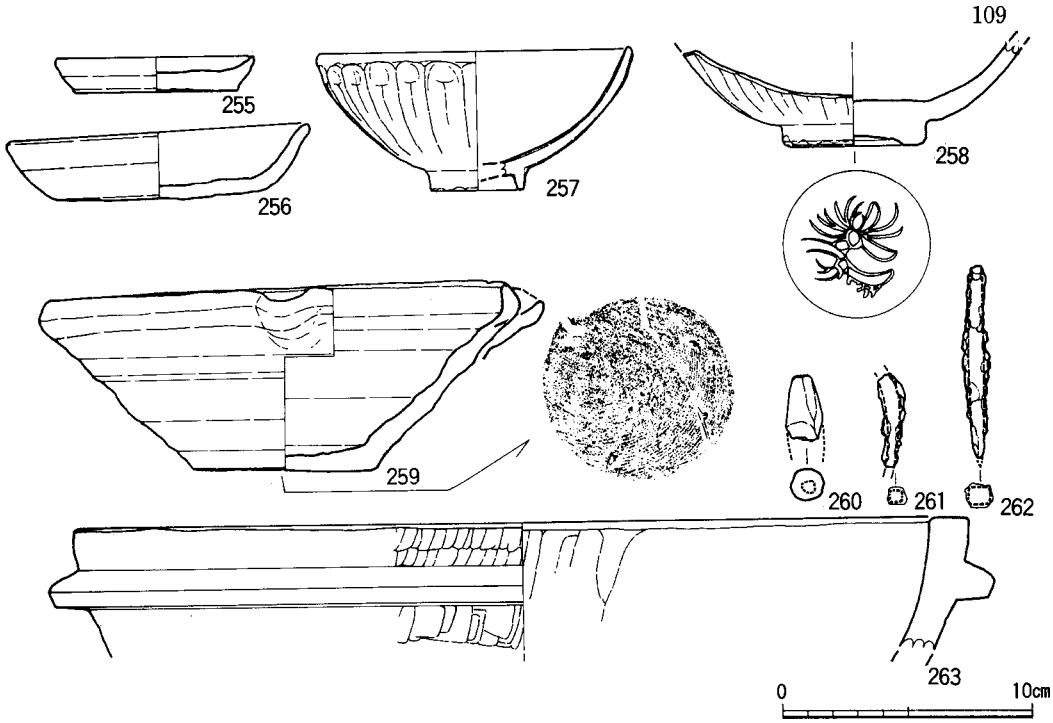


Fig. 76　竪穴遺構（ＳＸ75）出土遺物実測図（1/3）その７

壺（237）肩部片である。器形はやや肩の張るもので、復元径は13cm。不透明な灰緑色。

ＳＸ73出土遺物（Fig.74－239～242）

土師器

皿（239～241）口径・器高は7.6～9.0・0.9～1.2cm。いずれも糸切り底。灰褐～褐色。

坏（242）口径・器高は12.3・2.2cmを測る。底部は糸切り底である。焼成不良。明褐色。

ＳＸ74出土遺物（Fig.75－243～254）

土師器

皿（243）口径・器高は8.2・1.0cm。底部は糸切り底。焼成不良でしまりない。明褐色。

陶器

合子身（244）内面および体部外面に緑褐色の釉を施釉。ややムラがあり。底部はおそらく掻き取っているものと思われる。胎土は褐白色の泥質土。口径・器高は8.2・1.0cm。

鉄製品

釘（245～247）いずれも断面形が長方形の釘の破片である。246は頭部がわずかに残る。

刀子（248）　刀子柄の破片である。幅は

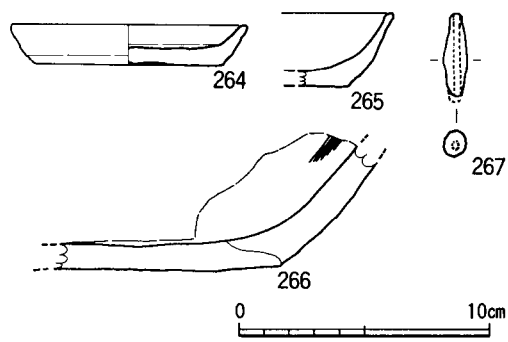


Fig. 77　竪穴遺構（ＳＸ76･77･81）出土遺物実測図（1/3）その８
(264：ＳＸ76、265・267：ＳＸ77、266：ＳＸ81)

1.4cm。

石製品

砥石（249～252）251以外はいずれも砂岩製の荒砥用砥石で、半欠品である。251は泥質砂岩製で中砥用の砥石である。研ぎ面はいずれも使い込まれており平滑である。

滑石製石鍋（253・254）いずれも石鍋の鍔部分である。復元口径は253が19.3cmで小型のもので、254が36cmで大型品である。外面には炭化物が付着。外面はケズリによる成形。

ＳＸ74出土遺物（Fig.75－255～263、PL.45）

土師器

皿（255）口径・器高は7.9・1.2cm。糸切り底で、板目圧痕がある。焼成不良。褐色。

坏（256）口径・器高は12.2・2.5cm。糸切り底である。焼成不良でしまりない。明褐色。

須恵質土器

片口鉢（259）口径・器高・底径は18.6・6.8～7.2・7.5cm。胎土はやや粗く、灰白色を呈す。なお口縁部は黒灰色。焼成はあまくしまりも悪い。底部は右回転の糸切り離し底である。

青磁

碗（257・258）口径・器高・高台径は257が12.2・5.4・3.6cm、258が高台径5.6cmである。257は小碗（碗Ⅲ類）で、厚くかかった釉は発色が良好で深い緑色。258は見込み内底部に草花文のある蓮弁文碗Ⅱ-1類である。

土製品

土錘（260）半欠品である。現存の長さ・径・孔径・重さは2.6・1.3・0.4cm・3.8gである。

鉄製品

釘（261・262）いずれも頭部、先端部の欠損品である。断面形は長方形。腐食が顕著である。

石製品

滑石製石鍋（263）口縁部片である。復元口径は32.6cmで大型品である。口縁から外面にかけて炭化物が付着している。内面にはケズリ成形の痕が若干残っている。

ＳＸ76出土遺物（Fig.77－264）

土師器

皿（264）　口径・器高は9.4・1.6cmである。底部は糸切り底。焼成はしまり悪い。褐色。

ＳＸ77出土遺物（Fig.77－265・267）

土師器

坏（265）器高は1.6cmである。口径は15.6～16cmほどか。胎土は精良。明褐色。

土製品

土錘（267）現存の長さ・径・孔径・重さは3.3・1.1・0.3cm・2.2g。焼成良好。

ＳＸ81出土遺物（Fig.75－266）

土師質土器

擂鉢（266）　糸切り後板目圧痕のみられる底部片である。一単位６条の下ろし目がつく。

ＳＸ82出土遺物（Fig.72－197～204）

土師器

皿（197～201）いずれも糸切り底である。口径・器高はおおむね8.0～8.8・0.9～1.2cmを測る。焼成は悪く、もろい。褐白色～茶褐色を呈す。

土師器

坏（202・203）口径・器高は202が12.5・2.5cm、203が12.9・2.2cm。底部はいずれも糸切

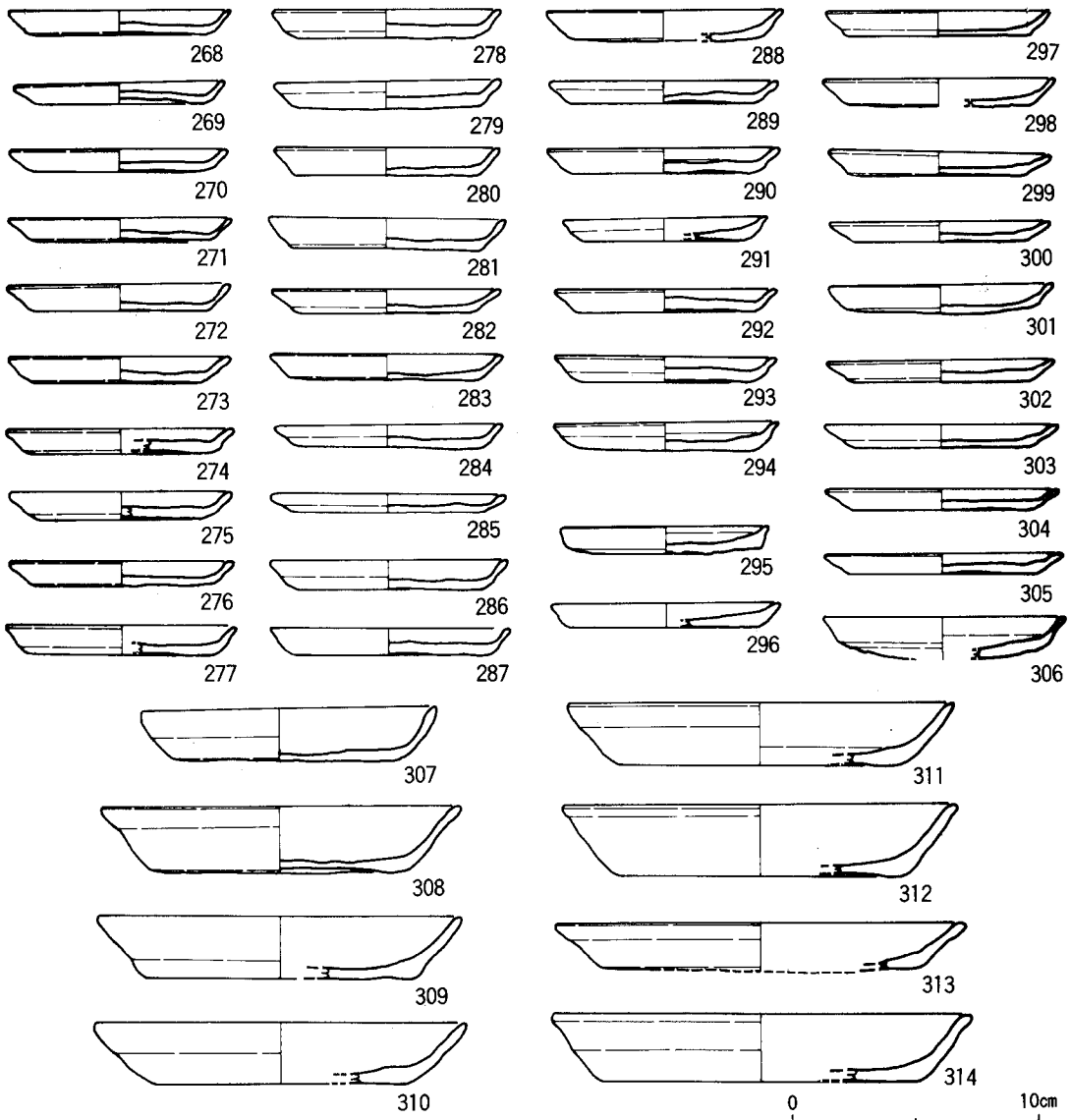


Fig. 78　竪穴遺構（ＳＸ83）出土遺物実測図（1/3）その９

り離し。焼成は不良でしまり悪い。明褐色。

鉄製品

用途不明（204）先端部は欠損。現存長は14.0cm。断面形は方形。

ＳＸ83出土遺物（Fig.76－268～314、PL.45）

土師器

ＳＸ83からは一括投棄と考えられる土師器皿、坏が多量にまとまって出土した。口径等の計測が可能な破片は皿が311点、坏が42点である。そのうちの皿については39点を、坏は８点を図示した。ここでは出土土師器について概括的に説明する。

皿（268～306）出土したものの口径は8.5～10.0cm、器高は0.9～1.1cmの範囲内におさまる。量的には口径が9.0～9.6cm、器高が、1.1cmに集中する。底径は7.0～8.0cmの範囲で、7.4cmが最も多い。底部の切り離しはヘラ切りが主体を占め、板目を残すものがほとんどである。糸切りのものは278・279・290で数は少ない。全体に作りは薄手で焼成は良好である。色調は赤褐色のものが主で、明褐色のものもある。形態的な差異はあまりなく、口縁部がわずかに外反するものがあるが、体部はほぼ直線的に口縁に続き、底部は扁平かやや上げ底ぎみのものが多い。なお291・295は混入の可能性がある。

坏（308～314）出土した坏の口径は15.0～16.0cmの範囲にまとまり、15cmが４割以上を占める。器高は2.4～3.3cmの範囲内におさまり、2.7～3.0cmに約５割以上のものがまとまる。底径については9.8～12cmまでの範囲におさまり、10～11.0cmにおさまるものが約７割以上を占める。器形・手法上にはほとんど差はない。底部は扁平で、底部と体部の境には明瞭な稜を有する。体部はほぼ直線的に口縁へのび、口縁部は丸くおさめている。わずかに外反するものもある。切り離しの手法が分かるものは全体の４割ほどであるが、それらはすべて糸切り底である。土師器皿の切り離し手法との差異が注意されるところである。色調はほとんどが赤褐色。なお、307は混入の可能性がある。

瓦器

皿（306）復元口径・器高は10.0・1.65cm。胎土精良。焼成はやや軟質。内面は灰白色。

4) 溝状遺構・礫群出土の遺物（Fig.79～83、PL.45・46）

溝状遺構からの遺物の出土は、ＳＤ08が量的にややまとまっているものの、他は出土量は少ない。いずれも埋没してゆく過程において二次的に堆積したものであり、直接的に時期を比定できるものはない。ほとんどがが小片であり、ここでは図示し得たものについて説明する。

ＳＤ02出土遺物（Fig.79－315）

白磁

碗（315）口径・器高・高台径は16.0・5.4・6.0cm。釉は体部内面から外面中央まで施釉されている。見込み内底は輪状に掻き取られている。高台はケズリ出し。釉は半透明の灰白色。

ＳＤ07出土遺物（Fig.79－316・317）

石製品

滑石製石鍋（316）口縁片で、復元径は21cm前後。器面調整はやや粗い。炭化物が付着。

土製品

管状土錘（317）完形品である。長さ・径・孔径・重さは4.5・0.9・0.7cm・2g。焼成良。

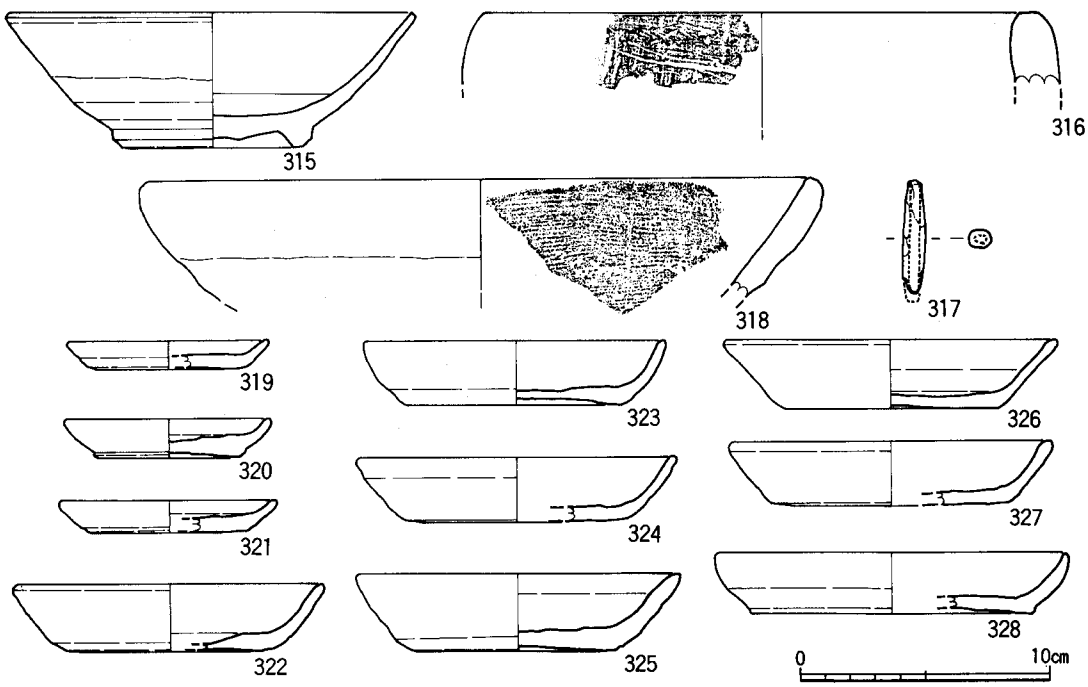


Fig. 79 溝状遺構（ＳＤ02･07･08）出土遺物実測図（1/3）その１

(315：ＳＤ02、316、317：ＳＤ07、318～328：ＳＤ08)

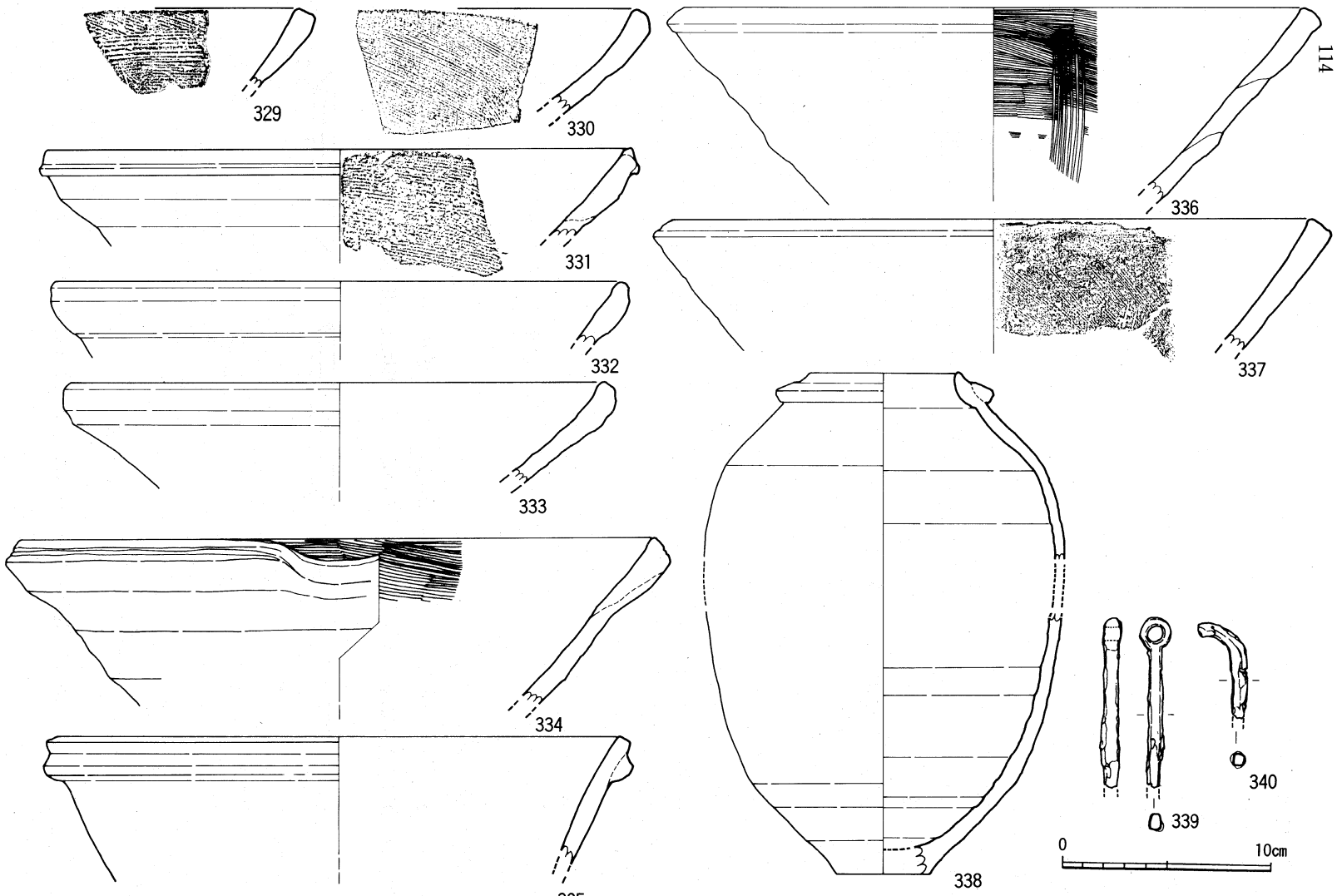


Fig. 80　溝状遺構（ＳＤ08)出土遺物実測図（1/3）その２

ＳＤ08出土遺物（Fig.79－318～328・80－329～340、PL.45）

土師器

皿（319～321）口径・器高は8.0～8.7・1.1～1.5cmほどを測る。いずれも糸切り底。319は切り離しの後ナデ消している。焼成はあまり良くなくもろい。明褐色～明褐白色。

坏（322～328）口径・器高は12.1～14.0・2.4～2.8cmを測る。322～324・327はほぼ同じ形態である。326は体部が直線的で、底部径が口径、器高に比しやや小さい。328は体部がやや内湾ぎみのもので特徴的な形態である。いずれも焼成はあまり良くない。褐色～明褐白色。

土師質土器

擂鉢（326・327）口径はいずれも30.0cmを測る。内面は目の細かいハケ目調整が行われた後に、下ろし目（５～６条）がつく。焼成はよく硬くしまっている。褐白色～明褐白色。

瓦質土器

擂鉢（318・329～334）口径が復元できるものは318・331～334の５点である。おおむね26～30cmほどの大きさである。全体の器形が分かるものはないが、口縁部は肥厚し、わずかに内面側が内湾ぎみである。内面は横位のハケ目調整、外面はナデ仕上げである。還元炎で焼成されたものと思われ、色調は体部が暗灰色～灰白色を呈し、一部に口縁部が黒灰色を呈すものもある。焼成は、良く焼きしまっている。下ろし目はあまり明瞭でない。

釜（335）復元口径は27cm。口縁部直下に断面が台形の弱い突帯（鍔）がつく。焼成ややあまく、軟質である。器面はハケ目調整後ナデ仕上げ。外面は黒灰色を呈す。体部は直立するか。

陶器

壺（338）口径・器高・胴部最大径・底径は7.1・25・17.2・4.4cmを測る。胎土は暗赤紫褐色で硬くしまる。釉は茶褐色で内外面全体に薄くかかる。耳が付く可能性がある。

鉄製品

不明（339・340）339は轡とも思われるが明確ではない。断面は隅丸方形で、端部に孔径が0.8～1.1cmの輪を作りだしている。現存長8.2cm。直線部分の幅・厚さは0.45・0.8cmである。340は釘の可能性がある。先端部は欠損している。断面形は長方形で折れ曲がっている。

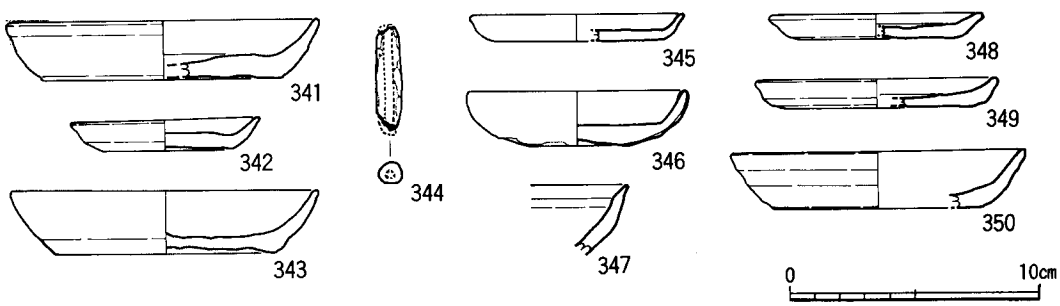


Fig. 81　溝状遺構（ＳＤ24･32･40･64）出土遺物実測図（1/3）その３

(341：ＳＤ24、342・343：ＳＤ38、344～346：ＳＤ40、347：ＳＤ49、348～350：ＳＤ64)

ＳＤ24出土遺物（Fig.81－341）

土師器

坏（341）口径・器高は、12.5・2.4cm。焼成は軟質でしまり悪い。色調は明褐色を呈す。

ＳＤ38出土遺物（Fig.81－342・343）

土師器

皿（342）口径・器高は、7.6・1.3cm 。調整痕は不明。焼成は軟質でもろい。明赤褐色。

坏（343）口径・器高は、12.2・2.4cm。胎土は砂を含みややきめ粗い。焼成は軟質でしまり悪い。明褐色を呈す。底部は回転転糸切りで、焼けひずみで上げ底となっている。

ＳＤ40出土遺物（Fig.81－344～346、PL.45）

土師器

皿（345）薄手で良質の皿である。口径・器高は、8.6・1.1cm。色調は赤褐色を呈す。

白磁

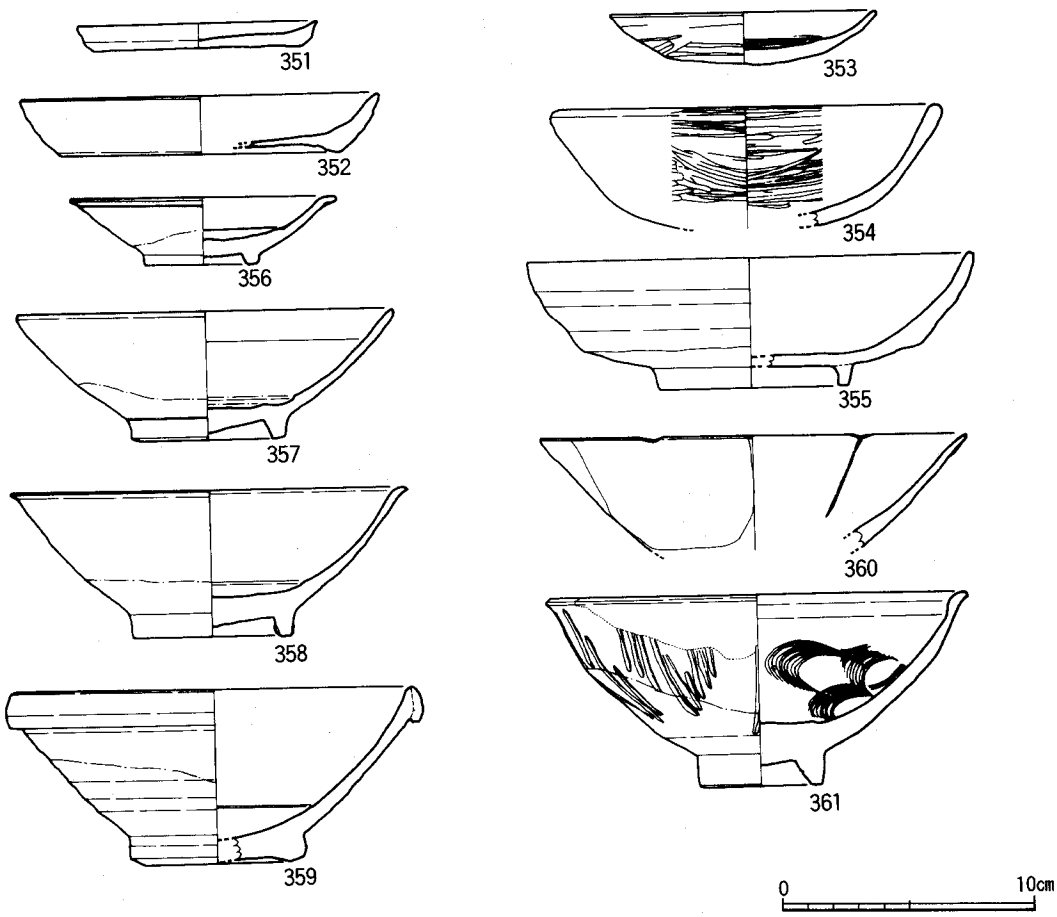


Fig. 82　ＳＸ2403（礫群）出土遺物実測図（1/3）

皿（346）皿Ⅵ類。内面に施文はない。口径・器高は8.5・2.1cmである。釉は厚く、むらがある。体部下半と底部は施釉の後で掻き取っている。

土製品

管状土錘（344）両端部がわずかに欠損。現存長・径・孔径・重さは4.2・0.8～1.0・0.3・3.5gである。焼成はややもろい。明褐白色。

ＳＤ49出土遺物（Fig.81－347）

陶器

碗（347）黒釉天目の碗である。小片のため口径は不明。内外面ともにやや厚手の黒褐色の釉がかかりシノギが見られる。口縁部はわずかに内へ屈曲し、端部が引き出されている。

ＳＤ64出土遺物（Fig.81－348～350）

土師器

皿（348・349）口径・器高は348が8.7・1.2cm、349が9.6・1.1cm。348は糸切り底で板目圧痕が底部に残る。349はヘラ切りと思われる。いずれも焼成はあまり良くない。明褐色。

坏（350）やや小ぶりの坏である。復元径・器高は11.8・2.3cm。糸切り底。明黄褐色。

礫群出土の遺物

ＳＸ2403出土遺物（Fig.82－351～361、PL.45）

土師器

皿（351）やや薄手で良質のものである。口径・器高は9.4・1.1cm。黄褐色。糸切り底。

坏（352）口径・器高は14.4・2.3cm。 底部はやや薄い。焼成悪く軟質。淡黄褐色。

碗（355）口径に比して器高が低い器形の碗である。口径・器高・高台径は17.8・5.2・7.2cm。器面が荒れているため明確でないが、内面はヘラミガキ。高台は断面コの字の安定した作りである。

瓦器

皿（353）口径・器高は10.6・2.1cm。内面および外面の体部までヘラミガキ。底部は糸切りの後ヘラケズリ。焼成良好で、硬く焼きしまっている。灰色～黒灰色を呈す。

碗（354）口径に比して器高がやや低い器形である。口径・器高・高台径は15.1・（5.0）cm。体部下半は手持ちのヘラミガキで、内面から口縁部外面にかけては回転ヘラミガキ。焼成良。

白磁

皿（356）高台付皿Ⅱ類。口径・器高・高台径は10.6・2.6・4.4cm。口縁部はほぼ水平に外反する。釉は高台部以外全面に施釉。淡くオリーブ色がかった透明な灰色。

碗（357～360）357はⅨ類、358はⅥ類、359はⅣ類、360はⅦ類にそれぞれ分類される。口径・器高・高台径は357が15.2・5.1・6.2cm、358が15.8・6.0・6.4cm、359が15.9・7.0・

7.0cm、360が16.8cmである。釉色はおおむね不透明な灰白色～白色で、359がやや黄白色がかる。357と358の見込み内底部は輪状掻き取り。358の高台畳付には目跡が残る。360の口縁部には刻みが入り輪花となり、白堆線が入る。

青磁

碗（361）同安窯系碗Ⅰ類。口縁部は内側に肥厚しわずかに端部が外反する。外面には片切彫りによる縦線を施文。釉は透明な薄い灰緑色。口径・器高・高台径は16.8・7.6・4.9cm。

ＳＸ3137出土遺物（Fig.83－362～380、PL.45・46）

土師器

皿（362～370）364・365・367はヘラ切り底で、他は糸切り底である。363・366・370には板目圧痕がつく。口径は8.6～9.8cm、器高は1.1～1.5cm程にまとまる。ヘラ切り底のものは焼成が良好でよくしまっているが、他は不良。褐色～赤褐色。

坏（371）口径・器高は16.0・2.8cmである。ヘラ切りで板目圧痕が残る。焼成良好。

土師質土器

土鍋（378）復元口径・器高は31・(14)cm。口縁部は内湾し、口縁下４cmの部分から、わずかに外傾する。内面および外面の底部にはやや目の粗いハケ目調整痕が残る。体部外面はナデ仕上げで、指頭圧痕が部分的に残る。内面の底部には下ろし目様の縦方向の沈線が見られる。

瓦器

碗（372～375）いずれも口径に比して器高が低い器形である。安定したやや高い高台がつく。体部は、372がその下位でわずかに稜線を持つ以外は緩い弧を描いて口縁部へ続いている。375の口縁端部は若干外反しているが、他は丸くおさめている。体部中央部までヘラケズリで器面成形が行われ、部分的に指頭圧痕を体部の下部に残すものがある。内面から口縁外面にかけては回転ヘラミガキ。見込み内底についてはミガキの方法は不明である。口径・器高・高台径はおおむね16.6～17.8・5～5.5・6～7.5cmである。

須恵質土器

片口鉢（376・377）復元口径は376が22.4cm、377が26.6cm。口縁部は平坦に切り落とされている。内外面とも水挽き痕を残す。焼成は良好で固くしまる。わずかに鉄分の吹き出しがある。色調は薄く青みがかった灰～灰白色である。東播磨地方産のものか。

青磁

碗（379）同安窯系青磁碗Ⅰ類。復元口径・器高は16.2・7.9・5.4cmである。器高がやや高い器形で、口縁の屈曲が弱く、わずかに肥厚しているという特徴がある。発色は良好で、透明な青緑色である。

陶器

甕（380）口縁部が逆Ｌ字形に内側に張り出すもので、復元口径（内径）は51.9cm。胎土は白色砂を含みきめ粗いが、硬く焼きしまっている。体部に薄い褐色～黄褐色の釉がかかる。

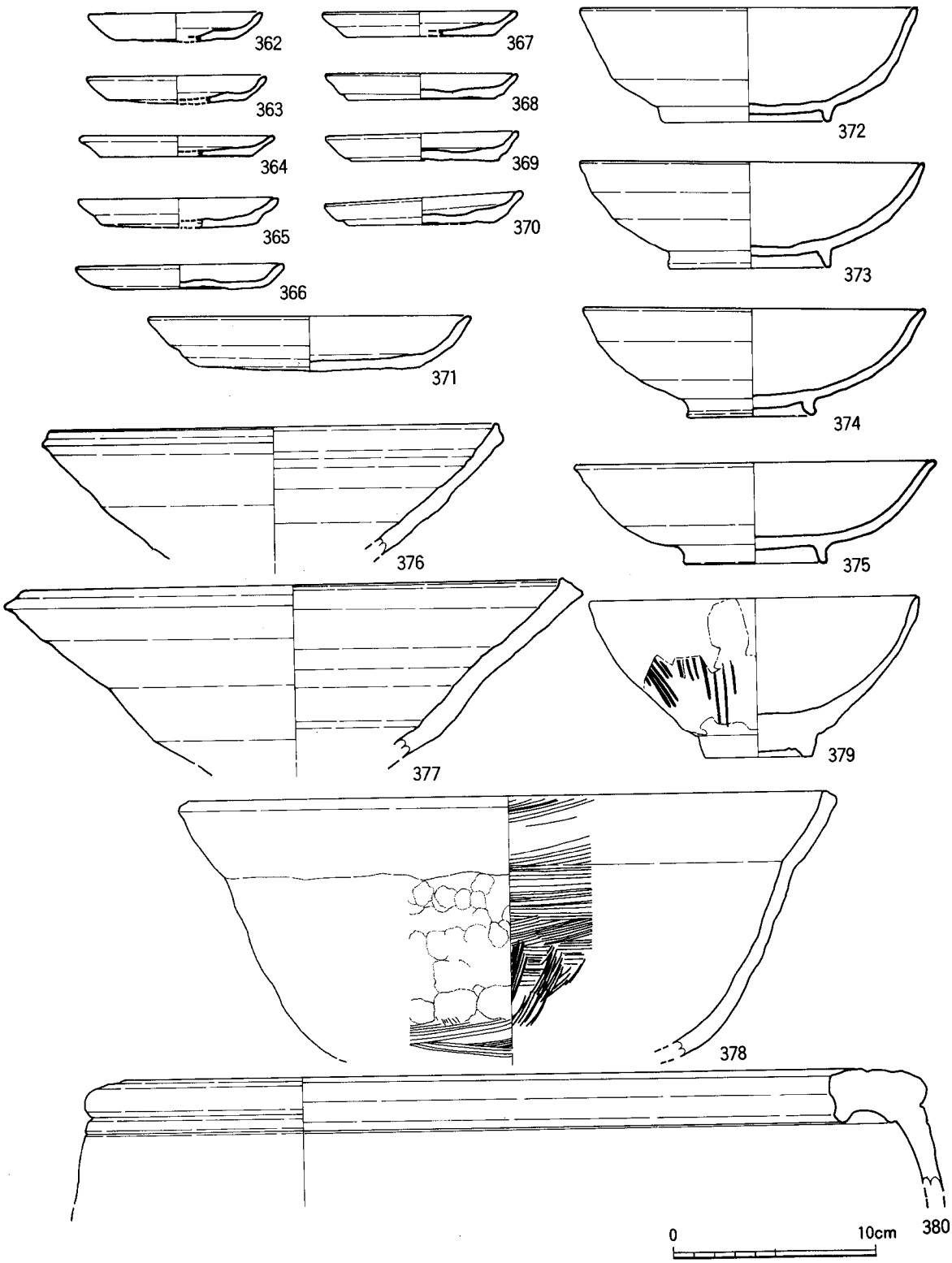


Fig. 83　S X3137（礫群）出土遺物実測図（1/3）

5) 土壙・土壙墓・木棺墓出土の遺物（Fig.84～87、ＰＬ.46～49）

ＳＫ01出土遺物（Fig.84－381・382）

土師器

皿（381）底部が厚手の皿である。口径・器高は8.5・1.4cm。焼成はやや不良。明褐色。

坏（382）形態的に皿（381）とよく似る坏である。口径・器高は12.8・3.0cm。焼成はややしまりが悪い。381と同様に底部に糸切り痕が明瞭に残っている。明褐色。

ＳＫ02出土遺物（Fig.84－383～387）

土師器

皿（383～387）口径・器高は7.5～8.6・1.0～1.4cmである。いずれも糸切り底である。383は糸切り痕を軽くナデ消している。器形は、385以外は体部と底部との境が不明瞭で、体部が丸みを帯びている。焼成はやや不良でいずれももろい。

ＳＫ03出土遺物（Fig.84－388～396、PL.46）

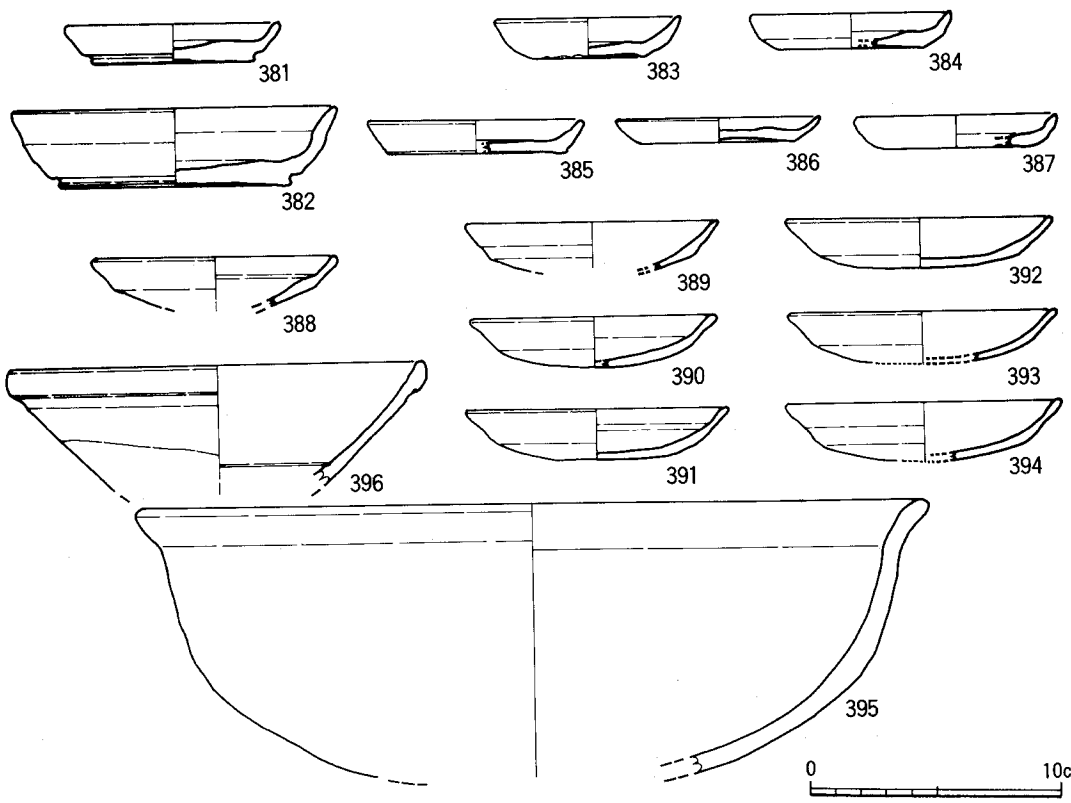


Fig. 84 土壙・土壙墓・木棺墓（ＳＫ01～03）出土遺物実測図（1/3）その１

(381・382：ＳＫ01、383～387：ＳＫ02、388～396：ＳＫ03)

土師器

皿（388～391・393）いずれもヘラ切り底の皿である。口径・器高は9.6～10.6・2.0～2.1cmである。底部は、388と389が直線的で扁平である以外はいずれも丸底である。ヘラ切り痕をそのまま残しているのは388のみで、他はナデもしくはヘラミガキを施している。

土師質土器

土鍋（395）口縁部は緩く外反する。体部との境はやや不明瞭で内面に明確な稜線を持たない。器形はやや浅めである。胎土は砂を含み粗いがよく焼きしまっている。暗褐色～褐色を呈し、外面は一部黒褐色で、炭化物が付着している。復元口径・器高は31・（11.1）cm。

瓦器

皿（392・394）口径・器高は10.6～11.2・1.9～2.3cmである。いずれもヘラ切り底である。394は切り離しの後にヘラミガキ（手持ち？）を施している。暗灰褐色～黒灰色を呈す。

白磁

碗（396）碗Ⅳ-2類。口径は19.0cm。器高は不明。釉は体部上半部に施釉されている。薄く黄緑色がかった灰色。

ＳＫ04出土遺物（Fig.85－418、PL.48）

鉄製品

小刀（418）現存長は28.8cm、刀身最大幅1.8～2.2cm、厚さ（0.4cm）ほどを測る。茎、刀身には柄・鞘に用いたと思われる木質が残っているが、遺存状況は悪い。

ＳＫ05出土遺物（Fig.85－397、PL.46）

青磁

碗（397）龍泉窯系碗Ⅱ類。完形である。口径・器高・高台径は16.8・6.9・5.2cmである。釉は全体に厚くかかっている。蓮弁はやや太身である。体部上半に氷裂が見られる。青みのある緑色。

ＳＫ07出土遺物（Fig.85－398）

白磁

碗（398）碗Ⅳ類。口径は14.7cm。釉は不透明で発色の悪い灰白色。体部下半まで露胎。

ＳＫ08出土遺物（Fig.85－399・400、PL.46）

土師器

皿（399・400）いずれも糸切り底である。399は底部が厚手である。口径・器高は7.8～8.5cm・0.9～1.5cm。焼成はよくなくしまりは悪い。褐色～明褐色を呈する。

ＳＫ10出土遺物（Fig.85－401～417、PL.47）

白磁

皿（412～416）412・413は平皿Ⅵ類、414～416は平皿Ⅲ類である。口径・器高はおおむね

10.4～10.5・2.5～3.2cmである。412・413の底部は全面施釉の後で釉を掻き取っている。体部はやや内湾気味である。いずれも弱い沈圏線が体部中位を巡る。釉は淡く緑がかった灰～灰白色である。414～416は全体に薄手の作りである。釉は体部中位まで薄くかかり青白～黄褐白色を呈す。部分的に薄く剝がれている。口縁部はいずれも沈圏線を境にして内湾気味に外傾。

碗（417）碗Ⅵ類。口径・器高・高台径は17.5・7.3・6.1cm。体部は高い高台から弧を描き口縁へ続く。口縁部はその上面を水平に切られている。透明な灰白色。比較的良品である。

石製品

不明（411）滑石製石鍋の鍔部分の転用品である。平面形は楕円形に仕上げている。摘みには0.8cmほどの穿孔がある。推定長・幅・高さは5.4・3.6・2.7cmである。

ガラス製品

小玉（401～409）六花鏡の下部でひとかたまりとなって出土した。いずれも風化が進んでおり、薄くめくれるように剝落している。この剝落の仕方はおそらくその製法と関連するものと思われる。大きさは現存値で、長径が0.8～1.0cm、短径が0.75～0.91cm、高さが0.75～0.95cmである。本来の大きさはこれらの値よりも0.01～0.02cmほど大きかったものと思われる。孔径は0.18～0.2cmである。色調はかすかに青みの残る白色である。

銅製品

六花鏡（410）土圧によって4つに割れている。土壙掘方の傾斜に沿って落ち込んだかのように出土した。法量は最大径が16.0cm、厚さが0.21～0.35cm、鈕は長さが1.0cmで幅0.7cmを測る。全体に薄手の作りで、銅質も悪く、脆弱な感じである。外縁断面形は蒲鉾状で、鏡面はわずかに凸面である。鏡背には非常に微弱であるが、幅2.12cm、長さ3.25cmの区画のある銘帯が見られる。残りが悪く解読は不可能である。鏡背にはわずかに繊維痕が銅錆と共に残っていることより、何らかの布に包んで埋置したことが考えられる。

ＳＫ13出土遺物（Fig.85－419）

瓦

丸瓦（419）掘方内に垂直に立って出土した。筒部外面に格子叩き目を、また内面に布目圧痕および指頭圧痕を残している。玉縁部の長さは4.1cm、幅は推定11cmほどである。

ＳＫ14出土遺物（Fig.85－420）

白磁

碗（420）復元口径・器高・高台径は18.0・7.0・6.6cmである。碗Ⅵ類。口縁端部は水平に切られている。体部内面には櫛描き文がある。釉調は透明度が高く、白色を呈す。

ＳＫ18出土遺物（Fig.85－421）

土師器

坏（421）口径・器高は13.6～2.7cm。糸切り底である。体部はやや外湾気味に立ち上がり、

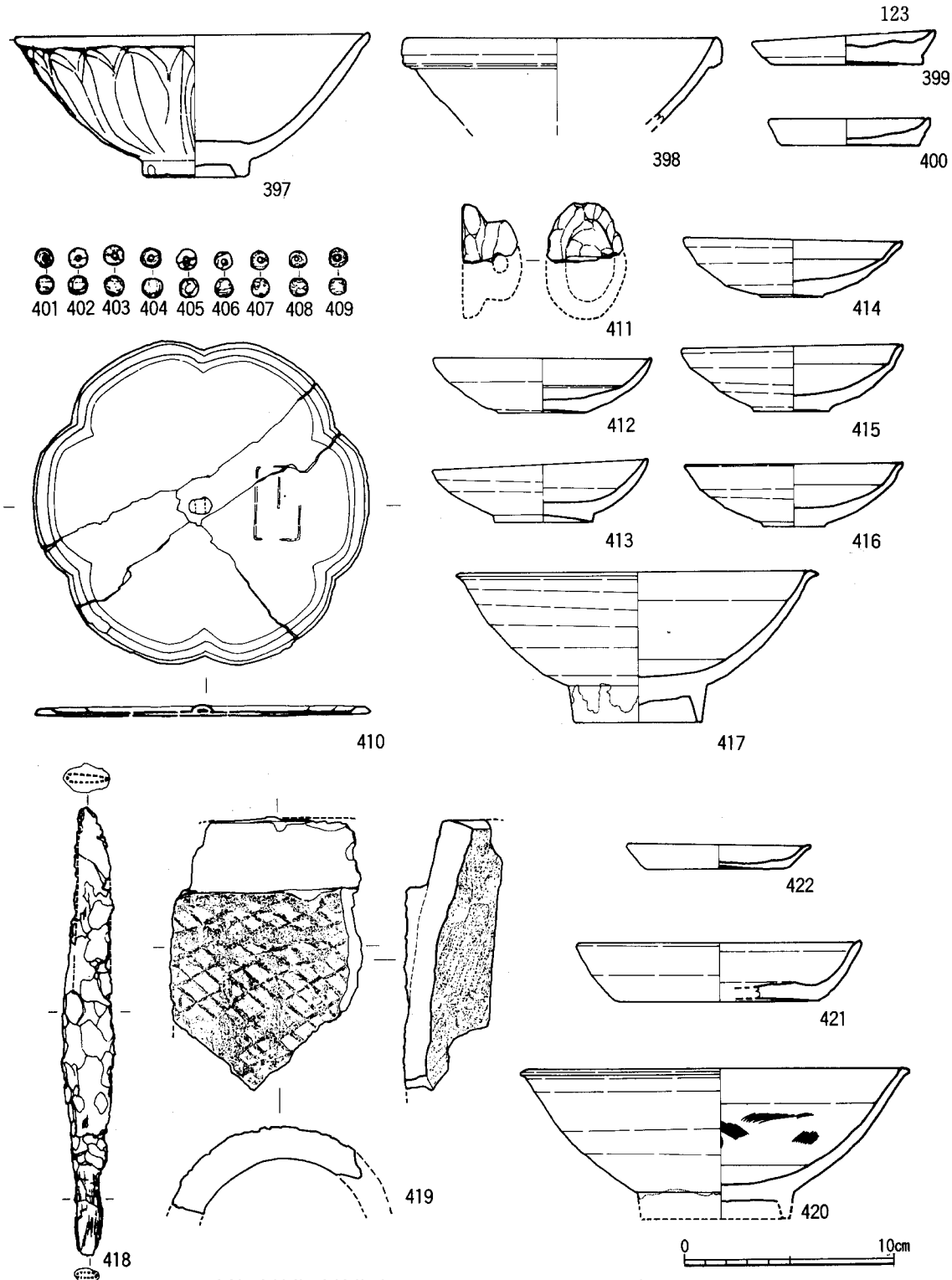


Fig. 85　土壙・土壙墓・木棺墓（SK04・05・07・08・10・13・14・18・19）出土遺物実測図（1/3）その2

（397：ＳＫ05、398：ＳＫ07、399・400：ＳＫ08、401～417：ＳＫ10、418：ＳＫ04、419：ＳＫ13、420：ＳＫ14、421：ＳＫ18、422：ＳＫ19）

口縁部は丸くおさめている。焼成は硬く焼きしまっている。明褐色を呈す。

ＳＫ19出土遺物（Fig.85－422）

土師器

皿（422）焼成時に焼き歪みがり、器形がややいびつになっている。口径・器高は8.6～8.9・0.85～1.2cm。焼成はあまくもろい。糸切り底で板目が残っている。

ＳＫ31出土遺物（Fig.86－423～439、PL.48）

土師器

皿（435～437）口径・器高は8.6～9.4・1.1cmを測る。すべて糸切り底である。体部と底部

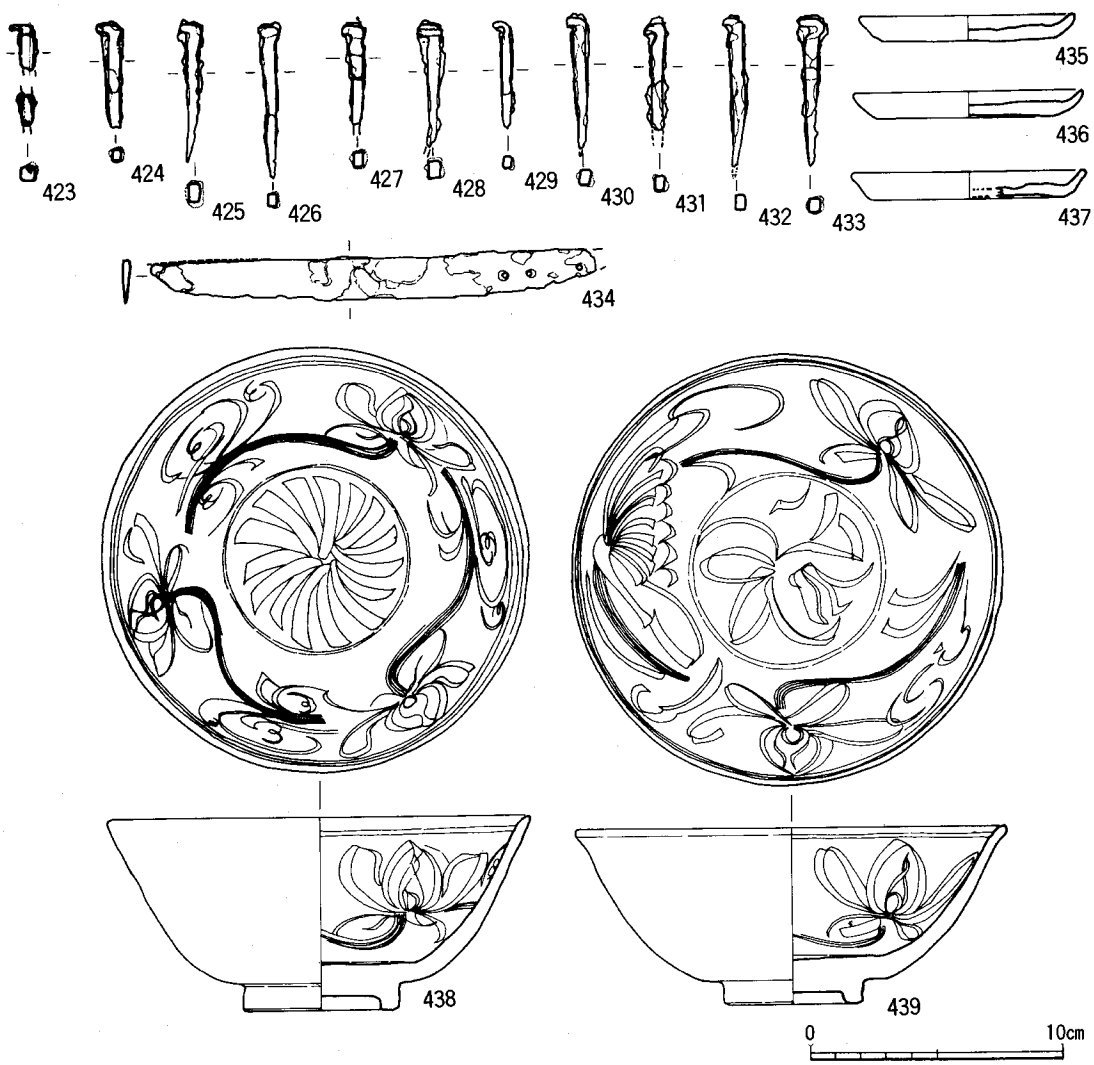


Fig. 86　木棺墓（ＳＫ31）出土遺物実測図（1/3）その３

の境はやや不明瞭である。437はわずかに口縁端部が外反している。褐色～明褐白色。

青磁

碗（438・439）口径・器高・高台径は438が16.8・7.7・6.2cmで、439が17.1・7.1・5.5cmである。いずれも体部内面に蓮花折枝文をヘラによる片切彫りで施文している。碗Ⅰ類。釉調は発色がよく透明なやや褐色がかった青緑色である。

鉄製品

釘（423～433）いずれも先端部が欠けており全長は不明であるが、4.5～6.5cmほどである。断面形は幅が0.4～0.6cm、厚さが0.35～0.5cmほどの長方形である。頭部は逆Ｌ字形に曲がっ

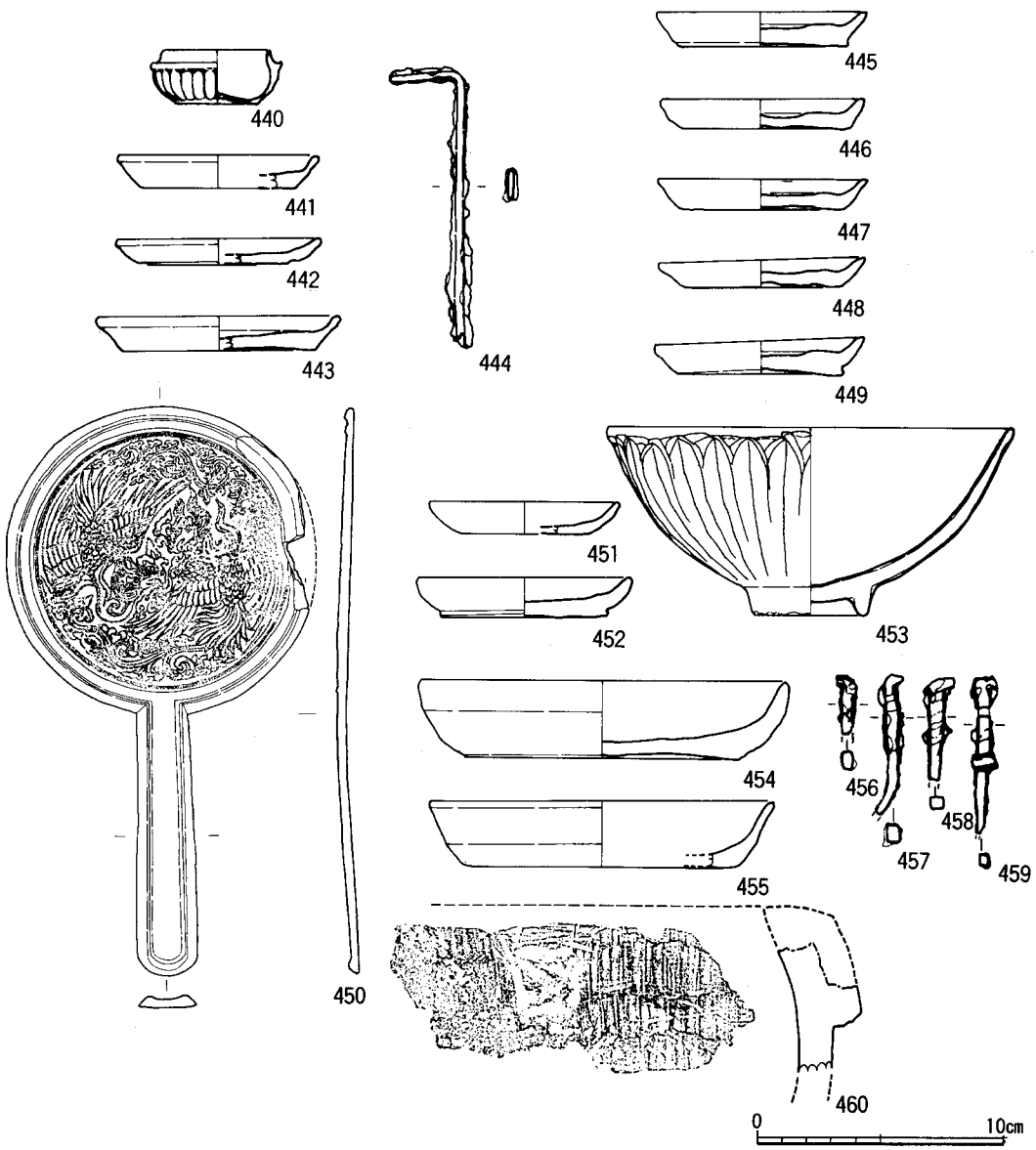


Fig. 87　土壙・土壙墓・木棺墓（ＳＫ32・34・36・38・39）出土遺物実測図（1/3）その４

(440～444：ＳＫ32、445～449：ＳＫ34、450～453：ＳＫ36、454：ＳＫ37、455～459：ＳＫ38、460：ＳＫ39)

ている。頭部には木質が付着し残っているものもある（425・428・433）。

刀子（434）茎部端がわずかに欠損している。現存長16.8cm、刀身の幅1.7～1.8cm、厚さ0.25cmである。峰は平坦と思われる。柄には目釘穴が二ケ所ないし三ケ所ある。

ＳＫ32出土遺物（Fig.87－440～444、PL.49）

土師器

皿（441～443）すべて糸切り底である。口径・器高はおおむね8.2～8.6・1.0～1.3cmである。441と443は形態的によく似ており、直線的な体部と底部の境は明瞭で、口縁部を丸くおさめている。442は体部の立ち上がりが弱く低い器高となっている。焼成は良くなくもろい。

青白磁

合子身（440）口径に比して器高がやや高い器形である。口径は4.3cm、器高は2.1cm、底径は5.5cmを測る。胎土は白色。釉は淡く青みのある透明釉で、薄く内面と体部上半にかかる。

鉄製品

不明（444）現存の形態はＬ字形であるが両端が欠けているために原形は不明である。断面形は、幅・厚さが1.2・0.15～0.2cmほどの長方形である。建具もしくは建築用の金具か。

ＳＫ34出土遺物（Fig.87－445～449）

土師器

皿（445～449）いずれも完形品で糸切り底である。445と449が底部が厚手であるが形態的にはほぼ同一である。体部はほぼ直線的に口縁へ続き、端部はやや先細りとなっている。口径・器高はおおむね8.5～8.7・1.2～1.5cmである。焼成はやや良好。褐色～明褐色を呈す。

ＳＫ36出土遺物（Fig.87－450～453、PL.49）

土師器

皿（451～452）口径・器高は451が7.9～8.0・1.2cm、452が8.6・1.2～1.5cmである。451は次に述べる柄鏡の下部で検出されたもので、452は埋土上層からの出土である。いずれも糸切りで、451は切り離し後軽くナデ消している。いずれも焼成はあまくもろい。明褐色を呈す。

青磁

碗（453）ほぼ完形である。口径・器高・高台径は16.7・7.7・4.4cmである。釉は全面に厚く施釉されているが、高台畳付部分は露胎で、胎土中の鉄分によって暗茶褐色となっている。蓮弁文はやや細身である。高台は口径に比して小さく、ややすぼまっている。龍泉窯系碗Ⅲ類。釉調は青みの深い緑色で発色良好。

銅製品

柄鏡（450）鏡背に鳳凰文をあしらった青銅製の柄鏡である。全長は23.4cmを測る。頭蓋骨の直上で、鏡面を表にして出土した。頭蓋骨との間には土師器皿が見られた。鏡面の一部が欠けている。作りは比較的良好で、鋳上がりもよく、鏡背には細線による浮文様に描かれた鳳凰

文が明瞭に残る。柄の一部には布の痕跡と板材と思われるものがわずかに残る。

ＳＫ37出土遺物（Fig.85－454）

土師器

坏（454）完形品である。口径・器高は15.0・3.2cm。糸切り底である。体部は丸みを帯びており特徴的な形態となっている。内外面ともナデ成形。焼成はややしまり悪い。褐白色。

ＳＫ38出土遺物（Fig.85－455～459）

土師器

坏（455）復元口径・器高は13.8～14.2・2.7cmほどである。糸切り底である。赤褐色。

鉄製品

釘（456～459）いずれも先端部が欠損している。復元長は5.5～6.0cmほどか。断面形は幅・厚さが0.5～0.7・0.4～0.6cmほどの長方形である。457以外には木質が付着し残っている。

ＳＫ39出土遺物（Fig.85－460）

石製品

不明（460）口縁部直下の耳部分の破片である。耳の下部は火を受けてボロボロになっている。口縁部と並行する耳の下側の側縁を二次加工して転用している。温石として用いたものか。

6）旧河川出土の遺物

旧河川（ＳＲ01・02・3723）からの出土遺物は少ない。ＳＲ01からは第Ｉａ区の中央部に位置する左岸（東岸）の落ち際から、土師器皿・坏、瓦器碗・皿などの破片が二次堆積の状況で出土したほかは、ＳＡ02の杭間に瓦器片が数点出土したのみである。ＳＲ02からも同様で、出土量は少なく、図示し得るものはない。ＳＡ01の掘り下げ時にＳＰ189から出土した小玉縁の白磁（Fig.63～48）に類するものが数点出土したのみである。

ＳＲ01出土遺物（Fig.88－461・463～468・470・471・473・474）

土師器

皿（461）ＳＲ01を完全に覆う第７層（Fig. 16）からの出土である。糸切り底である。
口径・器高は8.4・1.3cm。焼成はあまりよくなくもろい。褐色を呈する。

坏（643）第８層～９層上部に相当する東岸落際からの出土である。口径・器高は16.2・2.4cmを測る。体部は直線的。底部は糸切りで板目圧痕を残す。焼成不良。明褐白色。

碗（464）口径・器高・高台径は16.6・49・7.2cm。体部は下半部で屈曲し、口縁部へ続く。内外面ともに丁寧なヘラミガキ。見込み内底部は横位の手持ちヘラミガキである。焼成は良好でよくしまっている。色調は褐白色を呈す。

瓦器

碗（465・466）口径・器高・底径は465が15.4・5.2・6.4cmで、466が16.7・5.5・6.0cmを

測る。いずれも口径に比して器高の低い浅い形態である。体部下位に弱い稜が巡り，その下部には指頭圧痕が残る。焼成はややあまく，しまり悪い。黒灰～暗灰色を呈す。

須恵質土器

片口鉢（471）口径・器高・底径は27.4・11.2・9.3cmである。体部はわずかに外湾しながら口縁部へ続く。口縁端部は内側へ若干引き出されている。底部は糸切り底である。内外面とも水挽き痕を残す。口縁部が黒灰色の他は薄く青みがかった灰色。焼成は良好で硬く焼きしまっている。

瓦

平瓦（470）凹面側には目のやや荒い布目圧痕が残る。凸面側はヘラケズリによって成形している。焼成は良好で焼きしまっている。暗灰色。

白磁

皿（467）公台付皿Ⅱ類。口径・器高・高台径は9.6・2.7・3.8cmである。釉を輪状に掻き取った見込み内底には目跡が残る。体部の下半部は露胎。釉は半透明の灰白～灰乳白色である。

青磁

碗（468）同安窯系と思われる。器形は碗Ⅱ類に似る。体部は内面の沈圏線を境に上部でわずかに内傾し、口縁端部は弱く外反している。釉はガラス質で半透明の灰緑色である。口径・器高・高台径は15.3・6.6・5.6cmを測る。

ＳＲ3723出土遺物（Fig.88-462・469・472～475、89-492、PL.49）

土師器

皿（462）埋土上層（第５層）から出土した。口径・器高は8.0・1.5cmである。体部は直線上に立ち上がる。底部は糸切り底で，板目圧痕を残す。

土師質土器

擂鉢（492）器形は片口鉢である。体部の下半でわずかなふくらみを持つ。内面上半は横位のハケ目調整。外面はナデ消している。下ろし目は４～５条が一単位となり12ヶ所ほどに入れている。焼成はあまく軟質。明褐白色。

白磁

碗（469）碗Ⅵ類。口径・器高・高台径は17.3・7.3・6.1cmである。口縁部上端は水平に切る。見込み内底から体部下半にかけて、櫛描き文を施文する。高台部は露胎。灰白色を呈す。

木製品

不明（472～475）いずれも0.3～0.5mの厚さの柾目材を素材とする。473と474は長軸の両側縁が磨耗している。箆の可能性がある。

底板（472）桶の底板と思われる。直径17.7cmの円形で、厚さ0.5cを測る。板目材を素材とする。留穴には桜皮が残っている。

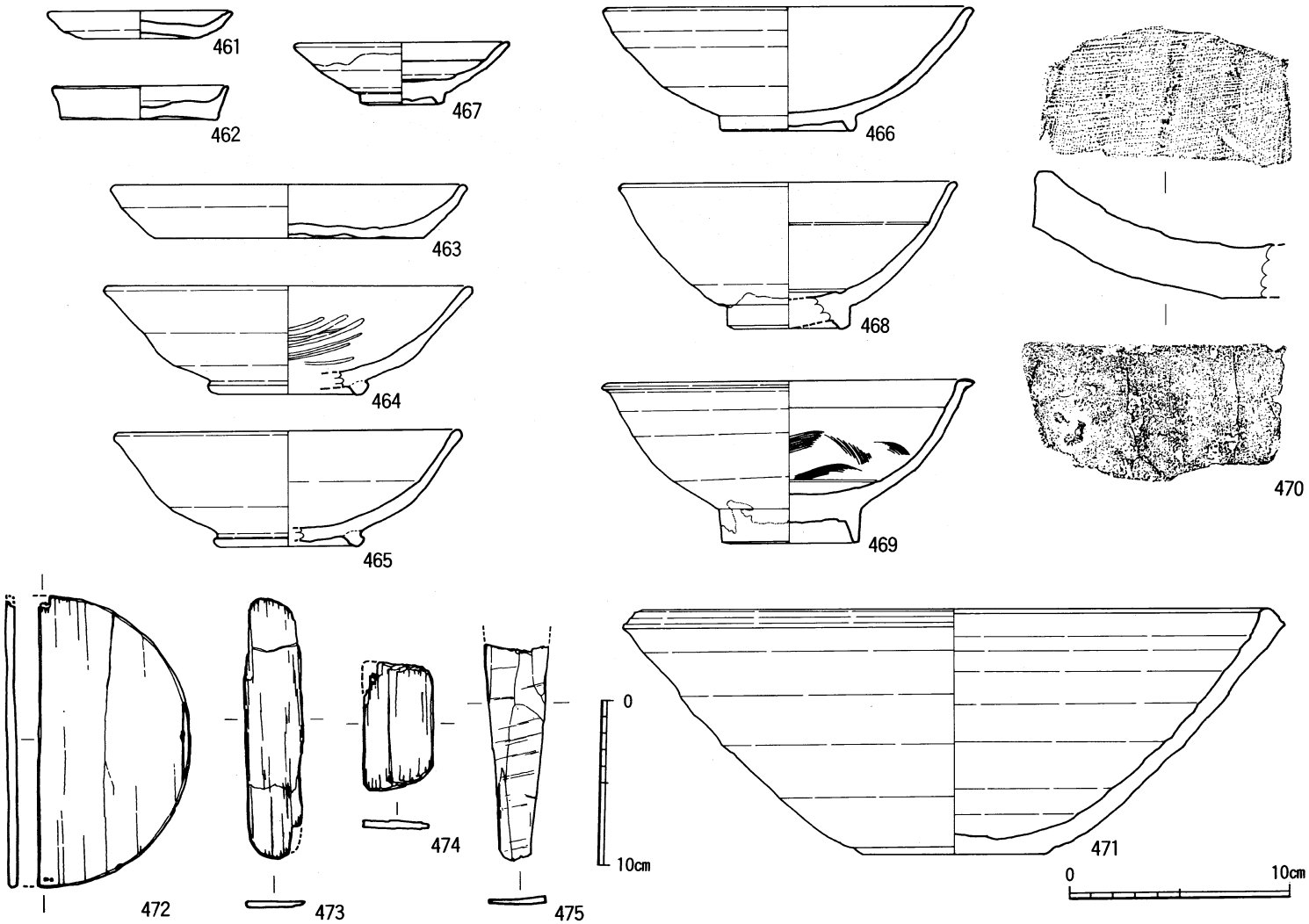


Fig. 88 旧河川（SR01・02・3723）出土遺物実測図（1/3・1/4）その4

(462・469・472・475：SR3723、461・463～468・470・471・473・474：SR01)

7) 表土、包含層出土の遺物

表土出土遺物（Fig.89－487、PL.49）

瓦器

皿（487）口径・器高は10.3・2.1cm。底部はヘラ切りで板目圧痕が残る。内外面ともにヘラミガキ。焼成良好。黒灰～灰褐色を呈す。

白磁

皿（520）高台付皿Ⅱ類。口径・器高・高台径は10.0・2.4・4.7cmである。体部外面上半から内面に施釉。透明な灰白色である。

碗（524）碗Ⅵ類。口径・器高・高台径は17.4・6.5・6.2cmである。釉は透明度が高く、焼成は良好。明灰白色を呈す。

青磁

碗（529）龍泉窯系碗Ⅰ類。口径は15.8cmである。器高は6.7cmほどか。内面には、ヘラによる雲文と櫛描文を併用して施文している。釉は発色がよく、透明度の高いくすんだ緑色である。

鉢（531）口縁部片である。龍泉窯系碗Ⅲ類。鎬蓮弁はヘラ沈線で縁どられた単弁である。釉はやや厚手で、青みの強い緑色である。

土師器

皿（476・481～486）476は、第Ⅰａ区東南部の遺構検出面の下位の土層である明褐色シルト層中から出土である。口径・器高・底径は10.8・2.7～3.1・6.5cmを測る。ヘラ切り底で、内部は横ナデ、指圧痕が残る。焼成は良好でよく焼きしまっている。明褐色。481はヘラ切り底である。作りは薄手で、焼き良好。口径・器高は9.6・1.3cmを測る。482～486は糸切り底で、ほぼ同一の形態である。焼成はやや不良でしまり悪い。褐色～明褐色。口径・器高は8.6～8.9・2.0～1.3cm。

坏（477～480）477・478は口径・器高が13.7～13.9・2.0～2.5cmで、作りがやや厚手である。焼成は不良でもろい。479・480は口径・器高が15.8～16.2・2.4～3.2cmで、胎土・焼成ともに良好。480は不明だが他はいずれも糸切り底である。

土師質土器

土鍋（493）大型の土鍋である。口径・器高は50.1・（20±α）cmほどである。内面はヘラケズリの後ナデ仕上げ、外面は縦位のハケ目調整。口縁部は丁寧なナデ仕上げである。胎土はきめ粗いがよくしまっている。褐色～暗褐色で、部分的に炭化物が付着している。

瓦器

碗（488～491）488と491が体部中位からやや下部で屈曲し稜線をもつのに対して、489・490はほぼ球形の体部である。489・490は位部下半に指頭圧痕を残す。491はやや小ぶりで、口

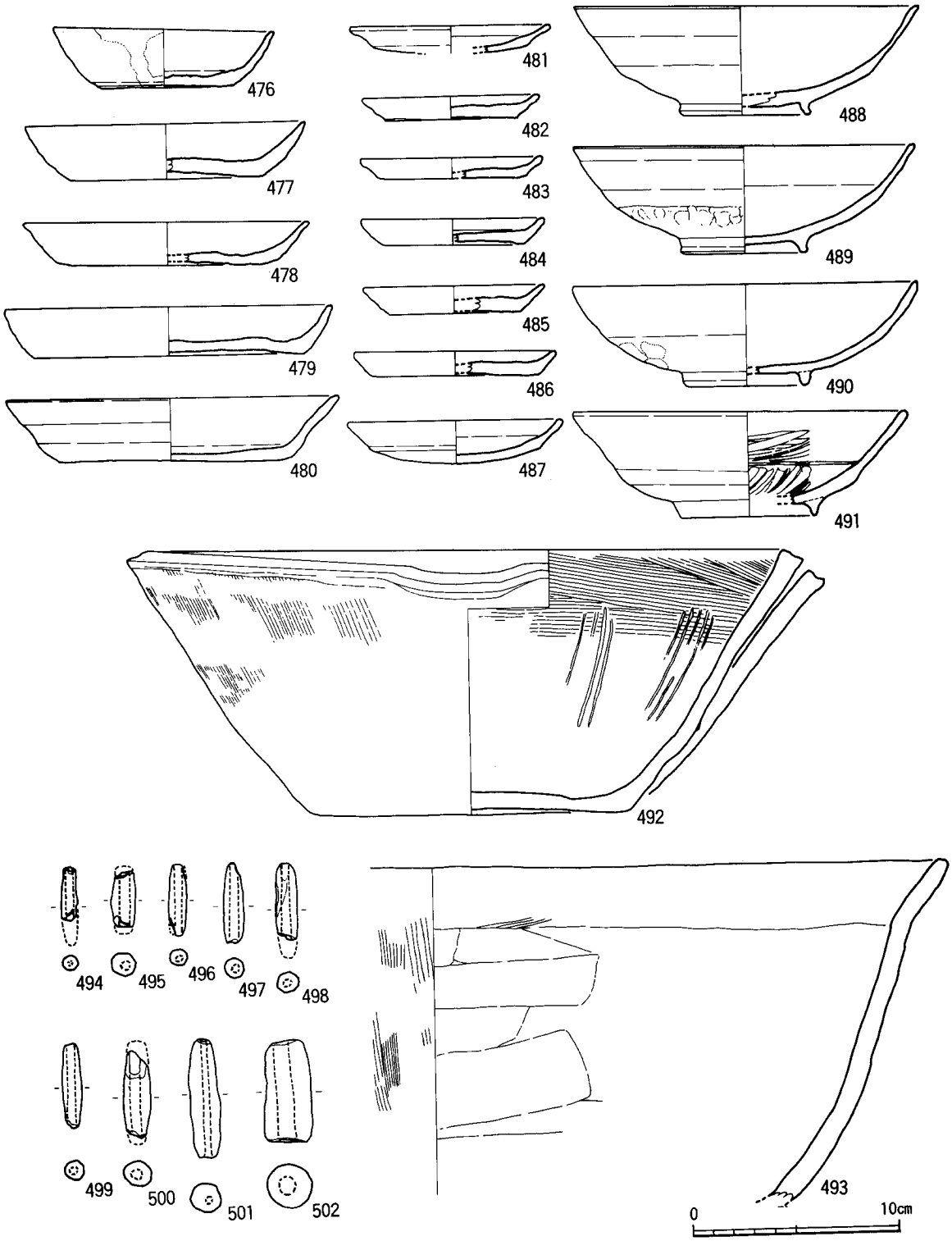


Fig. 89 旧河川・表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その1

(476、483～486：包含層、487：表土、477～482、488～491、493～502：検出面、492：S R 3723)

径・器高・高台径は16.1・5.1・6.5cm。他は16.7～16.8・5.0～5.4・5.8・6.5cmである。おおむね暗灰～灰色（部分的に灰褐色）である。

須恵質土器

甕（503・504）口径は503が21.0cm、504が26.1cm。503の頸部は長めで直立する。頸部から、大きく口縁部が外反する。504はナデ肩の肩部から直ちに口縁部が強く外反している。口縁部上端には一条の沈線が巡る。肩部の叩きは平行叩目である。焼成はやや悪く軟質。暗灰色。

片口鉢（505・506）口径・器高は505が30.5・9.8～10.3cm、506が26.3・11.7cmである。体部は505が直線的であるのに対して、506はわずかにふくらみがある。口縁端部はいずれも鋭く切り落とし、内側に若干丸く引き出している。口縁端部は暗灰色。体部内外面には水挽き痕が強く残る。焼成堅緻。青みがかった灰色。

白磁

皿（516～519・521・522）516～518は、口縁端部の釉を掻き取っている、いわゆる口禿の白磁である。516は浅い器形で、底部の釉を掻き取っている。青みある白色。

口径10.2cm、器高1.7cm。517、518は口縁端部が強く外反し、深い器形となる。口径10.6～11.6cm、器高3.5cm前後である。明灰白色を呈す。519・521は高台付皿Ⅱ類。口径・器高・高台径は519が9.2・2.2・4.6cm、521が10.4・2.9・4.8cm。見込み内底は輪状掻き取り。釉色は薄い青灰白色。522は皿Ⅶ-1類で、口径・器高は9.6・2.4cm。見込み内底にヘラ先による草花文を施す。釉は厚くかかり明灰白色を呈す。

碗（523）碗Ⅱ類。口径16.0cmほど。口縁は細い小玉縁である。やや浅い器形となる。釉は薄く黄色がかった灰白色。

青磁

皿（526・527）同安窯系皿Ⅰ類。口径・器高は526が11.2・2.1cm、527が10.6・2.5cmである。釉は透明な緑色。

碗（525・528・530・532）525は越州窯系青磁である。見込み内底に目跡がつく。高台は輪高台で径6.0cm。528は同安窯系碗Ⅱ類。口径17.0cm。530・532は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類とⅡ類である。口径・器高・高台径は530が16.5・6.8・6.3cm、532が16.5・6.8・6.3cm、532が17.4・7.0・5.5cmである。532の内底にはヘラによる草花文が施文されている。

陶器（514・515）514は茶釉四耳大壺の破片である。口径は10.8cm。陶器準A群に分類される。515は褐釉水注の把手である。釉は薄く青緑がかった褐色。

土製品

管状土錘（494～502）形態的に2種類に分けられる。1類は小型のもので、長さが3.0～4.5cm、重さが2.5～6gのもの（494～499）と、長さが5～7cmで、重さが8～12gほどのもの（500・501）がある。2類は、大型のもの（502）で、重さは29.5gを測る。これらはいずれ

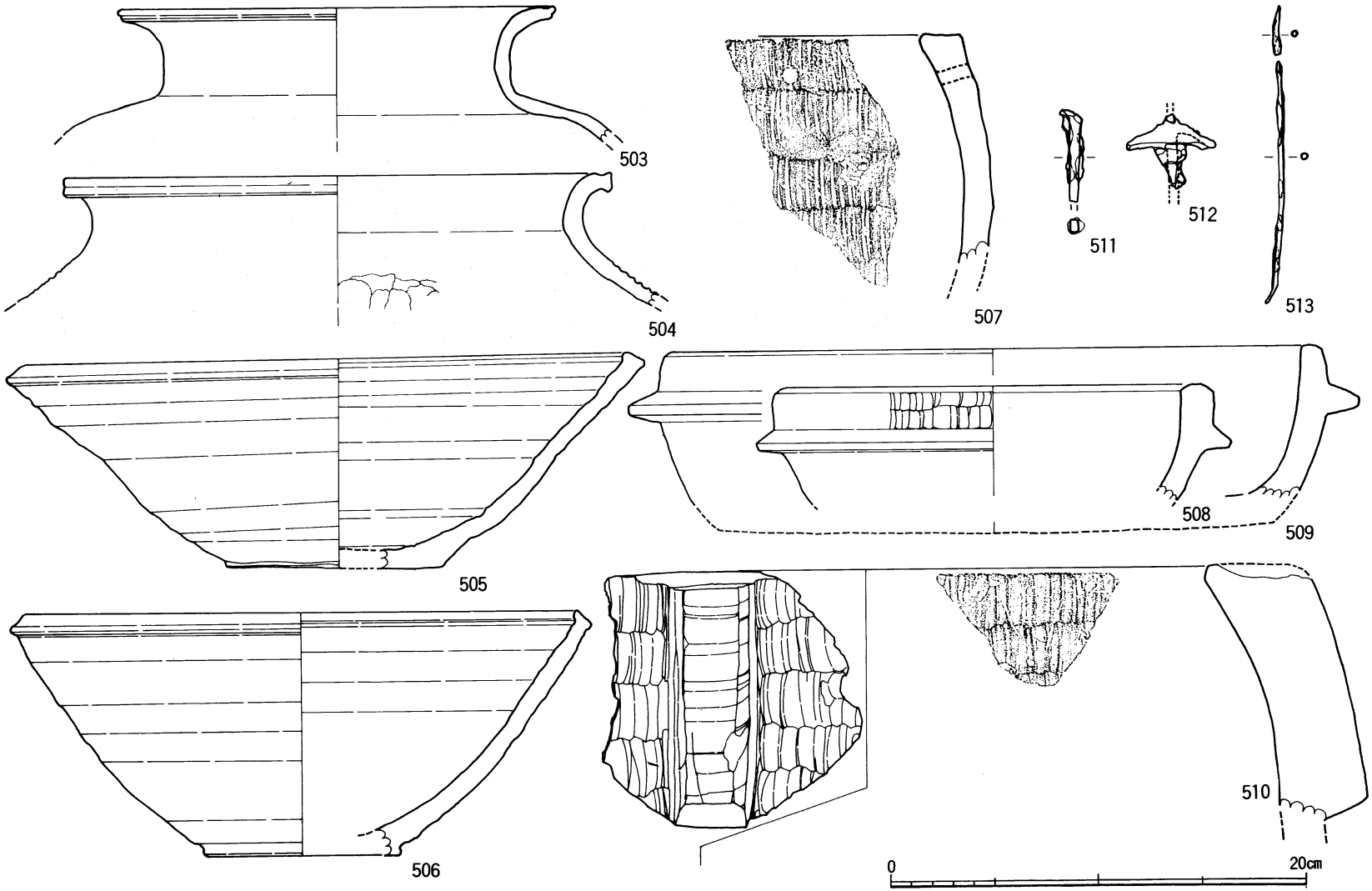


Fig. 90　表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その２

(506・511：包含層、503～505・507～510・512・513：検出面)

も焼成は良く、焼きしまっている。色調はおおむね褐色～褐白色。

石製品

滑石製石鍋（507～510）507と510は耳付の石鍋口縁片で、大型品である。510の口径（内径）は49cmを測る。508・509は鍔付の石鍋で、口径（内径）は508が18cm、509が29.6cmである。やや浅めの器形である。いずれも外面には炭化物が付着している。

鉄製品

釘（511）現存長4.4cm。頭部は逆L字形で、断面形は幅が0.6cm、厚さが0.4cmの長方形である。

紡錘車（512・513）512は紡輪部分の破片である。径4.0～4.5cm。513は紡茎と思われる。現存長13cmほどを測る。いずれも腐蝕がすすみ、残りは悪い。

出土遺構	貨銭名	裏	初鋳年	点数	挿図
表土	寛永通宝		1624	2	
表採	□□元宝			1	
	□□通宝			1	
	元豊通宝		1078	1	92-543
	至和元宝		1054	1	
	皇宋通宝		1039	1	
検出面	政和通宝		1111	1	92-554
	元祐通宝		1086	1	92-548
	元豊通宝		1078	1	92-544
	皇宋通宝		1078	1	
			1039		
SD01	不明			2	
	□□通宝			1	
	元符元宝		1098	1	
	熙寧元宝		1068	1	92-546
	景祐元宝		1034	1	
SX73	皇宋通宝		1039	1	
	景祐元宝		1034	1	92-537
	祥符元宝		1008	1	92-535
	大観通宝		1107	1	92-553
	開元通宝		621	1	92-533
					92-539
SP121	皇宋通宝		1039	2	92-540

出土遺構	貨銭名	裏	初鋳年	点数	挿図
SD08	紹聖元宝		1094	1	
	元豊通宝		1078	1	92-545
	熙寧元宝		1068	2	92-547
	治平元宝		1064	1	
	嘉祐元宝		1056	1	92-542
	皇宋通宝		1039	1	92-541
	崇□元宝		1034	1	
	元祐通宝		1017	2	92-550 92-557
	開元通宝	⌣	621	2	92-534
	□□□宝			2	
	不明			1	
1742(SP)	宣徳通宝		1426	1	90-558
	永楽通宝		1408	3	92-556 92-557
	洪武通宝		1368	1	92-555
	□□□宝			1	
	聖宋通宝		1101	1	92-552
	熙寧元宝		1068	1	
	至和元宝		1054	1	
	天聖元宝		1023	1	92-536
1902(SP)	元豊通宝		1078	1	
SX06	元祐通宝		1086	1	92-549
	元豊通宝		1078	1	
	皇宋通宝		1039	2	
3482(SP)	皇宋通宝		1039	1	92-538
合計				55	

Tab. 6　第Ⅰ区遺構別貨銭出土一覧

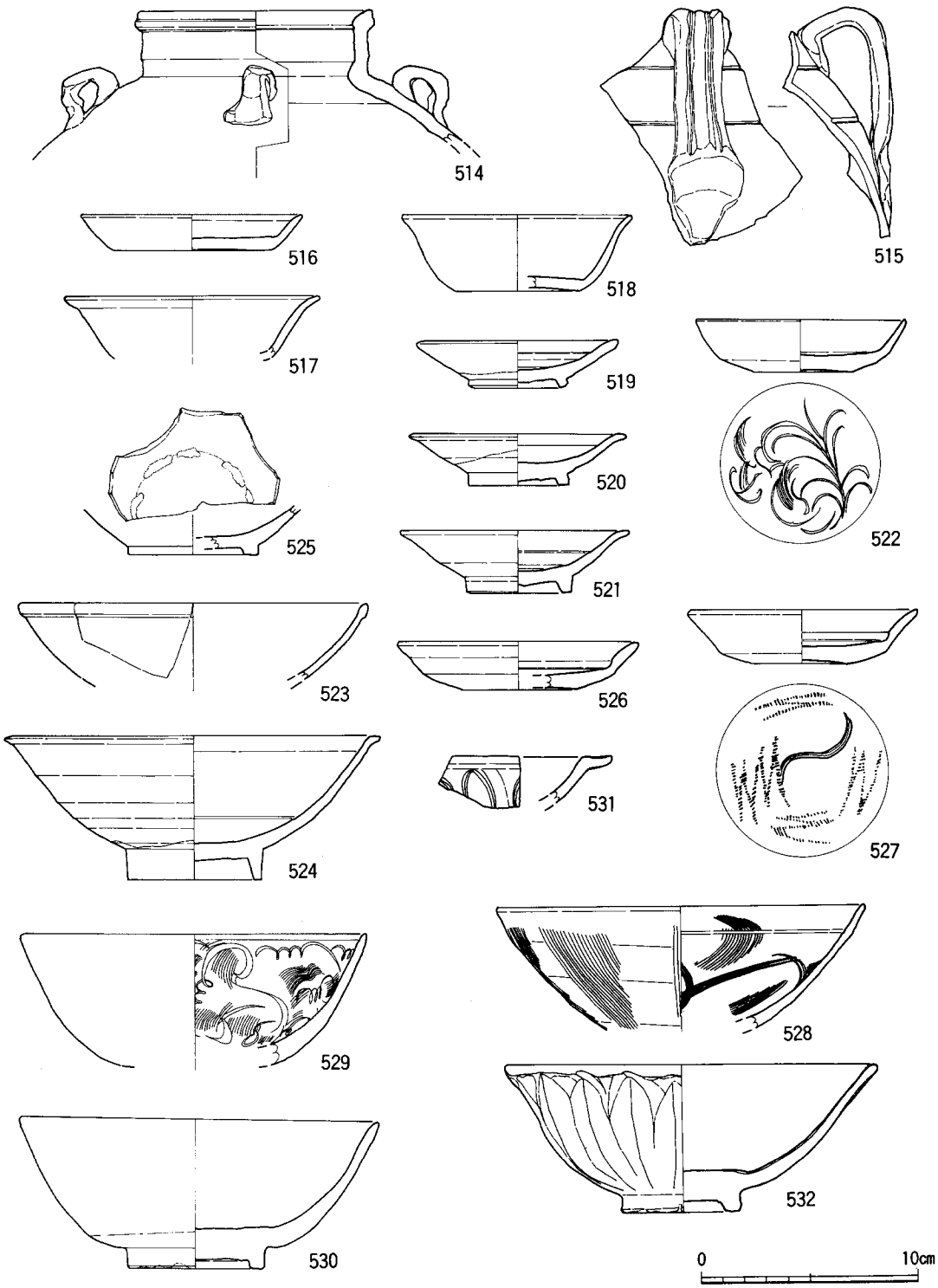


Fig. 91　表土・包含層 出土遺物実測図（1/3）その3

(514～517・519・521～522・525～528・532：検出、518・523：包含層、530：トレンチ、524・531：表土)

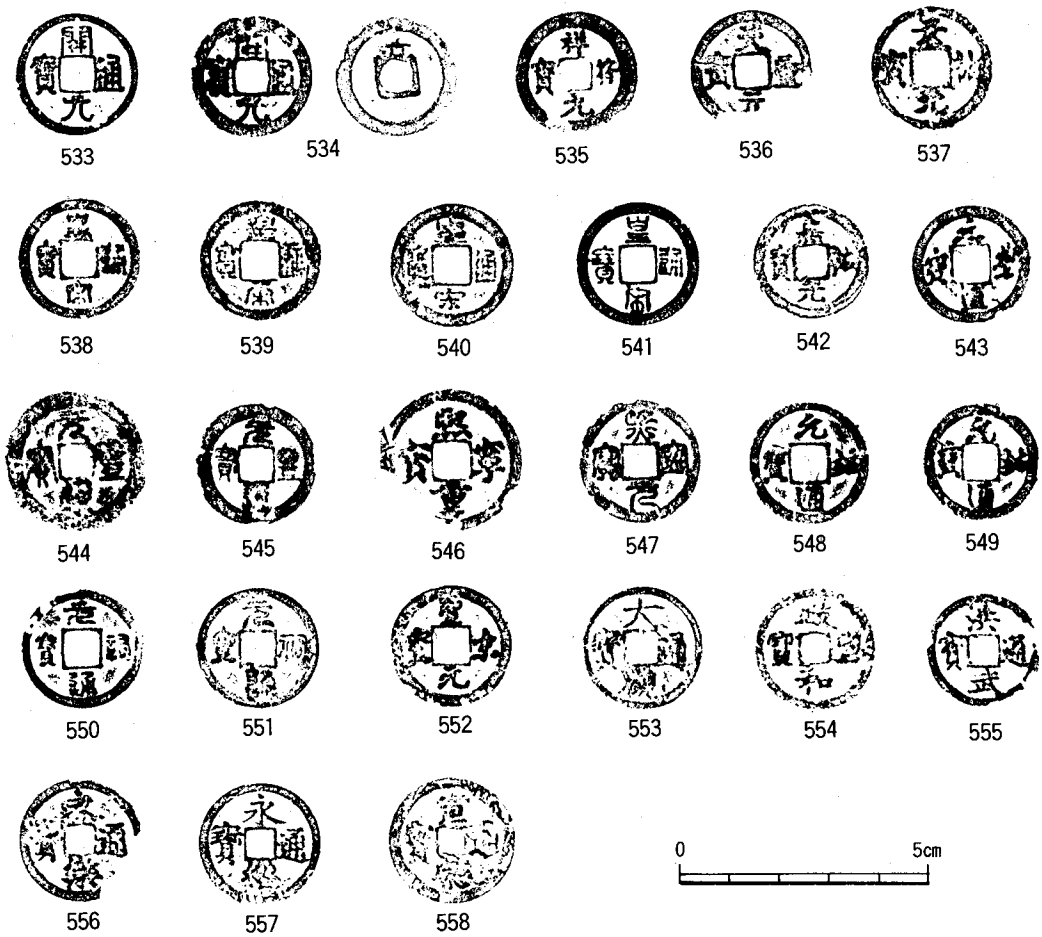


Fig. 92　第Ⅰ区出土銅銭拓影（2/3）

Ⅳ おわりに

以上の調査所見をもとに、戸原麦尾遺跡第Ⅰ区の成果と問題点について述べたい。

なお、第Ⅰ～Ⅳ区までを含んだ戸原麦尾遺跡全体の総括については次年度報告（戸原麦尾遺跡Ⅲ）において行う予定である。ここでは検出遺構の年代を整理しておき、次年度の総括に備えたい。また第Ⅰｂ区で出土した青銅製柄鏡について若干の考察を加える。

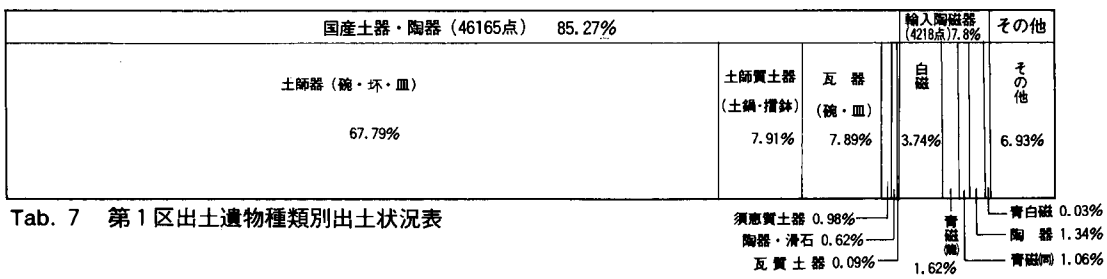
(1) 第Ⅰ区における調査の成果と問題点について

1) 出土遺物について

出土遺物は21世紀から14世紀にかかる土師器、土師質土器、瓦器、瓦質土器、須恵器質土器、輸入陶磁器などの日常雑器を中心とした土器、陶磁器が数多く出土している。大まかな各遺物の出土割合を知るためにやや乱暴であるが細かな時期区分を無視して、下表に第Ⅰ区全体の遺物の種類毎の割合を示した。出土量は圧倒的に土師器の出土量が多いが、瓦器や須恵質土器等の出土量も比較的多い状況である。これは当然のことながら、日常雑器類が主体を占めていることを表している。第Ⅱ区のと比べると、輸入陶磁器では白磁の占める割合がやや高いようである。これは第Ⅰ区の屋敷地が第Ⅱ区よりも形成時期が早く、したがってやや古い時期の出土遺物が見られることによると思われる。

本遺跡第Ⅰ区での、全体の遺物の出土量に対する輸入陶磁器の割合を博多遺跡群の状況と比べると、冷泉7-1地点では23.9%、同474-9で38.7%と高い比率であるのに対して本遺跡は7.8% で低い比率となっている。これは集散地としての博多遺跡群と本遺跡の性格の違いを明確に示している。しかし広島県尾道遺跡や、時期はやや異なるが草戸千軒町遺跡などと比べるとかなり比率が高いことが認められ、出土傾向の異なりは、地理的条件の差によるところが大きいと思われる。また同時に博多周辺の中世集落での貿易陶磁の占める割合が、その性格によってどのような異なりがあるのか、貿易陶磁の受容の在り方も含めて注意されるところである。

土師器のうち遺構毎に出土した皿、坏について法量の計測を行い、皿と坏の法量変化を遺構単位の平均値の変化をとおして見てみた。その結果では、まず全体の出土傾向でみると、土師器皿の場合、口径平均値が8.4～8.8cm、器高が1.2～1.3cmのものが最も多く、次に9.4cm、



Tab. 7 第１区出土遺物種類別出土状況表

器高が1.0～1.2cmのものが多い（これはまとまって出土したＳＸ83による)。次に9.2cm、器高1.0cmのもの、次に8.0～8.3cmで、1.1～1.2cmのもの、次に9.6cm、1.1～1.2cmのもの、最後に7.5～7.8cmで1.2～1.3cmのものと、10cm前後で1.5cmものといった出土量の違いがみられる。土師器坏の場合では、口径平均値が13.6～15cm、器高が2.6～2.8cmのものが最も多く、次に12.6cm前後で、2.6cmほどのもの、次に16cmから17cm前後の大口径のもので、器高が2.8～3.1cmほどのものがある。口径が11cm～12cm弱の小型のものも見られるが数は少ない。

次に遺構の切り合い関係から見た法量の変化を見ると、皿の場合は時代が新しくなるにつれて、法量の減少が見られることが認められ、便宜的に１～８期に区分した（Tab.７)。 坏の場合は時期の違うものの混入例が多いために明確でないが、16～17cm大のものは皿の２～４期にかけて特に顕著に見られる。12～13cm大のものは５期以降に見られるようになり、11～12cmの小型のものは８期以降に見られるようである。年代観は太宰府における編年を主に参考にすると、１期が12世紀半ば頃、５期が13世紀半ば頃、７期が14世紀半ば頃と考えられる。なお以下の遺構の時期については、この時期区分を用い表現する。

出土遺物については、このほか片口鉢や擂鉢などの日常雑器の共伴関係や、在地土器と東播磨地方産の須恵質土器（片口鉢、甕）や、常滑窯の陶器などの搬入品との問題など多くの検討を要すべき問題があるが、土師器皿、坏の編年も含めて次年度報告で検討したい。

2)　検出遺構について

井戸（ＳＥ）井戸が最も集中して検出されたのは第Ⅰｂ区の屋敷地部分である。第Ⅰａ、Ⅰｄ区では確認された数は少なく、また分布も散在的でまとまりはない。

出土遺物および切り合い関係からみた井戸の先後関係はTab.８のようになる。井戸で最も古いと考えられるのは第Ⅰａ区東南側で検出された、井側に曲物を用いたＳＥ01である。遺物は一括で投棄されたもので，第１期に該当し、12世紀半ばと考えられる。最も新しい井戸はＳＤ08とＳＥ13を切るＳＥ12であり、井側は直径43cmほどの曲物を用いている。ＳＥ13が埋没した時期が、出土している土師器から７期以降であることから、ＳＥ12は８期もしくはそれ以降の時期に埋没したものと思われる。14世紀半ば以降の可能性がある。

第Ⅰ区で井側に桶を用い始めるのはＳＥ06からである。おそらく13世紀前半から半ば頃のものと思われ、桶側の使用例では最古期のものとすることができる。

以上から、井戸の変遷を見ると、１～３期には貯水量が少ない径の小さな曲物を用い、４～５期になると容量の大きな桶を用い始め、また初期の頃よりも一回り大きな曲物を併用されていくことが分かる。第Ⅰ区の屋敷地における同時期の井戸の数についてみると、２～３基が併存して用いられている。分布の上からは、屋敷地の中央からやや北側の部分と南東部の一角に占地していたことが分かる。この分布は掘立柱建物の分布と重複しており、特に中央部の井戸は少しずつその位置が移動しているものの、母屋と考えられる建物と伴に屋敷地内における主

要な地点を占めているとみなすことができよう。

竪穴遺構、土壙・土壙墓・木棺墓　竪穴遺構はすでに述べたとおり124基確認された。これらの時期についてはTab. 8を参照されたい。竪穴遺構についてはそれぞれの形態的特徴および遺物の出土状況から、1～7類に分類することができる。1・4・5・6類は生活残滓の廃棄用の竪穴と見ることができるが、形態的な異なりは何によるものなのかが問題として残る。2類と3類とした竪穴は、祭祀もしくは墓址に係わるものと考えられる。副葬品を伴い明らかに墓址と考えられる土壙の形態を見ると、堀方の平面形、規模が一定の規格性をもっていることが分かるものの、多数を占める副葬品を持たない同形態の竪穴をすべて墓址としうるかというとやや難しい点がある。したがって消極的であるが墓壙の意味を込めて、土壙と呼ぶこととした。7類については竪穴の規模、形態からみて半地下式の家屋と考える。柱穴を伴う第Ⅱ区の例も含めて次年度検討したい。

屋敷地内の土壙の分布を見ると、屋敷地中央と北側および南側にまとまっている。中央に位置するＳＫ03・04・11・12は地鎮等の何らかの祭祀用の土壙と思われる。北側および南側の土壙はＳＫ10を最古とする墓址群であり、屋敷地が営まれた時期に並行することからいわゆる屋敷墓としての性格をもつ可能性がある。

掘立柱建物（ＳＢ）第Ⅰ区では掘立柱建物は50棟確認された。ただし検出された柱穴の数からみて建物の復元は完全なものでなく、再検討を要する部分も含んでいる。

規模から見た内訳は、1×2間が1棟、1×3が1棟、2×3間が35棟、2×4間が7棟、2×5間が1棟、3×3間が4棟である。圧倒的に2×3間の規模のものが多く、当時の家屋構造がこの間取りを基本にしていたと思われる。ただし2×3間の規模の床面積について見ると、最大のものが40.23㎡（ＳＢ02）で、最小のものが13.26㎡である。床面積に違いが見られるのは、おそらく屋敷地内でそれぞれの機能の差、用途の違いが表れているものと考えられよう。平均床面積は25.2㎡で、30～40㎡のものが11棟、20～29㎡のものが27棟、10～20㎡のものが12棟で、そのうち特に小さいと思われる15㎡以下のものが4棟見られる。床面積でみれば、大きく4つの異なる広さの建物があることになる。

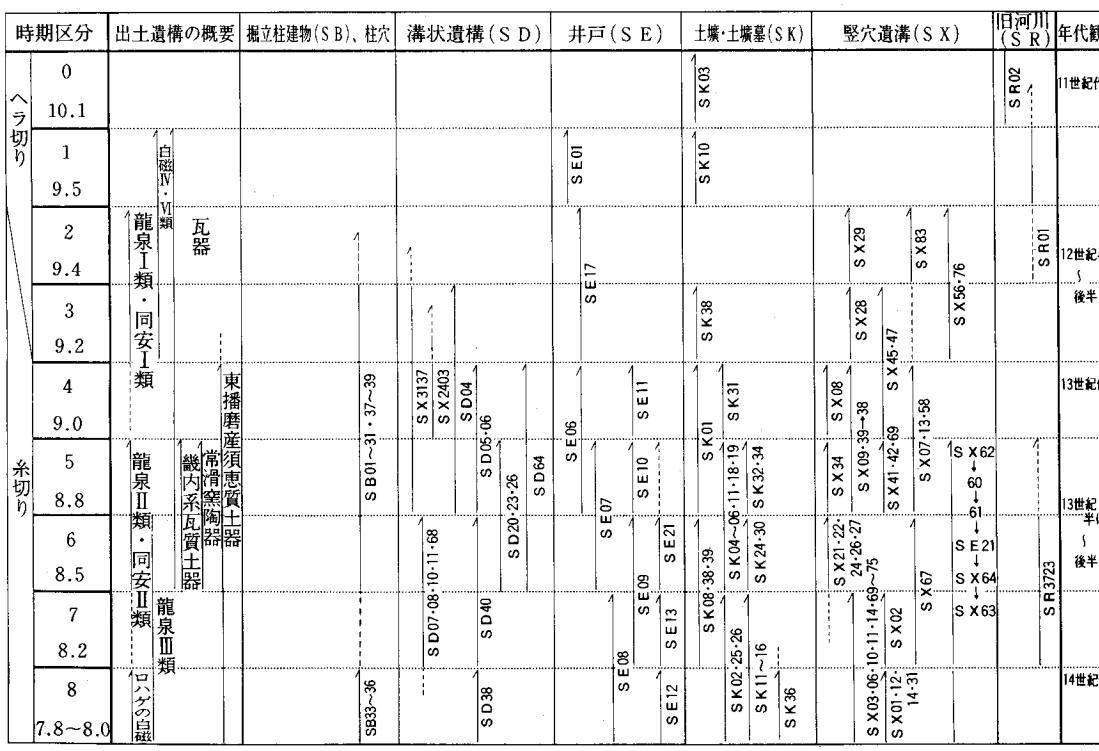
次に第Ⅰａ～ｂ区に位置するＣ群（39棟）での各建物の長軸（棟の方向）の方向性について見てみたい。磁北からの東もしくは西への長軸の振れは、東西棟の建物がＮ－55°－Ｗ前後のもの（ＳＢ07・09・10・12・15～17・19・26～28・33・37・38)、Ｎ－65°－Ｗ前後のもの（ＳＢ01・02・08・11・20～22・30・31・39）に分かれる。南北棟の建物は東西棟と比べて方向性にまとまりがなく、バラつきが大きい。また建物の大きさはＳＢ05・29・34以外は小さく、柱筋のとおりもやや不整のものが多い傾向があり、南北棟の性格を考える上で一つの要素となる。これらの建物の方向を復元条里の方向（南北軸Ｎ－20°－Ｅ、東西軸Ｎ－70°－Ｗ）と比べると、全体に10°～20°ほど北へズレている。これはＣ群の建物の方向が，条里方向ではなく、自然地

形の形状と建物群を囲む溝の方向とに規制された可能性を示唆している。条里方向に合致して並ぶ第Ⅱ・Ⅲ区の建物群とはこの点で大きな違いがある。

3) 第Ⅰ区の屋敷地の年代と遺構の構成について

屋敷地はおそらく2期（12世紀半ばから後半）にその初現を見る。ただし柱穴からの出土遺物や井戸ＳＥ17などからさらに四半世紀ほど遡る可能性があり、周辺の営田等の働きかけの上限を知る上でも検討を要する。屋敷地にはＳＸ3137などからみて、その当時より溝を巡らせていたことが考えられる。ＳＤ07・08・64と34・68を内外に配した土塁を構築するのはおそらく6期（13世紀後半）以降と思われる。第Ⅰａ区の掘立柱建物群とは併存していたと思われ、土塁を持つ屋敷地と持たない屋敷群とが同時期に隣接していたことが可能性として指摘でき、土塁の有無が何によるものなのか検討されるべき問題であろう。

屋敷地は溝の内側で推定約1300㎡の面積で、時期はやや下るが、諸岡館址、有田遺跡などの諸例と比べると、規模はやや小さい。この敷地内における遺構の構成は、例えば6期においては、掘立柱建物ＳＢ22もしくは23を主屋とし、これに並行あるいは直列するＳＢ10・15と、南北棟で規模の小さなＳＢ33が併存していたことが予想される。分析が不十分なため明確でないが、敷地内に、屋敷墓としての土壙墓や、生活残滓の廃棄用の竪穴などの遺構を伴いながら、各時期こどに3～5棟の建物を配し、構成されていたものと思われる。なお他遺跡との規模の比較、各時期の建物構成については第Ⅱ・Ⅲ区の建物群も含めて次年度報告で検討したい。



Tab. 8　第Ⅰ区検出遺構時期区分表（ーは、上限を意味する。➡は（先）→（後）。明記していない遺構は時期不明）

(2) 第Ⅰａ区ＳＫ36出土の青銅製柄鏡について

第Ⅰａ区のＳＫ36から出土した青銅製柄鏡は、一般的に高麗鏡として呼称されているものである。高麗鏡は多くの形式のものを含んで呼称されており、一つの鏡式として設定することが難しいと言われるほど種類が豊富である。これは高麗鏡と呼ばれるものの多くが同時代の宋・元鏡を始めとして、漢式鏡、六朝鏡、唐鏡等の模倣をしたものであり、高麗期独自の形式をほとんど有していないことによるとされている。その実態については今後の研究に待つべき部分が多い。

また宋代の鏡（主に湖州鏡）も含めて、この種の鏡が考古学的な発掘によって出土する事例は少なく、現存するほとんどのものが出所が明確でない伝世品であることを考えると、今回の出土は、編年上また鏡式設定の上でも貴重な事例であるといえる。ここでは、ＳＫ36から出土した青銅製柄鏡の副葬時期の比定と、類例資料について述べ、今後の研究の足掛かりとしたい。

柄鏡の形態（Fig.87、PL.49）法量は、全長が23.4cm、鏡部径（外径）12.8cm、内区径10.9cm、柄部の長さ10.8cm、基部の幅2.2cm、先端部の幅2.5cmを測る。厚さは鏡体部中央で0.45cm、柄部中央で0.6cmをそれぞれ測る。鋳上がりは比較的明瞭で、鏡背に描かれた文様は良好に仕上がっているが、銅質はやや悪い。部分的に、特に中央部分に空隙（１～1.5mm）が点在してみられ、やや脆弱な感がある。鏡体部と柄部は同時に製作されたものと思われる。外縁の断面形は蒲鉾にちかい三角形である。錫鍍金が施された鏡面はわずかに凸面で、燻銀様に光沢がわずかに残っている。鏡背の文様は細線により浮彫り風に描かれた鳳凰文および雲文で、高麗鏡の多くが肉太の鏡背文様であることから見ると繊細な図柄となっている。

共伴遺物（Fig.87、PL.49）ＳＫ36から出土した遺物は、土師器皿（451・452）と龍泉窯系青磁碗（453）である。土師器皿452は出土状態から見て二次混入の可能性がある。451は柄鏡と頭骨の間で出土したものであり、同時期の埋納と見てよい。451については、大宰府における編年を参考に比定すると、大宰府ＳＫ822・830・ＳＸ1200等の出土遺物中に、同様な法量・形態を持つものがあり、新しく見て14世紀前半代から半ばのものと思われる。452も同様に13世紀後半から末ごろに含まれるが、452を混入と見ると、土師器から見たＳＫ36の時期は、古く見ても14世紀初めよりも古くはならないものと考えられる。

また青磁碗（453）について見ると、形態的には鎬蓮弁文をもつものの中でも新しい要素を含んでいる。博多および森田分類では青磁碗Ⅲ類とされるもので、13世紀後半以降に見られるが、数はそう多くない資料である。紀年銘等で絶対年代が明らかな資料としては、韓国の全羅南道新安郡智島面防築里道徳島沖海底出土の、いわゆる新安沖海底遺物中に至治三年（1323年）の木簡と共に出土した類例品があり、間接的ではあるがこの類の青磁碗の年代観の目安とすることができる。これらから柄鏡が副葬されたのはほぼ14世紀前半ころと考えられよう。

類例品について　本遺跡出土の柄鏡と同形式と思われるものは、菅見によれば3例しられる。いずれも韓国中央国立博物館が所蔵するもので、それらを紹介した文献には下記のものが挙げられる。

①関野貞編	1920	朝鮮古蹟図譜　九	朝鮮総督府	1209頁
②後藤守一	1935	古鏡聚英　下篇（隋唐鏡より和鏡）		図版30
③秦弘燮	1974	韓国美術全集　8　　金属工芸	同和出版公社	126頁
④黄冱根		高麗鏡を通してみた韓国文様史	第一出版	
⑤李蘭暎	1983	韓国의銅鏡	韓国精神文化研究院	73頁

下図の1は文献①～⑤にいずれも掲載されている。文献③によるとその法量は全長が22.5cm、鏡面径が12.7cmである。本遺跡出土のものと比べると、鏡面の大きさはほぼ同一であるが、下図1の柄が約0.9cm長いだけで、ほとんど同じ大きさである。外縁はおそらく断面が蒲鉾状と思われる。鏡背文様は本遺跡と同様に内区を設け鳳凰文と雲文を描いている。鳳凰の尾の曲線や雲文の描き方など細部にわずかに違いがあるが、文様構成はほぼ同じである。2、3は文献③に掲載されているもので、鏡面径は2が12.0cm、3が12.9cmである。鏡背文様や、形状はよく似ているが、文様の描き方がやや稚拙である点は否めまい。3は柄の位置が鏡面の長軸から若干ズレており、鏡面もややいびつである。ただし全体のプロポーションは、1・2よりも3の方が本遺跡出土品に近い。これらはいずれも開城出土とされるがその詳細は不明である。これら以外にも未報告のものはあると思われるが、京都国立博物館・大阪市立博物館・神戸市立博物館所蔵の高麗鏡約200余面中に同形式のものはなく、わずかに1点のみ鏡背文様

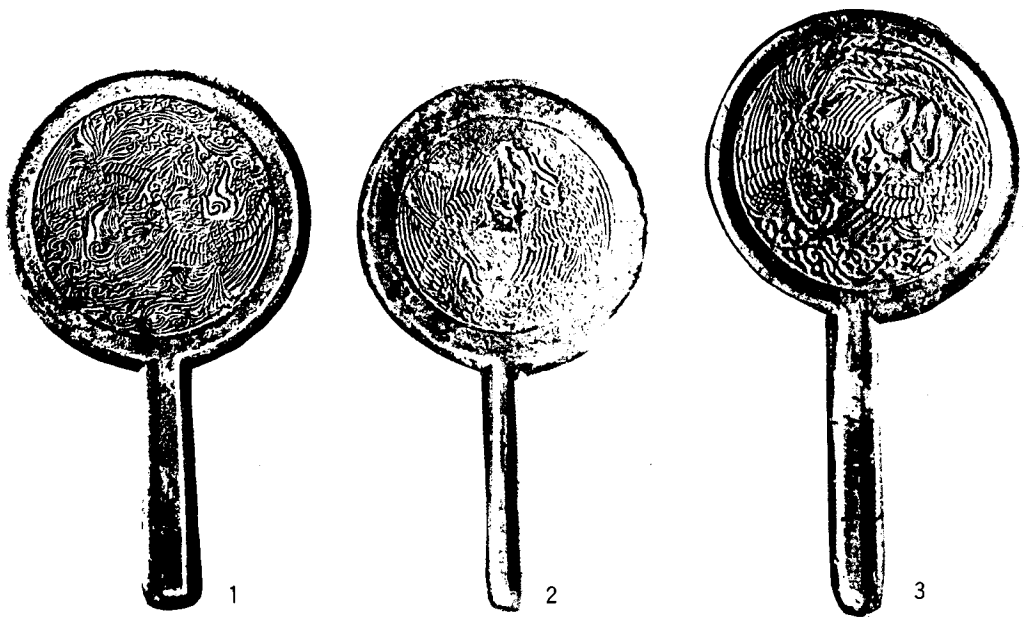


Fig. 93　青銅製柄鏡関連資料（開城出土）

が似たものがあるだけであり、さらに、先述した韓国中央国立博物館所蔵の470面の高麗鏡中にわずか3例しかないことなどから、本来数的に少ない形式のものだったことが窺われる。

その他の類例品について　次に鏡背の文様を一応度外視し鏡面、柄などの全体の作りから2、3の類例品を見てゆく。4は、游魚十一稜柄鏡と報告されているもので、形態的には異なるものであるが鏡背に内区を設けた施文やその方法、外縁の状況は共通した様相を示す。5は中国四川省成都で出土したもので鳳凰の描写はかなり異なるが、本遺跡出土品および1～3に形態的に非常によく似ている。また6は素文柄鏡で鏡背中央に「湖州云々・・」の銘帯がある例である。浙江省衢州市王家公社出土。一回り大きいが、形態的には1～3、5に類するものであり、5とともにこれらの柄鏡の出自を考える上で好資料となる。なお5とほとんど同一の資料が陝西省西安市高楼村第14号唐墓から出土しているとされるが、この類の鏡式が時期的にどこまで遡るものかという点についても、高麗鏡とはまた別の問題として興味あるところである。

まとめ　以下では本遺跡出土の柄鏡をめぐる若干の問題点をあげまとめとしたい。

本遺跡出土の柄鏡の出土例は非常に少ないもので遺物の共伴関係および副葬時期の分かる希少な出土例である。一般的には高麗鏡とされているが、その出自は宋代の湖州鏡に求められる可能性が高い。ただし鏡背の施文の手法については高麗独自のものかどうか今後の検討が必要である。おそらく当時の絵画様式まで踏み込んだ分析を要するであろう。

伝世された期間は不明であるが、少なくとも14世紀初期～前半にかかる時期に、中国産陶磁器とともに、この種の鏡を受容しえた階層の人々が周辺にいたことはまちがいない。鏡も含めてそういった文物がどういった経路を経てもたらされたものなのか、またそれを受容していた人々とは具体的にどのような社会的階層の人々だったのか今後検討すべき問題であろう。

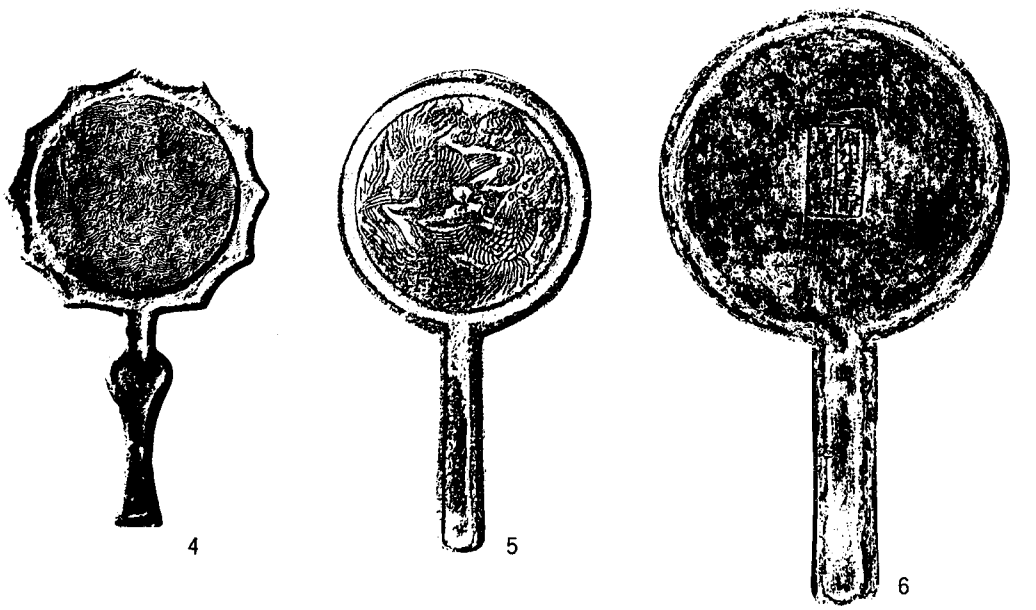


Fig. 94　青銅製柄鏡関連資料（開城　中国各地出土）

Tab. 9　第Ⅰ区出土土師器（坏・皿）計測表

遺構名	挿図番号	番号	器種	口径 × 器高 × 底径(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
SP3298	Fig60	1	皿	8.2 × 0.85 × 5.8		○		
3289	〃	2	〃	9.9 × 1.05 × 6.4		○		
2932	〃	3	〃	8.05 × 1.05 × 6.5		○		
3536	〃	4	〃	7.75 × 1.4 × 6.0		○		
3355	〃	5	〃	8.4 × 1.6 × 7.2		○		
3550	〃	6	〃	8.25 × 1.25 × 6.4	?	○		
3410	〃	7	〃	8.4 × 1.5 × 6.0		?		
212	〃	8	〃	8.5 × 1.3 × 6.4		○		
2081	〃	9	〃	8.2 × 1.2 × 6.1		○		
3528	〃	10	〃	8.25 × 0.95 × 7.05		○		○
3549	〃	11	〃	8.25 × 1.1 × 6.6		○		
3355	〃	12	〃	8.45 × 1.15 × 6.2		○		
2124	〃	13	〃	8.45 × 1.1 × 7.4		○		
3542	〃	14	〃	8.25 × 1.05 × 7.4				
2926	〃	15	〃	9.9 × 1.05 × 6.4		○		
01	〃	16	〃	8.4 × 0.9 × 7.35		○		
3356	〃	17	〃	8.6 × 1.0 × 7.0		○		
2081	〃	18	〃	8.6 × 1.1 × 6.6		○		
2900	〃	19	〃	8.65 × ?		○		
3567	〃	20	〃	8.7 × 1.0 × ?		?		
3291	〃	21	〃	8.6 × 1.15 × 6.4		○		
2987	〃	22	〃	8.5 × 1.0 × ?		○		
2904	〃	23	〃	8.95 × 1.05 × 7.2		○		
441	〃	24	〃	9.2 × 1.25 × 6.4	?			
2627	〃	25	〃	9.2 × 1.45 × 7.3		?		
3139	〃	26	〃	10.2 × 1.5 × 7.2		○		
1940	〃	27	坏	12.3 × 1.85 × 9.0		?		
2930	〃	28	〃	12.6 × 2.15 × 9.2		○		
3567	〃	29	〃	13.0 × 2.8 × ?				
164	〃	30	〃	12.7 × 2.6 × 8.7		○		
3549	〃	31	〃	13.05 × 2.5 × 10.2		○		
1947	〃	32	〃	14.3 × 3.1 × 10.8		?		
303	〃	33	〃	15.6 × 2.65 × 12		?		
189	〃	34	〃	14.4 × 27.5 × 9.8	○			
3149	〃	35	〃	16.5 × 3.6 × 7.6	○			
SE01	Fig64	57	皿	9.4 × 1.35 × 7.2	○			
	〃	58	〃	9.85 × 1.5 × 8.0	○			
	〃	59	〃	9.1 × 1.3 × 8.0	○			
	〃	60	〃	9.85 × 1.4 × 7.2	○			
SE06	Fig65	70	〃	8.8 × 1.1 × 7.2			○	
	〃	71	〃	9.2 × 1.2 × 7.9		○		○
	〃	72	〃	9.2 × 1.05 × 8.05		○		
	〃	73	〃	9.6 × 1.0 × 9.25		○		
	〃	74	〃	9.7 × 1.15 × 9.05		○		
	〃	75	〃	9.8 × 1.1 × 9.2		○		
	〃	76	〃	8.4 × 1.1 × 7.0	○			
	〃	77	〃	8.8 × 1.1 × 7.0	○			
	〃	78	〃	8.65 × 1.05 × 7.9				○
	〃	79	〃	9.0 × 1.0 × 6.6				○
	〃	80	〃	9.05 × 1.3 × 7.6	○			
	〃	81	〃	9.6 × 1.2 × 7.4	○			
	〃	87	〃	9.4 × 1.25 × 7.4	○			
	〃	88	〃	9.4 × 1.2 × 7.0	○			
	〃	89	〃	9.6 × 1.25 × 7.6	○			
	〃	90	〃	9.25 × 1.5 × 7.2	○			
	〃	91	〃	9.4 × 1.45 × 7.6	○			
	〃	92	〃	8.95 × 1.2 × 7.2	○			
	〃	93	〃	14.65 × 2.7 × 11.0	○			
	〃	94	〃	14.8 × 2.5 × 9.6		?		○
	〃	95	〃	17.0 × 2.4 × 13.1		○		
	〃	96	坏	16.0 × 2.25 × 12.2		○		
	〃	97	〃	16.8 × 2.7 × 13.25		○		
SE07	Fig64	114	皿	9.0 × 1.1 × 7.05		?		
	〃	115	〃	8.8 × 1.2 × 3.6		○		
	〃	116	〃	8.6 × 1.25 × 6.95		?		
	〃	117	〃	9.2 × 1.25 × 8.2		?		
	〃	118	坏	12.89 × 2.45 × 8.6		○		
SE08	Fig64	121	皿	7.85 × 1.25 × 6.6		○		
	〃	122	〃	8.1 × 1.3 × 6.6		○		
SE09	〃	127	〃	8.5 × 1.6 × 7.0				
	〃	128	〃	9 × 1 × 6.7	○		○	
	〃	129	坏	15.15 × 2.6 × 11.4		○		
SE10	Fig65	133	〃	16.4 × 3.1 × 12.1		○		
SE13	〃	134	皿	8.25 × 1.1 × 6.0		○		
	〃	135	坏	13.05 × 2.25 × 10.15		○		
SE17	〃	136	皿	9.4 × 1.15 × 8.5				
SE15	〃	139	坏	13.2 × 2.35 × 10.1		○		
	〃	140	〃	14.9 × 2.45 × 12.4				
SE21	Fig66	142	皿	9.7 × 1.1 × 7.4	?			
	〃	143	坏	13.5 × 2.75 × 11.05		○		
	〃	144	〃	16.4 × 2.6 × 13.0		?	○	
SX03	Fig68	161	皿	9.2 × 1.25 × 6.8		○		
	〃	162	〃	9.6 × 1.25 × 8.0	○		○	
SX08	〃	164	〃	8.75 × 0.9 × 7.0		○		
	〃	165	〃	9.05 × 0.9 × 7.0		○		
	〃	166	〃	9.3 × 1.1 × 7.5		?		
	〃	167	坏	14.15 × 2.6 × 9.0				
	〃	168	〃	15.05 × 2.6 × 10.8				
	〃	169	〃	15.4 × 2.35 × 11.0				
	〃	170	〃	15.6 × 2.7 × 11.4				
	〃	171	〃	15.8 × 2.7 × 11.6				○
	〃	172	〃	15.9 × 2.9 × 10.8		?		

遺構名	挿図番号	番号	器種	口径 × 器高 × 底径(m)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
S X 09	〃	176	皿	8.4 × 1.15 × 5.6		?		
	〃	177	〃	9.4 × 1.05 × 7.8		○		
S X 09	〃	179	坏	11.65				
	〃	180	〃	15.0 × 3.2 × 11.0				
S X 14	〃	182	皿	7.6 × 1.4 × 5.6		○		
S X 22	〃	183	〃	1.1 × 不明		○		
	〃	184	〃	1.1 × 不明				
	〃	185	〃	8.15 × 1.15 × 6.0		○		
	〃	186	坏	8.2 × 1.2 × 6.4		○		
S X 23	〃	188	坏	15.7 × 3.1 × 11.0		?		
S X 34	F i g 69	189	皿	8.55 × 1.1 × 6.6		○		
	〃	190	〃	8.65 × 1.15 × 7.4		○		
S X 82	F i g 70	197	〃	7.95 × 0.9 × 7.0		?		
	〃	198	〃	8.2 × 1.0 × 7.0		?		
	〃	199	〃	8.15 × 1.1 × 7.0		○		
	〃	200	〃	8.4 × 1.2 × 6.8		?		
	〃	201	〃	8.8 × 1.1 × 6.2		○		
		202	坏	12.5 × 2.5 × 8.8		○		
	〃	203	〃	12.85 × 2.2 × 9.4		○		
S X 58	〃	207	〃	12.7 × 3.2 × 8.4				
S X 60	〃	209	皿	8.6 × 1.2 × 7.0		?		
	〃	210	坏	11.25 × 2.3 × 8.6		○		
S X 62	〃	211	皿	8.2 × 0.9 × 7.3		○		○
	〃	212	〃	8.15 × 1.5 × 6.0		○		
S X 64	〃	213	〃	8.1 × 1.4 × 6.5		○		
	〃	214	〃	8.65 × 1.2 × 7.0		○		
	〃	215	坏	12.15 × 2.7 × 8.6		○		
	〃	216	〃	12.8 × 2.45 × 9.4		○		
	〃	217	〃	12.35 × 2.85 × 8.95		○		
	〃	218	〃	13.05 × 2.85 × 8.8		○		
S X 67	F i g 70	224	皿	8.4 × 1.0 × 7.7		○		
	〃	225	坏	11.75 × 2.15 × 7.7		○		
S X 69	F i g 71	226	皿	8.25 × 0.95 × 6.2		?		
	〃	227	〃	8.85 × 1.0 × 7.4	?			
	〃	228	〃	8.95 × 1.3 × 8.8	?			
S X 70	〃	230	〃	7.05 × 1.55 × 5.4		○		
	〃	231	〃	8.25 × 1.1 × 6.4		○		
	〃	232	〃	8.6 × 1.1 × 7.6		○		
S X 72	〃	234	〃	10.9 × 1.8 × 8.8	?			
S X 73	F i g 72	239	〃	7.65 × 1.15 × 6.0		○		
	〃	240	〃	9.0 × 1.2 × 7.4		○		
	〃	241	〃	9.0 × 1.9 × 7.6		?		
	〃	242	坏	12.3 × 2.2 × 8.4		○		
S X 74	F i g 73	243	皿	8.2 × 1.0 × 7.2		○		
S X 75	F i g 74	255	〃	7.9 × 1.2 × 6.6		○		
	〃	256	坏	12.05 × 2.55 × 8.4		○		
S X 76	F i g 75	264	皿	9.4 × 1.6 × 7.6		?		
S X 77	〃	265	坏	15.6		○		
S X 83	F i g 268	268	皿	9.1 × 1.0 × 9.25	?			○
		269	〃	8.5 × 0.9 × 6.65	○		○	
	〃	270	〃	8.8 × 0.9 × 8	○			
	〃	271	〃	9.1 × 1.0	○			
	〃	272	〃	9.0 × 1.0	○			
	〃	273	〃	9.15 × 1.3 × 6.8	○		○	○
	〃	274	〃	9.25 × 0.95 × 7.1				
	〃	275	〃	8.95 × 1.1 × 6.4	?			
	〃	276	〃	9.1 × 1.0	○			
	〃	277	〃	9.4 × 1.2	○			○
	〃	278	〃	9.2 × 1.1 × 7.2		○		
	〃	279	〃	9.25 × 1.05 × 7.6		○		○
	〃	280	〃	9.1 × 1.15 ×	○			
	〃	281	〃	9.8 × 1.3 × 7.7	?			○
	〃	282	〃	9.2 × 1.1 × 7.4				
	〃	283	〃	9.6 × 1.0 × 7.65	○			
	〃	284	〃	9.3 × 1.0 × 7.05	○	○		
	〃	285	〃	9.5 × 0.8 × 7.8				
	〃	286	〃	9.6 × 1.15 × 7.4	?		○	○
	〃	287	〃	9.8 × 1.15 × 8.05	○			○
	〃	288	〃	9.7 × 1.2 × 7.81	?			
	〃	289	〃	9.25 × 0.9 × 7.4	○			
	〃	290	〃	9.45 × 0.95 × 7.4		○		
	〃	291	〃	8.5 × 1.1 × 6.65		○		
	〃	292	〃	9.0 × 1.0 × 7.25	?			
	〃	293	〃	9.0 × 1.1 × 7.1		○		
	〃	294	〃	9.2 × 1.2 × 7.2				
	〃	295	〃	8.7 × 1.2 × 7.85				○
	〃	296	〃	9.3 × 1.0 × 7.8	?			
	〃	297	〃	9.2 × 1.0 × 7.65				○
	〃	298	〃	9.6 × 1.15 × 7.5				○
	〃	299	〃	9.0 × 0.95 × 7.2				○
	〃	300	〃	9.1 × 0.9 × 7.1	○			○
	〃	301	〃	9.1 × 1.2 × 7.75				○
	〃	302	〃	9.3 × 0.9 × 7.3	○			○
	〃	303	〃	9.6 × 0.9 × 7.6				
	〃	304	〃	9.5 × 0.9 × 7.25	○			
	〃	305	〃	9.7 × 0.8 × 7.7				○
	〃	307	坏	12.8 × 1.3 × 9.4		○	○	○
	〃	308	〃	14.8 × 2.7 × 10.2		○	○	
	〃	309	〃	14.8 × 2.5 × 11		○		○

遺構名	挿図番号	番号	器種	口径 × 器高 × 底径(cm)	切り離し ヘラ	切り離し 糸	内底部ナデの有無	板状圧痕の有無
SX83	Fig78	310	〃	15.05 × 2.45 × 10.3			○	
	〃	311	〃	15.8 × 2.5 × 11.56				
	〃	312	〃	16 × 2.9 × 11.8				
	〃	313	〃	16.8 × 1.45 × 10.2		○		
	〃	314	〃	17.05 × 2.75 × 12.8		○		
SD08	Fig79	319	皿	8.0 × 1.1 × 6.2				
		320	〃	8.15 × 1.45 × 6.0				
	〃	321	〃	8.65 × 1.2 × 6.4	?			
	〃	322	坏	12.25 × 2.5 × 8.3		○		
	〃	323	〃	12.1 × 2.45 × 8.6		○		
	〃	324	〃	12.85 × 2.6 × 9.0		○		
	〃	325	〃	12.1 × 3.05 × 8.0		○		
	〃	326	〃	13.25 × 2.8 × 8.6		○	○	
	〃	327	〃	12.7 × 2.4 × 8.4		○	○	
	〃	328	〃	14 × 2.4 × 11.4		○		
SD24	Fig81	341	〃	12.45 × 2.35 × 9.6		○		
SD38	〃	342	皿	7.6 × 1.3 × 5.5				
	〃	343	坏	12.2 × 2.4 × 8.8		○		
SD40	〃	345	皿	8.6 × 1.1 × 7.12				
SD64	〃	348	〃	8.65 × 1.15 × 6.4		○	○	○
	〃	349	〃	9.6 × 1.1 × 8.6	○			
	〃	350	坏	11.7 × 2.3 × 8.5		○		
SX2403	Fig82	351	皿	9.4 × 1.05 × 8.37		○		
	〃	352	坏	14.4 × 2.3 × 8.9		○		
SX3137	Fig83	362	皿	8.6 × 1.25 × 6.0	○			
	〃	363	〃	8.8 × 1.25 × 6.7	○		○	○
	〃	364	〃	9.6 × 1.0 × 7.4			○	
	〃	365	〃	9.8 × 1.35 × 7.8	○			
	〃	366	〃	10.05 × 1.15 × 8.4		○		○
	〃	367	〃	9.55 × 1.2 × 7.2	○		○	
	〃	368	〃	9.4 × 1.4 × 7.2		○		
	〃	369	〃	9.5 × 1.1 × 7.6		○		
	〃	370	〃	9.7 × 1.3 × 7.0		○	○	○
	〃	371	坏	16.0 × 2.8 × 10.87	○		○	○
SK01	Fig84	381	皿	8.45 × 1.45 × 6.4		○		
	〃	382	坏	12.8 × 3.05 × 9.35		○	○	
SK02	〃	283	皿	7.5 × 1.4 × 4.4		?	○	
	〃	384	〃	8.05 × 1.4 × 5.8		○		
	〃	385	〃	8.55 × 1.25 × 7.0		○	○	
	〃	386	〃	8.3 × 1.0 × 6.25		○		
	〃	387	〃	7.95 × 1.3 × 6.3		○		
SK03	〃	388	〃	9.7 × 2.05 × 8.0	○			
	〃	389	〃	9.9 × 2.5 × 8.0	○			
	〃	390	〃	9.6 × 2.0 × 7.6	○			
	〃	391	〃	10.4 × 2.1 × 7.88	?			
	〃	393	〃	10.6 × 2.0 × 9.0	?			
SK08	Fig85	399	〃	8.4 × 1.35 × 7.2		○	○	
	〃	400	〃	7.85 × 1.0 × 7.0		○		
SK18	〃	421	坏	13.65 × 2.7 × 9.6		?		
SK19	〃	422	皿	8.75 × 2.03 × 6.5		?		
SK31	Fig86	435	〃	8.65 × 1.0 × 7.0		○		
	〃	436	〃	9.2 × 1.1 × 7.0		○		
	〃	437	〃	9.35 × 1.05 × 7.6				
SK32	Fig87	441	〃	8.2 × 1.3 × 6.2		○		
	〃	442	〃	8.45 × 1.0 × 5.9		○		
	〃	443	〃	9.6(9.0) × 1.3 × 8.0		○		
SK34	〃	445	〃	8.75 × 1.35 × 7.2		○	○	
	〃	446	〃	8.6 × 1.3 × 7.4		○		
	〃	447	〃	8.6 × 1.25 × 6.9		○		
	〃	448	〃	8.6 × 1.15 × 6.8		○	○	
	〃	449	〃	8.55 × 1.35 × 6.85		○	○	
SK36	Fig87	451	〃	7.8 × 1.25 × 5.2		?	○	
	〃	452	〃	8.55 × 1.35 × 6.8		?		
SK37	〃	454	坏	15 × 3.15 × 11.6		○		
SK38	〃	455	〃	14 × 2.7 × 5.5				
表土・包含層	Fig88	461	皿	8.45 × 1.3 × 5.2		○		
	〃	462	〃	8.0 × 1.5 × 7.25		○	○	○
	〃	463	坏	16.2 × 2.45 × 12.2		○	○	○
	Fig89	476	皿	10.8 × 2.88 × 6.5	○			
	〃	477	坏	13.65 × 2.45 × 9.4				
	〃	478	〃	13.85 × 2.05 × 10.5	?	○		
	〃	479	〃	15.8 × 2.35 × 13.0				
	〃	480	〃	16.25 × 3 × 11.25				
	〃	481	皿	9.6 × 1.2 × 7.6	○			
	〃	482	〃	8.6 × 1.1 × 3.2		○		
	〃	483	〃	8.8 × 1.05 × 7.2		?		
	〃	484	〃	8.85 × 1.25 × 6.8		○		
	〃	485	〃	8.8 × 2.25 × 6.4		○		
	〃	486	〃	8.8 × 1.2 × 8.13	○	○		

図 版

PLATES

第Ⅰ区発掘調査風景（1985年２月）

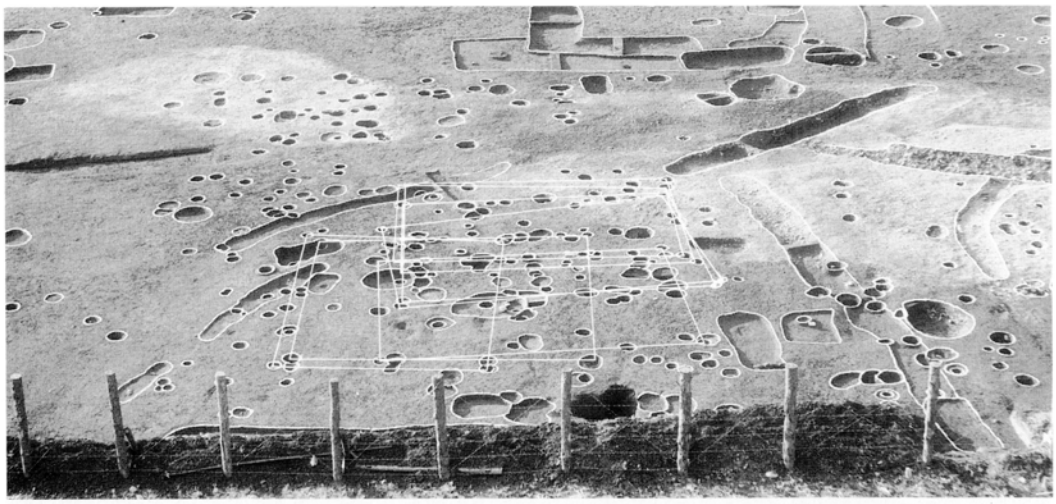
戸原麦尾遺跡とその周辺（航空写真）

(1) 戸原麦尾遺跡遠景および粕屋平野を臨む（西から）

(2) 戸原麦尾遺跡遠景および多々良川河口を臨む（東から）

(1) 第Ⅰa区全景（東から）

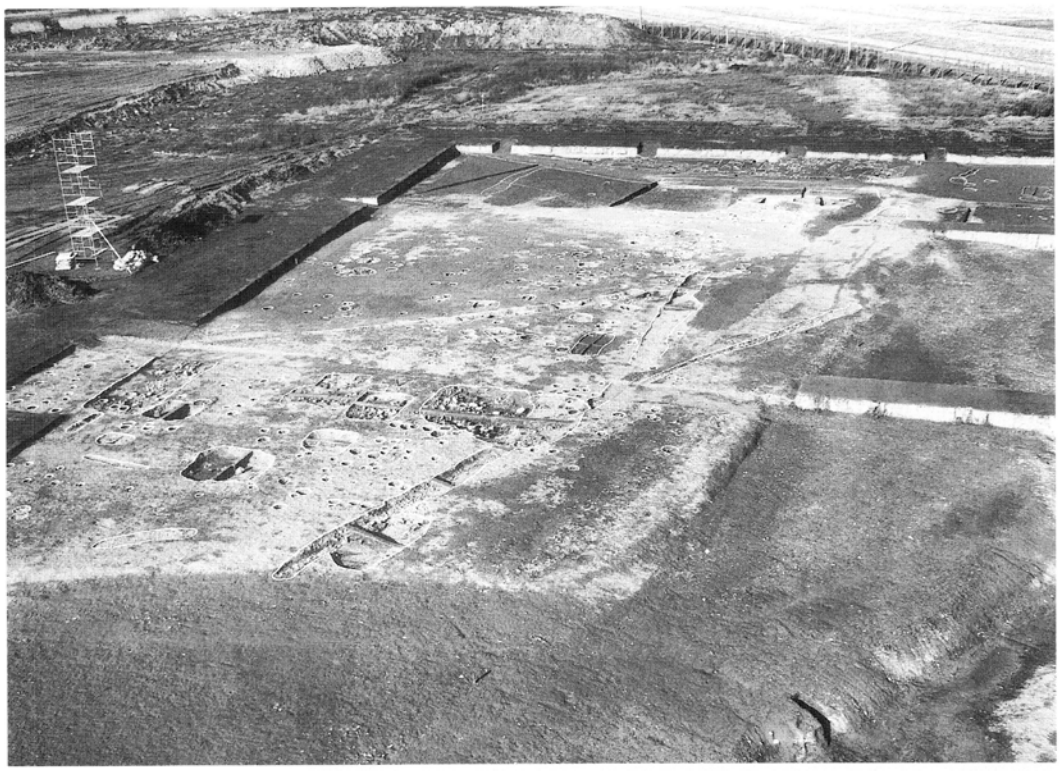
(2) 第Ⅰa区北東～北側遺構分布状況（東から）



(1) 第Ⅰａ区北東部遺構分布状況（東から）

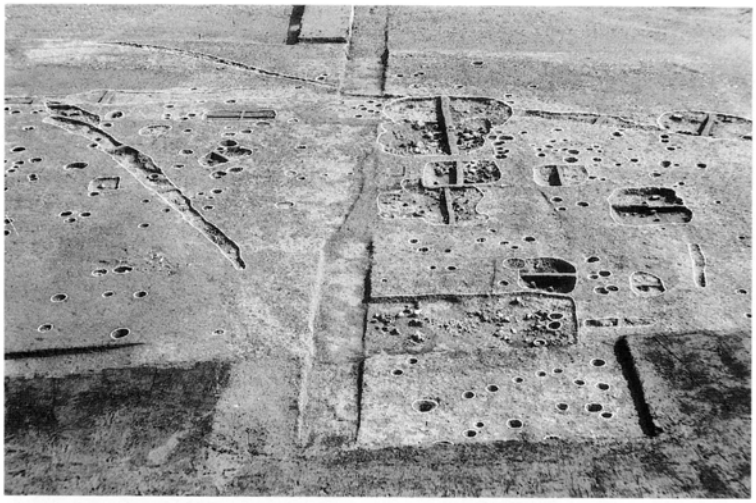
(2) 第Ⅰａ区北東部遺構分布状況（南から）

(3) 第Ⅰａ区北側遺構検出状況（西から）

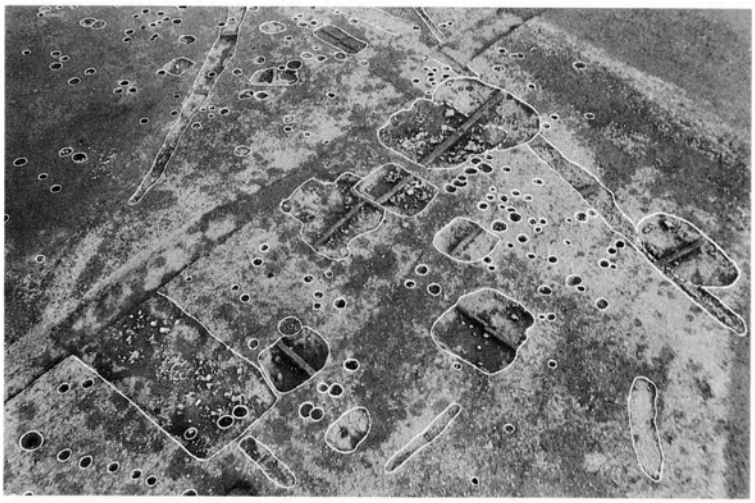


(1) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況（南から）

(2) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況（南西から）



(1) 第Ⅰａ区西側遺構分布状況（西から）

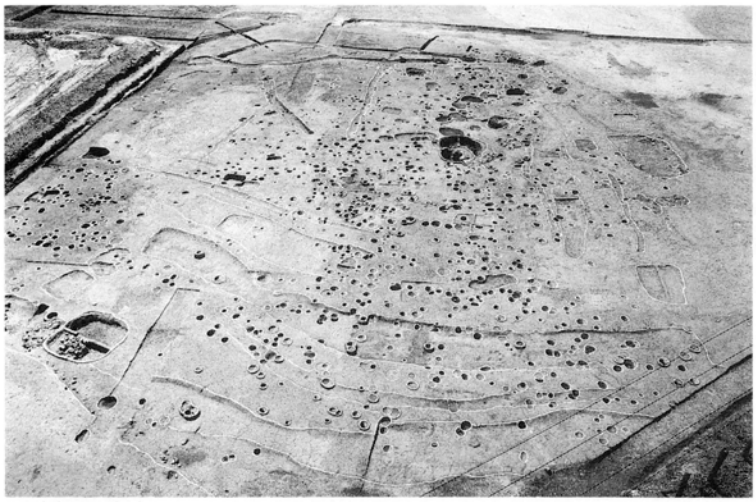


(2) 第Ⅰａ区西側竪穴遺構完掘状況（南西から）

(3) 第Ⅰａ区北側遺構完掘状況（西から）

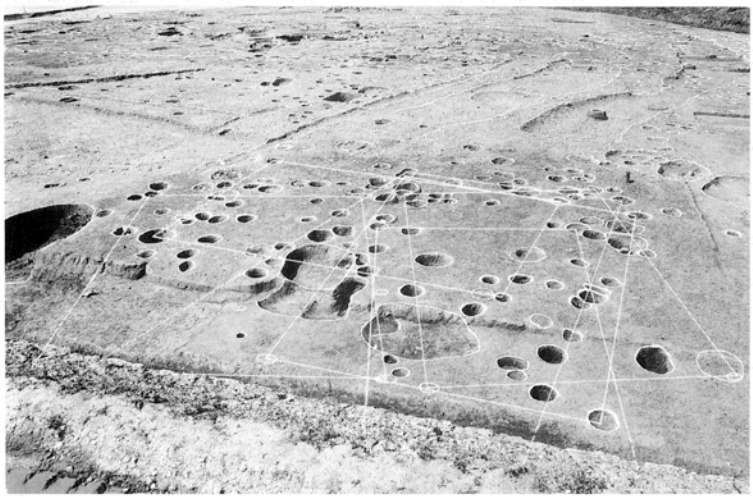
(1) 第Ⅰb区完掘状況全景（西から）

(2) 第Ⅰb区完掘状況全景（南から）



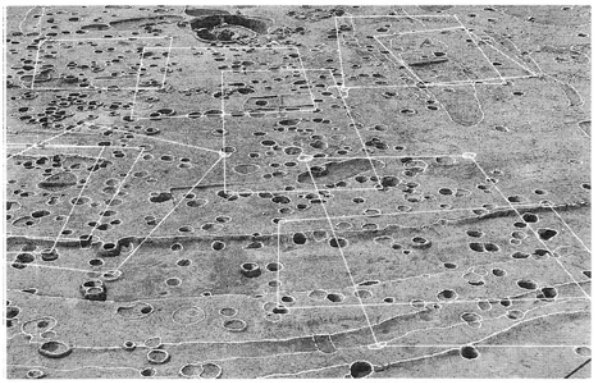
(1) 第Ⅰb区部分完掘状況
（東から）

(2) 第Ⅰb区部分完掘状況
（西から）

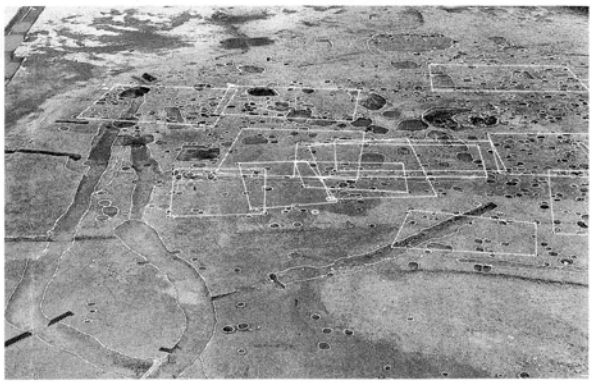


(3) 第Ⅰb区部分完掘状況
（南から）

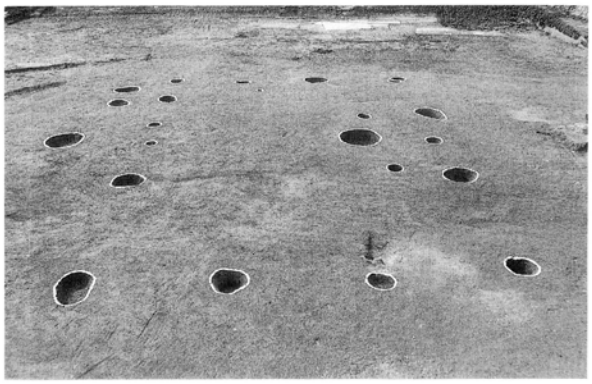
(1) 第Ⅰb区掘立柱建物検出状況（東から）



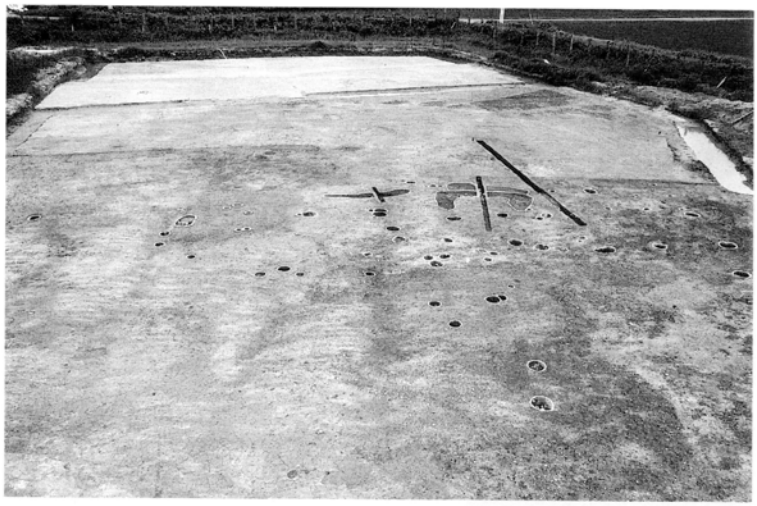
(2) 第Ⅰb区掘立柱建物検出状況（東から）



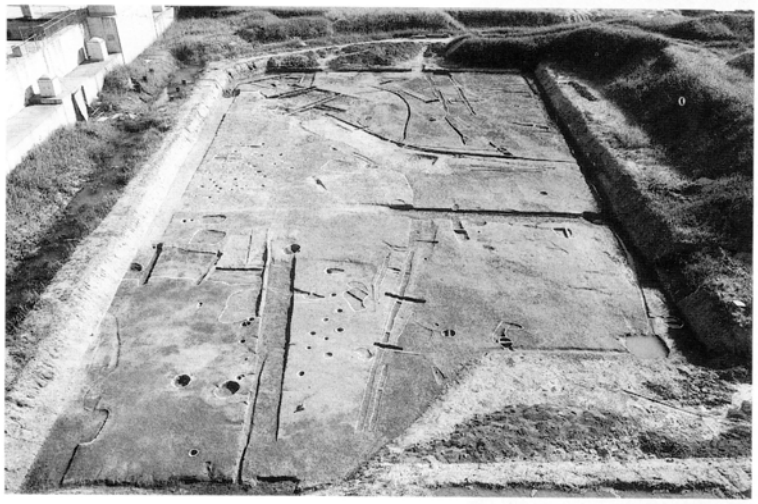
(3) 第Ⅰb区掘立柱建物検出状況（南から）



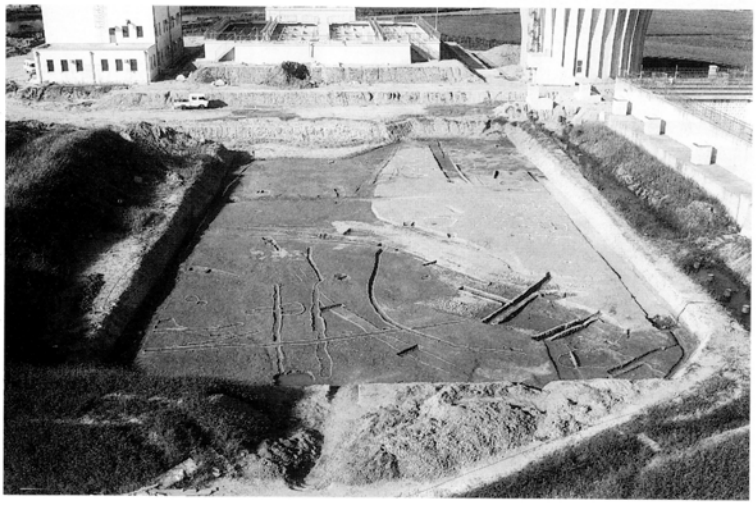
(4) 第Ⅰd区掘立柱建物検出状況（東から）



(1) 第Ⅰb区北側部分完掘状況（南から）



(2) 第Ⅰd区完掘状況（北から）



(3) 第Ⅰd区完掘状況（南から）

(1) 井戸（ＳＥ01）完掘状況（東から）

(2) 井戸（ＳＥ02）完掘状況（西から）

(3) 井戸（ＳＥ05）完掘状況（南から）

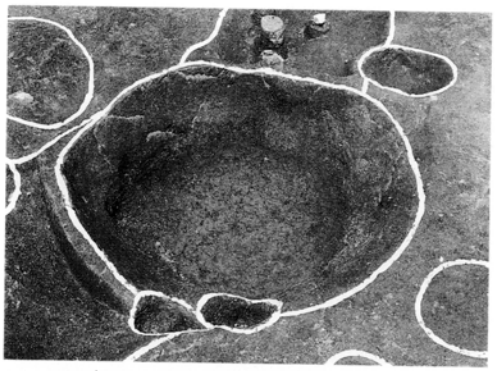
(4) 井戸（ＳＥ06）桶側遺存状況（西から）

(5) 井戸（ＳＥ07・08）桶側遺存状況（南から）

(6) ＳＥ07桶側遺存状況（西から）

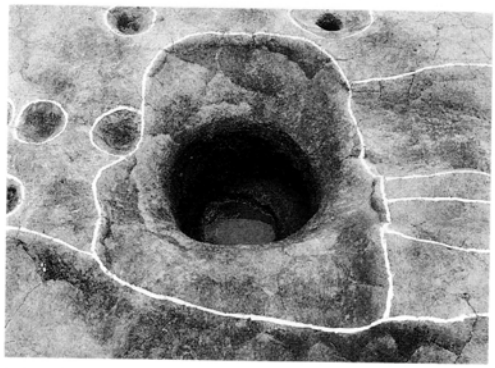
(7) 井戸（ＳＥ07）井戸枠遺存状況（南西から）

(8) 井戸（ＳＥ07）井戸枠遺存状況（南西から）

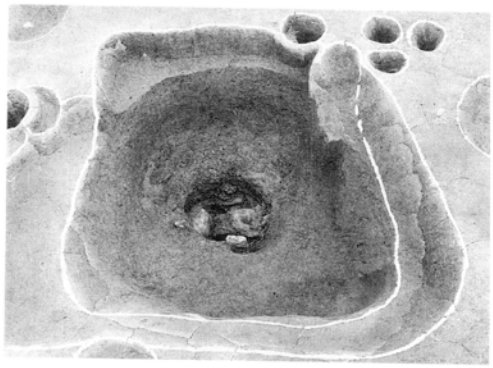


(1) 井戸（ＳＥ09）完掘状況（南から）

(2) 井戸（ＳＥ10）石組状況（北から）

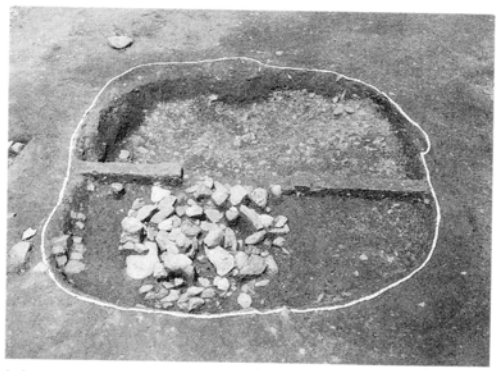


(3) 井戸（ＳＥ10）完掘状況（西から）



(4) 井戸（ＳＥ11）桶側遺存状況（西から）

(5) 井戸（ＳＥ11）桶側遺存状況（南から）

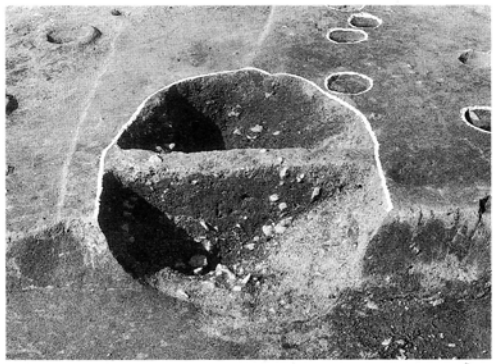


(6) 井戸（ＳＥ12）検出状況（南東から）

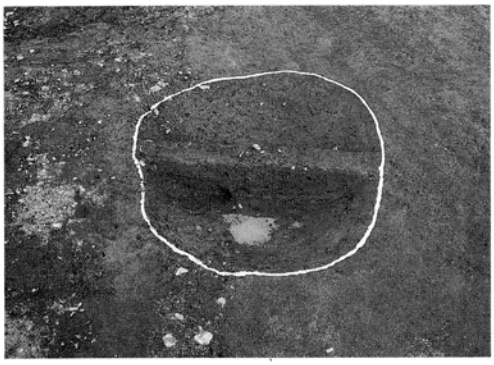
(7) 井戸（ＳＥ12・13）石組状況（西から）

(8) 井戸（ＳＥ12）井側内状況（西から）

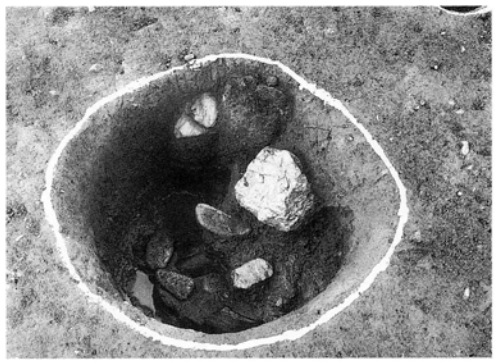
(1) 井戸（ＳＥ13）石組・井側遺存状況（南から）



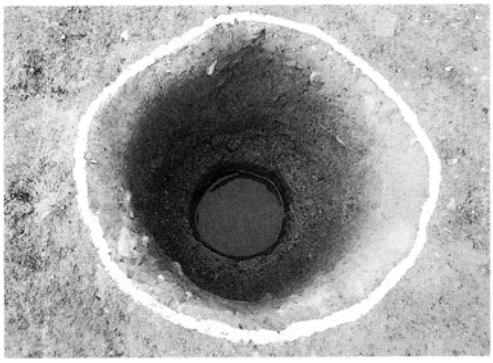
(2) 井戸（ＳＥ14）完掘状況（南から）



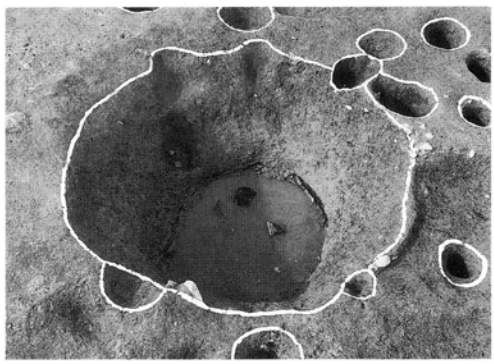
(3) 井戸（ＳＥ15）完掘状況（西から）



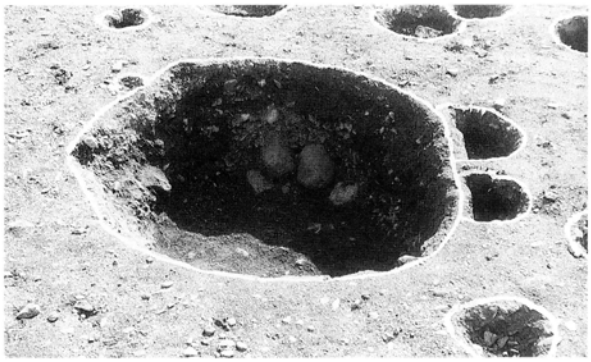
(4) 井戸（ＳＥ17）内遺物出土状況（南から）



(5) 井戸（ＳＥ17）完掘状況（南から）



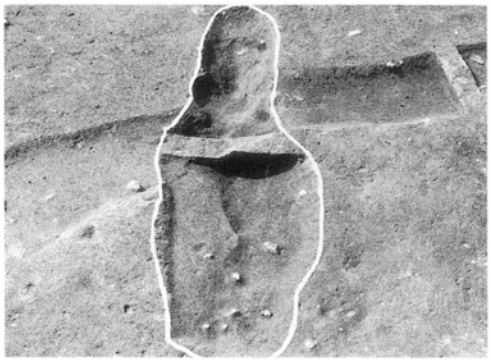
(6) 井戸（ＳＥ21）完掘状況（南から）



(7) 井戸（ＳＥ22）完掘状況（北から）

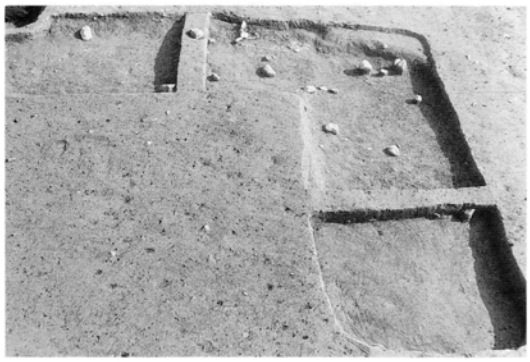
(1) 竪穴遺構（ＳＸ03）遺物出土状況（西から）

(2) 竪穴遺構（ＳＸ04）焼石・木炭出土状況（南西から）

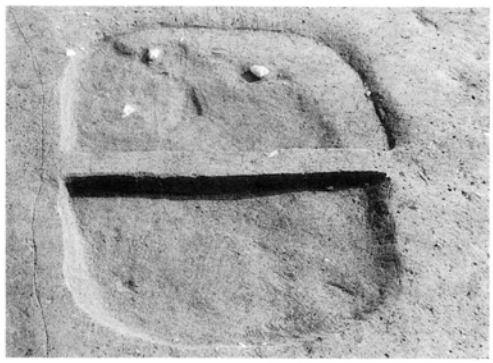


(3) 竪穴遺構（ＳＸ05）完掘状況（南東から）

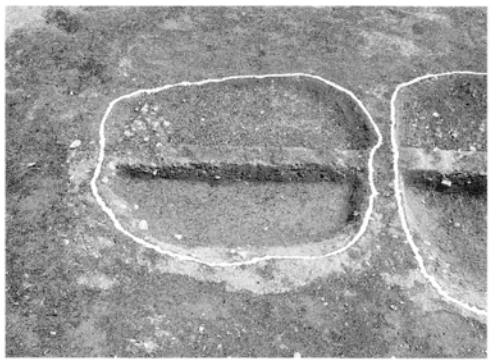
(4) 竪穴遺構（ＳＸ06）遺物出土状況（南から）



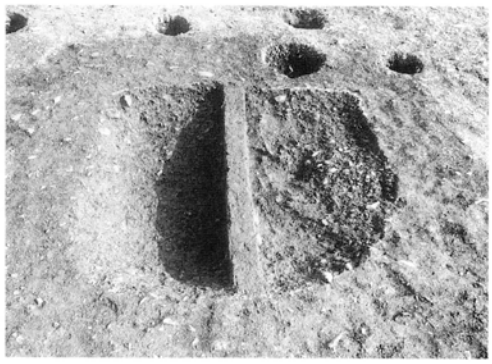
(5) 竪穴遺構（ＳＸ07）完掘状況（西から）



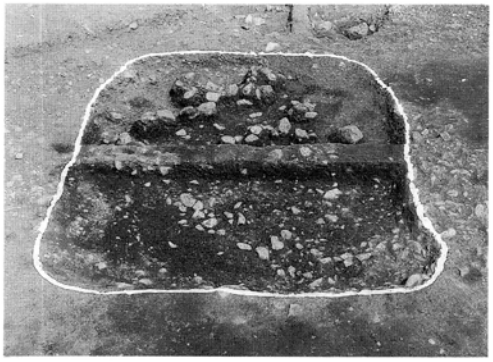
(6) 竪穴遺構（ＳＸ10）完掘状況（西から）



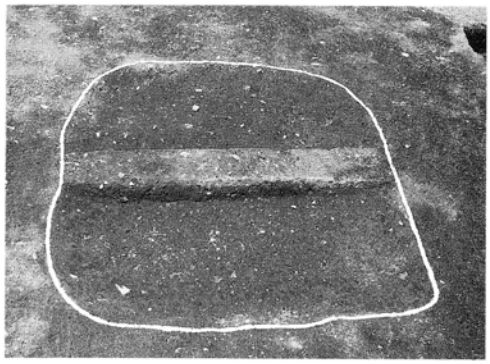
(7) 竪穴遺構（ＳＸ11）完掘状況（南から）



(8) 竪穴遺構（ＳＸ15）完掘状況（西から）

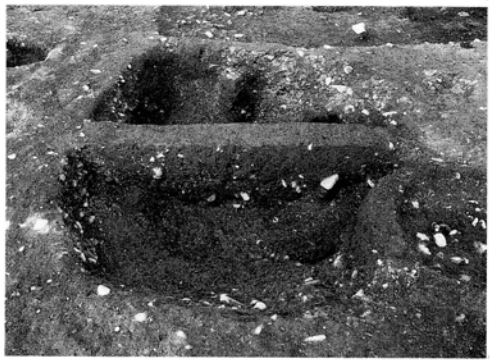


(1) 竪穴遺構（ＳＸ16）完掘状況（南東から）

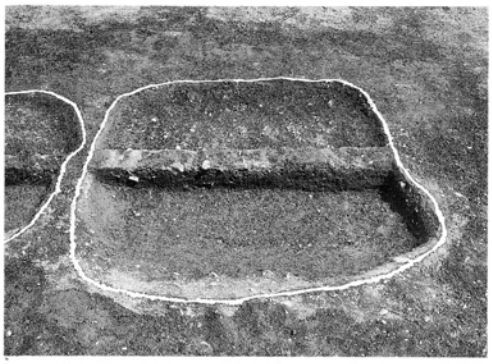


(2) 竪穴遺構（ＳＸ17）完掘状況（東から）

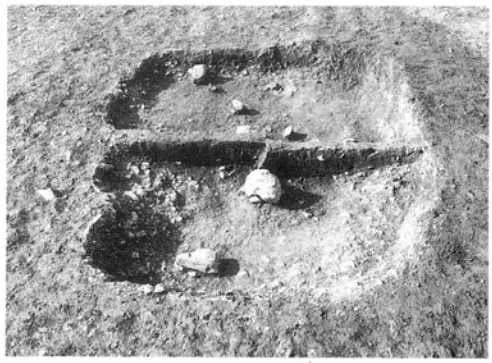
(3) 竪穴遺構（ＳＸ18）完掘状況（南東から）



(4) 竪穴遺構（ＳＸ19）完掘状況（東から）

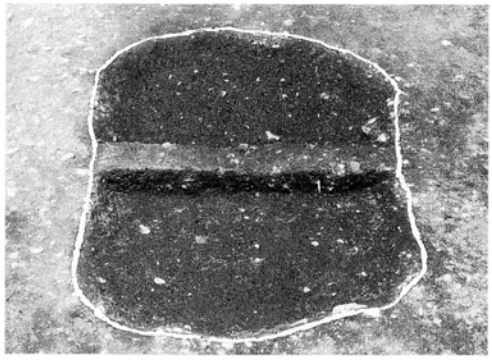


(5) 竪穴遺構（ＳＸ20）完掘状況（南から）

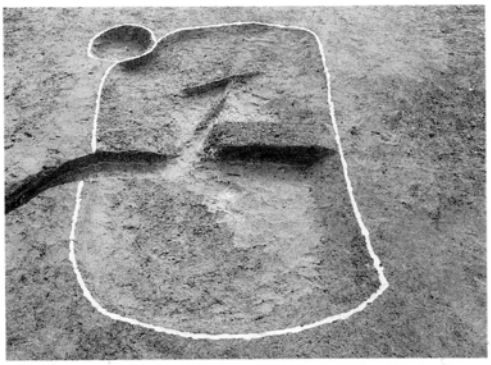


(6) 竪穴遺構（ＳＸ22）完掘状況（南から）

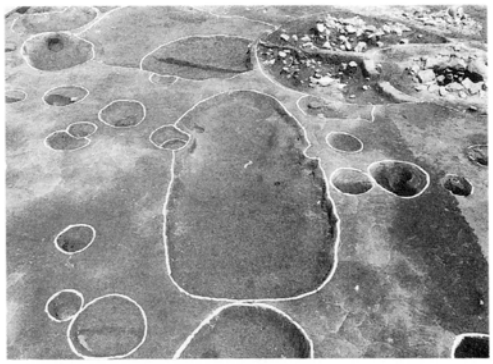
(7) 竪穴遺構（ＳＸ23）完掘状況（北から）



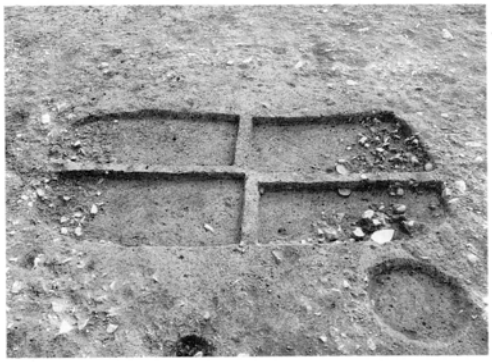
(8) 竪穴遺構（ＳＸ26）完掘状況（東から）



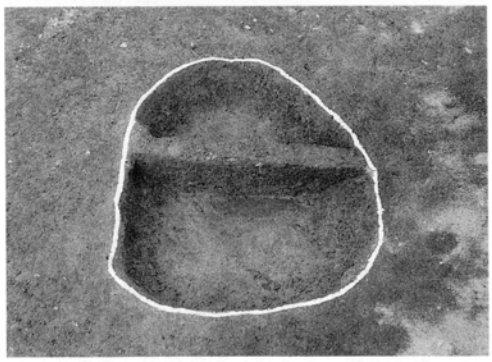
(1) 竪穴遺構（ＳＸ31）完掘状況（東から）



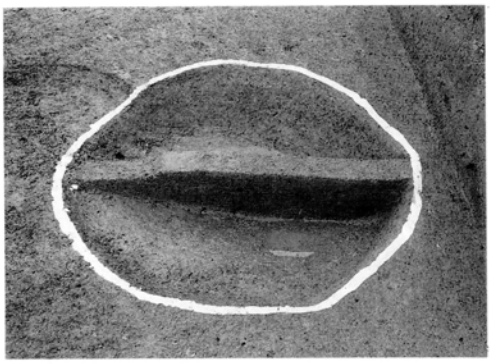
(2) 竪穴遺構（ＳＸ32・ＳＫ14・ＳＸ58・59）完掘及び切り合い状況（南から）



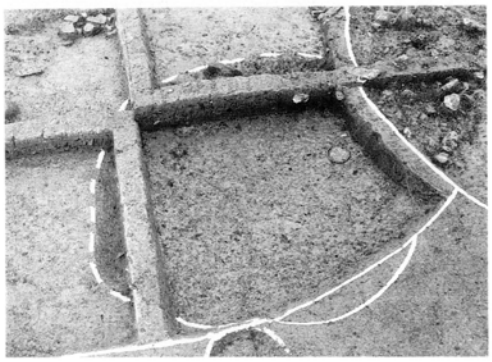
(3) 竪穴遺構（ＳＸ34）完掘状況（南東から）



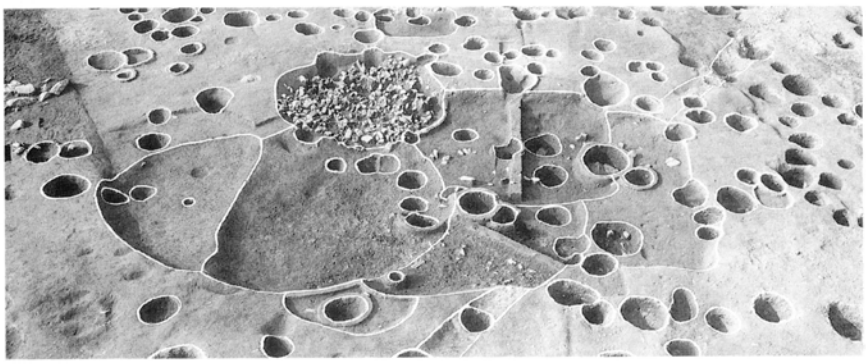
(4) 竪穴遺構（ＳＸ46）完掘状況（南から）



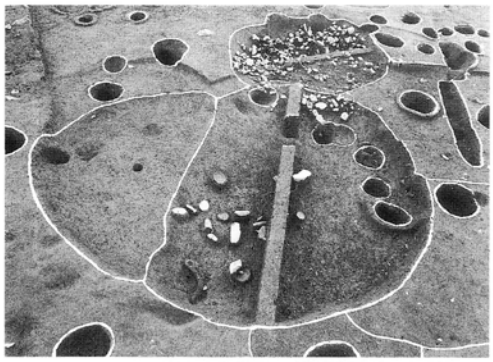
(5) 竪穴遺構（ＳＸ50）完掘状況（北から）



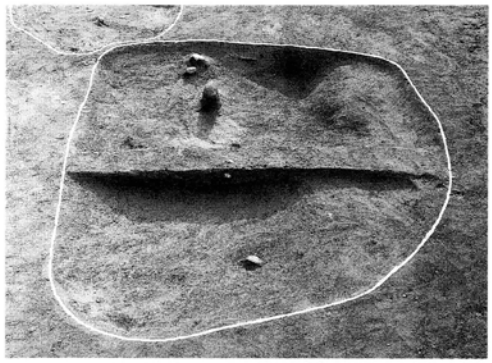
(6) 竪穴遺構（ＳＸ59）完掘状況（南から）



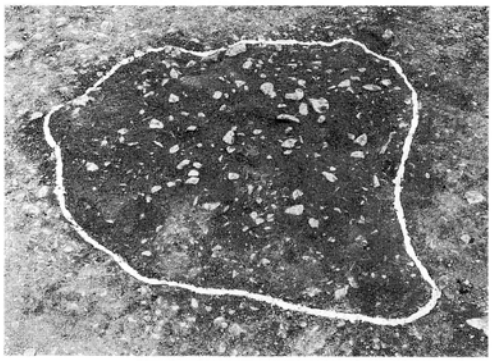
(7) 溝状遺構(ＳＤ33)・井戸(ＳＥ21)・竪穴遺構(ＳＸ60～64)完掘及び切り合い状況(南南東から)



(1) 井戸（ＳＥ21）・竪穴遺構（ＳＸ60～64）完掘及び切り合い状況（南西から）

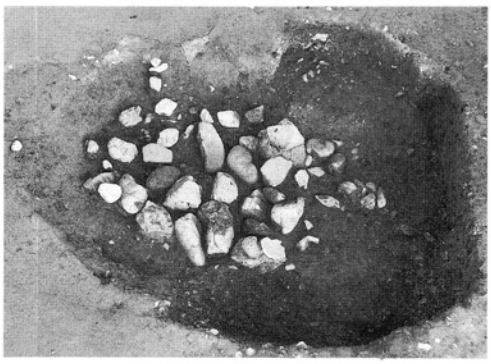


(2) 竪穴遺構（ＳＸ67）完掘状況（南西から）



(3) 竪穴遺構（ＳＸ68）完掘状況（南西から）

(4) 竪穴遺構（ＳＸ71）完掘状況（東から）



(5) 竪穴遺構（ＳＸ72）物出土状況（南から）

(6) 竪穴遺構（ＳＸ72）完掘状況（南から）

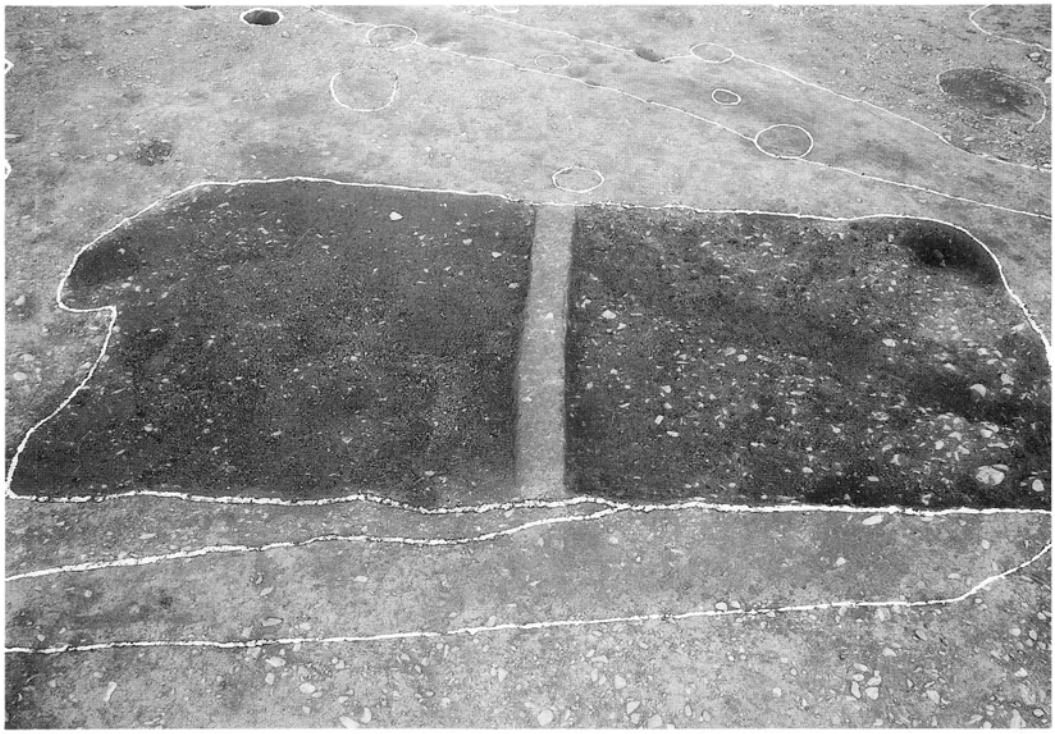
(7) 竪穴遺構（ＳＸ73）完掘状況（南から）

(8) 竪穴遺構（ＳＸ73・74）完掘・切り合い状況（北から）

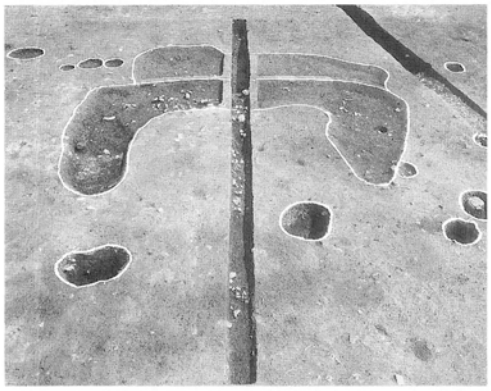
(1) 竪穴遺構（ＳＸ75）完掘状況（北から）

(2) 竪穴遺構（ＳＸ75）遺物出土状況（北から）

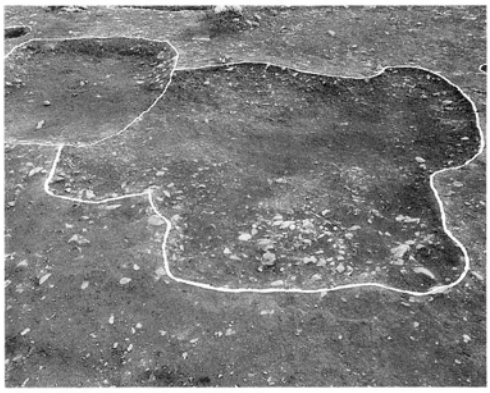
(3) 竪穴遺構（ＳＸ77）完掘状況（北から）



(1)



(2)



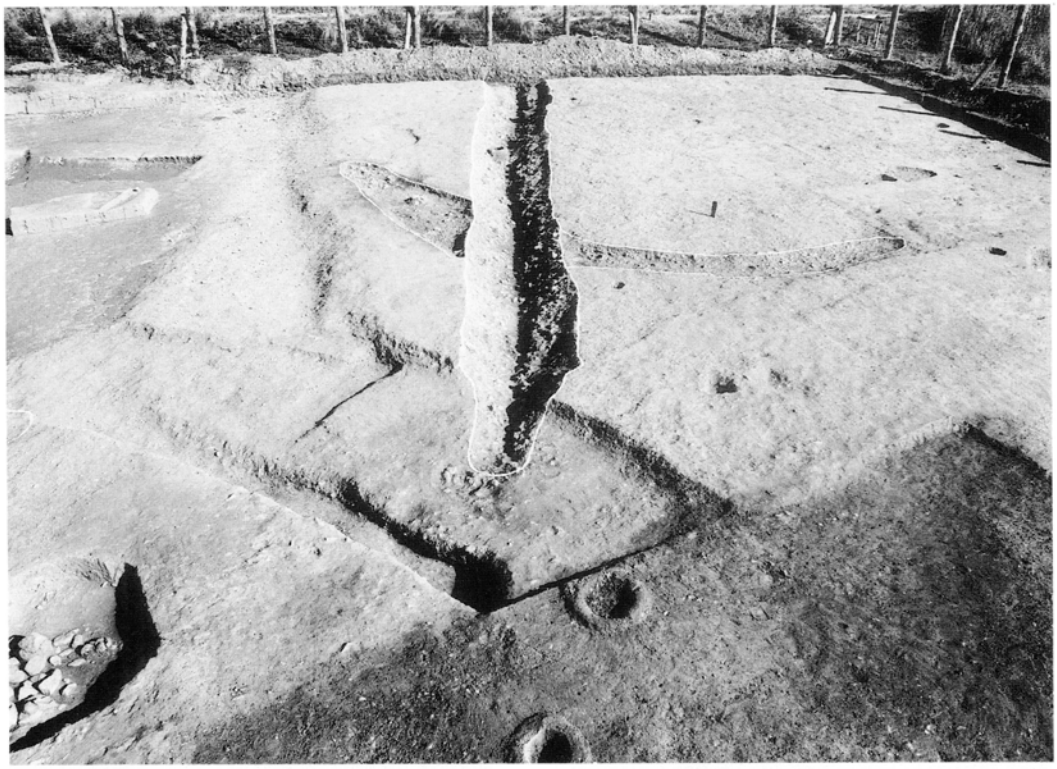
(3)

(1) 竪穴遺構（ＳＸ78）完掘状況（北から）

(2) 竪穴遺構（ＳＸ79～81）完掘状況（南から）

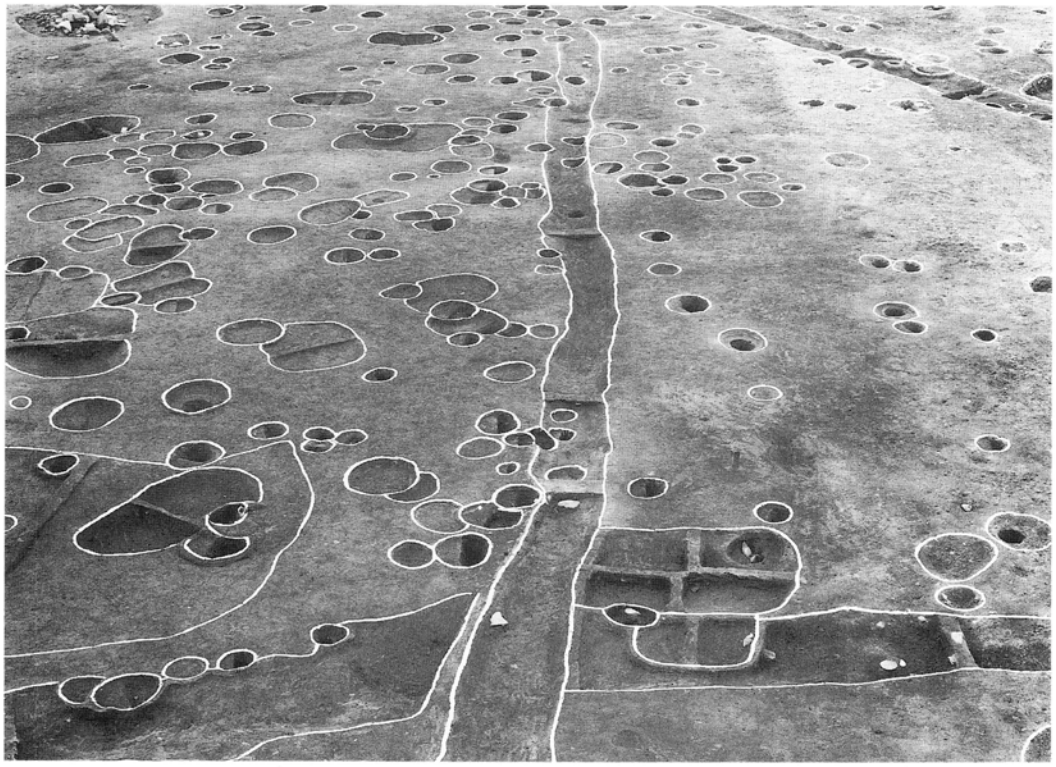
(3) 竪穴遺構（ＳＸ82）完掘状況（北から）

(4) 竪穴遺構（ＳＸ83）遺物出土状況（南から）

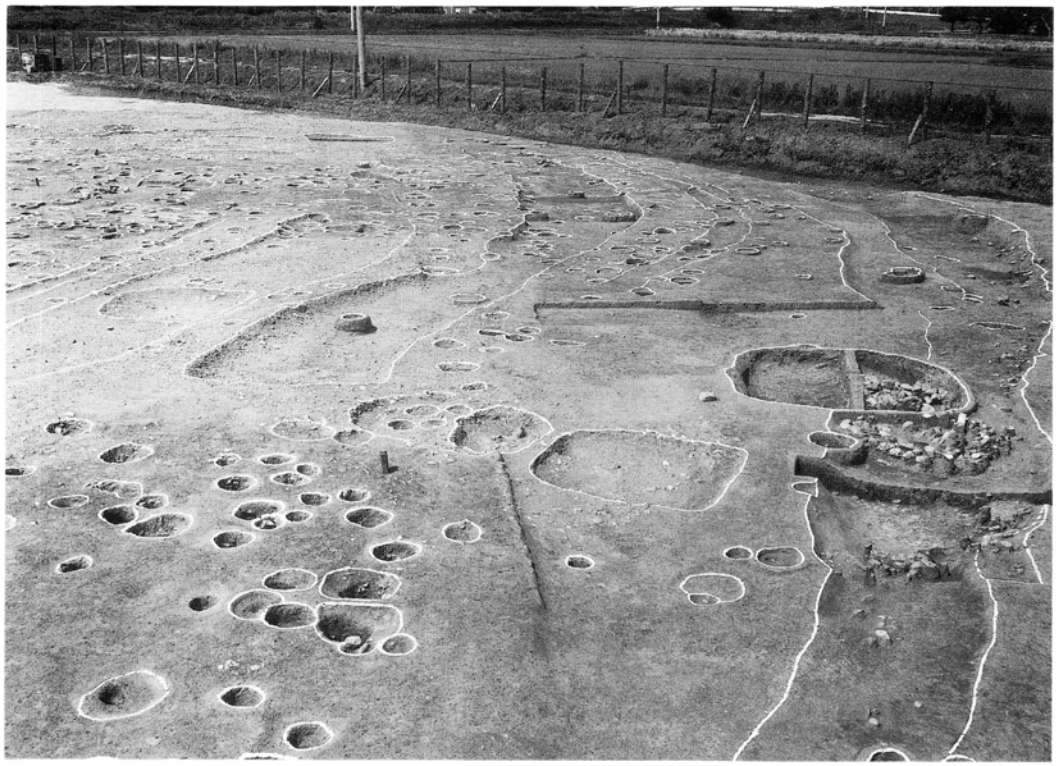


(1) 溝状遺構（ＳＤ01・02・05）完掘状況（南西から）

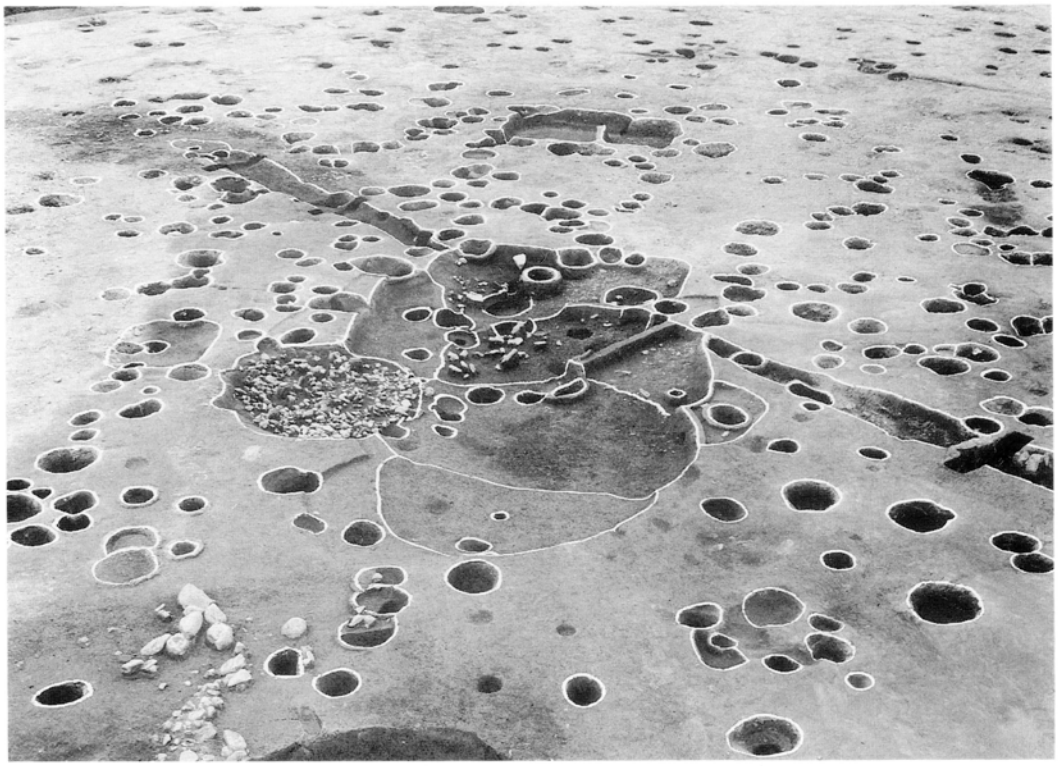
(2) 溝状遺構（ＳＤ24・25・26・64・68）完掘状況（南東から）



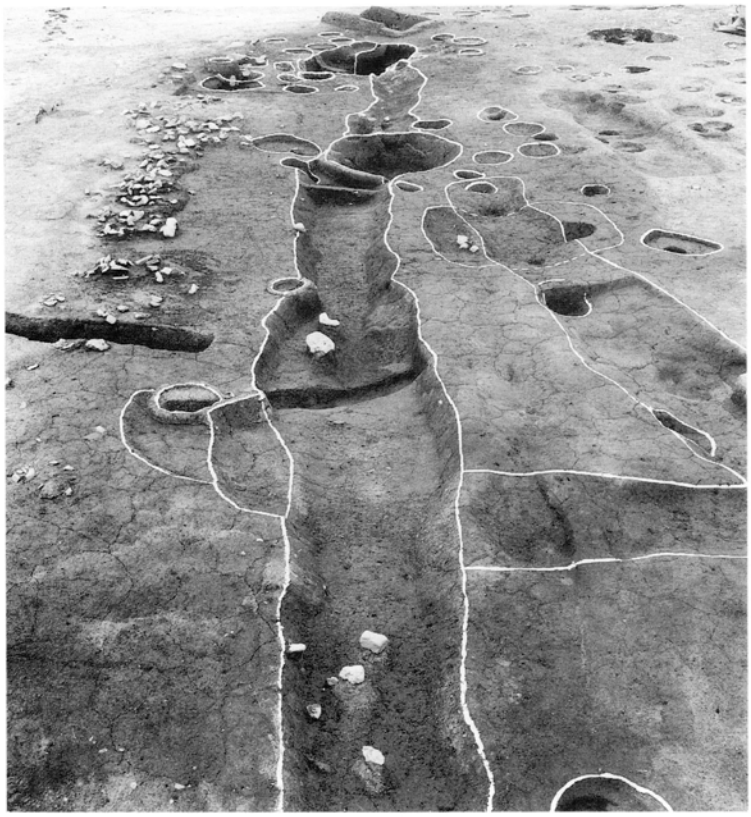
(1) 溝状遺構（ＳＤ23・26）完掘及び切り合い状況（西から）



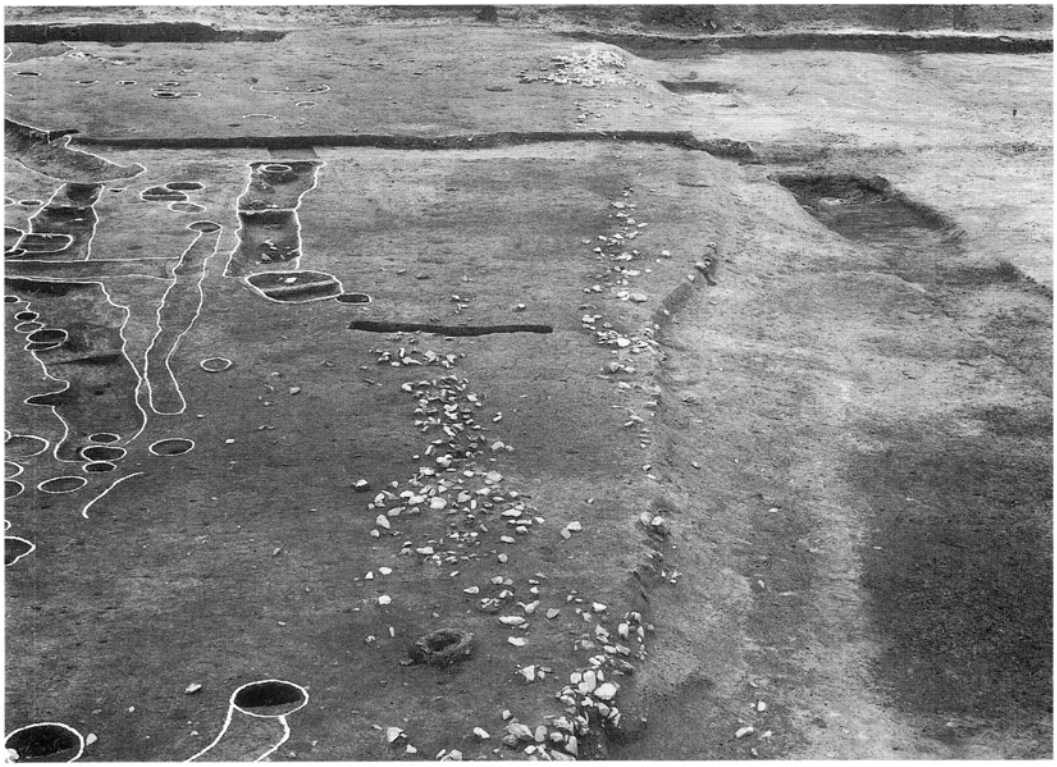
(2) 溝状遺構（ＳＤ08・60・16・21）完掘状況（南西から）



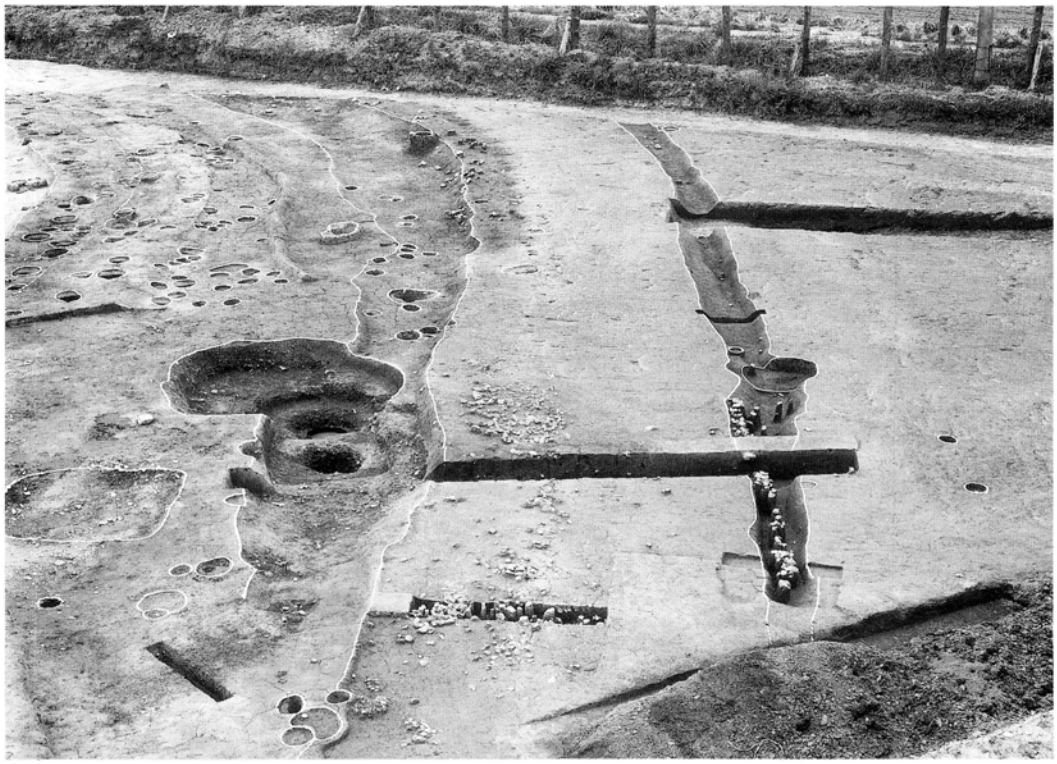
(1) 溝状遺構（ＳＤ33）完掘状況及びＳＸ62等との切り合い状況（西から）



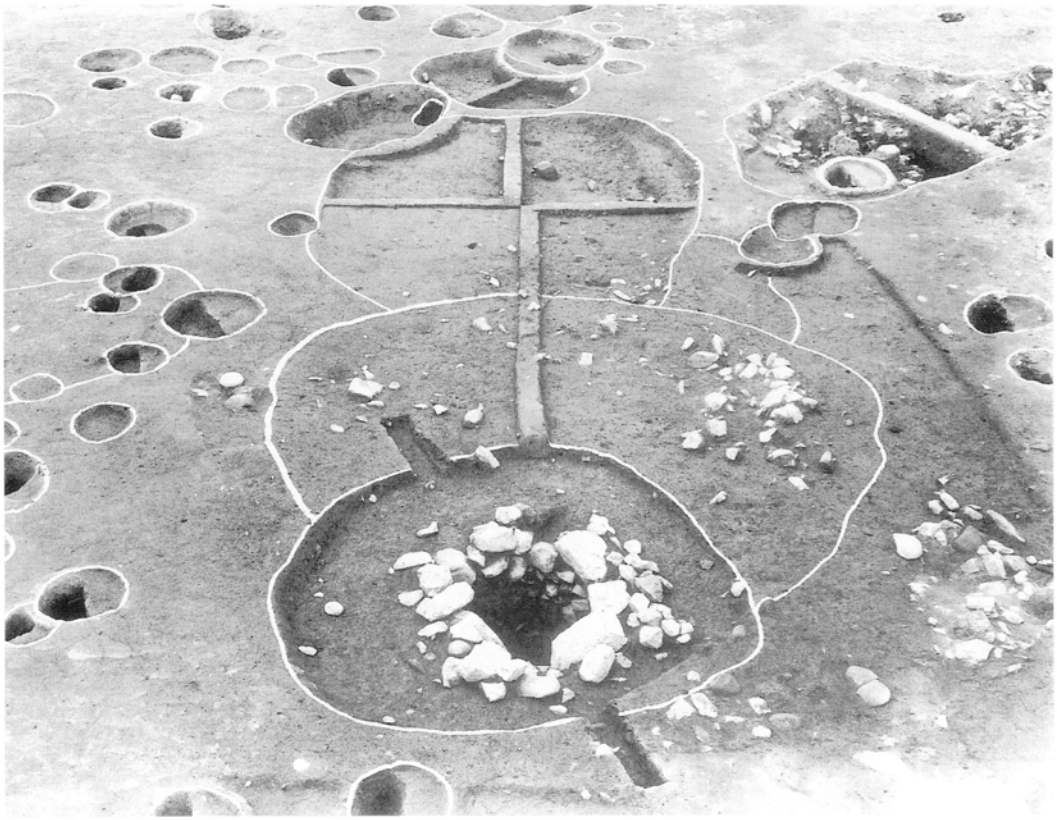
(2) 溝状遺構（ＳＤ64）
完掘状況（西から）



(1) 礫群（ＳＸ2403）検出状況（北から）



(2) 礫群（ＳＸ3137）検出状況及びＳＤ08・34（南西から）

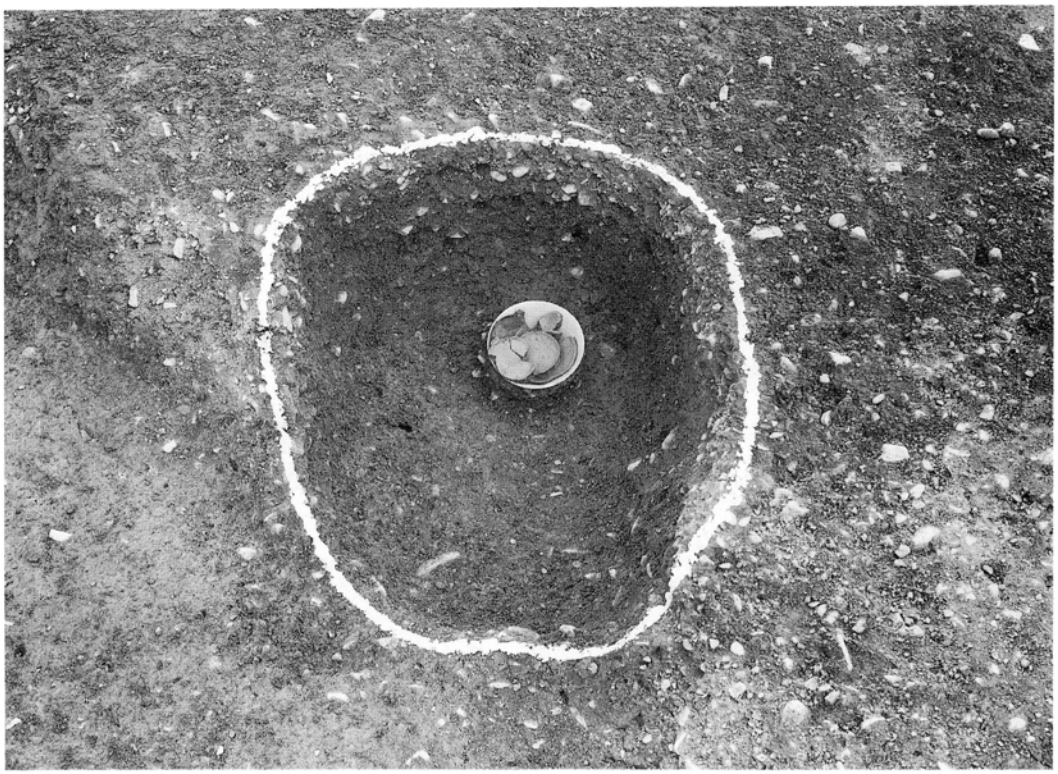


(1) 井戸(ＳＥ06～08)・竪穴遺構(ＳＸ58・59)・土壙(ＳＫ14)検出及び切り合い状況(東から)

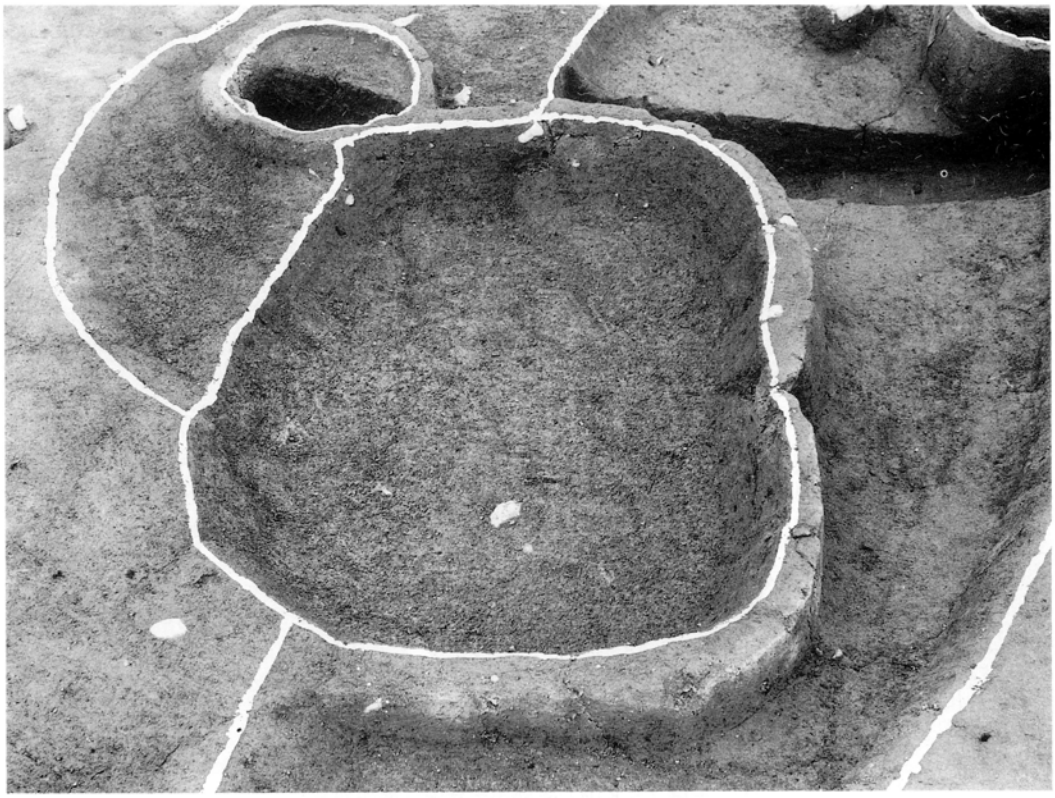
(2) 土壙（ＳＫ02）遺物出土状況（南から）

(3) 土壙（ＳＫ03）遺物出土状況（北東から）

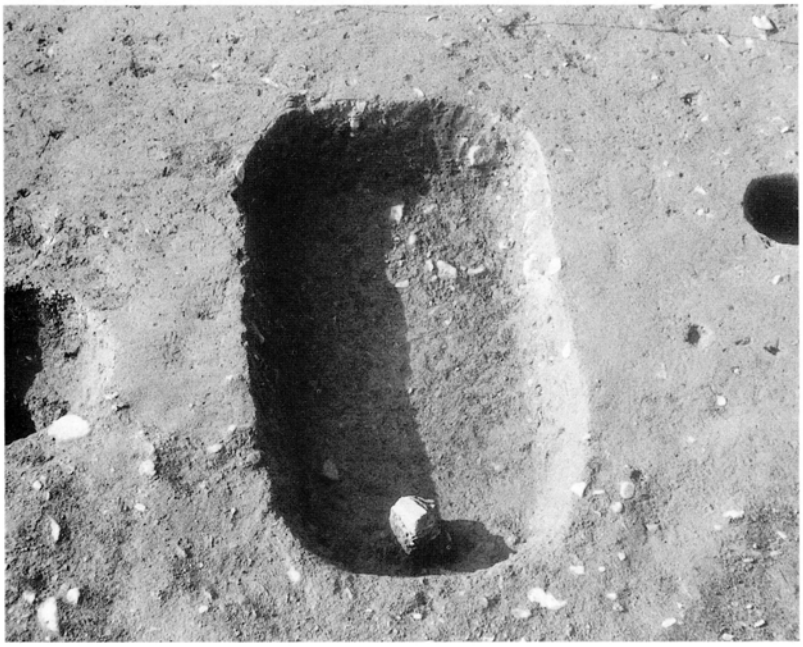
(1) 土壙（ＳＫ04）遺物出土状況（南西から）



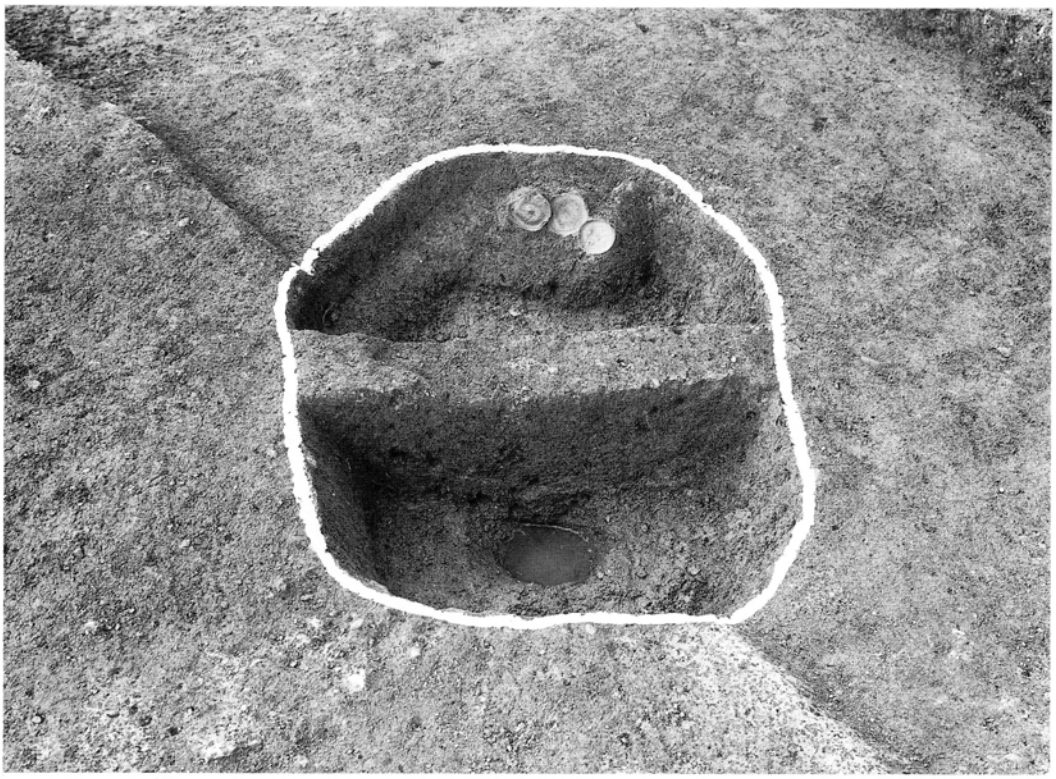
(2) 土壙（ＳＫ05）遺物出土状況（南から）



(1) 土壙（ＳＫ06）完掘状況（南から）

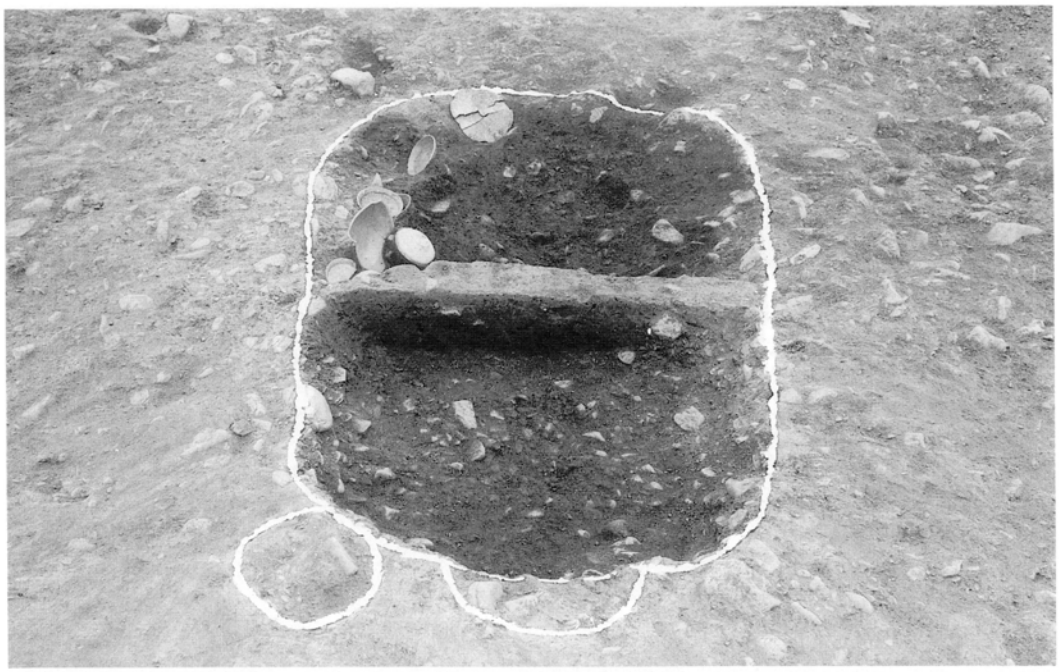


(2) 土壙（ＳＫ07）完掘状況（東から）



(1) 土壙（ＳＫ08）完掘状況（南西から）

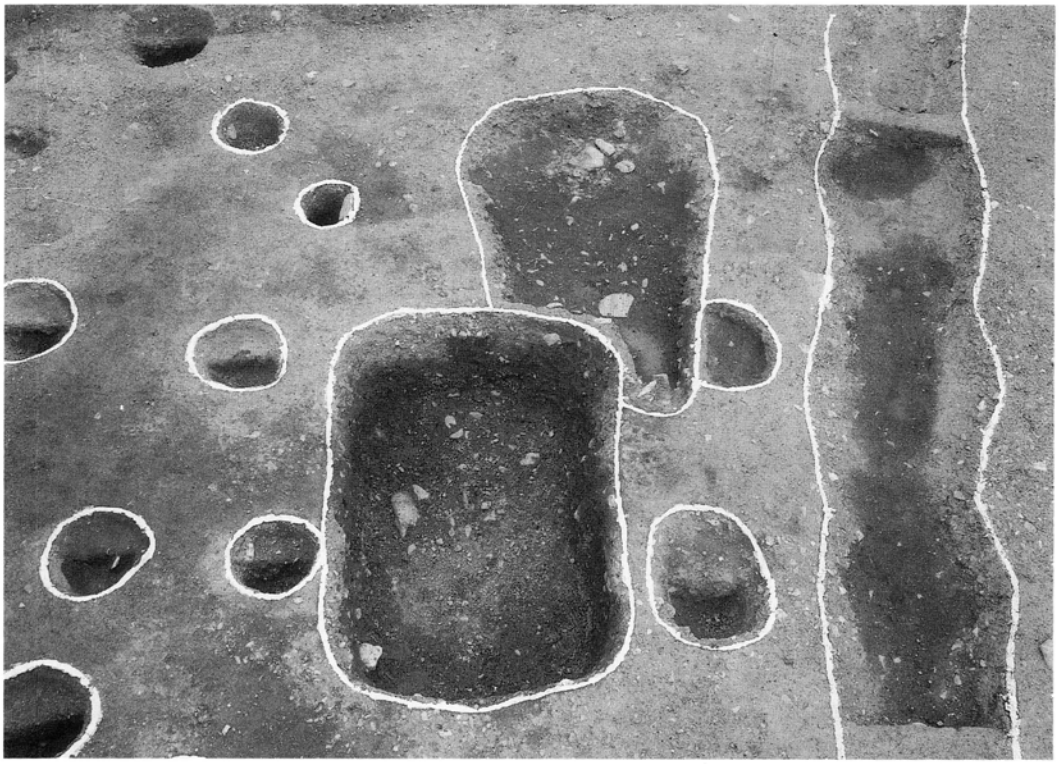
(2) 木棺墓（ＳＫ09）完掘状況（北西から）



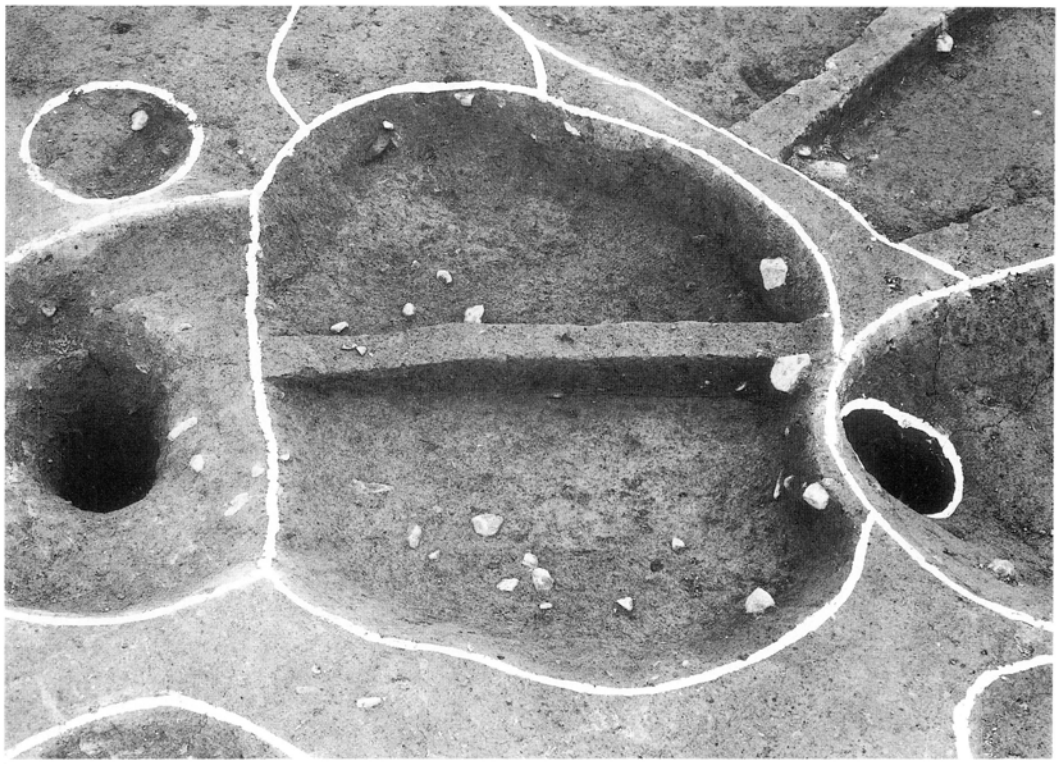
(1) 木棺墓（ＳＫ10）完掘および遺物出土状況（北から）

(2) 木棺墓(ＳＫ10)遺物(六花鏡・白磁碗・皿)出土状況(北から)

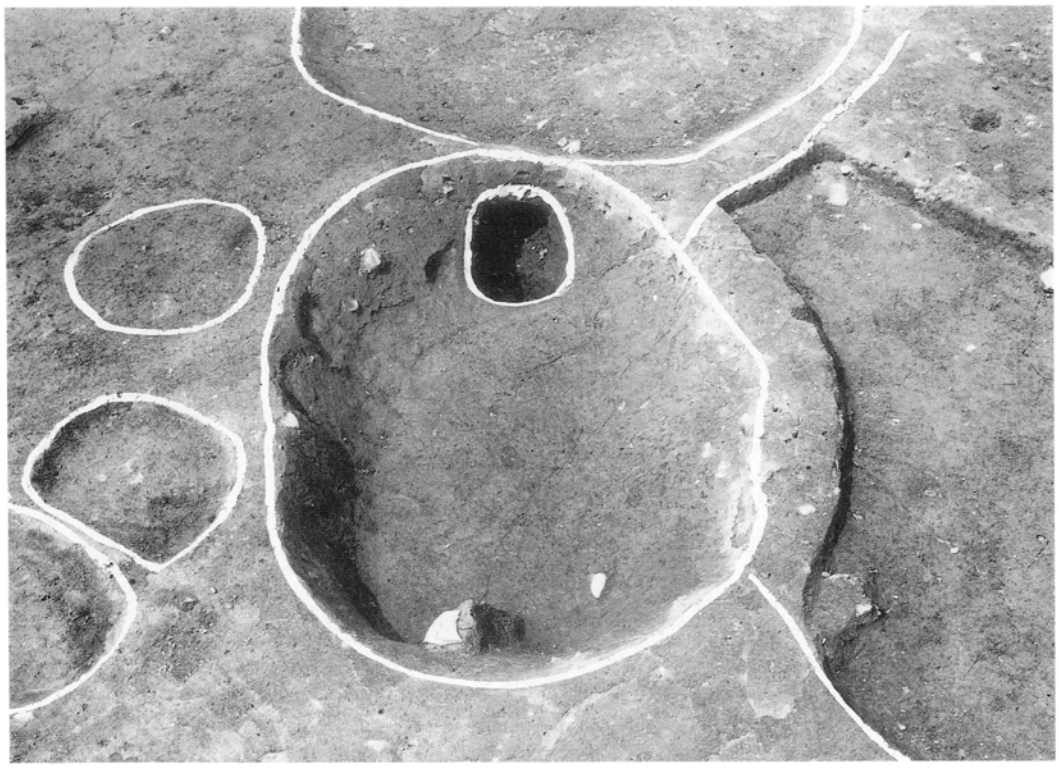
(3) 木棺墓（ＳＫ10）遺物（ガラス製小玉）出土状況（北から）



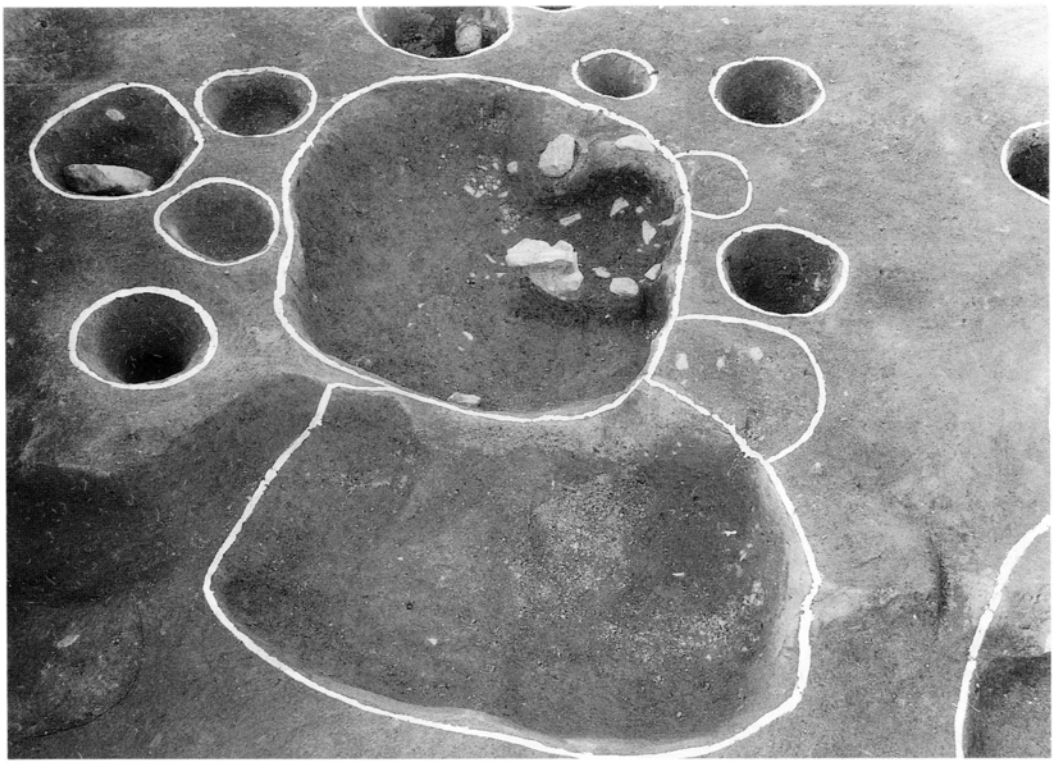
(1) 木棺墓（ＳＫ11・12）完掘状況（南西から）



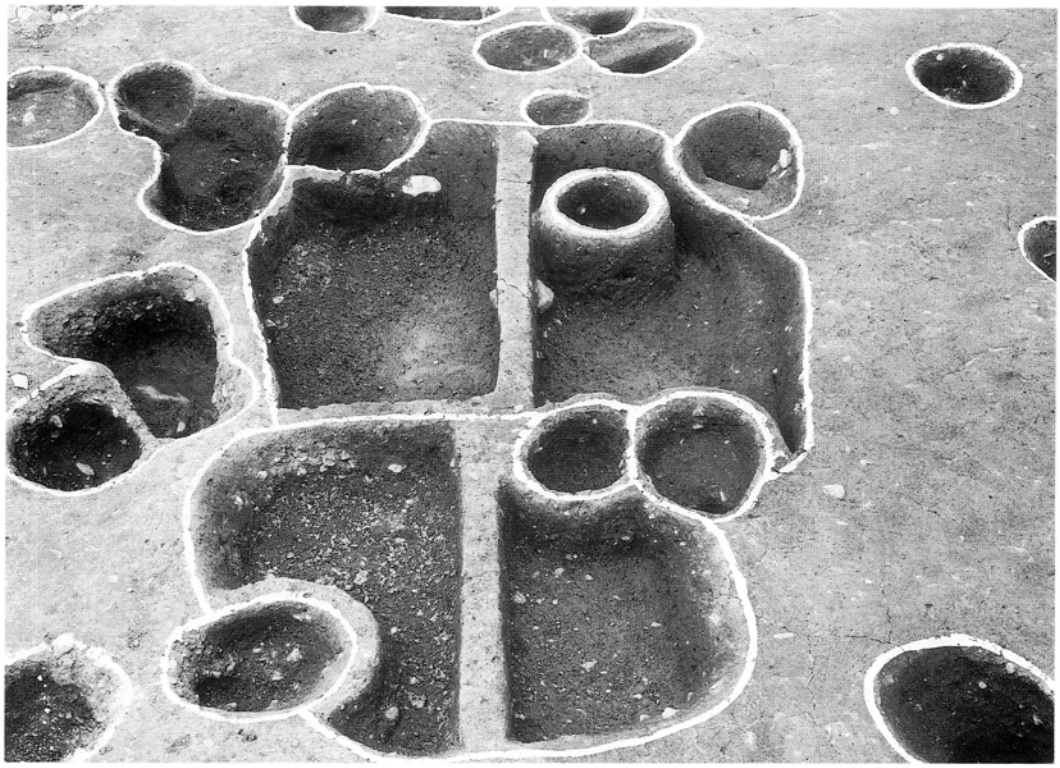
(2) 土壙（ＳＫ13）完掘状況（西から）



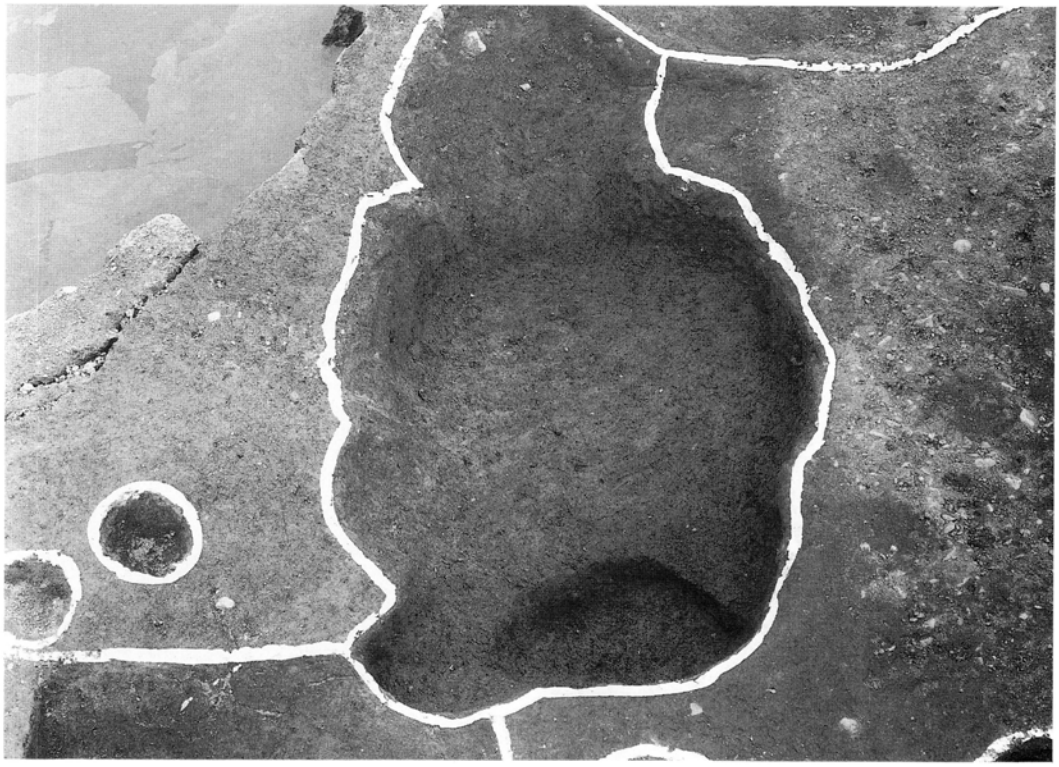
(1) 土壙（ＳＫ14）完掘状況（南から）



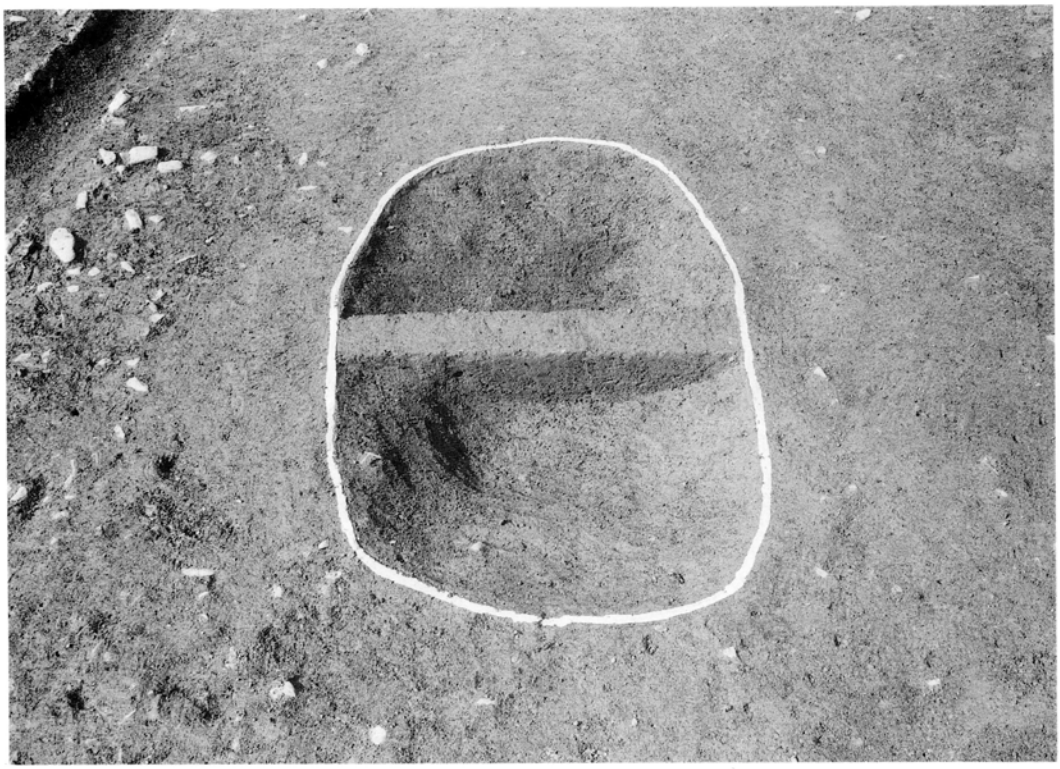
(2) 土壙（ＳＫ15・16）完掘状況（南から）



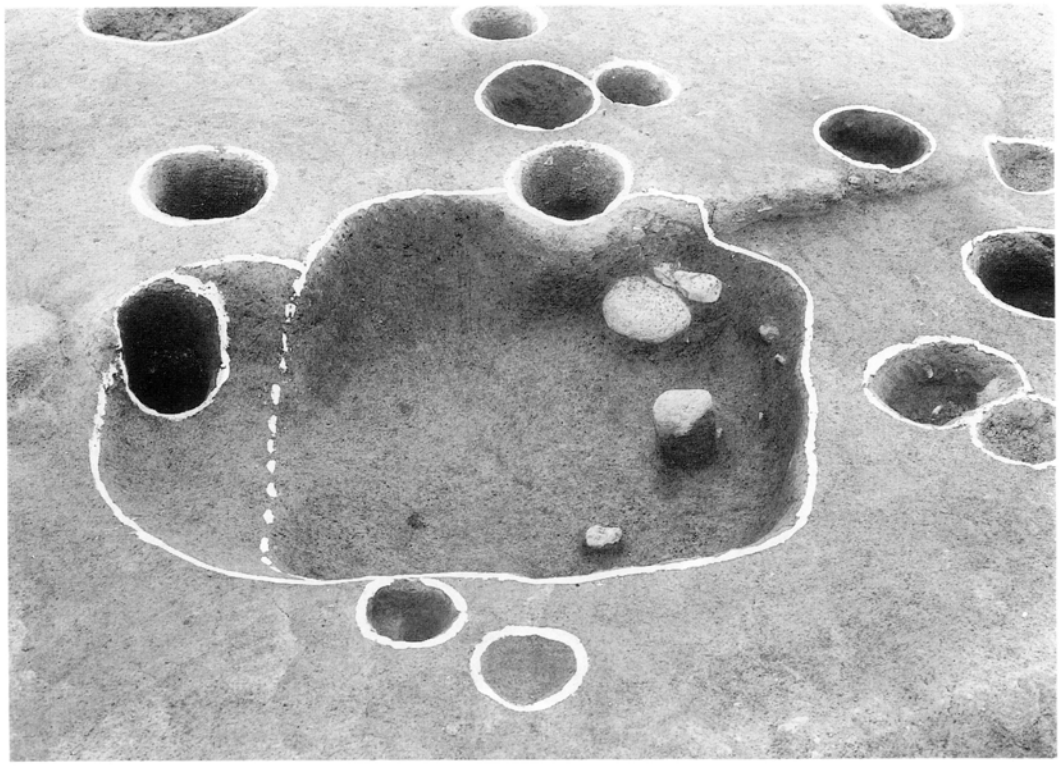
(1) 土壙（ＳＫ17・18）完掘状況（南から）



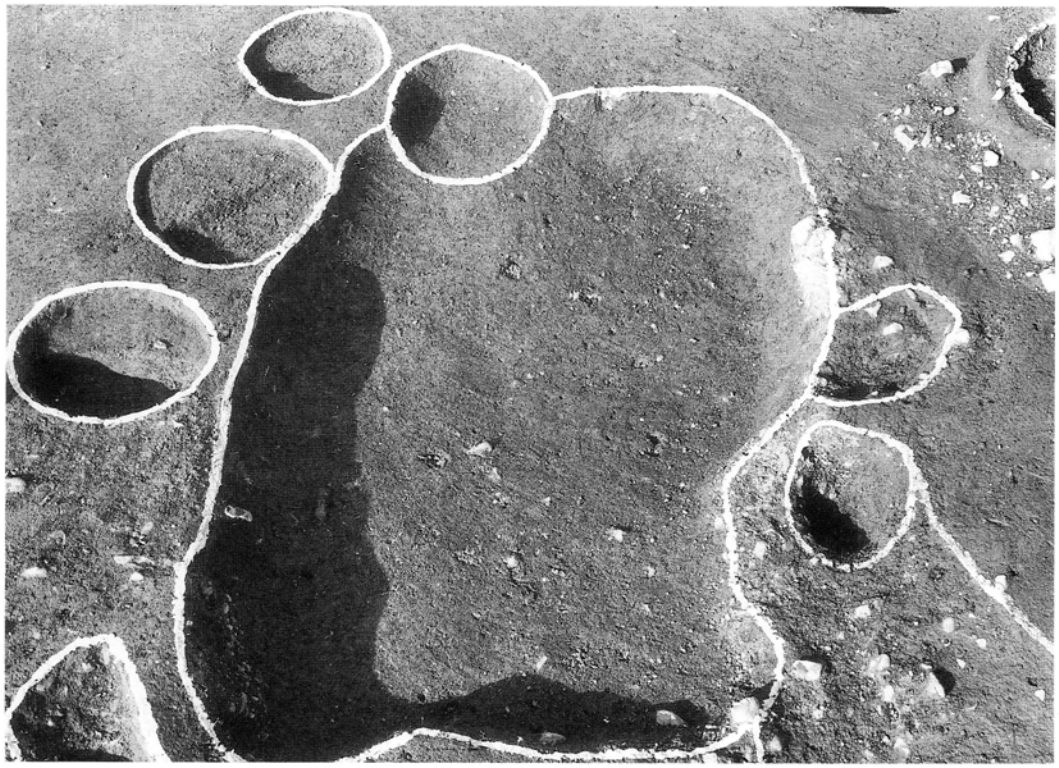
(2) 土壙（ＳＫ19）完掘状況（東から）



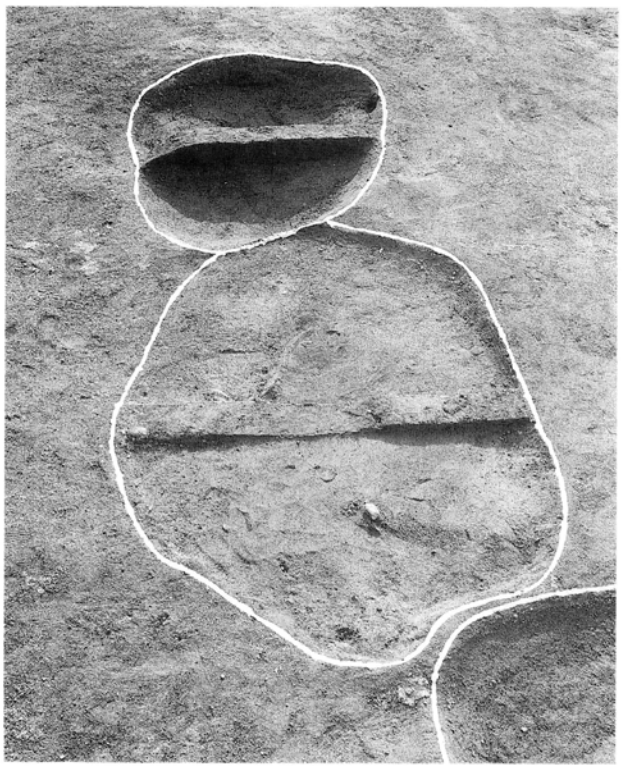
(1) 土壙（ＳＫ21）完掘状況（南から）



(2) 土壙（ＳＫ25・26）完掘状況（南西から）



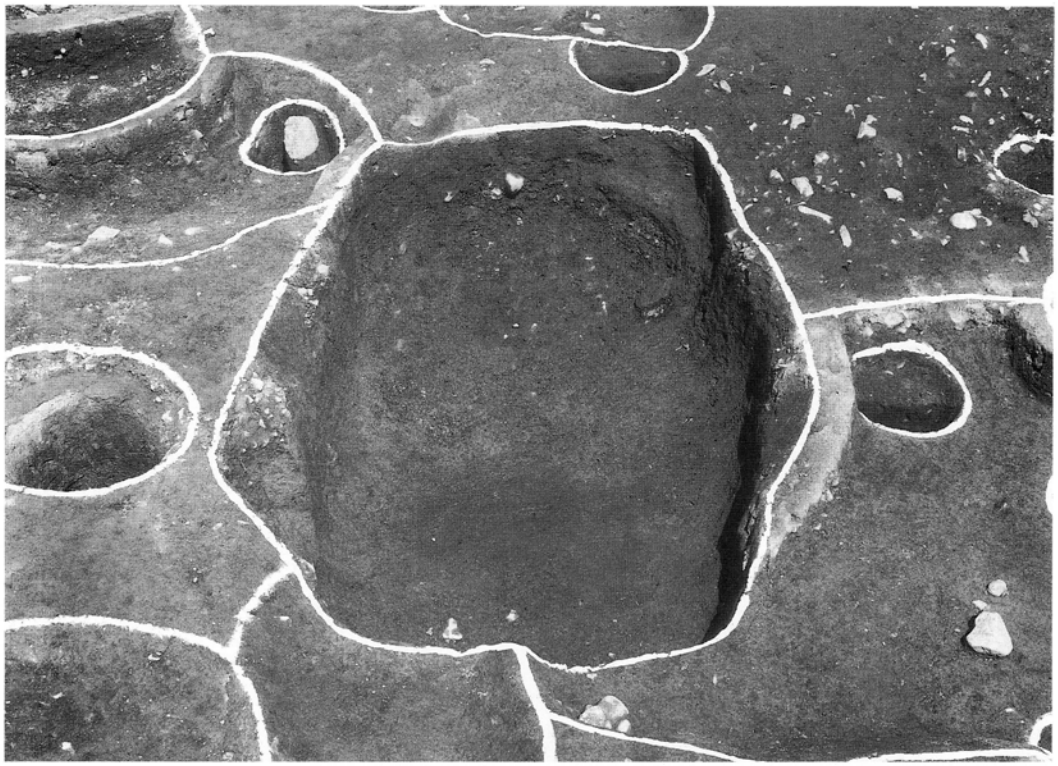
(1) 土壙（ＳＫ29）完掘状況（南から）



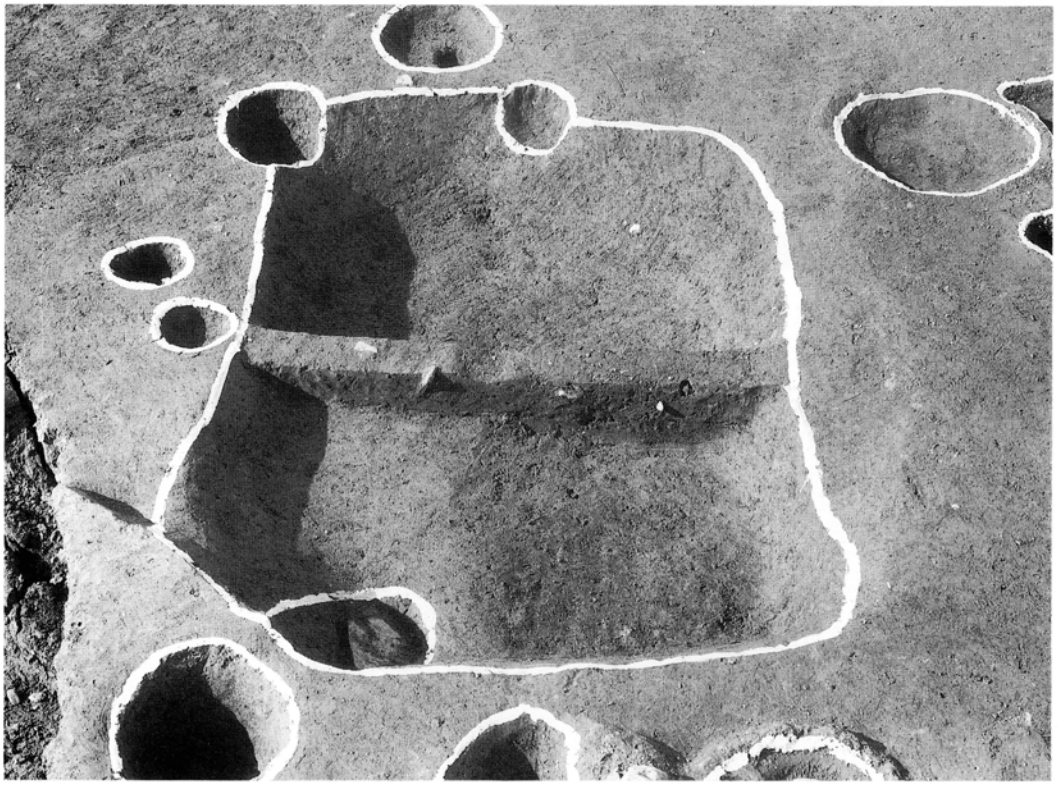
(2) 土壙（ＳＫ27）・竪穴遺構（ＳＸ51）
完掘及び切り合い状況（東から）

(1) 土壙（ＳＫ30）完掘及び遺物出土状況（西から）

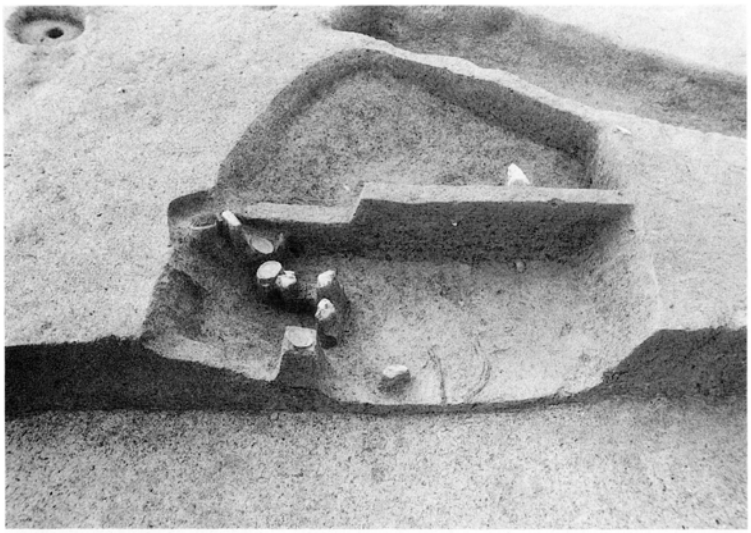
(2) 木棺墓（ＳＫ31）遺物出土状況（西から）



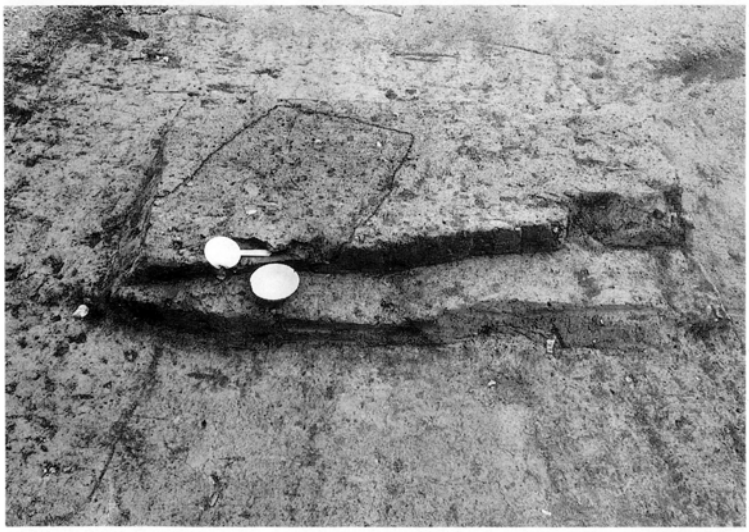
(1) 土壙（ＳＫ32）完掘状況（南西から）



(2) 土壙（ＳＫ33）完掘状況（南から）



(1) 土壙墓（ＳＫ34）完掘状況（北から）



(2) 木棺墓（ＳＫ36）遺物出土状況及び墓壙検出状況（北から）

(3) 土壙（ＳＫ39）完掘状況（西から）

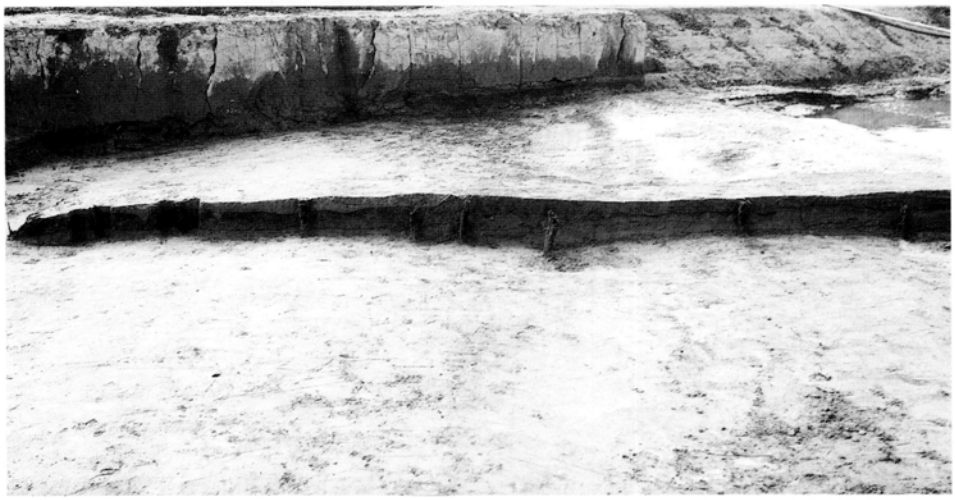
(1) 第Ⅰａ区旧河川遠景（西から）

(2) 第Ⅰａ区旧河川（ＳＲ01・02）遠景（南東から）

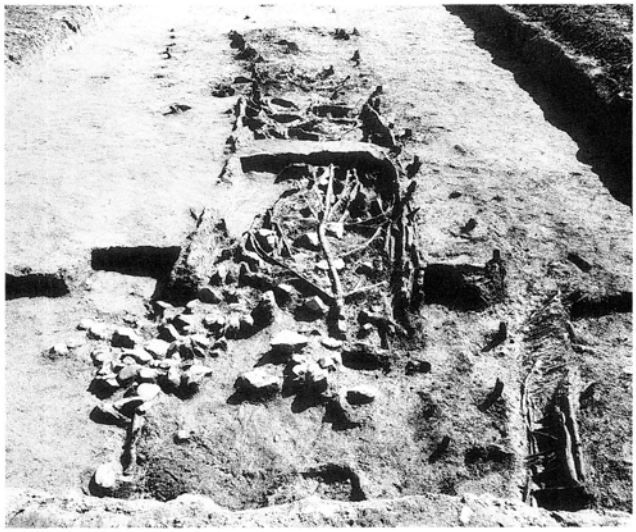
(3) 第Ⅰｂ区旧河川（ＳＲ3723）
遠景（西から）

(1) 杭列（ＳＡ01）出土状況およびＳＲ02内土層堆積状況（北から）

(2) 杭列（ＳＡ01）出土状況（北から）



(3) 杭列（ＳＡ01）出土状況（北から）



(1) 杭列（ＳＡ02）出土状況（西から）

(2) 杭列（ＳＡ02）出土状況（東から）

(1) 杭列（ＳＡ06）出土状況
（東から）

(2) 杭列（ＳＡ07）出土状況
（西から）

(3) 杭列（ＳＡ07）出土状況
（南西から）

(1) 第Ⅰａ区東南壁土層断面（北西から）

(2) 第Ⅰａ区旧河川（ＳＲ01）中央部土層断面および東岸際状況（南から）

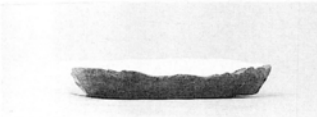
(3) 第Ⅰｄ区西壁土層断面（東から）

2

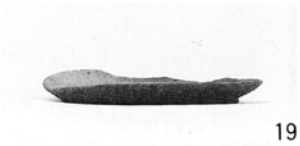
7

8

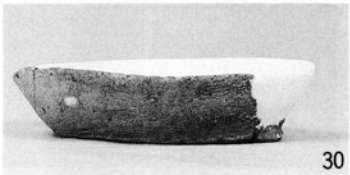
10


11

14


19

26

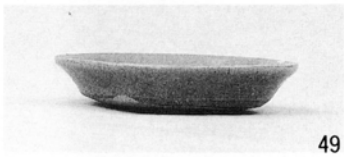

30

31

35

43

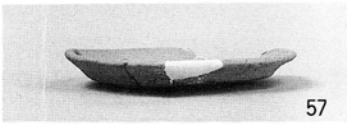
51


49

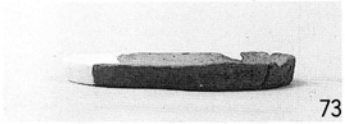
42

52

第Ⅰ区柱穴出土遺物（1／3）

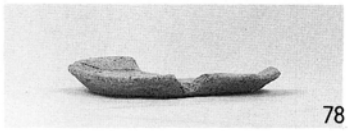

57

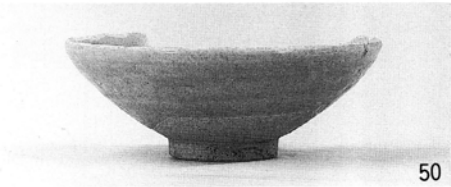
70


73

61

71


78


50

83

66

69

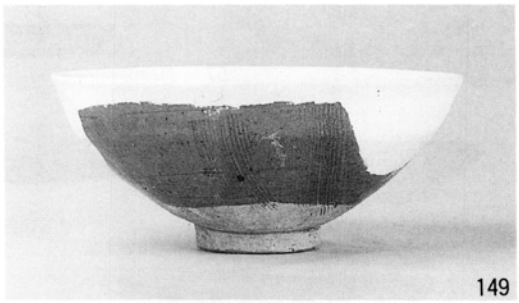
54

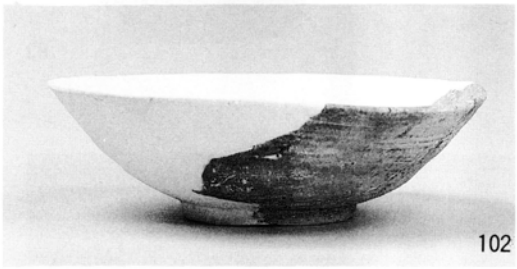
53

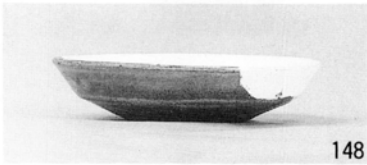
55

第Ⅰ区柱穴、井戸出土遺物（1／3）

56

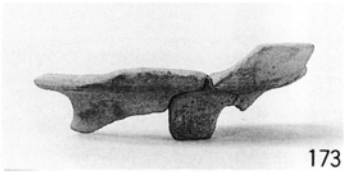

149


102


148

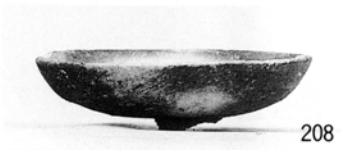
191

153


173

161

157


208

185

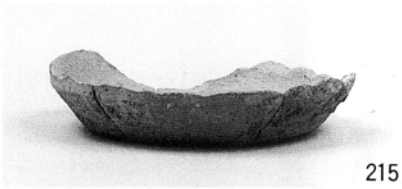
189

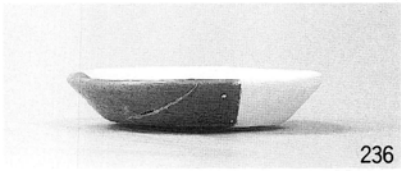
207

186

213

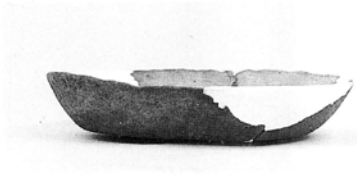
第Ⅰ区柱穴、井戸、竪穴遺構出土遺物（1／3）

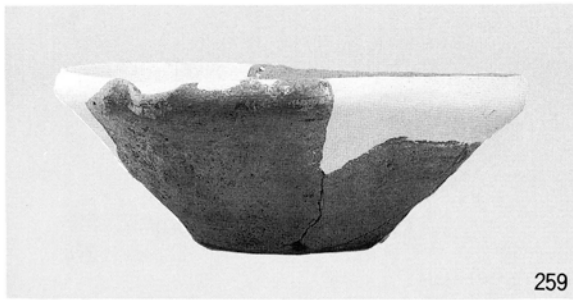

215


236

216

233

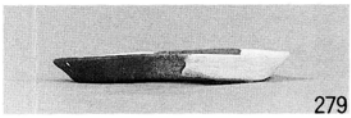

256

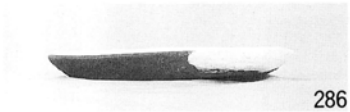

259

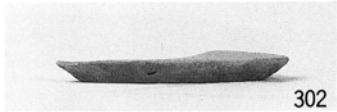
273

284

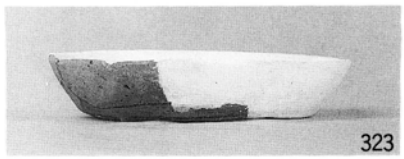
293

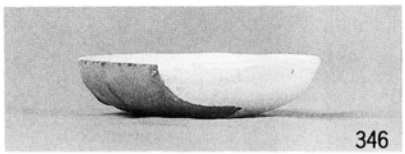

279

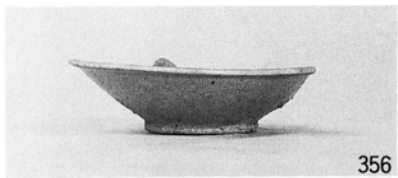

286


302

325

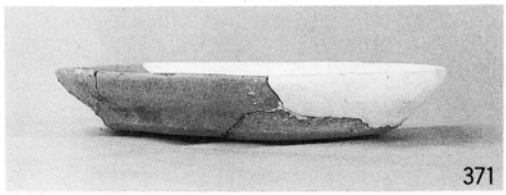

323


346


356

365

370


371

第Ⅰ区竪穴遺構、溝状遺構出土遺物（1／3）

372

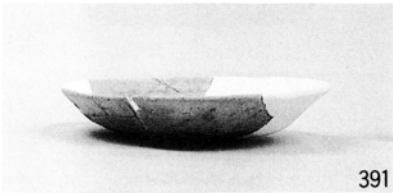
374

373

375

378

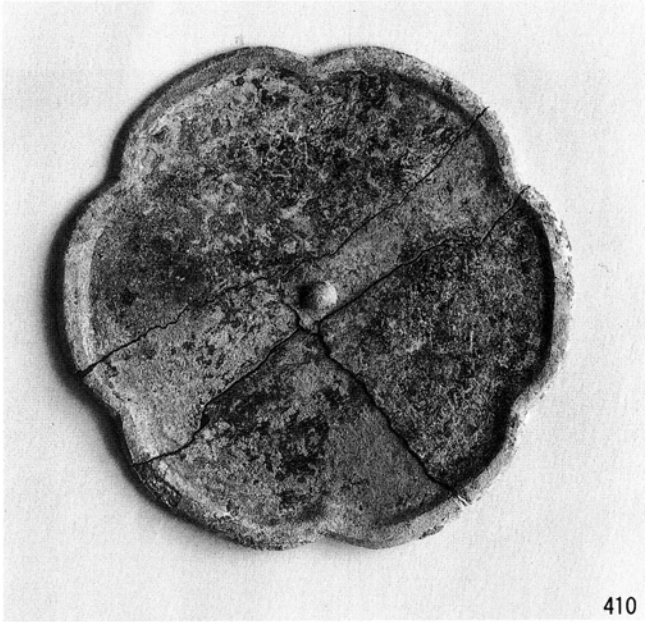
390


391

397

399

第Ⅰ区竪穴遺構、土壙出土遺物（1／3）

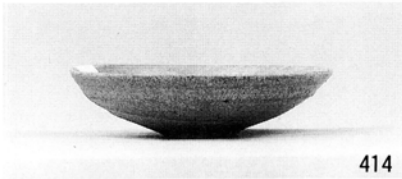

410

412

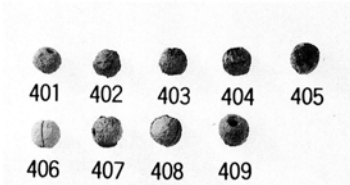
415

413

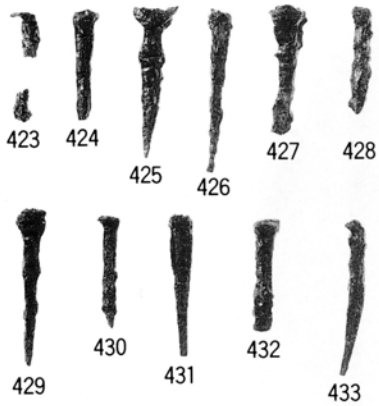
416


414

417

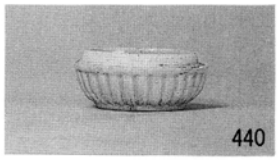


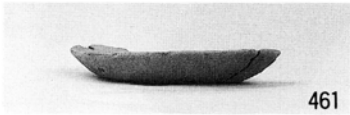
第Ⅰ区木棺墓出土遺物（1／3）

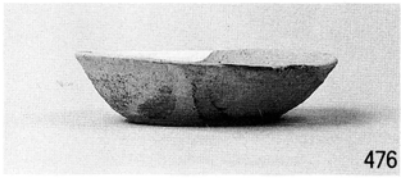


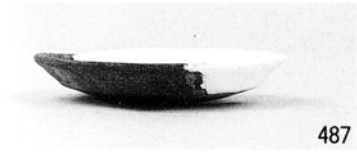
第Ⅰ区土壙墓・木棺墓出土遺物（1／3）

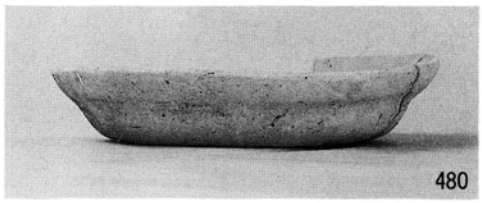
450


440


461


476


487


480

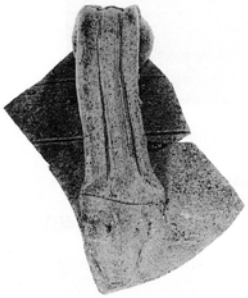
453

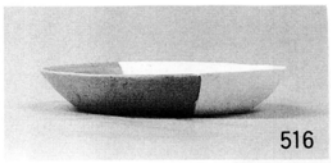
491

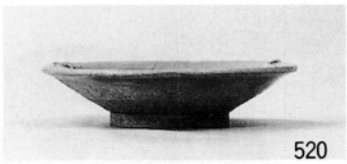
469

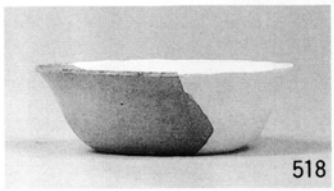
514

第Ⅰ区木棺墓、検出面、包含層出土遺物（1／3）

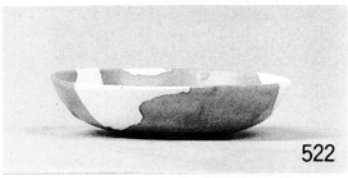

515

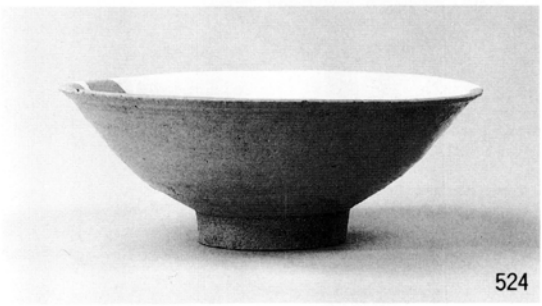

516


520

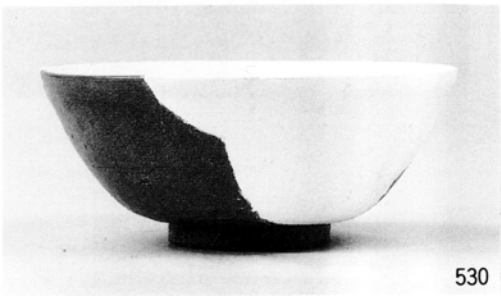

518

521

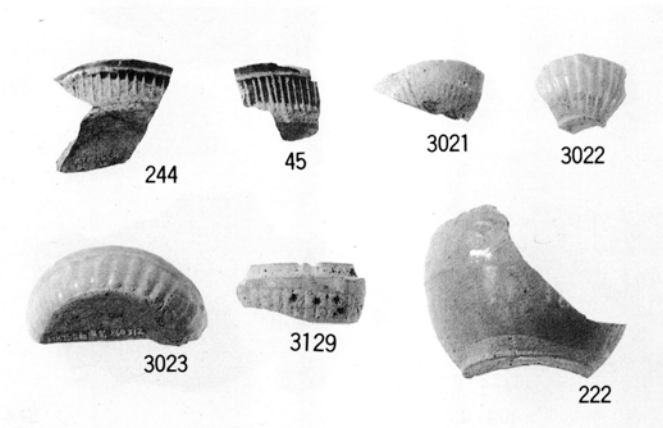

522


524

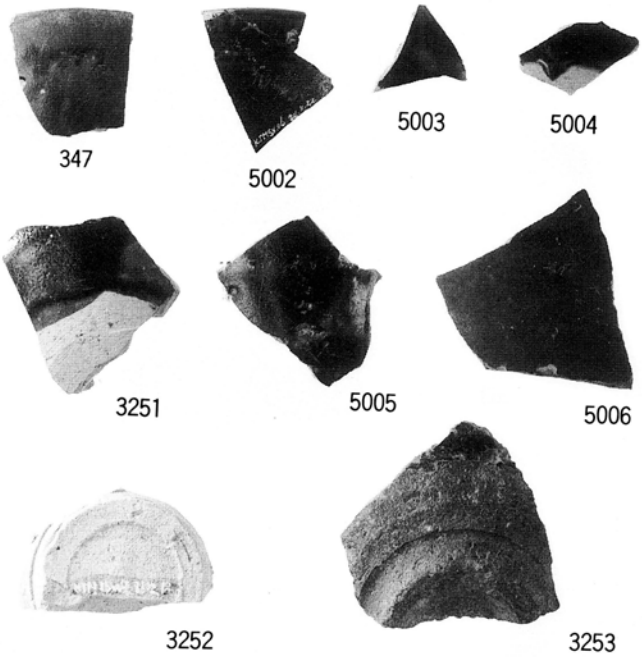
526

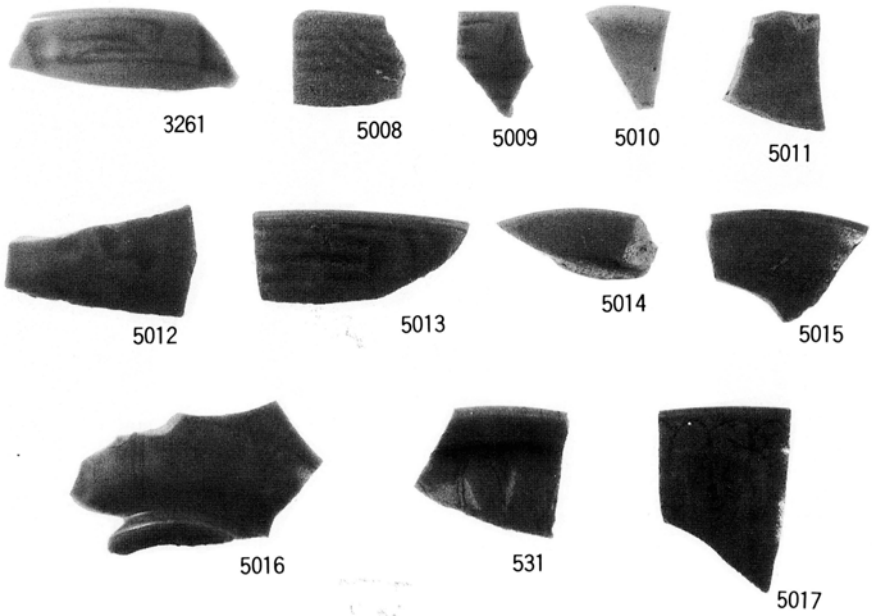

530

532

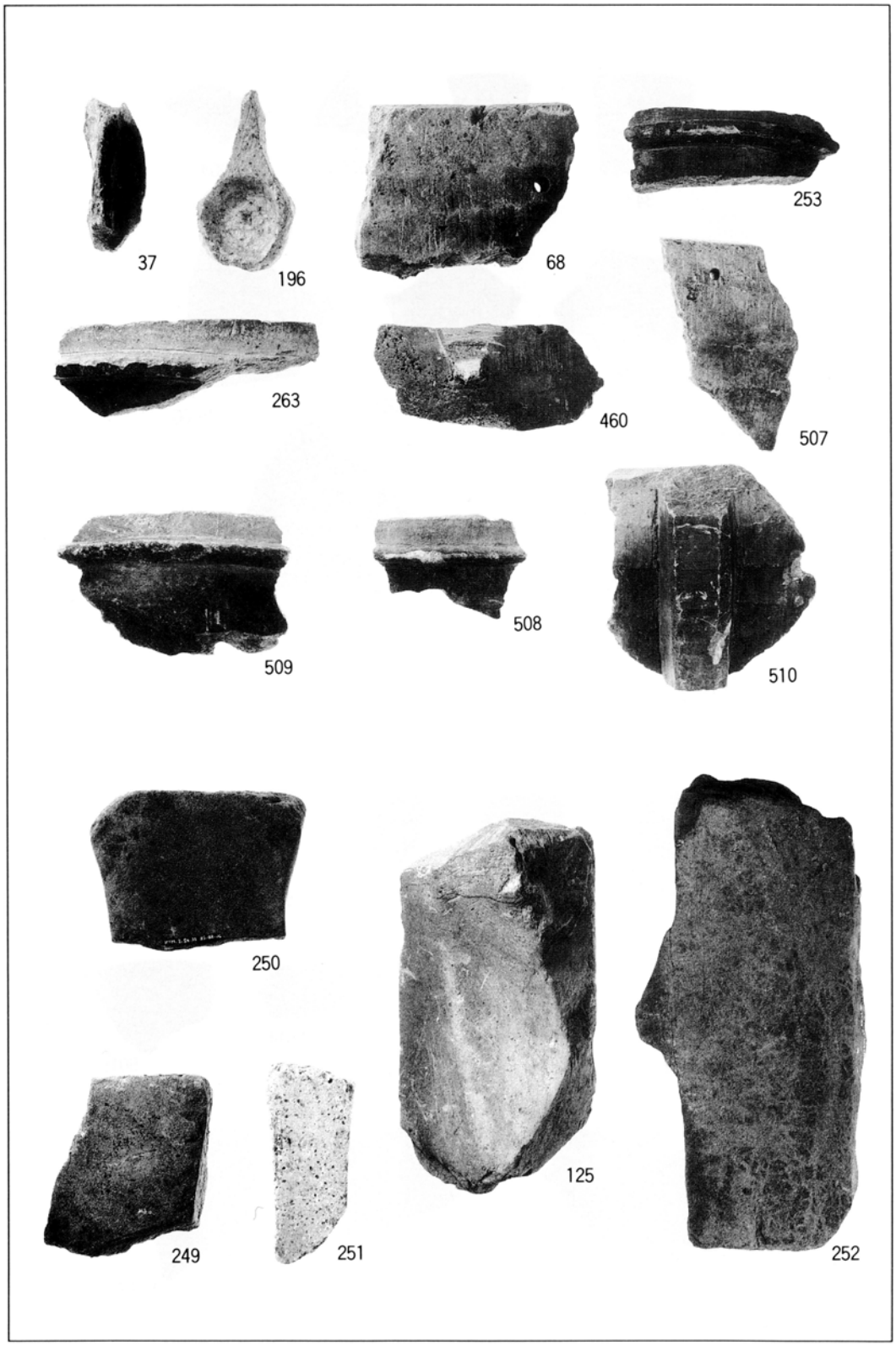


第Ⅰ区包含層出土遺物（1／3）

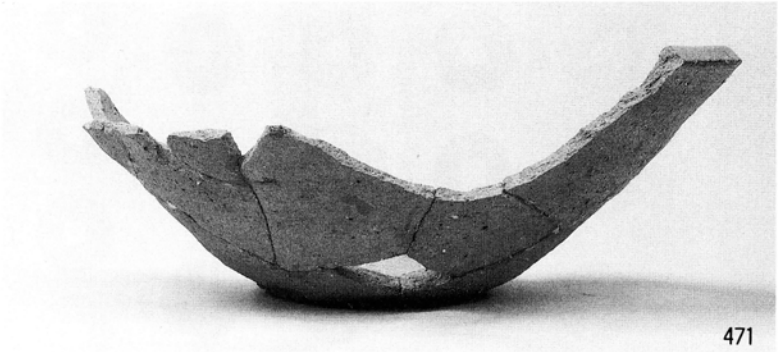

347
5002
5003
5004
3251
5005
5006
3252
3253

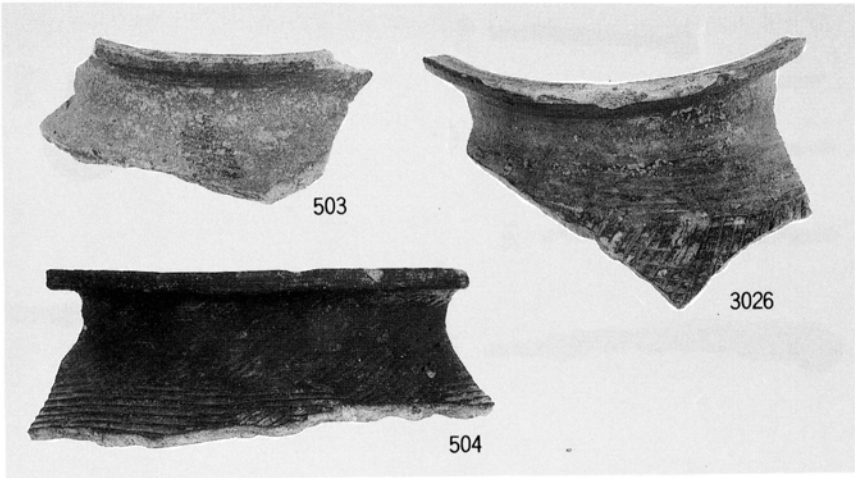

3261
5008
5009
5010
5011
5012
5013
5014
5015
5016
531
5017

第Ⅰ区出土天目、青磁碗

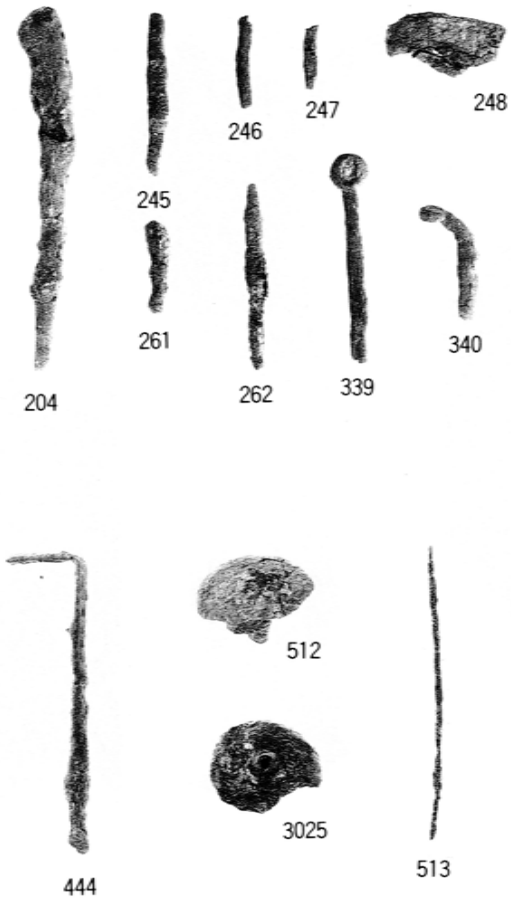


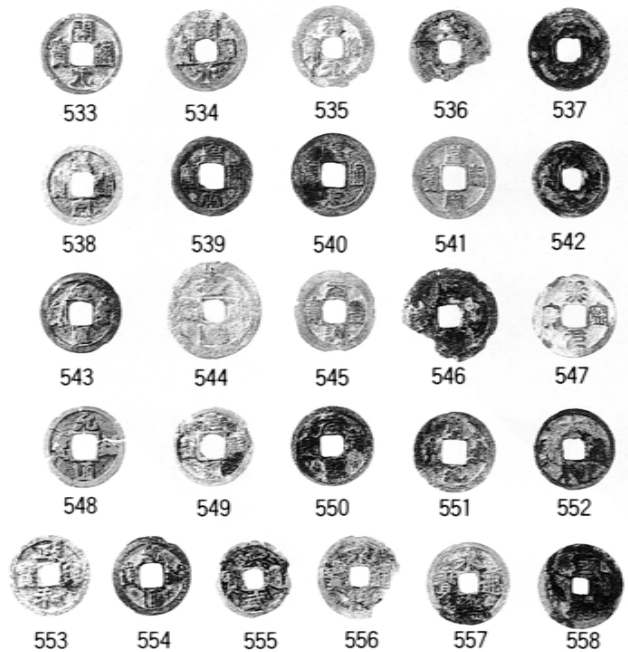
第Ⅰ区出土石製品（1／3）





第Ⅰ区旧河川、検出面出土遺物（1/3・1/4）





第Ⅰ区出土鉄製品、貨銭（1／3）

粕屋郡粕屋町

戸原麦尾遺跡(II)

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第201集—

１９８９年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目7-23

印　刷　同盟印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南6丁目6-1